

裏庭日記／孤独のわけまえ

中田満帆

a missing person's press

2023

裏庭日記／孤独のわけまえ

まだ見ぬぼくの友人たちへ、  
ぼくを友人としてくれる遠くの  
わずかなひとびとへ

これこそが人々が恩寵というような言葉で語るものなのだ。

ジェイムズ・サリス

夜の蠅の大き目玉にわれひとり

西東三鬼

装帧——著者自装

裏庭日記



\*

「ニュー・カラーの写真家が好きです。旅の匂いがしてるみたいで」——社交辞令でわたしはいった。たしかに写真もそのジャンルも好きだ。でも、だれにもいいたくはなかった。あの老人のために自尊心を切って渡したようなものだ。『パラダイス・フォグ』での個展と演奏はあまりいいものじゃなかった。聴き手の求めるものが、はつきりとしなかったのもある。しかしそれよりも病んでしまうのはかれらが、かの女らが、ずっとアクションを求めているということだった。あいにくわたしはパフォーマンスじゃない。電気椅子はどこにもなかった。踊るためのフロアに大版写真と楽器をひろげ、わたしたちは演奏したんだ。ひとをびっくりさせたいとか、悲鳴をあげさせたいとか、そんなものは手放した。

いまは夜。会場の撤収はおわり。なにもすることがないなんてうそだ。歌詞を書き、コラムのアウトラインを仕上げる。もちろんこの小説もそうだ。物語は放擲された。でもひとびとは愛し合う、憎み合う、あるいは孤立する。長距離運転の滝田がハミングしてる。フィル・セルフェイのカセットにむかって。かれはドラムの国に棲んでる。無国籍だが血筋は正しい。正銘のブルテリア（人型）。

「おれらのパラダイスはどこだ？」

滝田はパブに行きたがっていた。それでは金がかさむ。でもかれは我慢なんかしない。「おれらのパラダイスはどこだ？」。わるいがいわせてもらった。「よそ者にパラダイスはない」。地上を雲が流れる。冬の地平をずっとわたしたちは走る。わたしはこんなところまでやってきたというのに、日本での一夜が忘れられないでいた。詩人で写真家の友人が、ずっとカフェイン錠を呑んでいた。エナジードリンクとともに。それで死ぬんだっていつて。でもかれにそんなことができるようにはおもえ



なかった。わたしが廊下にでると、かれの嘔吐が聞えた。旅の支度が迫っていた。ノートをいちまいちぎってペンを走らせた。もしかしたらかれにイメージを与えられるかも知れない。そうすれば死なずに済むだろう。

《裏庭日記、もしくは孤独のわけまえ》——おもいついた、たったそれだけを書いてドアに挟んだ。滝田が待っていて、スティックをふっていた。そして笑う。

徒足<sup>むだあし</sup>だったな。

あいつは死なねえよ。

たしかにそうかもしれない。でもわたしにできるのはあれだけだった。かれがなんとかして作品をつくってくれるのをただただおもしろいながら、アメリカの夜を走ってる。

\*

小雨が降ってる。'80年代の終わりだ。3つになるぼくを父は郷里へはじめて連れてった。豚のくそがうずたかくされ、台車で運ばれていく。臭気に眼を閉じる。みんな祖父の養豚場のためだった。祖父の製材所へもいった。そこにひとり、年長の少年が遊んでた。かれは犬をつかって死んだ鶉や鴨をとってた。なんともいさましくおもえた。いっぽう父はずっと祖父と話をしていた。わるい話になったんだろう。銃身を切りつめた猟銃でもって祖父はいった。「早く、こっからでていけ、さもないとぶっ放す」。その通りだった。鴨居に穴をあけられ、ぼくらはまっすぐに出た。父は生気を失って自身の車へと帰った。まるでここが日本じゃないようにお互いで息を吸った。吐いた。うんと吸った。――呑んだくれのばかやろう。――それきり黙って家へ帰った。生野高原は退屈するために、ずっとそこにある。ぼくは早くこの土地がなくなるように祈った。3度も。

けれども退屈の日々はずっと強かったんだ。ぼくはなんとか母方の祖父母に会った。大正からの名家らしく、機織り工場があり、琴があり、着物があり、デイズニーのカラー・フィルムもあった。妹たちが舞を習ってるあいだ。立派なビリヤード台もあった、ルールもわからずにぼくらは遊んだ。琴を姉妹は習い、日本舞踊を屏風のある小さな舞台で披露したりもした。ぼくは叔父の室から漫画本を観てた。ぼくは仮面ライダーになるつもりで暮らした。でも大人になるということは無力では意味を持たず、わるくてつよいものに勝たなければ死ぬしかないようとおもった。屋根から飛び降りたり、瓦を割ったり、木に手刀を喰らわしたり。とにかくぼくはさみしかった。姉には妹がいて、妹には姉がいるのに、ぼくはたったひとりだとわかった。だから階段から妹を突き落とした。ぼくはなにも憶えがなかった。でもみんながぼくを見てた。ぼくは淋しかった。これじゃあ、仮面ライダーにも忍者ジライヤにもなれない。祖父はやがて友人の借金のために破産し、屋敷を失った。あるとき、

母方の祖母に灸をされた。ぼくはなんにもしてないのに。姉妹のいる室の襖をあけただけだ。ふたりが悲鳴をあげる。かの女はいきなり襲い来て、ぼくの親指をライターの火で炙った。畜生。

ぼくの左目の隅には縫い跡があった。2歳のとき、ぼくは台所のガラス戸があげられなくて、頭からガラスに突っ込んだ。血、また血。もう少しで眼をひとつ喪うところだったらしい。家のうらには父のつくった離れがあつて、ぼくが産まれたぐらゐからずっと手をつけてた。土台はともかく鉄骨は業者の手が入ってるらしい。はじめのうち、ぼくは父を尊んでたし、すごいひととおもつてた。けれども齢を重ねるうちにそいつは狂気を学ぶための、いちばん初めの教科書だとわかった。高価い工具や、建材を買い込み、家計を追い込む。でもともかく、そのころは家がいかに醜くなつていくかなんてわからなかった。質素な2階家ができるだろう、なんとなくそうおもつてた。父はぼくを連れてよく北神鋼材や、ホームセンターへ連れてつた。あるいは不要になった建材をもらいに、近所の建築現場まで連れてつた。あるとき、ぼくと姉が車に乗つてつた。断熱材もらつた。ぼくたち姉弟はそいつを触つてしまった。綿飴みたいな黄色いものは石綿だつた。手がちくちくと痛み、しつこく手を洗つてもしばらくは痛いままがつづいた。

やがて姉が山口幼稚園に入った。近所の娘に誘われて生瀬のバレエ教室に通うようになった。母は特別姉をかわいがつた。ぼくも連れられ、螺旋階段のうえ、ずっと待ちぼうけを喰らつた。なんて仕置だ。欄干に凭れ、日を浴び、ずっとずっと終わるのを待つた。姉がいなくて少しだけ淋しかった。やがてかの女が小学校へあがり、ぼくが入園した。泣いて抵抗した。毎朝、いかないとごね、駐車場から鉄のスライド門まで抱かれるか、ひっぱつていかれる。ぼくはなんとしてでも園には馴染むまいと誓つた。歌を口ばくで通し、休み時間を延ばせと要求したりした。劇の配役がいやで、役を変えろといった。かつこよくて死なない男のひとに！——そういつた。そしてぼくは脱走の名人だつた。でられないときは屋根にだつて登つた。うまいけば公民館の入り口まで逃げた。でも母は褒めてくれなかった。

クasmotakeshという子とぼくは友だちになりたかった。かつこいいなまえだし、身なりもいい。いちど声をかけたけど、声が小さくてかれに伝わらなかった。ぼくは、ミッホっていう、じぶんのなまえがいやだった。どうしてコウタロウやタケシじゃないんだ。どうしてこんな女の子みたいな名をつけられたんだ、赦せないものがそこにはある。母同士のはからいで、クasmotくんの家に行くことになった。ぐずついた曇天。緑色のアパートメント。かれも含めてみんながテレビゲームをしてる。うちにはそんなものはない。父が赦さない。ぼくは中心部へ入っていけず、隅っこでミニカーをいじった。もうひとりのはぐれものとともに。愉しくなかった。雨が降りだした。激しい。やがて母が迎えに来た。ぼくは車のなかから建物を見あげる。いったいなんのためにここまで来たのか、ため息を洩らした。なにもできなかった悔しみを雨が代弁してた。幸福は遠かった。ぼくはからだの大きいやつらがぜんぶがきらいだった。あたりまえみたいに遊具をかつさらっていく姿はなによりも憎かった。時間が来て、かれらがいなくなり、遊戯がはじまったとき、ぼくはたったひとりで遊び始めた。みんな教室のなかにいる。でもぼくはそこにいたくはなかった。夏の休みをまえにしてぼくと母は教務室に呼ばれた。たまねぎ——玉垣先生が色とりどりの書類を机のうえにひろげた。そいつによれば、ぼくは病氣らしかった。いつもひとりぼっちでだれもとだちがいない。先生は精神科への案内状をしたためた。そいつを母は封切らず、やぶり棄てた。べつにぼくが病氣でもぼくにはどうでもよかった。どっかへでかけられるならなんだっていい。母や先生たちが傷つこうとも、もはやどうでもよかった。冬、クリスマス・パーティーはつまらない催しだった。サンタクロースを信じたこともなかった。公民館で「サイボーグ009」の映画を観た。モノクロのやつ。そっちのほうがずっとマシだった。ぼくはなにもしないまま卒園した。もう半ズボンをはかなくてもいい。それだけが喜びだった。

北六甲台小学校は丘のうえにあった。よそものたちのあつまり。みんないい服とランドセルを来て、きれいなまんまだった。ぼくはといえばランドセルを奪われ、犬のくそを塗りたくられてしまった。フランスの、かわったかたちのだったからか。か

わりに迷彩柄のずた袋で通った。ことの翌日、壇上に岩瀬、真嗣が立ってる。ふたりが謝った。

ごめんなさい。

浜崎先生がいった。

どうや？

赦すか？

赦す以外の回答がなかった。みんな、ぼくを注視する。

ああ、もういいよ。

ぼくは折れた。悔しさでいっぱいだ。年中、みじめなおもいをした。ぼくはよく『ぼくとカンガル』という童話のまねをした。カンガルーのボクシング。よくおなじクラスの女子のまえで演じた。かの女は、はじめて会った白人で、南山真波といった。うしろの席からは星乃秀明の最高のジョークが聞けた。笑いすぎて席を変えられてしまった。そのせいで南山とは離れることになった。星乃とはたびたび遊んだ、どうしてもうちに来てもらいたかった。ふたりしてガレージの屋根で枇杷を食べた。ふた親の仲はすでによくなかった。とくに不況をまえにしてからは、ささいなことがいさかいになった。母はやがて黙ることを憶え、ぼくらに含み話をした。たとえばぼくが生まれるまえのアパートメントでやつにマグカップを投げつけられたこと、浴室の壁を修復する父に労いをいおうとして怒鳴られたこと。そんなくだらないことばかり喋った。決して父からかばってはいけなかった。やがてぼくは近所の年長者たちと遊ぶようになった。かれらはみんな、ぼくにやさしかった。けれども学校はやはり退屈で逃げようのない場所だ。家に帰ると、けむりきのこを探しにいった。いたるところにそれは生えてた。踏んづけたり、壁に投げつけたり。胞子の煙を眺めて愉しんだ。そして花の蜜を吸いに庭にでて、かたっぱしから花を引き抜いた。蜜は花びらの奥にあった。ちゅうちゅうと吸いながら表にでた。いつものように年長の少年たちと遊んだ。かれらは木の

うえにパレットを置き、基地をつくった。ぼくも乗せてもらい、その眺望を愉しんだ。ある休日父以外の全員で西脇に行くことになった。母の郷里であり、母の実家は機織り工場がくっついた大きな日本家屋だった。ぼくの愉しみは伯父の部屋にある漫画だった。『仮面ライダー』があっただ。朝日ソノラマ版の。けれど残念なことに途中までしかない。ちょうど一文字隼人の部屋が爆破されたところで終わってた。姉妹と一緒に駄菓子屋にいき、飛行機のおもちゃを買った。側溝ではきれいな水が流れ、春の光りに溢れてる。しかし、ぼくはどうしても祖母が好きになれなかった。いつのことだったかはわからない。ただあるとき、ぼくが姉妹の遊ぶ室に入ると、ふたりが大きな悲鳴をあげ、飛び込んで来た祖母が故も訊かず、ぼくをねじ伏せ、右手の親指をライターで焼いたからだ。ぼくがいったいなにをしたのかはわからない。

\*

3人組の上級生に弄ばれた。かの女たちはきれいだった。やさしかった。図書館でぼくと遊んでくれた。——ねえ、ズボンとパンツ脱いで。——でもどうしても、ぼくはかの女らに应えて陰部をだしてあげることができなかった。そのときぼくはかの女らを辱めてしまった。いちばんきらいな担任の浜崎にそのことを指したんだ。すぐにとっかまってかの女らは責められてた。遠くからそれを見てた。なんていうことをしたんだ、ぼくは。あんなにやさしいひとたちを辱めてしまった。

\*

「将来になりたいものは」と浜崎が訊いた。なんだでもよかったんだ。警官でも看護婦でも。でもぼくは「ふつうのひと」と

答えてしまった。——それはなにかね？——みんなだれもふつうのひとなんだ。警官でも看護婦でも。やつの責めるような大きな声がした。ぼくには理由があった。でもそいつを言葉にすることができない。哀れなるミツホよ、おまえは一生理解され得ないのだ。机のうえに飛び散った泪のつぶが電光に照らされ、そのなかにちいさな自身の顔をみつけて恥ずかしくなった。みんな、ぼくを寝小便でもかましたみたく眺めてた。幼稚園でのまともでない暮らしぶりがあったのをだれにもいえなかった。涙をいくつか流した。それから近所に現れた不審者についてもまちがった軋轢がもちあがった。やつは車で公園に乗りつけ、蒲団を干し、子供をじつと見つめてたという。ぼくはそのことで誤解を受けた。母から伝聞をいっただけなのに浮浪者を差別していると決めつけられた。あんなところに浮浪者なんかいない。でもアカにはわからなかった。教壇で吊し上げを喰らった。悔しかった。

\*

ぼくは家にある本で、レタリングの実用書がいちばんのお気に入りだった。外国の本で、大きく、さまざまな書体がそこにあった。文字で描かれた車の絵というものも載ってあった。さっそくまねをして描いた。愉しかった。いつまでも厭きない。けれどもある日、それを母方の祖母が隠した。どうしてそんなことをするのか、まったくわからない。かの女の悪意、そのほかにおもい至るものはなかった。あの本でぼくは110という数字にはじめて出会った。算数の授業、みんながいっせいに10が10個で100と合唱する。ぼくは反発を憶えた。100よりも110のほうが、ずっと重要な数字なのに。

校庭では菟を飼ってる。白い鉄の檻。あたらしく産まれた菟が庭を走りまわった。そいつを追いかけて、檻のまわりを駈ける。そのせつな、積んであったコンクリーブロックを倒してしまった。子菟は押し潰されて死んだ。多くの上級生たちが駈け寄り

た。だれもぼくを見ない。ばれてはないか。怖くなって教室へ走った。子菟は夢にまででて、ぼくを呪ってる。大汗を掻き、天井を見た。

夏のあいだずっと年長の少年たちと遊んだ。ぼくはかれらにとって弟みたいだった。かれらにさそわれるままに基地をつくり、爆竹を鳴らす。土スキーをおもいつく。崖の傾斜の、柔らかい土を素足と木の枝で滑った。木のうえにパレットをおいただけのアジトは、台風11号で壊れしまった。みんなの関心さえ薄くなってた。やがて秋だ。少年ふたりがぼくを迎えてくれた。ケンジくんとノブくん。かれらは、ベニアと車輪とロープで台車をつくっていた。「乗りなよ」。――ぼくは喜んで乗る。ふたりが紐をひっぱる。加速はつく、スピードはどんどん速くなる。ぼくは正座して乗ってる。よし、溝蓋を超えるぞ。そこでもなにかもがだめになった。ぼくの口は蓋をもろに喰らい、ぼくの右腕はベニアとアスファルトのあいだにあって信じられないところへひっぱられてた。だれかがぼくを起こした。口いっぱいに流れる血を押さえ、うちのなかへ駆け込んだ。簡単な手当と止血のあと、歯医者にいった。下の歯肉がむちゃくちゃになってた。上の歯には蓋のあとがしっかりとある。それだけを直して帰った。あたまが痛い。息が苦しい。眠れない。ぼくはぼくは癒やすためにシロップやシンナーやブランデーを使った。ふくれあがっていくみたいな頭を抱え、夜の悪夢を、昼に見た。あれきりかれらとは遊ばなかった。

いっぽう学校では言葉の問題で苦しめられつつあった。祖母にやられた灸みたいに、それはもはや言語を飛び越えてしまった。塀のむこう、手の届かない方向へと去ってたんだ。あいもかわらず、ぼくには友達がなかった。欲しいとはおもってた。けれど話しかけてくれるのもいた。岸本研祐というやつが、粘土をつかった授業のときにいった。

これがジェット・コースターやろ？

かれが粘土の塊りを示す。

これがおまえのかあさんやろ？



さらにちいさな塊りを示す。そしてジェット・コースターごと、机に叩きつけた。ガガガーン！——なんてことをとぼくはおもった。こんなことをいうやつははじめてだ。動揺してしまう。しかし、それを知られては負けはあきらかだった。だからぼくもやり返すことにした。

これがおまえの家だろ？

かれは首をふった。

いや、ちがうわ。

ちがわないな。

ちがうな。ただの粘土や。

こうさ！

ぼくは四角く成形した粘土を平手で潰した。でもやつはぼくをほったらかしてどっかにいっちまった。けっきょくぼくはひとりで1台の自動車と、人間をつくり、提出した。じぶんでも最高の出来だったが、ある日公園で人間のほうをなくしてしまった。どこを探してもなかった。

その年の誕生日。ぼくはトミカの飛行機を贈られた。誕生会がひらかれ、近所の子供たちやその親が集まった。会が終わって飛行機に触った。毀されてた。怒りの矛先もなく、ただ、ちツと毀れた玩具をみながら、もうだれもじぶんのものには触れさせまいとおもった。しかし、そんな矢先、またしてもやられた。ある日曜の朝だった。ぼくは買ってもらったおもちゃの刀をもってそとを歩いてた。そこへ中井龍之介と嘉村大介がきた。あッというまに刀を中井が没収してしまった。ふたりは走り去り、ぼくは追いつけなかった。刀をようやくみつけたとき、それは道の脇におかれた建設残土のなかに埋められてた。土で汚れたそれはもうぼくのものではなかった。家にもちかえったものの、もう触ることはなかった。いっぽう中井の家でも誕生

会がひらかれた。ぼくも呼ばれてしまった。やつへの贈りものを撰ばなければならない。母と西友で探した。ちょうど欲しいものがあった。車の、プラモデルのついた食玩だった。けれど探してるのは怨めしくて恐ろしい中井への贈りものだ。けっきよく母にそれとなくせがんでそいつをふたつ買ってもらった。ひとつは中井に、もういつぼうはぼくにだ。ぼくは中井の家にいった。瀟洒な内装をしてる。壁はいちめん艶めかしい木目の板に被われ、食卓も巨きな木を輪切りにしてつくったものだ。さらにそのうしろには裏庭が展がった。木製品にこだわりがあるのはわかる。階段もおなじく木と鉄を組みあわせたものだ。木と鉄が交互に現れるような様式にはなかなかの美学を感じる。緑がやけに涼しかった。案の定、誕生会はひどく退屈だった。それに気づきでもあった。やつとも、やつの母親とも話すことはない。やつはありがとうのひとこともない。ただただへらへらしてるだけだ。ぼくは急にばからしくなり、だれよりも早くその場をあとにした。

それでも、学校じゃあ、体育の時間。砂場で相撲をとることになった。男女一緒でだ。ぼくの相手は南山真波だった。恥ずかしくって、かの女には、——とても触れられない。あっけなく、倒され、笑いものにされてしまった。ところで第3のあこがれについて話そうとおもう。それはファミリーという6年をリーダーとして6人で行うグループ活動のことだ。北六小にはファミリーというちんけなまえの制度があった。ほかにも北六フェルステイバル、北六カーニヴァルとか、とか。それぞれ6年から1年がひとつの班になって活動してた。わがリーダーは愉快なやつで、グリーンハイツにある、巨きくて青い貯水タシクのそばで暮らしてた。隣には唯一の不動産屋がある。生野高原をあがった、丘のうえの住宅地だ。ぼくはじぶんの班の男リーダーの6年生よりも、ほかの班のリーダーの女性が好きだった。あるとき、リーダーが糊のついた画用紙を手にもぐを追いかけてた。そこへ6年の女子がやってきてリーダーを咎めた。そしてぼくに笑顔をむけ、慰めようとしてた。かの女の顔には生毛がたくさんあって、がっかりしたけれど、とても惹かれた。

やがて来る大恐慌時代に両親の仲は冷え、夏休みの旅行はなくなり、船とバンガローの旅も消える。あとは車でただただ田

舎を走るだけになる。でも、それはまださきの話だ。けっきょく、ぼくはいちども宿題をせず、だれもぼくの存在へ気にかけることもなかった。ぼくは落伍者としてはじまった人生をただ受け身に捉えるだけで、ほかにどうしようもなかった。毎年なんともいじめが待ってた。ぼくは泣かなかった。それがみんなにとっておもしろいことだったのに。ものを隠されたり、悪口をいわれたり、好きな子を暴かれたり、でも絵だけは無事だった。ぼくはいつかこの連中からはなれて絵を描いて暮すんだとおもってた。あるときの教室でみんなじぶんの家について話してた。ぼくの家は中古だった。ぼくは正直過ぎた。みんなはいっせいに笑い、

中古や！

中古やって！

家が中古だなんておかしい！——そう囃し立てた。たしかにあれは中古の平屋建てだった。酪農家の家を買ったわが家。びわの木があつてそのさきは大きなタンク。父はそいつを30年かけて、醜く、薄汚い、トーチカに変えた。ぼくは愛想笑いでやり過ごした。やがて迎えた卒業式の余興。あのひとがいなくなってしまう！——ぼくはかの女を見つけようと校庭をさまよった。ひとがいっぱいでとても見つけられなかった。あきらめて、わかれの科白さえもいえず、けっきょく教室にもどった。曇り空のもと。

\*

『バック・トゥ・ザ・フューチャー』ほどぼくを虜にした映画はない。ほどぼくを虜にした映画はない。はじめて観た映画だ。観たのは1歳のとき。当然、憶えてない。あるとき、父が第2作の字幕版を買って帰った。すぐにその世界にのめって、

英語や、演技のまねを家でも学校でもやった。タイムマシンをほんとうに発明しようと設計図を書き、大人になったらデロリアンに乗ると決めた。2年にあがった。担任は今宮先生。かれは子供の詩に興味があった。ぼくを捕まえては、詩になることばを得ようとした。あるとき、かぜの強い冬の日、ぼくがみずからを回転させてふらふらになったときのことを話すと、かれはもっと詳しくといった。体育の時間が迫ってた。女の子たちが先生を呼びに来る。かの女らは困惑してる。ぼくは校庭に逃れる。みんなが先生を待ってた。

そのころ、家に帰れば上村透がいた。なにがおもしろくてかれが、ぼくのところに来るのかはわからない。一緒に模型を見たり、漫画の話をしただけで、これといって愉しくもなかった。でも頻繁に会ってた。背が高く、女の子にはもてた。ラブレターをもらったこともあったけれど、みんなのまえで馬鹿にした。苗字がまちがってたからだ。そんなことで、とおもった。なんてひどいやつなんだとも。それでもぼくはかれとのつき合いをやめなかった。ぼくはいつもみすばらしい格好をして、靴下さえ穿かなかった。絵の巧い変なやつ、というのが、みんなの認識だ。昼休み、ボール遊びもせずに、机にむかって絵や漫画を画く。『ハゲ田ハゲ男』というのがぼくの最初の連作だった。読者はひとり、浪河繁雄だ。やがてぼくがほかの子たちと遊ばないというのが、クラスの問題に挙げられた。終礼の会で、女の子たちが提議する。校庭でボール遊びに参加するべきだと。なぜみんなひとにかまうのか、ほっとくということができないのか、それがぼくにとって謎だった。みんながみんなおなじことをやる、そんなこと、なにがうれしいのか。ぼくは毎年いじめやからかいの標的になった。みんなとんでもなく愚かだった。でもぼくにはどうすることもできない。

\*

夏の終わり。おれを父は西宮のヨットハーバーまで連れていった。船を見渡す小屋のなかで味のないコーヒを呑み、それから船に乗った。沖まででるまえにおれは船酔いになって、船室の狭いベッドに横になった。やがて船は海へでた。父はまったくおれに関心がないというふうにして船着場にもどった。船のメンテナンスをした。グリスを船体に塗る。老人がひとり、一緒にその作業をした。おれはおもわず、船体に触ろうとした。老人が呶鳴った。――触るな！――おれは脅えきつて、なにもいえなかった。突堤の端っこにムール貝がいくつも落ちてた。陽光を受けて滑る、それはまだ喰えそうだった。ぼくは新聞紙でそれを包もうとした。けれど水気を吸った紙はたやすく破れてしまった。ぼくは諦めた。

ある夜、父が走る車のなかで話した。あの老人が死んだと。癌だったらしい。右腕までも切り落として生きようとしていたらしい。腕のない男がぼくのなかで横たわる。駅を過ぎて、山を登って、やがて家に着くまで、その幻像は消えなかった。いったい、腕がなくなったらどんな感覚に陥るのか。わからないまま、いつのまにか幻像は消え、夕餉の卓のまえでおれは床に坐った。それなのに眠るときになって男はやってきた。そしておれに呪いをかけたようにおもわれたのだ。

\*

姉は新品の自転車を買ってもらった。でもぼくが乗るのは毀れた拾いもので、かつて籠を留めてただろう、フロントの金具がむきだしになり、ブレーキ・チューブも固定されてなかった。どうしてこんなものをあてがうのか。こんなものをどこで父は見つけてくるか、わからなかった。それでも子供用のマウンテン・バイクをようやく買ってもらった。ぼくは喜んだ。けれども、妹や姉が勝手に乗ってつてしまうことも多かった。そのたびにぼくは怒ったし、腕をふった。そのころ、同年たちと遊べないぼくは年少の子たちと遊んだ。自転車を乗り回し、あたりを探検した。ダムや廃墟、放置された貯水タンクに登った

りした。そのなかで憶えてるのは坂本大智の弟と、三芳という子だ。三芳くんはぼくのことを先輩と呼んだ。学校のなかでもそう呼ばれ、少しはずかしかった。いや、ちがう。ぼくがかれにそう呼ばせたんだ。夕暮れどき、ぼくは長い坂を猛スピードで降りた。からだをひくく傾けてかぜの抵抗を減らす。新サイクロンに乗るライダーみたい。でも道には窪みがあった。まづ前輪が持つてかれ、半回転、放りだされ、腹這いの姿勢でアスファルトを滑った。自転車はめちやくちゃになった。当然。ぼく自身も。もちろん。ぼくは三芳くんの家にいった。いちばん近かったからだ。かれの父がインターホンにでた。友だちですと告げる。傷の手当をしてもらった。三芳くんとともに坂を降り、家に帰った。からだの痛み、毀れた自転車、どっちもつらい。かれが帰ったあと、母がいった。傷にまみれたぼくに冷たく、——自転車はミツホだけのものちゃうよ、——だから怒らへんのやで。——じゃあ、どうして姉には自転車があるのか、教えて欲しい。——お姉ちゃんは特別なの。

姉の友だちに汐澤江里という子がいた。かの女には、くそがつくほど生意気な弟がいた。あるとき、やつが三芳くんに咬まれたといい立ててきた。——どうしてぼくに？——わからないまま、姉と友人とその弟、そして三芳くん、ぼくが集められた。わが後輩は否定した。どうしたわけか、ぼくが審判役だった。どっちを信じるか、というわけだ。どうしてぼくを験す？——もちろん、後輩を信じたかった。でも、なんにもいえず、ただただぼくは口籠ってしまい、そのあとずっと三芳くんから遠ざかってしまった。かれとはもうそれっきりだ。2月、妹が産まれた。今宮先生はべつの学校に移ってった。ぼくはかれに紙粘土でつくった人形を渡した。それは仮面ライダー旧1号だった。ただアンテナの材料が見つからなかったけど。

3年の担任は林という乱暴者だった。子供たちを恫喝し、ときには撲り、足蹴にした。授業放棄もたびたびだった。だれかが謝りに来るまで職員室からでようとしなかった。けつきよく優等生たちが頭をさげにいく。ぼくはおもった。あんたなやつ、放っておけばいいのにつて。ぼくはたびたび宿題を忘れ、渡り廊下にある、用具室に連行された。パイプ椅子に坐らされ、罵られる。胸倉を掴まれ、壁に押しつけられる。ぼくは耐えた。泣かなかった。それでも廊下を歩くほかの教師に救いを願った。

厚化粧の女教師が戸のすきまからこつちをみた。去ってった。なんてことだ！——なんとか釈放されて、教室にもどった。ぼくはなんとか学校を休もうとした。ある夜、母のまえで包丁をだし、じぶんの腹に突き立てようとした。たった2日だったけど、休みを得た。そんななか、父方の祖母が死んだ。眠ってるあいだに息を引きとったそうさ。ちよつとまえに会ったばかりだというのに。

ぼくは一瞬は喜んでしまった。林に会わなくとも済むって。そんなじぶんがいやだった。ぼくはおばあさんのことが好きだった。懐いてた。かの女は岡山から追われ尼崎へきて『鈴村』というお好み焼き屋をやってた。かの女をつくる苺ミルクをとるとき懐いだす。姉や妹はそれがきらいで、大きな声で不味いといってた。ぼくは葬儀で泣きじゃくった。姉や妹は冷たく無表情だった。焼き場でぼくはかの女の骨を盗もうとした。それほどのことだった。でも法事は退屈で、見慣れない親戚たちがいやだった。おまえらは関係ないんだ！——そう怒鳴ったのを憶えてる。

あるとき、授業で花壇へいくことになった。みんな走った。林は怒って腕<sup>かいな</sup>をふった。教室へもどれ！——やつがいうには植田という女子がコンタクトを落としたという。でもそんなことだれがわかるんだ。かの女がコンタクトしてるなんてことをどれほどのやつが知ってるんだ？——理不尽さを味わうには、もつともなやつかも知れない。でもそんなかたちで学びたくはなかった。毎日、撲られないか怯えながら過ごし、やつがいなくなるまでずっと気が気でなかった。

そんなころ、家に上村透と、寺内麗奈が来るようになった。ふたりして空き地の野苺を食べてた。どうしてふたりで来たんだとぼくは尋ねた。道でたまたま遇ったという。そしてぼくはふたりと、かの女の家に行った。贗アツパーミドルな家、贗アツパーミドルな内装、贗アツパーミドルな家具、贗アツパーミドルな両親たち。おれはただただどうしていいのかわからずにいる。数日後、かの女の家近くを通った。姉の友だちの母親が声をかけてきた。ぼくはうつかり寺内のことが好きだといっってしまった。ほんとは心にもなかった。女の子の家に行ったことで舞い上がったんだ。数日後、すっかり噂になって、父で

すらそいつを知ってた。ぼくはただただぜんぶが呪わしかった。つぎにぼくは宇土まどかという子が気になった。好きというほどではなかった。でも好きだとおもうことで亢奮を憶えた。かの女が転校するとき、みんなでパーティーをやった。木村という女子に訊かれ、ぼくはかの女が好きだといった。半年経って、学校の催しにかの女が来てた。木村とともにぼくを見る。「あいつ、きらいや」という声。かつてぼくのお道化や踊りに笑ってくれ、リクエストするか女はもういなかった。女の子たちがどうして変わってしまうのか、ぼくにはわからなかった。怖れ、羞ぢ、ぼくなんかが出過ぎたまねをしてしまったとみずから責めるしかなかった。

家の経済が傾くにつれ、父との関係もゆがんでった。夜にふたりで映画を見ることもなくなった。早く寝ろ！——父は怒鳴る。これもまた理不尽なことだった。週末には朝早くから草刈り。たったひとりだけだ。姉妹は眠ってるというのに。ぼくは次第にかの女らに怒りをむけはじめた。暴力を繰り返した。ある日曜日、家の枇杷の木が切り倒された。あれほどおいしい実をつけてた木が伐られ、燃やされる。おれのぼくの幼年期がそのまま終わったみたいな匂いがした。やがておれは父を撲り、母を売りにいくだろう。——そんなおもいとは拘りなく、時間は過ぎてった。ぼくは素足で過ごした。学校でもそとでも。上級生にも下級生にも見下されてた。たびたび望ましくないやからにしつこく攻撃されることもあった。姉や妹たちとも遊ばなくなった。近所のだれとも話もしない。そんなとき、年少の女の子に声をかけた。一緒に遊ぼうとした。かの女の腕を掴んだ。その子は悲鳴して去ってった。やがて家に連絡がいき、ぼくはかの女の家で謝りにいった。廊下の果てで怯えた少女がこちらを見る。ゆっくりとちかよる。親にうながされてあたまをさげた。

\*



ぼくは、ぼくという1人称がきらいだ。あるとき、作文の発表があった。窓際に坐ってぼくは、ぼんやりみな声を聞いてた。いつも気どつて、いじめっこたちも1人称には《ぼく》を使った。それが癪に触ったし、ひどく羞ずかしくおもえた。だからぼくは《わたし》を使った。みんな嗤った。長つたらしい嗤いだった。教師がみなとぼくとを諫める。大人しくなるまで。

時代が、あるいは立場がかたむくにつれ、大人たちは臆病になり、それを見せまいと拳やからだにものをいわせた。父は母を罵り、母は隠れたところで父の悪口を子供にいいふくめる。恐慌は子供たちをも呑み込んだ。だれが生け贄になるかをいつも政治が決める。ひとのかたちをしたひとでないものたちが、知らないうちにみんなを呑んで友だちだったはずのものたちが友だちだったはずのものへ石を投げてた。子供たちは知らないうちに親のふるまいを身につけ、それぞれの大人を演じる。みんなはみんなの瑕疵を探りあった。うわさ囁やかげぐちをいつてたがいの結束を高め、そのつらなりを友情と呼んだ。

4年にあがって担任は北原先生になった。やっと林から開放されてとにかく嬉しかった。かれは休み時間にギターを弾いた。ぼくも弾いてみたくなった。宿題をいちどもしなかった。ぼくはもう、授業についていけなくなつた。木曜日のみの部活動があった。ぼくは演劇部に入った。はじめはまったく興味がなかった。じゃまばかりしてた。秋になってまじめにやるようになったものの、視聴覚室が使えなくなり、そのまま立ち消えになった。ほかの部への編入を望むも叶わなかった。ほんとうは漫画部に入りたかったけれど、そこには姉がいた。いっぼ父の日曜大工はどんどん大事になつた。ぼくはもろに巻き込まれ、人非人としての薰陶を受け始める。ぼくは映画監督になりたくて、勝手にビデオカメラを持ちだしては手づくりの町を撮つてた。ある日の授業、ぼくは便所で少しだけ休んでた。わるいとはわかつてた。そこへ先生が入って来て、授業をさぼつたと怒つた。

「留年させるからな!」——ぼくは家に帰って悩んだ。母は笑い飛ばした。小学校に留年なんてない。半信半疑のまま風呂

に入り、シャワーを浴びた。翌日、先生はなにごともしなかったかのように授業をした。そしてギターを弾いた。1月、地震が来た。棚からものが落ち、蒲団をかぶってかわした。家族はぼくがまだ眠っているとしつこく笑った。余震も激しく、ガラス戸がわれるかも知れない、そうおもえるほど揺れた。父は歩いて会社までいった。そのあと、父は、どういうわけか、ぼくだけ連れて伯母の家に行った。湊川の山手から神戸市街へ。坂をくだり、ずっと町のなかへ入っていく。ぼくはズボンの袖に漫画本を隠して持ってた。ひまつぶしのためだ。商店街に入る。ビルが大きく傾き、道には照明や看板や窓ガラスが散らばってた。ぼくは父のカメラでシャッターを切りまくった。どこまでいっても倒れたビルや、地階や2階部分の押し潰れた建物と家屋がつづき、ひとの姿はまるでなかった。伯母の家で父は2階の水道を修理してた。ぼくはじっと黙ったまま、はじめて会う伯母とその夫のまえ、時間が過ぎるのを待った。

学校もしばらくは休みになった。登校がはじまっても午前中だけ。給食センターもだめになって、チーズケーキやパンケーキが配られた。減多にないご馳走にぼくの舌が歌った。ふたたび退屈な授業ははじめるまでひと月はかかった。生野高原じゃ、なんともない。むしろ学校のある丘には瓦が落ち、ブルーシートをかけた家がやたらとあった。そして5年生にあがる。担任は東野先生だ。かれは強面で知られてた。とてもおっかないとぼくも想像してた。でもそんなことはなかった。かれはやさしかったし、ぼくのことを理解しようとしてくれてた。ぼくは上履きを履くようになり、大人しく授業を受けられるようになった。そのいっぽうで宇土まどかが帰って来た。ぼくは動揺した。毎朝、ローマ字のプリントを取りにくたびに、かの女の蔑みと嫌悪で充ちたまなざしに眼を伏せるしかなかった。時折、男子どもがと叫ぶ。――ミツの好きなひとは！

うろたえるぼくを見て喜んでる。こいつには参った。されるがままにぼくは耐えた。いちばんめの妹にもおなじようなことをされた。ぼくが気になってる子のまえで「ほーくんの好きなひとや！」とわめくんだ。そしてぼくが女のひとを絵に描くのをことさら恥ずかしいようにいいふらす。ぼくは、だれについても卑屈さがあった。気がつけば、なまえも呼ぶことができない

い。すまないような、恥ずかしいようなおもいでいっぱいだ。かれらを友だちと呼べるのか、呼んでいいのか、自信がない。まったくなくなった。それ以来、ぼくはだれについても警戒を抱くようになった。漫画部がないからとビデオ部に入った。でもなにひとつ作品をつくらないまま1年が終わった。

\*

毎年、『桜の絵コンクール』というやつがあった。ぼくはいちども受賞できなかった。姉や妹でさえ入賞したというのにぼくの絵はだめだった。母にいわせると、ぼくの絵は「子供らしくない」ということだった。ぼくは卒業までずっと図工の内田先生に絵を見てもらってた。漫画ももちろん。いろんな助言をもらったはずが、ぜんぶ忘れてしまった。卒業後、かれとは1度だけ遇ったつけ。中学2年のとき、コープ神戸の本屋でだ。

絵、描いてるか？

いえ、やめました。

いまは小説を書いています。

そうか、——それもおなじく表現だからな。

かれはがっかりしたようだ。淋しい声でいった。いまでも申し訳ない気持ちだ。それぞれ別の場所へむかい、かれはその13年後に死んだ。それを今宮先生から教えてもらったとき、もう2年が経ってた。もっと早くなんとかしてれば再会できたかも知れない。でもどうすることもできなかった。われわれはみなすれちがい、ある1点で結ばれる。そしてそのまま離れ、大概、ふたたび交差しないまま息絶えるんだ。だれもかも、そこから逃げることはできない。垂直にそそり立った崖のうえで、互い

の指にふれあい、落ちる。たったそれだけのために人生はあって、死はあって、そのあとには余韻さえ赦されてはない。そいつに気づくまでにどうしようもなく時間がかかってしまった。

12月、いちばん下の妹が産まれた。母は墮ろすつもりだったらしい。父がとめた。金はない。母がパートタイムにでるといっても父は反対した。けれどもけっきょく母は産まれたばかりの妹を残して仕事にいった。髪をみじかくして。母との関係はずっと薄くなるばかりだった。その存在さえも半分あって半分のようないようなものだ。ぼくはまったくかの女と話をしなかった。姉妹とわいわいやってるなか、とてもわって入る気にはなれなかった。ぼくは話が苦手だったし、口をひらけばひとをうんざりさせるのをわかってたからだ。憶えてるかぎり、ぼくが産まれ、はじめておもったのは（こっから逃げなくては）だった。知らない半裸の女がいて、一緒に眠ってる。どうして？

ほんとうの家、ほんとうの母、ほんとうのなまえを口にするまえにぜんぶ忘れてしまった。幼いころからじぶんが生まれるまえの文化に興味を持った。それは漫画本だったり、テレビ番組だったり、音楽だったり。給油所をやっている隣人がぼくの5歳ごろ、引っ越しの際、レコードコレクションとプレイヤーをくれた。子門真人がやたらにあった。ぼくはかれの『ヒーロー主題歌集』や『流星人間ゾーン』を何度だって聴いた。でもあるとき、近所の子供たちがそいつを毀してった。

\*

終礼のとき、岩瀬が壇上にあがった。そして告白した。——最近、女の子たちがぼくに冷たい、避けられてる気がする。きられてる気がする。どうしたらいいのか、教えて欲しい。——なんだってやつはそんなことをいうのだろうとおもった。ぼくはいつもかの女たちにやられてる、いわれてる、でもそれを訴えてもどうしようもないことがわかった。岩瀬は年寄りみ

たいな皺だらけの顔をみじめにゆがめ、泣きそうな、嗟れた声で話す。先生がかれをかばう。たしかにかれは女の子に好かれるようなやつじゃなかった。見るからに悲壮だ。たぶん、その悲壮さがいやなんだろう。かれの告白を反芻しながら、その日の帰途をたどった。ぼくは泣きごとなんか、いったりしない。

\*

雲がひとのように

長距離バスとならんで

森のなかへ姿を消す

時間は

ぼくらがおもってるいじょうに

感情をもってる

——それはコーヒーみたいに

——それは警官みたいに

——それは眠りに就く子供みたいに

ぼくは雲が好きだ

有情群類とともにして

もうじき下車します

さようなら

\*

6年にあがった。担任はまたしても浜崎だ。好きだった音楽の武内先生は産休に入った。ぼくは図工や音楽の先生とは仲良くなれた。でもほかのすべての先生とはまるでだめだった。武内先生のかわりに醜女が入ってきた。世界の終わりみたいだった。忘れもしない、かの女は見本を見せようとぼくのリーダーを吹いた。みんなが憐れみをもってこっちを見た。武内先生がもどつて来るまで、ぼくはそのぞつとする醜女から逃げようとしてた。やがて先生はもどつて来た。そんなときだ。義村廣がいった。

おまえ、仮面ライダーやウルトラマンの歌しか知らへんのやろ！

こんなことをいきなりいうやつにはうんざりだ。2年生のときもかれはおなじようにみんなのまえで恥をかかせた。じっさいぼくには好きな歌謡曲があまりなかった。姉や妹の聴く音楽もいいとおもったことはない。映画音楽のほうがずっとよかった。ぼくは口ごもり、そんなことはない、とだけいった。ぼくはたったひとりでB T T Fのサントラ盤を聴いた。松本というやつがグリーンハイツに越してきた。やつはおれをしつこく平手で叩き、叩いては隠れた。なんのために？——ぼくは我慢がならず、浜崎にいった。だれかがやつにおれがかれの悪口をいってたというのが、その犯意だった。そんなことをいい含めるやつを、松本は明かさなかった。その挙句、「ミツホはすぐにちくる」といった。じぶんがされたほうだったらやつはなんといっただろう？——ぼくはいつもジャージを着て学校にいった。それしか服はなかった。けれどもある日、ボタンシャツにベルトとズボンでいった。女の子たちが褒めてくれた。それから服装について気を配るようになった。

\*

いつからか、かの女の存在に眼を奪われてた。髪のみじかい、少年みtainな子だった。大きな声で明るく喋ってた。日毎にかの女のこと気がになった。かの女が休み時間、ぼくの机に坐る。ぼくはかの女の名まえも知らなかった。けれど「好きだとおもっては負けだ」とみずからに科した。もうひとを好きなるまいとおもった。それでもかの女を眺め、ついにそのなまえを知った。村上友衣子。どうやってかの女に近づけばいいか、そればかり考えつづけて日を過ごした。けれども友衣子の存在があるからといって学校での暮らしに救いはない。まえの席に坐るた小寺沙紀がいきなりこっちをむいていう。

おまえの人生、終わっとう！

こういった不意打ちによく遭わされた。ほかにも細見というやつがぼくに突っかかってきた。

みんな、おまえのことばかだっというてるでえ！

みんなってだれだ？

みんなはみんなや！

だれとだれとだれなんだ！

おまえ、塾にもいってないんだろう？

因数分解もわからんのやろお！

知ってるんならいつてみいや！

こいつはやたらとしつこかった。見てくれはなよしたおかまのくせにぼくを攻撃する。あるとき、階段でいきなりテレビゲームを自慢した。



おまえ、ゲームも知らんのやろお！

残念ながらそうだった。ビデオゲームは父がずっと禁じてたし、ぼくができるのはPCゲームだけだった。細見のやつはぼくを挑発し、やつを階段から突き落とした欲望に駆られた。そんなろくでもないことがあまりにつづくなか、よく休むようになった。休むたびに連絡帳を持ってくるのは竹村紗代だ。母が竹村さんからよと声をかける。学校じゃあ、かの女は寺内といっしょになって、ぼくへいやがらせしてるのに、こんなことでいい子ぶるなんて卑しいとおもった。たとえば、かの女と寺内のそばをぼくが通る、ふたりは悲鳴をあげてよける。ぼくは癪にかかった侏儒みたいになにもいえないで立ち尽くす。あるいは耐えて歩き去る。ぼくがわるいというのか。ぼくがなにをしたというのか。罪悪感にかられ、怒りにかられた。かの女たちに出会すたび、反撃をおもった。でも拳すら挙げられない。学校が好きだったことなんていちどもない。男から女からいろいろな眼に遭わされつづけてる。

竹村の家は遠いはずなのに、ちかくに棲む透や大智がやって来ないのも癪だった。友だちがいないことにうすうすながら気づき始めてた。森へ入って山茄子を食べる。もう3年まえ、うちのまえで寺内と透が野苺を食べてた。あのころがよかったなんておもわない。寺内はいやがらせをするし、宇土はもうぼくの藝も笑いも求めない。かわいかった子たちはみな変わってしまった。村上だって変わってしまうかも知れない。いや、変わってしまう。余計なことばなにもいわないことだ。好きだとか、そういうことは。

慰みにぼくは猫を飼おうした。真夜中、かれと眼を合わせた。かれは警戒心を解いて、ぼくのほうへ近寄って来た。うれしかった。クロと名づけた。でも飼えなかった。赦されなかった。夏のある日、かれが溝にいた。太陽を浴びて眼をひらきぐったりしてた。眼からどろりとした液体が流れてる。どうすることもできなかった。ぼくはかれを見殺しにしたんだ。

\*

ぼくは教室で、ボックス棚の荷物を片づけてた。荷物のなかには祖父からもらった、鉄の、小さな定規が入ってた。かれのなまえも入ってる。質のわるい同級生ふたりがそいつを見た。——それ、村上から盗んだんか？——ぼくは言葉にできず、その定規を投げ、涙声で祖父からもらったことをいった。悔しくてならなかった。

\*

夏休みになってぼくは、はじめて酒を買った。髪をぜんぶ降ろし、貧相な格好をして、罐チューハイをいっぽん、そしてもういっぽん。退屈な家族旅行を紛らわすにはそれしかない。家には金がなかった。吝嗇家の父は田舎道をただただ走ることにできなかった。そしてだれもない森のなかの駐車場で朝まで車か、テントのなかで過ごす。寝苦しく、便所はひどく汚れてた。大きな蜘蛛が這いずり回って気分がわるかった。そんなことばかりつづいたあとに休みが明けた。友衣子は尾野とけんかしたらしい。ふたりはなかよしで通ってた。事情なんてなにもわからないのに、アカの豚野郎が人民裁判を要求した。こいつは善悪の判断だって、相手が子供だから好き放題やってる。九州市部から送り込まれた三流の工作員なんだろう。席の配置を変え、審判と書記長をおいた。だれもこんなことはやりたくはなかった。ふたりがどうしてあなってるかをだれもしらなかつたかも知れない。紅衛兵たちがいちまいちまい紙をくばった。なにも書かれてない紙。この出来事からなにをおもうか？——てなわけだ。

村上さんと尾野さんのことについてどうもういますか？

なかよくしたほうがいいとおもいます。

村上さんと尾野さんのことについてどうもういますか？

仲直りしたほうがいいでしょうね。

村上さんと尾野さんのことについてどうもういますか？

ちゃんとおたがい仲良くしたほうがいいとおもいます。

村上さんと尾野さんのことについてどうもういますか？

返答はしだいに男子たちにもまわってきたけれど、みんないつてることはおなじだ。なんの閃きもない。それよりどうしてけんかになったかを教えろよ、アカのできそこないめ。

村上さんと尾野さんのことについてどうもういますか？——ぼくはいった。——ふたりで話し合って、それでもだめなら一時的でもいいから離れるのがいいだろう。——友衣子にきらわれてしまったかも。ぼくはしばらく悔やんだ。浜崎がいう。——「離れてもいいのか？」——なにがどうあっても、ぼくにはまったく関係ないことだ。いくら愛しい友衣子のことでも、かの女の交友関係に口を挟む謂われはぼくにはなにもない。人民裁判が終わってぼくはただ坐ってた。手許には共産党綱領も、毛沢東語録もない。ただただ日曜神経症を焦がれながら、友衣子の横顔を盗み見てた。

\*

あるとき浜崎が課題を寄越した。「戦争について書いてくるように」。ぼくは書いた、もし戦争になったら自衛隊が軍隊のかわりになるだろう。母は肝を冷やした。かの女の弟は3人とも、それぞれ陸海空の士官だったからだ。かの女は手紙を添えて

提出させた。激しく面罵され、浜崎は報復にでた。たぶん戦争へのうらがえしの愛がそうさせたんだろう。修学旅行はいちばんの催しだった。だのにぼくの班は最悪だった。ぼくのところだけ、あまりものの集まり。ぼくにいやがらせをしてた小寺沙紀と久保恵里菜、それから前野という小男。まったく最悪の布陣だ。やってくれるな、浜崎め。——持ってきたカメラで夜の海を撮った。露光不足の神戸港。小寺と久保がじぶんたちを撮ってくれとせがむ。口さがない醜女なんぞけつ喰らえだ。ちくしょう、浜崎め。——フェリーと電車とバスを使って広島にいった。ぼくは恋をした。もちろん友衣子に。かの女は去年転校してきたらしい。そのみじかい髪が胸をざわつかせた。ついに精通が来て、ぼくは、ぼくがわからなくなった。かの女のことをなんでも眼に収めたくてならなかった。友衣子、友衣子、友衣子。どうせ訊いたってぼくに教えてくれるものはなにもないからだ。ぼくはかの女を写真に収めようと四苦八苦だった。それは船のなかでも、列車でも、広島市街でも、宮島でも。でもぼくはかの女に出会うことなかった。ぼくが勝手な自由行動にでても、土産物屋にいても、被爆者のホラー人形のなかでさえも。もはや宮島はくらかった。ぼくは牡蠣の山葵漬けと、もみじ饅頭を買った。そして丘の公園でほとんど平らげてしまった。土産にもならない。それからぼくは宿にいて寺内麗奈を探した。スパッツ姿はなかなかそる。この女のふるまいは最低品だったが、どういうわけかやってしまった。竹竿をつかって宿の窓をあけようとした。だれも声すらださなかった。しばらくして何人かのわるがきが竿をつかった濡れ衣を着せられた。かれらを眼で責める友衣子がうつくしかった。ぼくはじつとしてかの女を見る。かの女は可憐過ぎた。太陽は海へ融けた。帰りのバスのなか、ぼくはまたかの女を盗み見た。初日に来てた服を着てる。そっちのほうがずっといい。素敵じゃないか。西宮北インターから学校へ。カメラにはまだフィルムが残ってあったけど、かの女が眠るなかでぼくにできることはなにもなかった。

冬休み。父の生家まで連れられた。いろいろとまわり道をしながら、森林や溪谷を越えて美作市下町<sup>みまさかしもちよう</sup>まで。ぼくは書きかけの漫画を持って屋敷にあがった。そいつは、はじめギャグ漫画だった。いまではヒーロー・アクションもの変わった。石ノ森章太郎を真似て、かげのある話にした。ただひとコマだけ、女の子を桂正和みたいに描いてる。あたりに店はひとつしかない。大きめのスーパーマーケットがあって、制服の少女がふたり、狭いテーブル席で笑って話してる。どこにもいくところがない。生野にそっくりだ。祖父は土間にある小さな室のなかで火鉢に当たってた。なにか話をしようと近寄ってみた。貰を啗え、火鉢に眼を細めてる。かれは、かつての妻が死んだのをどうおもってるのか。なんとなく父の幼少について聴こうとした。かれの口が曖昧にうごき、閉じる。なにをいつてるのかわからないまま、そこを離れた。居間で漫画を書いていると、学生らしい青年がやって来た。

漫画を描いてるんだ？

うん。

巧いね。

かれの室に遊びに行く。自動車や飛行機のプラモデルが棚にならん。机のうえには参考書がならび、いかにも勉強中みたいだ。——プラモデル、あげるよ。——かれはいい、赤いレーシング・カーと、プロペラ機をぼくにくれた。まさか、かれがいちばん若い叔父だと、そのときは知らなかったし、わからなかった。

休みが終わった。その木曜日、うんざりしてた。マンガ制作部のための作品はページ数制限でだめになってしまった。そんなことは聞いてない。印刷はやると顧問はいう。けれど割愛され、他人の手が入ったものだ。自作とはいえない。悔しいおもいで椅子に坐った。帰りの車で母がいった。——それ、ちゃんと印刷屋さんにとっていったら。——教師に否定されたものを

またべつのところにだす、そいつは辱めでしかない。ぼくはだめだ。室の隅、なるべく見えないところへ、漫画『ナチュラル仮面団』を置く。せつかく描いたのに、だれにも見てもらえない。ぼくですら、どうしてもよくなってしまった。

卒業の催しをみんなで考え、出し合ってた。女の子は、男の子全員と服を取り合えようといった。男子みんなで反対してるのに、ぼくはひそか、女の子になって友衣子に近づけばいいとおもった。あとはせいぜい唄うこと。ぼくは自作の脱獄歌を唄った。みんなが笑った。そんなもの使えるはずもない。支度がなにもかもが終わった日、上田という女が泣いてた。中学受験に落ちたらしかった。醜かった。とにかく視界に入れたくなかった。かの女はだれにでも悪態をついた。ぼくと席が鳥だったとき、さんざ攻撃された。みんなに渾名をつけて呼び、世界が呪わしいというさまだったが、それでも地位が欲しいんだ。

最後の席替え、ぼくはようやく得た友衣子の、通路を挟んだ隣の席へいった。籤引きで<sup>ずる</sup>狡をした。2度引いたんだ。それまでして欲しかった席だ。上田なんかざまあだ。ぼくは友衣子をちらりと見た。汗ばんだスポーツ着がよく見えた。そしてぼくはそいつを眼が焼けるまで見てた。それでもかの女とぼくとを繋いてくれるものはなにもない。やがてかの女はべつの学校へ行ってしまいだろうし、そのかがやきに触れることなんかないのをぼくはわかった。醜いぼくがたったひとつ見られる白昼夢にちがいない。

けっきょく友衣子もだんだん席をぼくから離すようになった。席替えが決まったときだって、かの女は教室のうしろで尾野と一緒にぼくを見てた。蔑んでた。ほんとはかの女もぼくをきらってるのがわかった。どうすることもできない。嫌われる勇氣だって？——ぼくはなにもせずともきらわれ、嘲られてきた。いまさらできることはない。卒業予備軍としてやることは多くない。下級生から色紙をもらったり、最後の催しを考えたり。ぼくはなにもしなかった。どうしていいかわからないまま提案やら、なにやらくだらないことをしてるみんなを見てた。アカはふんぞり帰って教卓で指令をだしてた。やつにみつからないようふるまった。やつの銀縁が光る。

こらミツホ！

芝居の準備をしろ！

勝手にやってればいいんだ。またぞろやつの好きな戦争悲劇ものだった。三國連太郎が若いときの体験をやることになってた。ただし結末を変えて主人公を死なすことにしてた。愚かしさしかなかった。反戦のためにはどんな手段をとってもいいのか。戦争が起ったらこいつを真っ先に殺したい。ぼくは村の役人というどうでもいい役で、主役はいじめっこの小出だった。しらじらしい芝居。やがて暗くなつてなにも見えなくなった。やがて本番が来た。終わった。全員で歌ったり、行進をしたり、くだらないことがつづいた。カーテンコールまでずっとあくびを噛み殺してた。ぼくには浜崎が戦争を期待してるしかおもえなかった。実際反戦的な人間ほど好戦的な態度をとるもので、ぼくはのちのちまでそういった手合いに痛い目に遭わされることになる。ぼくはかれらかの女らにとって体のいい標的ではなかった。それをおもい知るのはまだあとだ。

やがて芝居が始まった。ぼくは小出に敬礼の仕方を教授した。祖父から教えられたものをだ。すべてが暗く、溶暗するなかで、みじかい科白をいい、なりゆきを見送る。なにもかもがまことに退屈だったにもかかわらず、ぼくはその光景を愉しんでもいた。どれだけかれらが無様な声をだすのか、それだけが期待だ。みんな、浜崎の人形でしかない。けっきょくぼくは便所にいくふりをして体育館の裏口でひとり遊びに興じることにした。

\*





ポラロイドのフィルムが切れた。

カーカーはくその幼児語だって聞いた

コーヒーを呑みながら

そういった男の銀河

は、カーカーでいっぱいだ

ぼくは馴染みとなったそわそわをなんとかしようともがいてる

ハンバーガーを食べながら。

ハイネケンをだしてくれる、

「バーガーキング」が好きだ

おそらくぼくが飛ぶとき

アボガド・ワッパードとセットで持っていくよ

黄金幻想よ、

——くたばれ！

\*

深夜、給油のあいだじゅうずっと、滝田はバッテリーやらエンジンオイル、配管の具合まですべてを見た。あきらかに苛立っていたし、スピーカーの音響にも怒っていて、なんどもスイッチを押した。配線も見た。——もういいだろうとわたしは思った。店主が降りている。滝田はおかしな声で草を買いたいといった。

おーおー、おれも落ちぶれたもんだな。

ないのかよ。

いーやー、あの小屋にある。

いつてくるよ。

どっかで休んだらどうだ？

もうじき休むことになるよ、いやでも。

やつのブルージーンはとてもよかった。ヴィンテージものだろう。わたしの趣味ではないが。排煙を嗅ぎ、おれたちはパラダイスにむかう。滝田はほくほく顔で車に乗って、店主にチップをはずんだ。まあ、いいだろう。わたしにはどうだっていい。パラダイスなんていうものはないとわたしは滝田にいった。ちんけなバーでピンボールをやるだけだって。やつは聞かなかった。ハンドルを握って夜の果てまで走るだけ。けっきょくはふたりとも疲れ切って、タコマの安宿に停まった。モーターの灯が悲しかった。そしてちかくの酒場で呑んだ。CCをジンジャーでわった。アイラ・オブ・ジュラをロックで呑んだ。女はいない。カウガールはどこにもいないんだ。——おまえのギターはな、と滝田が口を切った。油漬けにでもして3年寝かせろよ。

——それからどうするんだ？——おまえのタムでジャムでもつくるのか？

おい、中国人ども。

店主がいった。——おれたちは中国人じゃない。

ともかく、いざこざを起すな。

それからウィードはてめえの室でやれ、ここじゃあ解禁されてねえんでな。

わたしたちは黙ってそれぞれのを呑んだ。音楽はなし。地元の年寄りがあたりでわたしたちを眺めていた。どうってことはない。そろそろひけようとおもった。わたしだけでもいいから。ところがだ、滝田がひとりの男と撲り合いになって、そのままガラスごと外にだしてしまった。いったい、なにがジェーンに起こったのか？——しかたなくわたしが運転になった。滝田はジュラのボトルを持って来ていた。なんていいやつなんだ。おまけにポットまである。わたしたちは立派な犯罪者だ。適当なクリークの近くに車を置き、歩いてモーテルに来た。特大サイズでビニールのポニーが迎えてくれた。それまでにわたしたちは3キロも歩いていた。若い女が降りてきた。薄茶色のみじかいボブに、昏い緑色の眼をしている。

泊まりたいの？

もちろんだ。

草の匂いがしてる。

ほんのお土産だよ。

ありがとう、安くしておくね。

ありがとう。——MISS——？

ロージー・フロスト。詩人とおなじ綴りよ。

詩を書くの？

兄が、——もうやめちゃったけど。

わたしはさっきの事件が大事になるかどうか、札を切った。占いは得意じゃない。でもやらなきゃいけなかった。でもけつきよくわたしはジュラを呑み、ポットを吸った。なにかも大したことじゃないということがわかった。いいポット、いいフロスト。かの女のような娘と寝てみたかった。でもわたしはもうへろへろだ。滝田にまかせてさっさと眠ってしまった。

翌朝、滝田の姿はなかった。カウンターにメモがあって、「ロージーとでかける」とあった。あしたの夜には『ブーン・ブーン』での催しがあるというのに。どうしろってんだ。待つしかなかった。窓から見える、さむぎむしい土地を車が入ってきた。黒いシェビーだ。もしかするにもしかしたらだ。降りてきた男はわたしをまともに見ずに呟いた。——ロージーがでてったみたいだな、勝手に。

おれはなにも知らない。

おれの相棒と一緒にどつかにいつてしまったんだ。

おまえ日本人ジャパニーズだな、\*\*\*の工場はひどかった。

おれもそう聞いている。ひどいってな。

おれはロージーの伯父だ。——この国は好きか？

わたしは答えなかった。好きな土地はある、ひとがいる。ただそれを説くには物事が急過ぎる。

ロージーこそいったいなにものなんだ？

かわいそうな娘だ。

それ以上はいえないみたいだった。男は滝田の特徴をおれから訊きだし、さっさと村の寄り合いへ電話をかけた。そしてい

なくなった。それから1時間、2時間、3時間、4時間。冬の陽は暮れてゆく。わたしはそとへでてあたりを歩き回った。とまれ！——聞えたときにはもう頭をやられて冷たいところへ仆れていた。気がついたとき、民家の1室に閉じ込められていた。氷嚢がひとつ溶けかかって寝台にあった。殺す気はないらしい。どうしたものか、天井をみつめ、横になった。やがて扉がひらき、若くない女がケトルとグラスを運んできた。互いになにもいわないまま、受け取って白湯を呑んだ。女は椅子に坐った。階下からやがて男がきた。まだ若い男だ。

おれのことを知ってるだろう？

いいや。

ハंक、ロージの兄だ。

詩を書いていたんだって？

やめろ、死にたいのか！

きみはひとが殺せる気にいるだけだ。母親のまえでなにができるってんだ？——かれらはよく似ていた。

仲間はどこにいった？

それはわからない。いつ帰ってくるかもだ。

あした、おれたちはライブがあつて、はやく現地にいかなくちゃいけない。あいつなしで舞台には立てない。どうしていいか、わからない。

ロージはまえにおれがやったことで傷つけられたんだ。

ひどいものだった。

かの女にはなんの落ち度もないのにだ。

それからかの女はこの町をでるといって、いろんな男をだましてきた。

身体が無事なのが不思議なぐらいに。

いっぽうでロージを襲ったやつらは豚箱をでてからずっとロージを逆恨みしてる。

手を貸して欲しい。

わたしをじっとみるハンクはまちがったやつに見えなかった。ただ向こう見ずで、落ち着きがなかった。突っ込むのはあぶない。そうはいっても滝田のこともある。わたしは訊いた。きみはいつたいなにをしたんだ？——2年まえ、村の顔役といつていい男に車を奪われたんだ。一味の棲む家に忍び込んで探した。下っ端をひとり撲った。そのときやつの女が入ってきて、おれはかの女とわるくない仲になった。そしてふたりで帰って来たんだ。——小さな物語だ。車の憾み、顔役の沽券、そして女。——でも、そいつがほんとうなら、いくべきところはやはり司法ではないか。

こんな田舎でなんになるっていうんだ？

どこにだってもんな揉めごとはある。それはわかる。しかしいまは、まだ滝田がやられたわけでもないわたしはおもい、車のナンバーを書いてハンクへ渡した。麦藁色の壁に遊覧船を描いた油絵がある。そいつをみつめ、しばらくしてわたしは立ちあがった。まだ頭が傷む。

ここはじめてか？

ああ、この国でドサ回りもはじめてだ。

ハンクが笑った。気づけば夕餉のときだ。豆料理と子鹿のステーキがでた。どっちもうまかった。熱い珈琲で流し込み、ひと息つく。そのときだった。戸外を車がスピードをあげてむかってくる。わたしとハンクは物陰からそとを謀った。そこには古く、緑色のダッジがあった。まちがいなかった。けれども乗っていたのはロージひとりだった。

滝田はどうしたんだ？

かれね、吸ってるうちにどっかにいったのよ。

どっかに？

わたしもやっていたからわかんないわ。

「そのうち、どっかで見つかるさ」とハンクがいった。わたしにはそうはおもえなかった。いまさら大麻ごときでおかしくなるやつじゃない。どこでやるか、どこでやらないかの区別くらいはちゃんといってるやつなんだ。

どこまでいった？

湖のほうまで。

案内してくれ。——わたしたちは湖へ走った。片道1時間もかかる。なんでそんなところへいったのが、どちらがいいだったのか。ロージはなにも憶えてないといい切った。わたしがたどり着いたとき、地面に血のあとをみつけた。追ってはみたが、あっけなく消えた。連れ去られたんだ。冷たいかぜが湖水をゆらし、わたしの胸に入り込む。ロージとハンクは冷静だった。「このあたりには熊がいる」。だがそれと地面の血痕は噛み合わない。ひとの手が必要になる。車だってもう1台いるだろう。だがおかしなことにタイヤ痕はダッジのそれしかない。じゃあ、ロージが？——どうして？

いいかげんにしてくれないか？

ハンクが痺れを切らした。わたしはあきらめて宿に帰った。夜、たったひとりで『ブーン・ブーン』にいった。3時間もかった。ひとりでギターを弾き、ドローイングをやった。客のひとりが不在の男について訊いた。消えたなんていえない。病気だといってごまかした。終わって3時間、わたしはふたたび村へ帰った。ロージは、ロビーのカウチに坐ってポットをやってる。わたしに気づき、笑った。わたしはなにもいわずに宿泊料を払い、じぶんの室へと階をあがっていった。夜の淵に立

って、テレビをつける。ニュースに合わせ、なんにも考えずに見ていた。だれかがドアをノックする。掃除夫だった。わたしはチップをやって鍵を締めた。しばらくだれとも会いたくはない。翌朝、朝食を喰いにでかけた。ちいさな軽食屋をみつけて入った。ひと気がない。でもおれはテーブルについた。

おまえさんは客なのか？

老年の黒人がキッチンの裏から現れた。

テーブルにいるから客なんだろうな、棍棒も持ってないし。

かれには片耳がなかった。刃物でそっくりやられたみたいで、かろうじて耳たぶの切れっ端みたいなのがついてるだけだ。わたしの脳裏に浮かんだものは、かつて見た写真だった。私刑に遭い、吊るされた黒人たちの。女も子供も見境がなく、血にまみれ、生きたまま焼かれ。

サンドイッチとコーヒーを。

おまえさんは旅行者らしいな。

どこに泊まってる？

ロージー・フロストのモーターですよ。

いきなり、かれは動作のいっさいをとめて、わたしを見た。そしてカウンターに肘をつき、冷たい眼で戒めた。――やめろ、あそこからでるんだ、そうでないとおまえさんの生死はわからんぞ。

\*



他者のなまえで

(会ったこともないかれの、)

だれかに酒を奢る

このとき問題になるのはライムか、  
レモン、

どちらを添えるかということ。

なまえのだれかなら、

どちらにするのか。

天使に化けた女たちのために、  
財布をからっぽにする  
のは嬉しい

かつて酒場なぢみの女の子が犯された  
それから店には来なくなった  
真夏の夜のこと

もしきみなら

レモンにするだろう？

18/1/15

\*

下級生の楽隊がマーチングを鳴らしながら鼻をほじった。屁をひったやつだっている。卒業はべつの輪っばを撰ぶだけのことだ。なんであれ撰択肢などというものはない。リハーサルの舞台のうえでぼくはおもいだす。寺島圭吾に貸してきずものにされた『泳げ！ たいやきくん』のレコードのこと、姉がいたために入れなかった漫画部のこと、仕方なくは入った演劇部、仕方なく入ったビデオ部。じぶんでつくった漫画制作部。田中良和に革ベルトで鞭打たれ、はじめてみんなのまえで泣いたこと——ミツホが泣くのはめずらしいといわれたこと、それは救いようもない羞ずかしめだ。田中は3年時に道内から転校して以来ずっとぼくをいじめてる。——下級生のとき一緒に下校してくれた年長の女の子たちのこと。かの女たちのやさしさにあふれたまなざし、そして別れ。——清濁の別もなしにいろんなものがぼくのなかにあった。

そんなとき村上友衣子がこっちにやって来た。ちいさな紙を差し出す。自己紹介のカードだった。

これ、書いてよ。

かの女がぼくにいった。最高の瞬間だ。かの女を笑わそうといういろいろ書いては消し、消しては書いた。憶えたての替え歌を書いた。品がなかった。かの女に渡そうと歩いてたとき、運悪く紙が教卓のまえに落ちてしまった。アカの分隊長がいう。

これはなんだ？

だれに渡されたんや？

答えなかった。友衣子を守らなくてはならない。たとえかの女にきらわれてても。当然。

いったいだれが渡したか、教えるんや。

教えろ！

けっきょく教室全部に渡った声にぼくは負けてしまった。――村上さんです。かの女からもらいました。――めざわりだ、あっちへいけ。やがて友衣子が呼ばれた。ながい説教を受けている。でも声が聞えない。それでもじぶんが辱めにされてるのはあきらかだ。あのやろうだけは赦さない。ぜったいに殺してやる。かの女がかわいそうで、かの女にわるく、申し訳なかった。恥ずかしかった。友衣子はもうなにもぼくにいわなかった。カードのことがどうなったのか、知りようもない。家はどんどん貧しくなった。改築のために、コンピュータのために。父の尊厳と願いのために貧しくなり、ぼくはたったひとりですれにつきあった。家の仕事はみるみるきつくなった。母屋をどうするつもりなんだ。絵を描くこともできないまま日は転がって、それが秋になったり、冬になったり、春になったりした。きれいに建てられた近所の家々がうらめしかった。アマチュアがプロの仕事するわけがない。父の近所でも指折りの変人だった。おかしくなってく家を見て、ひとびとが立ち止まった。ぼくは恥ずかしくてならなかった。こんなところから早くでるべきなんだ。

校庭に穴を掘った。またしても浜崎がろくでもないのをやってる。青い屑入れに未来への手紙を書こうという。ぼくはいつもいじめる田中良和について書いた。やつがにやにやしながら、それを見る。気味がわるい。

実名で書かんで、Aくんとでもしとけよな。

ぼくはそれに不承不承従い、書きつづけた。それでも、けっきょく浜崎にこんなことは書くべきではない、そういわれて手紙は処分された。ぼくはポリバケツになにも入れず、そいつが埋められるまでなにもいわずに見た。小雨が降りだした。なにか汚らしいものにすべてが見える。ぼくはどうしてこんなところにいるんだろう。ぼくのことを気づかうひとはない。曇った空のもとでなにもかもが終わってしまう。暗い。

ぼくは広島で買った小さなカメラでみんなを撮り始めた。ほんとうは友衣子が目的だった。大上里菜というきれいな子に頼んで女の子たちの写真を撮ってもらった。どういうわけか、大上には緊張しなかった。かの女のほうも悪名高いぼくにどうしてか、平然としてた。

\*

\*

父親も浜崎も手強い大人だった。ひとから大切な願いや望みを奪うのがとんでもなく上手だった。同級生たちだってそうだ。ぼくにできるのは空想と絵しかない。こんなものでは勝てるわけがない。友衣子は私立にいくだろうか。かの女みたいな娘がこんな掃き溜めにいるわけがない。それでなにもかも終わりだ。卒業式、母は来なかった。大上里菜に少しどきりとした。赤い唇が大人ぽかった。とまどう。とつてもきれいだったから。ぼくは小さなカメラであたりを撮った。恥ずかしさも飛び越えて友衣子を、友衣子を。――でもなにも写ってなかった。シャッターは緩いし、フィルム感度はわるい、おまけにファインダーを使うと、対象から1メートルはうえを撮ってしまうからだ。友衣子の頭上しか写らない。大智とともにかれの母親の車に乗った。窓からみる校門にまだかの女のかげがある。さようならもいえなかった。声。学校は淋しい建築だとぼくは覚った。だれかを拒み、仲間たちの結束を高める場所だ。そこから洩れたものには、もう居場所なんかない。彫り抉られた子供たちがきょうもコサックを踊ってる。ぼくはかれらかの女らのために花束と、伴奏を連れて来なくちゃいけない。さらば学校よ、ぼくはどこでもないところに行くんだ。

天唇という一語のために滅びたし黄砂のなかのゆいこを見ればや

18/2/15



\*

山口中学校に上がった。公立中学だ。貧しくあらっぱいひとびとでいっぱいの中に校区はあった。落書きから婦女暴行、工事現場を荒らすのがやつらの流行りだった。薄汚い男や女。耳慣れない言葉づかい。なにもかもいけすかなかった。うしろには長陸というやつ。隣は前田美香という陰険な女がいた。おれは早々からかわれ、ぶ厚い唇を揶揄された。矢吹丈のスウェーバックをまねしてた。どうしてだかおもいだせない。おれは図書室にしようとした。そのとき胸板のある男と眼があった。拳の薰陶を受けた。不愉快だった。かれのなまえは知らない。なまえないあらくれものが幾人もいる。

入学生の看板を見たとき、驚いた。そこに友衣子のなまえがあった。かの女がこんなところに来るなんてとおもった。おれは7組で、1階にある。あとはみんな2階だ。どれぐらい会えるだろうか。おれはおもった。いつだったかスーパーマーケットで、中井龍之介とつれあいの中学生ふたりにつきまとわれたことがある。やつらはあざ笑った。「おまえは絶対8組にいく!——特殊学級やぞ!」——寸止めじゃないか。おれはさっそく嗤いものにされてしまったし、友衣子に出会すのもむづかしいとわかった。勉強にはもう着いていけないのがわかってる。

かつて幼稚園で一緒だったやつらが、つきまといはじめた。どうしてかはわからない。かれらの悪態や挑発にはうんざりだった。みんながいつせいにつよく見せようと気取ってる。校庭の花をひきぬいてやつらに投げつけた。花壇を荒らしたとして訓戒を受けた。たいしたものじゃない。でも、カブラ・ペンを突きつけたあと、やつらの母親が飛んできた。「うちの子につきまとわないでくれ」——こういった不条理と友人になりつつあった。それも長い友人に。——なぜ?

友だちがないということに気づいたのは科学館へいったときだ。だれも一緒に昼餉をとってくれるものがない。だれも声を



かけられない。みんながみんな、だれかとそいつをやってるあいだ、おれは恥ずかしくて、ひと気のない隅っこで喰った。小  
学生るときなら、だれかが声をかけてくれてた。ときには女の子ですら。じぶんがまったくの用なしだとわかった。透ですら  
声をかけてくれない。帰りのバスのなか、ふぎけあうみなを横目におもった。どうしておれはひととおなじにできないのか。  
やがてその日の写真があがった。クラスでいちばんの女の子とおれが写った1枚があった。さっそく注文用紙に番号を書いた。  
けれども、その注文用紙は母がまちがって父の書類棚に置いた。気づいたときには受付は終わって、写真はけつきよく手に入  
らなかった。あるとき廊下から声がした。半分白人の女の子だ。

ねえ、アレやって。

そうせがまれた。南山真波だった。アレってなんのことだろう。まったく憶えがない、かの女はせがむ、残念ながら応えら  
れなかった。かの女が去ってからしばらく、それが『カンガルーのボクシング』だと気づき、おれは臍をおもくそに噛んだ。

\*

廊下を歩いてた。おれの足がだれかの足に当たった。かるく謝った。かれはおれを便所へ連れ込んだ。相手はちよつとした  
顔役だったらしい。おれに眼鏡をはずさせると、平手をいっばつ。くやしくなって睨むと平手をもういっばつ。山田という細  
いからだ、細い眼の、蛇みたいな男だった。教室に帰ってしたたかに泣き、みずからの弱さを嘆いた。それを榎田慎一郎や福  
島亜沙が蔑すんだ眼で眺める。田臥というやつが、おれをアルフと渾名しだした。アルフとは公共放送でやってたアメリカの  
コメディ・ドラマの主人公で、宇宙人だ。だれかをからかわずにはいられないやつばかりだ。そういう病気なのか？——それ  
とも風土か？

\*

おれは美術部へ入った。4年ぶりの男子だった。4年まえまでは顧問は男だったらしい。デッサンは退屈だった。石膏像も好きになれない。女の子たちはみな、いかがわしい漫画本を持つてはしゃいでた。なにが藝術だ。ばか女どものズリネタなんかくそ喰らえ。そんなものでマチスの筆致がどうか、クレーの色使いがなんていうのはよしてくれ！——顧問はずっと不在だった。技術指導もない、基礎知識を教えてくれるわけでもない。幸いなことにおれはすぐにそこを馘首になった。たったひとこと、クラスのからかい屋を「あいっらはくそだ」とだけ。日毎くりかえされるいやがらせにあきあきしてた。「ひとの悪口をいうひとはいりません」。顧問の老女がいった。これで幸せだ。おれはなにもいわずにでてった。しかし担任の三宅女史が黙ってなかった。おれを部に戻すべく歩きだした。ばかばかしい。おれはでていき、つぎの場所を探した。みんなが吹奏楽部へ誘った。朝も早くから練習とは気狂い沙汰にしか見えない。それに姉がいる。おれは帰宅部になった。ばかどもの面を見なくともいい。どっかの女の子がいった。

なあ、ミツホは部活せえへんの？

おれがやりたいことがないよ。

なに？

軽音でもあつたらな。

放送部に入ったら？

みんなじぶんでなにかをしようとはしなかった。すでにできあがったなにかにしがみついてるだけだ。つまらない連中がつ

まらないヤンキーどもにあたまをなでもらってた。おれはご免だった。それでもかれらはおれに拘ってた。片山というちびの双子が、河内という痘痕づらが、しつこくからんで来るようになった。そして夏、非行ものと精薄児で海に行くことになった。旅の内容もわからずに頷いてしまった。片山と河内の両方がいた。ハミゴだの、逆ギレなんてことをいわれた。どういう意味かわからない。おれはひとり小島をめぎして泳いだ。水はどんどん深くなる。たどり着けるかが心細くなった。そしてついに助けてくれと叫んだ。岩場に立つ5人組の男がなにもいわずにいた。助けてくれ！——もう1度いった。やつらはうごかなかった。おれはなんとか岸についた。

こっち、来んなよ。

おまえ、どっかいけや。

だれがおまえらなんかのところにいくものか。おれは水を吐き、しばらく岩のうえに坐った。もといた海岸は遠く、かすんでる。なんのためにここへおれは来たのか。けっきょく、ふたたび海に入った。そして最後まで泳ぎ切る。岩場で足の裏を切った。そのまま靴を穿いて宿にもどった。不良たちがおれの腕時計を毀してた。どうにでもなれとおもった。なんとばかなやつらか。帰りのバスで、片山のちびが、金のないやつは土産屋にはいるなといった。おれは金を家に忘れてきた。おれはちびを無視して入り、つまらない商品を眺めた。家に帰った。おれのまわりには醜い連中が続々とあつまって来る。そしておれ自身、どうしようもなく愚かで、ぶかつこうだった。どうしたものか、わからないまま過ぎした。

\*

写真はおそらく

時間のモチーフなんだろう

現像し忘れたいまが

古い記憶の紙束になって送られて来る

かつてぼくは映画監督になりたかった

そしてやみくもにカメラを回して

歩きまわったよ

あなたの時間をモチーフにして

ポラロイドを撮った

写っていたのは夜の鯨が

陸で涼んでるところ

\*

残りの夏はずっと穴を掘ってた。あるとき、2階まで上つてるときだ。踏み段代わりの仮板がはずれ、落下したおれは1階の砂利に叩きつけられた。おれがソファで痛みに耐えてると、父は薄笑いをにやにや浮かべ、ほかの仕事をいつけた。この男はいかれてる、そうとしかいえなかった。父は地下室をつくりはじめる。まったくの手作業で。スコップと掘削機。たまに大きな岩にぶつかると、鎖で牽引し、とんでもない荒業でそいつを引き抜くことになる。いかれてる。とてもついていけないうなもんじゃない。おれは父の眼を盗んでさまざまところで寝た。物置のなかや、林のなかでも。こんなことがいったいいつまでつづくのか、見当もつかない。どうやら父は吝嗇か、あるいはちゃんとした幻想にでもかられて、重機や他者の手を使いたがらない。いったいどこに逃げ場がある？

友衣子とは公智神社の夏祭りですれちがっただけだし、だんだんとかの女のことかぼやけてきてた。顔も声すらも忘れそう。だ。おもったよりも出会すことがない。休みがやっと終わって、またからまれるようになった。双子の片山と咆づらの河内だ。体育祭でじゃまを仕掛けてきた。あるいは図書室の合同授業で、片山のひとりにおもいきり顔を撲られた。すさまじい右ストレートだった。そのとき懐いだしたのは、はじめて力石と出会い、撲られたときの矢吹ジョーそのものだった。そんなふうにして災難はずっとつづく。親にはなにもいわなかった。勉強ができないからだと父はいうだろう。母はあたらしい職をみつけたらしい。いつもいかなかった。あるとき、職員室の帰りに2階へ寄った。かの女を求めて廊下を歩く。かの女が見えた。眼鏡をかけてる。そして義村と笑みを交わしてる。おれは妬心と、情けなさとともに地階へ降りた。かの女だけが問題じゃない。おれには女の子と話すなんてとんでもないことだった。

秋口、山田が謝るようにいつて来た。いったいなにを？——おれは応えなかった。掃除の時間、かれの手下がしつこくおれを呼びだした。おれはいかなかった。やがて2階から山田と片山、河内、そしてなまえのわからないやつが降りてきた。おれは通路にでてって、やつらに囲まれた。クラスの全員が窓から見てた。だれも助けようとしなない。創世記にあるみたいに《たったひとりの神が血に飢えた狼と、か弱い子羊とをつくりだし、これ善しと観たまえり》ってわけだ。みんなおれがいたぶられるのを待ち望んでる。期待する眼がずらりとならんであつた。

あやまれや。

山田がいった。

どうして？

おまえ、おれのことばかにしてるんやろうが。

憶えがない。

いまからあやまれや。

おれは観衆に手をふりたかった。おれは大丈夫だって。でもそうじゃなかった。5人にかこまれ、観客に見られ、とても身動きはとれなかった。だれかおれを助けてくれ、だれでもいいから救ってくれ。

どうしたんや？——謝れや。

ああ、土下座してやるよ。

土下座なんかいいから謝れや。

そのときひとつの窓から女子がわめいた。——だれか先生呼んできて！——福島亜沙だった。ちゃらちゃらした女だとおもってたから意外だった。ほんとうはいい子なのかも知れない。でもかの女の声にはだれも応えなかった。時間がゆっくり動き

だす。

やっぱり謝らない。

なんや、どういふつもりや？

黙ったまま鉄の柵にもたれ、時間が経つのを待った。三宅が入ってきた。5人組みは慌てて去っていく。山田がくやしきまぎれにおれの足を蹴った。力が入ってない。羞ずかしく、口惜しくてたまらず、それを上村透に告白した。「あいつらをやつきたい！」と。かれはペンケースからペーパーナイフをだした。

これ、使えよ。

おれが貸したっていうなよ。

わかってる。

授業の終わりを見計らって、おれは山田の下っ端を狙った。やつの腿にナイフを突き上げる。「痛い！」。感触はない。おれはもういちど刺した。次は山田や河内の番だ。ぜったいに殺す。けれど意思はぼやけ、道は昏くなった。おれが刺した小谷という少年は医務室に運ばれてった。なにかがちがう。おれは教師に捕まった。そうして医務室へ、血まみれの脚で、小谷が横たわってる。かれの小柄なからだは寝台のいうえで藻掻いてた。床には血だまりができ、大量のティッシュ・ペーパーやナプキンの中から坐ってる。柔道教師がいった、

こんなやつがやったのか？

おれは監視小屋に入れられた。マジックミラーがひとつある。やがて母が来て、担任と話しをはじめた。廊下から聞える声はうろたえてた。しばらくしておれはだされた。医務室ではまだ止血をしてた。怯えきった眼でかれがおれを見上げた。互いになにもいえなかった。創世記の神はもはやいない。夜の駐車場で、車に乗った。母が嗚咽した。

ごめんね、わたしのせいで！

これはつまらない場面だ。三文芝居。おれが観たいのは無責任な観客たちが、みずからの生贄に喰われていくというさまだというのに、かれらはだれも痛みなど負わない。たがいの痴愚を礼讃しあうだけだ。またしても罨に嵌った。おれが見た女の中かで母ほど愚かなものはなかった。ひたすら自身の責務を回避し、愚痴を吐く。おれは母性など知らないし、どうだっていい。そんなもの知りたくもない。道。ただここから離れられればいい。

\*



## 苺の31音

苺はそれ自体が詩だ

最終バスみたいに

きみが消えてしまう

苺の31音はぼくには聞えないから

ガンマイクとともに

農夫の武田さんと

一緒に録音

するのさ

甘く、すっぱい、つぶらな短歌をきみに届けたい

でも手遅れ

なぜなら苺をぜんぶ食べてしまったから

31音はぼくのおなかのなか

どうぞ耳を当ててくれ

17/3/21

\*

父はそっけなかった。「刺した」という一語にも感ずるところはないみたいだった。話が済むとすぐに眠った。おれはしばらく謹慎になった。室に入って音楽をかけた。バッハの『主よ、ひとの望みと喜びを』だ。やってしまったことを考える。もし山田を狙えたら、どんなによかったろう。それが下っ端で、だれよりも弱い小谷なんて、これこそ恥だ。なんてことをしてしまったのか。これじゃあ、ただの弱いもの虐めでしかない。もっと強いものにむかうべきなのにおれは——もう考えるのもあきあきだった。また学校で珍獣扱いされるだろうし、かわいい女の子にはみなきらわれるだろう。おなじみのこと、いつものことだ。おれは台所について製菓用のブランデーをとった。ロックを2杯つくり、室で呑んだ。気分はわるくなかった。さらにロックで2杯呑む。なにもかもどうでもよくなった。酒こそがすべての答えになる日が来るかも知れない。こいつさえあれば怖いものもないときが来るだろう。柔らかな酔いのうちで笑いが零れて来る。父がひろってきた、汚い寝台に横たわり、眠った。

おもったとおりのことになった。たちのわるいやつらがおれをからかいはじめた。ひとの痛みなんか、こいつらにはわからない。おれは期末試験までただ黙っておいた。ペーパー・ナイフを透に返した。成績ははじめから地に落ちてた。この世ではいちど踏み外せば、もはやまともな世界にもどることはできない。おれは成績表と全学年のテスト結果を改竄した。ふたつをスキャンし、数字を入れ替え、学年別の平均をさげた。そしてふるいコピー機にありがきなノイズをちりばめた。まさに傑作だった。それでも父にはすぐにばれてしまった。中学以降、父はいきなり勉強をいいだした。それまでほったらかしでなにもして来なかったというのに、学業についてかちわめく。子供のような大人だった。怒声を聴かせたところで、ものごとはわ

るくなる。子供の前頭葉は萎縮し、海馬は変形する。おれは音楽に引きずり込まれてった。ラジオを『ミュージック・スクエア』や『ライブ・ビート』にセットし、エア・チェックした。冬になって教育実習生が来た。すべて女だった。おれのクラスにはおれとおなじなまえの女があてがわれた。わるい冗談だ。クラスのみんながおれとかの女を笑った。憶えてるかぎり、かの女が声を発したことはない。肉の厚い顔に表情はなく、読みとれるものはなにもない。全校合唱会が迫ってた。友衣子のクラスは『あの素晴らしい愛をもう一度』だという。なんてちんぷな代物なんだ。斜に構え、おれはクラスメイトにいった。小山という秀才は耳をかさず、そのまま廊下を通り過ぎてった。おれはおそらく世界でいちばんのろくでないにちがいない。

1月なかば、テアトル梅田までやって来たのに、なんだか怖気づいてしまった。おれはまだ13歳。映画はR指定だ。いちばんめ、おれは失敗した。受付で15歳とிட்டからだった。しばらくして雨が降りだした。おれはトレーナーを着、眼鏡をし、髪を濡らしてうしろに撫でつけた。われながらひどいかわいさだ。でも、これならいけるかも知れない。受付で学生証を忘れたといった。成功だ。

映画は『ラブ&ポップ』。庵野秀明の作品で、女子高生の援助交際についてのものだった。きわどい場面もあった。特に浅野忠信が怒声をあげる場面は凄まじかった。おれは裕美が好きになった。きれいな映画だった。かの女の歌う、『あの素晴らしい愛をもう一度』が明るくもさみしさを感じさせた。なんとも名残惜しい作品だ。おれは映画を2度観た。2度めは透と義村とで川西池田まで遊びにிட்டたあとだった。夜の最終上映にிட்டた。母はかんかんだった。おれは村上龍を読みはじめた。

おれも小説を書こうとおもった。それまで読んだ本といえば、乱歩の『怪人四十面相』、保坂展人『いじめの光景』、辻仁成『ピアニシモ』ぐらいだった。それでも書きたかった。まずは原稿用紙を買い、書き始めた。内容はといえば、ただの風景描写に過ぎない。絵はとつくに描かなくなってた。おれが書き溜めた原稿を父が検閲しただした。辞書から言葉をひろって書いてるだろう！——いさましい父上さまを演じてるつもりなのだろう。いわせておいた。ぼくは字がほとんど読めなかった。そ

れでも辞書を引きながら本を読んだ。夜に読む本は、背徳のよう生きながらにして父や母を殺すみたいな愉しみがある。『限りなく透明に近いブルー』や『海に向こうで戦争が始まる』、『コインロッカーベビーズ』、『音楽の海岸』を読んだ。作品のために地図を書いたり、人物の服装を考えたりした。はじめに書いた作品では薬物遊びに突っ走っていく少年少女の話だった。父はそれを見てかんかんになった。おれは小説を書く。でもだからといってヒーローになれるわけじゃない。おれは音楽にもひかれた。でも楽器がない。歌詞を書いた。進級はあやうかった。ともかくこの世界からでは表現が必要だ。だれかの命令で動かされたくはない。自由になるには、じぶんだけの方法が必要だ。なんでもいいから特別なものが欲しい。父にやらされてるみたいなことを大人になってもやるなんていやだ。人生に於ける付加価値がどうしても必要だ。おれはなんとしてでも、そいつを手に入れてみせる。たとえだれかがおれのせいで静かな血を流そうともだ。

\*

雨を聴く

アルコールという月光液を呑みながら

田村隆一の「1999」という詩集を捲りながら

ぶざまな音節のなかで

あらゆる過去の顔が

抽斗から垂れてる

ぼくはもしかしたらきみのことが好きかも知れない

あんなにもぼくをいたぶったきみのことが忘れられない

たしかにきみはひどいことした

それでもきみのなまえを呼ぶ

そして小説の登場人物にそのなまえをつける

かの女はとても幸福そうで

なにものにも穢れはしないだろう

もしきみがそうであつたなら

いまいちど夢のなかで

しけこもうじゃないか

\*

おれは進級できた。またも7組。あたりを見渡す。担任は牛尾といった。息がつまりそうだった。柴という女生徒がきれだとおもったぐらいで、ほかになにもなかった。知ってるやつは、透、松尾、山村、そして漫画制作で一緒だった波河、長谷と尾下ぐらいだ。まえの席には長陸が坐ってる。やつはおれのまえでふんぞり返ってた。小谷は転校していなくなった。やつは孤児だった。施設からべつの学校に変わった。そのせいか、少しだけ長陸は窮屈そうだ。気持ちを発散させる仲間がいらないかも知れない。ぼんやりとおもい、もはや聞く気にもなれない授業を受けてた。

ミツホ、キツショー！

こちらを見もせずにやつが叫んだ。だれも反応しない。なにもなかったみたいにまえを向いてる。

死ねや、ミツホ！

おれは青ざめた。恥ずかしくおもった。怒りがすべてを充たす。すべての授業が終わるまでずっと、反撃のときを謀った。そいつは来なかった。おれにはなにもいえない。なにもできない。やつの口ぶりに反発も憶えたが、それ以上に頷かざるを獲なかった。たしかにおれは気色のわるいやつだ。自身でもそうおもってるというのに、その科白を退けようもない。ようやく終礼をやり過ぎし、廊下にでた。だれもかも、なにこともなかったかのように歩く。そうして靴箱を過ぎ、玄関の廂をはなれ、おれは植え込みの縁に坐った。しばらくひとが過ぎるのを眺める。あまりに多くのものごとがわずらわしくおもえた。下級生の女の子がおれのところに来ていった。

ごめんなさい。

なにが？——かの女は微笑んでる。いたずらっぽく微笑んでる。みじかい髪、あたらしいスタイルの制服。なかなかどうして、そそる子じゃないか？——でもかの女のいつてることがわからない。かの女はもういちどいう。——ごめんなさい。——なにを謝ってるんだ？——おれはあたりをみた。悪党気どりの同級生たちがおれを見て、へらへらと薄笑いを浮かべてる。またしてもばかにされてるんだ！——立ちあがるとあたりを一瞥し、歩き去った。またしても逃げを打った。おれは学校を休み、未明まで父からの打擲を受け、それを忘れるために昼まで眠った。おれは休み、その繰り返し。黴臭い寝台のうえで、おれはなにものかに祈ろうとした。架空の恋人や友人たちをおもった。どうやたらかれらの世界にいけるのだろうか。いつまでもこの世界との和解を求めてさまようしかないのか。幼馴染みたちは日増しによそよそしくなった。姉や妹たちだってそうだ。おれにはいけるところはない。金も仕事もない。それでも毎日休むわけにはいかなかった。母が父以上にやっかいな朝もあるからだ。室のガラス戸を破らんばかりに腕をふってわめきちらす。おれは坂本たちと学校へいくはめになる。そしてまたも息苦しさを味わう。あらゆる人間がおれを嗤い、なにもかも奪い去ってった。

あの女の子を探そうとした。「ごめんなさい」の犯意を探ろうとした。下級生の群れのなかから、なんとか見つけれないかと歩きまわったが、けつきよくは諦めた。おれはふたたび絵を描くようになった。安いコピー用紙にペン画や鉛筆画を描き、長谷と尾下に見せた。かの女たちが気に入ればくれてやった。授業はどうについていけるものでないし、だれかと打ち解けるのもひどく怖い。——細長い男がおれに近づく。清潔そうなつらに、にやにやと卑しい笑みを浮かべて、

おまえの噂は田臥から聞いているよ。

どんな？

おまえ、あたまのおかしいガイジなんだってな！

生徒会委員の中島だった。怒りと恥ずかしさでなにもいい返せない。やつは、にやにやにやにや。そのままほかのやつらの

群れに失せてった。居心地がわるい。ここにはいたくない。あれが大人たちの望む子供なのか。おれはますます学校にいかなくなつたし、朝帰りも多くなつた。もはや母は心配などしてくなつた。学校はほんとうにくだらなかつた。木村真美という女がいちばんめの妹にいった、ミツホに似てなくてよかつたねと。なぜこうも悪しき被造物につきあわされるのか。

\*

なにもかもが裏庭に放りだされてた。本も絵も画材もなにもかも。だれがやったのかを考える必要はなかつた。なんども室を片づけろといつて来た。おれには片づけ方がわからなかつた。父はそれを侮辱と見做し、報復をとつた。そいつがこれだ。しばらくして母が帰つて来た。

早く、片づけて。

たったそれだけだ。気づかいもない。そういう女なんだ。土をかぶつたものは、もうおれのものじゃない。漫画雑誌のうえでおれは踊つた。やけくそになつてすべてをふり棄てようとした。父はなにもいわなかつた。父がおれのものを火に焚べる。それを聴きながら過した。その夜、おれは父のコンピュータを毀した。配線をぜんぶ切り、基盤に唾をした。もちろんただではすまない。おれは公園で過ごした。そのとき、いきなり父が突つ走つて来た。

「おまえ、やりやがつたな！」——知つてたんだ、おれがここにいるのを。走つた。坂を抜け、林に入り、森のなかに身を隠した。あんなやつは死んでしまえ。光り。殺されたつて文句はいえない。呼吸を整えて、町まで歩いた。丘を越え、山をくだり、麓の林道から、国道にでた。光り。北インターまで歩いた。光り。寒かつた。シャツいちまいで腕や顔を匿い、道路脇の農道で眠つた。暗い。ちょうどコンクリートの水門が冷たいかぜから守つてくれた。朝になつておれは西脇へいくことにし



た。祖父母の家でとうぶん匿ってもらうつもりで。段ボールがいる。行き先を書かなきゃ。ちかくの工場から調達した。そしておれはヒッチ・ハイクをはじめた。乗せる気のないばかが「がんばれよ」ってほざいた。大きな運送トラックに乗っておれは西脇をめざした。ところが住所を知らなかった。祖父は友人の連帯保証人になった挙句、逃げられた。とうに屋敷を喪い、かれらはJRAの育成場にほどこかい、鄙びた2階家に棲んでる。なにもかもちいさい。集配所に着いたあと、運転手の老夫は弁当を喰わしてくれた。それから電話で1軒づつ、祖父母のうちを探してくれた。西脇には村上姓がやたらに多い。岡山の美作に中田姓が多いみたい。夕方、祖父がぼくを迎えに来た。かれらに手をふって、それっきり。

\*

いい天気だ

ナックルボールを投げてみたくなる

だれもない町でいつかかげが追って来る、

そいつはきみのもの？

ぼくのもの？

ピーナッツ・バターを塗りすぎたトーストみたいに甘いものを滴らせながら

大きく深呼吸する

たぶんぼくはたどり着いてしまったんだ、

緑色の王国へ

こんにちは

おはようございます

群生する蔦がビルディングを覆い、

かすかにきみのために朝露を滴らせる

\*

湖水を陽が照らす。わたしはもういちど、この村に来た。生きてるのか、死んでるのかもわからない男のためにできることがあるのか。もういちど確かめに来た。まずはフロスト伯父に会った。かれは猟銃会の古顔で、銃砲店をやっていた。客が来るような気配はない。わたしはそれとなくかれの生業を確かめた。ビル・フロストは予備保安官であり、金の多くはそこからだった。ロージの事件のとき、やくざもののひとりを見つけたし、しばらくあげたのもかれだという。ロージはいまどんな暮らしをしてるのか、仕事は宿だけなのか、危なくはないのか。それらの問いにすべて答えなかった。つぎはハンクに当たることにして連絡先を訊く。

おれたちを疑っているのか？

警官の仕事を奪わないでくれよな？

たしかにわたしのやれることではなかった。届けはもうだしてしまっている。しかし、7日が経っていた。わたしは車をだしてハンクの職場へむかった。村の図書館で働いてるといふことだ。昼だというのにやけに暗いところだ。廊下のカウチには死体のような老人どもが脚を伸ばして眠っていた。どうやらここも村の寄り合いでしかないようだ。ハンクが台車を押して歩くのが見えた。

ブローティガンはあるか？

生憎、ビートやそのへんはおいてないんだ。

それは残念。

ふるい公衆道徳が赦さないんだ。――ぼくの室にならあるが。

いや、いいんだ。

ところで、とわたしはいった。あんたの伯父さんは保安官、ロージーについては黙秘している。滝田についてちやどうかわからないが、組織との癒着だって考えられる。あんたがたがロージーを守るために生贄を捧げたってね。――ふざけるんじゃない！――ハンクは台車を放りだしてわたしに掴みかかった。逆恨みもいい加減にしろといわれた。そうかも知れない。図書館を追われ、わたしは酒場にいった。冷えたビールと、スコッチがあればいい。小さな村だ。店主はわたしを知っていた。

あんたか、仲間が消えたってのは。

だれに聞いた？

もちろんビルだ。

おれが知りたいのはロージーの素性だ。

よそものが訊いていいことじゃない。

ビル伯父もそういったよ。だがそんなやり口じゃ、まるで隠しごとあるって宣伝してるようなものだ。

なあ、よそもの。おれたちの流儀をわかってくれ。

みんなどっかに傷はある。それに女の子だ。赦してやっていいだろう。

責めるつもりはない。ただなにがあったのかを知りたい。

勝手にしな、

黄色いの。

ラフロイグに口をつけ、ビールで舌を冷やした。どうしてこんなところに来てきたのか。道を撰んだのは滝田だった。だ

けどかれ自身が消えた。店にいるのはわたしだけだった。そろそろもどろうと立ちあがったとき、男が入ってきた。ひとりだ。若い。保安官助手らしかった。青い制服で、顎をしゃくった。「来てもらいたいんだ」。わたしたちはおもてへでてかれの車に乗った。エンジンは切ったまま。

ここで消えてくれればなにもいわない。

そうでなければ逮捕か？

そうはいってない、国外退去ってところだろう。

わるいが友人を探してるんだ。

もう死んでるかも知れない。

血痕に大麻、そしてロージーだ。

もしかしたら組織に連れられて熊の餌だ。

ろくな死体さえ残らない。

わたしはいずれこの国を発つ。——できることはぜんぶやらなくちゃ気が済まない。——組織はどこにある？

狂ったか？

かれは黙ってわたしの眼をみつめた。そして大きく口をゆがめ、しっかりと歯を見せた。笑ったつもりのようだった。さて、わたしのほうも笑わなくてはいけなかった。歯をみせてやった。

いいだろう、遠くから拝むだけだぞ。

村の中心地から幾分南東へそれたあたりにちっぽけなモーテルが、売春宿があった。おそらく裏賭博に遣われてるだろう小屋もあった。色褪せた看板たち。そのなかに大きな映画館があった。そこがやつらの巢だった。

どうやら『血に飢えた断末魔』を上映して以来、あいつらはここを根城に生きてるらしい。女を喰ったり、土地を転がしたり、違法労働者の斡旋もそうだ。そして役人とはいい仲らしかった。

ロージはここで襲われたのか？

そうだ。——でもじぶんからだった。

兄を助けるためだった。

ふたりともことばを失くし、ただ坐っていた。無線のノイズのなかで田舎らしい事件の報せが聞えた。かつばらい、飲酒運転、夫婦同士のいさかい、子供同士のいさかい、役人の失踪やなんか。やがてかれが車をだした。黙ったまま市街へ。あたらしい建築たち。そのひとつを指した。泊まるならあそこがいいだろう。——ばかな気は起こすなよ。あと1週間、猶予をやる。わたしは黙ったままホテルに入った。荷物を渡し、掃除夫にチップを与え、室にあがった。角部屋で大きな張り出し窓がある。ポーターにもチップをはずんだ。そして食事について考えていたとき、電話がなった。ハンクからだ。保安官助手から聞いたという。この町でうろつかないでくれといった。疲れきった声だ。わたしは喰い下がった。——あの映画館でなにがあったんだ？——電話は切れてしまった。

わたしは町をうろついた。その果てのバーへいった。まるで街区から隔離されたように、なにもないところにひっそりあった。店に入っすぐわたしは少したじろいだ。どこを見ても黒人しかない。かれら専用のバーだった。しかし、いまさらそとへでて長い道を歩く気にもなれず、カウンターに着いた。異物を視るかれらの眼。わたしはビールを頼んだ。つよい酒に頼つていいものか、まだわからないからだ。バーテンは気にしないという態度でビールをだした。そういえばこの町で黒人を見たのは、あの軽食屋以来だった。おれが2本めに入ったとき、若い男が声をかけて来た。

どっから来たんだ？

日本だ。

旅鳥って身の上さ。

なにをしてる？

絵を描いたり、ギターを弾いたりしてるよ。

おれが聞いている話とはちがうな、そういつてかれは凄んだ。

あんたはロージのところから来たんだろ？

もちろん問題があつて。

だれから聞いたんだ？

削げ耳のギルからだ、このまえいったろ、あそこの軽食屋に。

きみらの情報網は凄いな。

話を逸らすじゃねえ、あんたのためにいつてるんだぜ、消えた仲間なんか忘れちまえ、さっさと帰りな。

わたしは黙ってうなずいた。酒代をおいて立ちあがった。若い男も立ちあがった。わたしの耳に囁く。

もしも、あんたが組織を狙ってるんなら手を貸すぜ、どうだい？

生憎、そんなつもりはないよ。

おれにはとてもできないさ。

早く帰れよ。——その声を背で受け、ホテルまでの道程を辿った。どういうわけか、おなじ道をぐるぐる迂回していたようだった。やがて淡雪が降り染める。——いったい、ここはどこなんだ？

ピクニックですつと

ぼくは女の子たちという

男の遊び方がわからなかった

ぼくは6歳

やがてなにもかにもに締めだされ

フオール・アウト

中空にさまざまなかたちの動物たちが

パンチ・アウトされる

悲しいね

もうだれもない

愛を教えてもらえないのなら

はやく逃げるんだ、ビニール・シートを棄てて



\*

7日も経たず、西脇から帰された。母方の祖父には懐いてたし、かれもそれを知ってた。それでも折に触れて口にする、かれの本性にぞっとさせられた。生野までの道すがら、かれは吐き棄てた。「呑み屋の女ごときが」と。死んだ祖母のことだ。つづけて父への怒りをあきらかにし、「あんな女の倅なんかに」とも。しまいに「あの女の戒名には釋の字が入ってる、それは部落のものの戒名や」——おれは応えにつまった。かろうじてひとこと、——岡山に部落なんかないよ。——「イヨ?——釋の字は部落のもんや!」——近所の坂をあがってまえで、かれは穏やかな口調へ変えた。

唾を吐くまえによう考えるんや、

すぐに吐いたらいかん、

いくらあんな親父でもな、

おまえの親なんやからな。

辛抱せえよ。

だれも救い主にはなってくれない。やがて家が見えてきた。父とどうやったら会わずに済むのか、だれか教えて欲しい。父はおれをうしろから抱きしめようとした。気持ちがわるかった。ふりはらい、この男がなにも変わってないのを見てとった。またしても日曜大工と折檻が待ってた。姉や妹たちは異星人みたいにおれを見た。もうしばらくかの女らと話をしてない。学校が終わって坂本姉弟と帰った。ワゴン車のなかで姉がいった、おれが女の子の、すけべな絵ばかりを描いてると。おれが普段どんなふるまいをしてるかをおもしろおかしくいいたてた。運わるくおれが描いた絵が車のなかにあった。大智が手にとつ

た。乳房の大きい短髪の女だった。姉はおれをばかにして、囃し立てた。大智がおれにいった、——おまえはそんなやつなのか？——おもいあまつておれはいった。そんなこといつてるから、おまえはタラシつていわれるんだ。——タラシがなにかなんておれは知らなかった。姉でさえ定義のはっきりしない俗語だ。大智は眼を丸くした。おれは恥を憶えて押し黙った。家に着いておれは姉に謝ってくれるように頼んだ。しかし、かの女は笑い声をあげるばかりだ。ほかにできることはない。箒のさきにカッターナイフをつけ、戦いの支度をした。じぶんがなにをしようとしてるのか、なにをしたいのかはわからなかった。居間を歩く姉に箒をむけ、絶叫し、突撃した。

ウラミハラサデオクベキカ！

すんでのところ、かの女は便所へ遁れた。木戸を破ろうと体当りする。それでもけつきよくは室にもどった。しばらくして姉は近所の英語教師のもとに遁れ、母が帰ってきた。おれを断罪し、おれは素足のままおもてへでた。どうしようもない茶番だった。それでも父からどんな罰を喰らうか知れたものか。泥濘を歩く。おれは歩いて山を越え、麓へ降りた。道場駅まえの商店でポルノ雑誌をみた。金はせいぜいカップラーメン1個ぶん。店主はみえない。盗めるだろうが怖かった。そのまま三田まで歩いた。街灯のもと、靴なしでは目立つ。どうしたものか、坂をあがって公園にでた。ポケットから食品保存剤をだした。こいつを吞めば死ねるかも知れない。水と一緒に吞んだ。灰みたいな味がした。死ねそうになかった。車道に飛びだして死のうともした。できない。ひきかえして道場駅へ来た。ラーメンの自販機のまえ、小銭をかぞえてたら、パトカーが来た。

警官に捕まり、有馬警察へと送られた。幕。車のなか、おれは保存剤の袋に爪で文字を書いた。村上友衣子が好きだったと。でもおれは死ねなかった。署に着いて1時間、だされたソーダをまえにおれは泣いてしまった。疲れ切つてなにもかもがどうでもよかった。父と母が迎えに来て、そとづらのいいざれごとをいった。あの家には帰りたくはない。次はどんな制裁を受けるか、気が気でなかった。姉は謝らなかった。すねたつらをしてるだけだ。それを妹が援用する。母は姉を叱らなかったし、

父だってそうだ。姉も妹はどんどん増長してった。

自殺しようとしたんやって？

うちの親から聞いたで。

大智がいった。

うそだよ、

おれはうそを吐いたんだ。

そう答えるほかにない。まるでみずから悲劇的になってるみたいできまりがわかった。だれかに申し訳ないとか、悲しむひとがいるということはない。恥ずかしいだけだ。鞆に入れたラジオで音楽を聴き、便所のなかにこもった。じぶんには合わないとおもいながら、激しい音楽を聴いた。だれかがおれを、みんながおれを嗤ってるかもしれない。でもいつか、やつらをやっつけてみせる。そうおもいながらひずんだギターや、荒れたドラムの音を聴いてた。便所からでて息を吸う。理科の授業が終わったころだ。生徒会委員の中島が薄笑いで、おれを見る。人生のすべてはおれのひとり負けだ。だれかが叫んだ。

おい、アルフ！

職業体験が決まった。おれは大智といっしょに弁当屋だ。いきたくはなかった。あらかじめだした希望に意味はない。配膳や洗い場やら、朝の支度を手伝うと、やることはなかった。従業員たちは配達で出払った。ふたりしてちらしを折った。大智がけしかけた。小銭がある、——盗もうか。——卓上の、小さな藤の籠を指す。——やめろよ。——おれはいった。

テレビ画面では焼けた家屋が映しだされてる。昔しの事件。火事の現場から子供の骨が見つかって、それを隠してた女が無罪になったらしい。行方不明になってた、ジョウマルという男児の骨らしい。

つまらないな。

やつはテレビを消した。おれは観ていたかった。おれたちはただ黙ってちらしを折りつづけた。やつが便所に立ったすきに小銭をくすねた。うまくいった。帰り道、生協のスーパーマーケットへ寄った。2階の本屋。おれは村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』の下巻を買った。大智はいった、「本なんか読むのか？」と。つぎの朝は、茶道教室へいくことに決まってる。あの寺内麗奈と竹村紗代も一緒だ。最悪だ。たったこれっぽっちのことで、おれはうごけなくなってしまった。朝、母の車のなかでぐずついたまんまでいた。かの女たちがなによりも怖い。恥ずかしい。憎い。かつておもしろい画いた復讐も役に立たない。車を降りると、歩いて家まで帰った。1時間と半分かかった。もちろんのこと、父は怒った。それしかできなかった。

女の子が怖いやと？

ふざけるな！

坐った木椅子ごと蹴飛ばされる、床を転がる、嵐が過ぎ去るまで黙った。おれはなにもしないでいたかった。体験にはもういかなかった。くそくらえ。だれもおれを理解しようとしのないのなら、おれもおまえらを理解することはない。やがてすべてが終わった。体験発表があった。おれは坐ったままだ。寺内を眺めた。おれには知らん顔だ。こいつらのために人生が惨めになってしまった。しばしば竹村とまぐあうことばかり考えた。寺内はいまでは狐づらの、咆づらでしかなかったけれど、かの女はちがった。みてくれがいい。おれ好みに髪が短かった。かの女を辱める、あるいはかの女から辱められる光景をおもって茎を熱く、太く、硬くした。生活はだんだんとばらばらになっていった。秋になるころにはまったく学校にはいけなくなった。たまにいつでも昼をまわってる。あいもかわらず、歌詞もどきを書き、小説もどきを書きつづけた。そいつを国語教師に見せる、ただそれだけのために学校へいく。松本という教師はおれのクラスの担当じゃない。けれどもあの女教師より見るめがあると踏んだ。かれは童話を書きたいという。

体育館で講話があった。おれと数人を挟んで透がいる。ばかなやつらが伝言ゲームをはじめた。おれがいてもないことを

透に伝え、透がやってもないことをおれに伝えた。腿をつよく叩かれた。講話が終わったあと、透はおれに回し蹴りをした。危うく階段から落ちそうになった。あとでやつは謝った。けれども、おれを下位の存在としか見てないのがわかった。

\*

あるとき、おれは地階の水飲み場まで歩いてた。紺ではなく、赤いスカートのセーラー服を着た少女がいた。息を呑んだ。それほどのうつくしさだ。気取られないように、なんてことないって顔をしておれも水を呑む。黒く、みじかい髪、曇りのない両の眼。均整のとれた長身。——おれが見とれてるあいだにかの女は去ってった。まるきり映画のなかの人間じゃないか。けっきょくかの女のなまえすら、知ることはできなかった。

\*

ほとんどの夜を公園や森で過してる。眠れる場所を求めてさまよう。家はあっても家庭はない。家族はあっても最愛はない。人間はいても対話がない。そして可能性はあっても無効にされてゆく。おれが長い夜から朝までのあいだ、いくらさまよってもひとびとは見向きもしない。あるとき、自治会館のある公園のベンチで、おれは眠ろうとしてた。大人たちがなにかを終えてでてきた。そのなかのひとりがおれを知ってた。ナカタさんの息子やろ？——へらへら嗤って手も差し延べずに去ってゆく。あるいはこういうこともあった。休日のスーパーのベンチでおれは時間を潰してる。それ以外に道がない。あとで母がいう、大智がその光景を見た。どうして声もかけないのか。名塩グリーンハイツの公衆電話で夜をよく明かした。またあるときだ、

たちの悪い男たちが車でやって来た。ラジオを聴こうとする坂の上のおれにむかって。やつらは公衆電話が使えなかったとい、その原因を叩きのめすと脅かした。そして下品な笑いとともに去ってった。

山を越えて町へ降る。国道に沿って歩く。当てもなく歩き、コイン・ランドリーに入った。深夜2時だ。回転するドラム、回転するドラム、回転するドラム。やがて男が入って来という。——なにやってるんや、はよ帰れよ。——咎めるふうもなくいった。おれは塵箱に棄ててある、弁当を眺めた。まだ白飯が残ってる。男がいなくなってから、そいつを喰った。冷たい飯がうまい。なんだかそこで眠ろうとした。けっきょく、できなくて隣のコンビニエンス・ストアへ入った。早くもクリスマス・ソングが流れてる。the brilliant greenの英詩の唄だ。ふとおれはラジオ番組を使ってかの女に告白しようとおもった。広末涼子のやってるラジオ番組のワン・コーナーで、友衣子にむかってだ。考えは、たわむれに過ぎなかった。それでもいつかはかの女に告げたい。——そうでなければ、おれは一生悔やむにちがいない。

棚のポルノ本を眺め、そのうちの1冊をとった。『JURECCO』。中身を見て、それから便所にいった。マスを掻いた。それからまた件の本を見た。便所にいった。マスを掻いた。店員に本を持ってかれるほどご執心だった。菓子パンを買っておもてへでた。雪が降りはじめ、そのなかを歩いた。それから終夜営業のレンタル・レコードで、シングル盤をいちまい借りた。そいつを歩きながら聴き、生野高原の公園でも聴いた。エレファントカシマシ、『明日にむかって走れ／ふたりの冬』だ。いくらか日が経って、おれは『JURECCO』を買った。シングル盤を返すついでに。店員は咎めなかった。川島和津実と沢田舞香、どっちもおれが、それまで見たなかで最高の女神たちだった。おれはかの女たちに汚されたかった。

冬の校庭、サッカーの試合。山田がゴールキーパーだ。女の子たちがやろうに歓声を送る。なんてこった、くそと味噌の区別もつかないんだ。家に帰ると、姉がおれが読みたかった雑誌の記事を勝手に切り抜き、勝手に便所に流してしまった。そしておれをからかった。煽った。おれはかの女を追った。風呂に隠れた。おれがガラス戸を蹴った。少しだけ割れた。怒った父

に戸外へと追いだされた。公園で夜を明かした。ことの流れを知っても、父は姉を軽く窘めるのみでなにもなかった。産経新聞や西尾幹二の『国民の歴史』やなんかを読む父は、みずからを保守と見做してみたいだ。けれどもやつのする、おれへの仕打ちは、アカの総括とかわらなかった。数時間もかけて自己批判と解答を求め、気に入らなければ手をふる、怒声をあげる。終わりのない仕打ちのなかでおれは自我を喪い、感情を忘れた。昔しみたいに裏庭の木へ縛りつけたり、定規で打たれることはなかったけれど、総括だけは健在だ。終わりのない自己批判の果て、またしても学校へいきはじめた。あるとき、カセットテープを持ってた。ダビングしたばかりのエレファントカシマシ、アルバム『明日にむかって走れ―月夜の歌―』だ。これらの歌にはちやらちやらした詞はない。どれも素直で、まっすぐだ。透がいった。

なんやそれ？

エレファントカシマシだ。

変やで、おまえ。

やつが顔を顰めて去っていった。いったいどういふつもりなんだ。なにをやっても、おれはおかしなやつなんだ。夕暮れ、やつと歩いてた。やつが中井の家を指していった。――あれ、借家なんやで。内緒やぞ。――どうしてそんなことにかまうのか、おれにはわからなかった。やつの侮蔑におれは顔を顰めて歩いた。

\*

くるりというバンドがデビューした。『東京』という曲で上京した青年の心情を歌ってる。テレビで流れる装飾過剰な歌なんか聴けたものじゃなかった。すぐにかれらのシングルを買い、アルバムを待った。そうしながらやがておれ自身がバンドを

演って歌うことのおもった。愛するもののためにも舞台に立ちたかった。でも女友だちさえできなかった。じぶんの顔がゆがんでるのか、いつも気がかりだったし、精神科にいくべきとおもってた。おれを愛してくれるひとがこの世界にいるのか、うたがわしい。それでもいい音楽はずっとおれのほうへ近寄りはじめてる。長谷から手紙をもらった。小説の感想だった。「今度とはまともな小説を見せてね」とあった。ヘンリー・ミラー風の私小説はまったく受けなかった。もちろんのこと。かの女は姉を尊敬してた。姉はかの女を「微妙な男に媚びる変な女」と評した。たったいちどきり、かの女と長電話をした。詞の感想を聞いた。

「雪」っていう詞がよかった。

あれは希死念慮の比喻だった。かの女は気づいてない、おれの危機に、おれの不安にも。

いちど学校終わったあとにうちへ来ないか？

べつに下心があったわけじゃない。なんとかかの女をわが家に誘おうとした。

野球部の水嶋って子、知らない？

いや。

つき合ってたんの、わたしたち。

だから、どうだっていうんだ？——長谷のやり口に怒りがこみあげて来て、おれは気にはなってるだけの子を好きだと告白した。たしか米田とかいう子だ。かの女とはなんのかかわりもない。ただそのおもぎしを盗みみただけだ。たぶんどこか三輪明日美に似てたせいだろう。けつきよく、だらだらとした会話を11時に切りあげて、おれは短篇を書き始めた。少年同士の出会いと離別の話だ。できあがってすぐに原稿を学校に持った。これがまともな小説だ、そういつて長谷へ渡した。自信はあったけど、けつきよく反応はなかった。はじめから期待なんかしてなかったとひとりかぼやきながら、長谷からの長い手紙



をめちゃくちゃに引き裂いて横になった。もはやできることはない。

全校集会、中島が演説をぶった。終わったあと、透が「かれこそ男だ！」と繰り返す。おれからすれば、卑怯者のおかまやろうでしかない。ばかげた世界だ。どうもこいつもなにもわかつちやない。そしてその世界から逃亡する手段は死のほかにおもい至らなかった。だれかが、あるいはみんながおれを見て、隠れて嗤ってる、そうにちがいない！——ノートのうえて怨み節を垂れ、本を読む。

\*

淋しい夜にはエレファントカシマシの『君がここにいる』がよく似合った。じぶんを求めてくれる存在に懐いを馳せ、古い寝台のうえて眠る。ものはみな遠く、儚かった。20歳には死のうとおもうときもあれば、生への意思に溢れるときもあった。でも、けっきょくじぶんにできることがなんなのがわからないまま夜が明け、日が暮れた。多くのまやかし、他人との和解だとか、慈しみなんてものは信じられなかった。それでも他者を求めずにはいられなかった。ぼくは自身が大人になれるのか、それが幸せなのかを自身へ問うた。

梅田へ遊びにいった。禁止されるまえにおれはRUSHを買って、18になるまえに川島和津実のビデオを買った。かの女こそあまねくものの答えだった。家に帰って父の葡萄酒をやりながら、姉の室でビデオを見た。かの女の室にはテレビがある。おもったよりも幼い声をしてる。うつくしいおもざし。おれは時間をかけてゆっくりと、みずからを慰めた。

\*

カプセル・ホテルで

どこにだれがいたのかで、夜の更け方が、時の経過がかわっていく。  
だれかのかげがけものように吊るされ

血抜きされる

まばたきをやめろ

でもどうせきみたちは信じないし

1週間後にはアメリカにいつてしまう

もう帰ってくるなよ！

Albatross!

18/02/11

\*

ロージが入ってきたとき、わたしは滝田の写真を見ていた。ロージはわたしのそばでなににもいわず、寄り添って窓に靠れた。わたしはかの女からのことばを待ち、滝田とのかんことを考えた。やつがはじめてわたしの個展にやってきましたドロ잉グを見たこと、わたしがやつのライブにいったこと、ふたりで音楽をはじめたこと。「おまえもおれも自由の代償を払ってるんだ」というやつのことば。

兄から聞いたわ、あなたは最低よ。

その通りだ。

わたしのからだを見る？——傷口に触ってみる？

そんなことじゃないんだ。

ハンクの話しをしてくれ。

兄のなにを？

かれはずっとこの村にいたのか？

「司書になるまえは州立大にいたわ。詩を書いていたのよ。大学の詩人会にも入っていた。有望な詩人だった。でも郷土史を書くこうと記事を調べていたとき、祖父と組織のつながりを知ったわ。ずいぶん落ち込んだ。それでも書くこうとしていた。夏休みに帰ってきたとき、詩人会から告発状が届いた。——供託金をかれが盗んだとあった。でもアリバイがあった。それを証明しようとしたとき、電話があった」。

どんな電話だ？

もうやめましょう、こんな話し。

淋しいのならわたしがいる、どんなことでもしてあげる。

いったいどんな——もうロージーにはなにも見えてなかった。ヘロインでもやったのか、眠たそうな眼でわたしを捉え、押し倒した。寝台のスプリングが鳴り、12匹の菟のみたいにうごきだした。わたしにはどうすることもできない。ロージーはまともな女じゃない。きつとだれかに薬と命令を受けてる。そのからだは真っ白で、冷たかった。わたしはかの女のからだを引き剥がし、カウチに運んだ。

おれは淋しくなんかないよ。ハンクについて訊いてるんだ。

いったいなにさまのつもり？

そんなに知りたきゃ本人に聞けばいいことよ。

いいや、かれは話さないだろう。

わたしを連れだしてくれる？

ぜんぶがわかったら。

ならいいわ。——電話があつたの。きみの記事を買収取って。それでハンクは待っていた男に記事と資料を渡したの。詩人会は金のことをまちがいだと謝った。だけど、そのあと高級車がハンクへ贈られて来た。ハンクは返しにいった。

あの映画館へか？

そうよ。

階下から跽音が聞える。窓の下には銀色のルノーがあつた。おかしいことにならないうちに、わたしはすべてを聞きだすつ

もりでいた。だが遅かった。ロージの握った拳銃がこちらをむいている。小ぶりの自動式だ。ラリってるぶん余計にあぶない。——ちくしょう。

おれを殺すのか？

いいえ、愉しんでもらうの。

日本人<sup>ジャップ</sup>ってけっこうおもしろいんだから!!

わたしがかの女の手をとったとき、男がふたり入ってきた。ひとりにはメキシコ人、もうひとりにはレッドネックと呼ばれる貧乏白人だ。チェックのシャツにデニム、そしてブーツ。レッドネックが口火を切った。——ロージ、おまえは喋りすぎだ。ふたりとも映画を観る必要があるそうだな？——わたしたちはルノーに乗せられ、映画館へきた。上映作品のリクエストまではできないみたいだ。入り口ではビル伯父が待ち構えていた。——いったいどういうつもりなんだ？

貧乏白人にわたしはいった。やつは答えず、車を駐車場へまわすと、降りてドアをあけた。ふたりとも降りろ。——わたしはビルを見た。ライフル銃を持ち、かたくなな面持ちで立ってる。衛兵みたいだった。わたしたちはなかへ通された。座席を越え、舞台にあがる。スクリーンの裏手に事務所があった。あるいは拷問部屋かも知れない。

教えてやろう、ここだけの話だ。

レッドネックが喋りだした。首にナイフの痕がある。——あるとき、ハンクはここへ車を返しに来た。社長からすれば当然面子をつぶされたつてところだ。ものを察した三下がハンクを吊るし上げようとした。とちりやがった。反対に腕を折られた。ハンクは恐怖からか、ほかのやつらにも立ちむかった。そのとき社長の女が入ってきた。見物のつもりだったらしい。だが撲られたやろうに巻き込まれ、舞台から落ちたんだ。頭を打ち、重度の癲癇と診断された。ものや金で済む話じゃなくなった。社長はビルに電話をした。いい提案を期待してだ。そのやりとりをたまたま聞いていたロージはたったひとりでここに来た

んだ。かの女は薬を仕込まれて7日間、ここで過ごした。解放されたときには毀れてしまっていたよ。薬と男なしじゃあ、生きられない娘になっていた。——ロージーがくすくすと笑った。そこにいる全員を嘲るみたいに嗤っていた。

\*

滝田への線はどこかへいつてまった。やつはロージーと寝たのか。ホテルにもどってロージーに訊いた。——ええ、もちろん。大人なふりして初<sup>うぶ</sup>なひとだった。あなたのほうはどうなの？——おれのことはかまわないでくれ。——わたしは苛<sup>いら</sup>立っていた。ロージーを救えないこの村の大馬鹿どもや、映画館のやくざたち、そして兄だというのに妹を守れなかったハンク、甥や姪をほったらかしに組織とつながるビルにもだ。怒りではちきれそうなわたしを眺めてロージーは子供をあやす母のように髪を撫でてくれた。わたしたちは窓にもたれて泣いている。雨がふってる。北のなかの北へわたしはむかいたかった。——あなたの話を聴かせて？ おれは、——わたしは話した。

冷え切った家庭に育った。父と母は半目しあって、とてもじゃないが愛も情もなかった。日本の経済がわるくなっていくなかで、大人も子供も不満を募らせてった。あたまのわるい、勉強もスポーツもできないおれは道化を演じることでもなんとか逃げていた。それでもわるいやつらが寄ってたかって家庭や学校の憂さをおれの存在で晴らそうとした。だれにも助けなくてもえなかった。父はいった、おまえができそこないだからと。そして折檻した。母はいった、がまんなさいと。おれの家は貧しかった。ほかの子のようにいい服も着られず、ビデオゲームもなく、ただハンマーや手斧だけがあつた。おれは絵を描きつづけた。どんなにばかにされてもやめなかった。

やがておれは恋をした。12歳だった。かの女へのおもいをたったひとりの友達にいった。かれはおれを裏切っつかの女に告

げ口したよ。それからさらなる地獄がつづいた。生きながら焼かれるように学校へいった。いくしかなかった。かの女の眼はかつてのようにやさしくはなかった。おぞましい容姿、だれもおれから立ち去り、おれの存在から色を失わせた。大人になつておれは母を苛み、父を撲った。かつてされたことにあらゆるかたちで仕返しを遂げた。けっきよくだれも愛してくれない。それでも滝田だけはおれの相棒だった。やつのいない世界で暮らしてゆく自信なんかない。

ロージが寝台へ導いてくれた。おれは、わたしはかの女の胸のなかではじめて愛に気づいた。そしてかの女をまっとうなところへ連れていくんだと誓いをした。わたしはもうだれにも負けない。負けてはならないんだ。——ロージ、この町を  
でよう。

\*

聖人のふりをして神の水を飲み乾す  
われわれはだれも素直なふりをして  
身内でないものを火破りにかけてる  
われわれはひとりではいられないくせに  
身内しか愛せない——いいや、  
身内すら愛することができない  
だから苛立ちに火を放つ

かつて母だった女がいった  
家族は他人のはじまりだと

牛乳をからになるまで呑み、  
みずからの厩に入っていく  
もうだれにも燃やされないように  
身内だけの道徳に踊り狂うばかどもよ、  
おまえらなんかひとり残らず、  
半額シールでも貼られちまえばいいぜ



\*

おれは驚いた。3年になって初日、クラス表に友衣子のなまえがあったからだ。でも喜べない。どうすることもできないとわかってたし、この学校にはもういくつもりはなかった。またも7組。からっぽな女校長の挨拶に飽き、教室に入る。詰め襟が息苦しかった。担任はまたも牛尾、そして透もいる。かれとはもう遊ぶこともなくなった。どうやらおれのお目付役のようだ。いまや小奇麗な連中とよろしくやってる。おれは制服がいやでならなかった。深夜徘徊はつづいた。終わりはない。父とはまともに話なぞできない。母とも、だれとも話はできなかった。かつてなら道化性があって、笑いを生むこともできたが、それは人間ざらいにとってかわった。気づいたとき、もう身の置きどころはなかった。学校にも家にもいられない。最愛の友衣子がこんなにもちかくにいるというのに、おれは離れなければいけなかった。おれが醜いからだ。

湯本香樹実の『夏の庭』と太宰治集をもって夜を歩く。ときどき大学生のハイカーたちがおもしろがっておれに声をかけてきた。だれもかれもしがらみのうちにいる。名塩グリーンハイツの電話ボックスでラジオを聴きながら夜を明かした。『真夜中ラジオ・ユアーズ』が好きだった。やがて朝になると室に帰る。父がいるときは麓の新興開発地で過ごした。家は1軒もない。あるとき、あそこを勃つ立ててストリーキングをしてたら、散歩の老人に見つかってしまった、慌てふためいた、逃げた。こんなところにひとがいるなんておもわなかった。夜明け、電話ボックスで『夏の庭』を読み終えた。

\*

夏が来て、くるりの『さよならストレンジャー』を買った。毎日幾度も聴きながら歌詞を書いた。じぶんでも信じられないぐらい辞が通り、うちなる響きが飴した。新譜が待ちきれず、『ファンデリア』も買った。『もしもし』はもう手に入らなかった。『街』を買った。おれはアルバムがわりに歌詞集をまとめた。『普遍的↓不連続線』、『ちまたのくうらん』、『sweet bite r candy』と。冬になってガットギターを弾いた。そいつは母のものだった。弦は下3弦だけで、Dやその類似コードしか弾けない。小6のとき、そいつで Carpenters の『Yesterday Once More』を短音弾きしたことがある。夏休み。おれは家の仕事にかりだされた。姉も妹もいるのに、男はたったひとりだけ。早朝の草刈りから、大工仕事。うだろーような暑さがたまらない。倒れそうになって叢に尻もちをついた。2×4の角材がおれをめがけて飛んできた。背中を直撃し、激痛が走る。

仕事をしろっていつてるやろ！

こんなことが毎年起きる。母屋に屋根裏をつくり、離れにフローリングを敷いた。車庫の屋根にコンクリートを流し、小屋を立てる。ちょっとでもへまをしようなら、逃げだそうなら、薄く切られ、撓る木材を鞭におれの手を打った。おれの足を打った。——痛い！

痛いに決まってるやろ！

おれのいう通りにできへんからや！

朝の6時から夜の23時まで、家の仕事はつづいた。父のラジオからばかげた流行歌が流れる。まちがえるたびに父はいった。

おまえなんか馬鹿でもチョンできることもできん！

そんなに世のなかにでてなにができる！

おまえなんか人間やめてルンペンやれ！

早う首くくって死んでまえ！

限界だった。夏の終わりの夜、おれは灯油をペットボトルにつめ、好きな音楽をもって家をでた。どうにでもなってしまう。母がおれを見咎めた。灯油なんかでなにをする気や！——くそつたれの役立たずめが。歩いて1時間と半分、駅に着いた。梅田まで乗った。東商店街の雑踏をいくと、若い女たちが客引きをしている。声をかけられて「家出してきた」といった。もしかしたら、いいめに遇えるかも知れない。おれはギター弾きに声をかけた。なにかやってくれ。

なにが好きなん？

エレファントカシマシですよ。

エレカシはできへんけど、斉藤和義って知ってる？

『ソファ』って歌が好きです。

それはいまできへんけど『歌うたいのバラッド』って曲をやるよ。

おれもギターを弾いて歌いたくなった。ぼくはかれに歌詞集を見せた。幻冬舎から送り返されたものだった。かれはそのなかから「旗」という詞を並び、即興で歌った。朝になるまで音楽について語った。おれはどうしたものだろう？——テレビ局にむかって歩いた。乞食や浮浪者たちがあちら、こちらで寝てた。関西テレビのそばの、コンビニまえでひとりに声をかけられた。痩せ細って、光りに焼かれつづける老夫だ。憐れだった。

「にいちゃん、パン奢ってくれ」——わるいけどぼくもルンペンなんです。かれを背におれは歩いた。わるかったかも知れない。でもできることはなかった。路地裏で灯油に火をつけた。そしてそのまま歩き去った。火は弱く、消えそうだった。夜、またおなじギター弾きを探した。でも見つからず、終電まじかの駅にいった。母に電話した。死にたいといった。駅員が事情を呑み込んで列車に乘せてくれた。おれはいくじなしだ。たったひとりで帰ってきた。そのあと父の車で駅員に菓子折りを持った。父は死にたければ死ねといった。はじめて音楽雑誌を買った。エレカシの記事が小さく載ってた。ライブで「おは

ようこんにちは」や「待つ男」をやり、新曲はロックだと告げてた。帰りに叔父の家に行った。おれは車のなかでただただ話が終わるのを待ちつづけてた。

後日、エレファントカシマシのベストを買い、それから『浮世の夢』を買った。生々しいことばの連続だ。やるせない日々のなかで支えのひとつになってくれるとおもった。その通りだ。さっそく歌詞をまねて書いた。「夢のちまた」の美しさにうっとりとした。そしてシングル『ガストロンジャー』がでた。文字通り、衝撃だった。なにもいえなかった。学校にいくふりをして森のなかに通れた。そこで昼まで音楽を聴き、あとは生協のスーパーでやり過ごし、放課後になってから学校にいった。友衣子のことはもうすっかり忘れてしまった。もはや、かの女は、はるか遠くのなにかだった。じぶんにいまさらできることがあるとはおもわなかったし、なにもしなかった。

\*

次の正月、おれは山口病院という精神科にいった。治療を望んだけれど、だめだった。医者が親に照会したんだ。おれはしかたなく大阪までいった。ポルノブックを買い、薄汚い外人から馬鹿高い指輪を売りつけられた。たったそれだけで金がなくなつた。

そのころ、ひとつ下の妹は問題を抱えてた。吹奏楽部でいじめに遭つてた。木村真美や西林絹子たちから。かの女らは口の利き方の知らないけつの穴だった。おれはあるとき音楽教師の佐藤先生に妹のことを問われ、聞きかじりの事実を話した。妹はそいつに泣きながら怒った。さらにいじめられるとおもったからだ。高校にあがってからは退屈しのぎか、憂さ晴らしか、じぶんのからだを切り刻むようになった。あるいは癲癇の発作を起こし、前後不覚に陥ることもしばしばだった。かの女は幼

年期、風呂場で転び、後頭部を切っていた。ちょうどおれと風呂へ入ろうとしたときだった。扉の金具に頭を打ちつけ、眼を開けたまま声もださなかった。おれは悲鳴して親を呼んだ。救急車を呼んだ。

おれは、もちろんろくでもない兄で、いまかの女がどこに棲んでるかもわからない。死んだのかも知れない。兄妹愛などけつぐらえ、というわけだ。ここにも父の計略が働いてて、落ちこぼれたものをさらに追いつめ、逃げ場をなくさせ、兄妹間にわざと対立を煽り、攻撃させ合った。なんにせよ、やがて灰は、灰へと還る。気に喰わなかった。両親がきらいだ。なぜならひとの親というもののほど、罪人はこの世にいないからだ。もはや姉とも妹たちとも話をしなくなった。通じ合うものがなにもない。父の計略はぜんぶ巧くいった。植えつけられた攻撃心と反感はなかなか絶えることがなかった。

家父長主義なんざ滅ぼすべきだ。おれもおもった、だれかが書いたみたいに《父親を殺したいとおもわなかったものなどいるのか》と。おれはたびたび姉たちに悪態をつき、かの女たちは嘲笑った。家族愛というものはおれの世界には存在しない。家のなかで安心できる場所がなかった。どこにいても監視の眼があった。いつ父は死ぬのだろうかと算段した。あと30年は生きるだろう。それまでおれ自身は生きていられるだろうか。殺すか、殺されるしかないのかも知れない。

毎朝、撲り起されるとき、反撃への意志を確かめる。でもなにもできないまま時間は過ぎていく。まったくばからしいことに父は、おれが正しい技術や、認識を得る機会を奪いながら、おまえは劣ってる、なぜなら姉も妹も優秀じゃないかと捲し立てた。おれは誓った。あのやろうを死ぬまでいたぶってやる。母は子供が成人すれば離婚する、そう幾度もいいふめた。でもけつきよくそうはならなかった。

\*

## 山火事

(こいつを書いてるのは生田川上流の長距離バス発着場。たぶん発表はしない)。

詩を読むのは

かなしい

ことか

沼に空砲を撃つみたいにななしいときもある  
なにも感じなくなったぼくはただ頁をめくる

さようなら

愛しかったものたち

ぼくらのけものの

魂しいが

自動車に轢かれて

死んでる

きみはぼくの友だちじゃない

たったそれだけのありきたりなこと

ぼくは詩が読めなくなってしまった

山火事がきれいな夜を

ずっと待っている

15/3/44

\*

「精神科はあぶない」というのが、ものを知らない母の見解だ。おれは有野台にある心療内科へいった。ロールシャッハ・テストや、ほかにマークシート式のテストを受けた。処方された薬のせいで脚に痙攣が起った。通院はやめた。テストの結果はわからない。おれは、おれをみんなとおなじようにしてくれるところを探してた。あいかわらず歌詞を書き、放課後、詞や絵を見せるためにだけに職員室へ通った。美術教師、国語教師、音楽教師が目当てだった。やがて秋が来た。どうやっても修学旅行にはいけなかった。旅先は長崎だ。みんなが怖かった。なにをいわれるのか気が気でなかった。友衣子のちかくへいきたい。それでもあきらめるしかなかった。でも写真はべつだ。おれは担任に頼んで、女の子の写真を焼きましてくれように頼んだ。でも恥ずかしくて、友衣子のはだめだった。

かの女のことを考えるだけでおかしくなりそうだった。技術教師が笑った。

校内はじまつの傑作だ！

けつきよく写真は届かなかった。ふざけやがって。その娘は、たったいまいすら注文してないと担任はいいはった。そんなことがあるもんか。以来、おれはかれらを相手にしなくなった。なにをいわれても上の空だ。ちくしょう、おれを値踏みしやがって！——雨のなか、上村透が土産をもつてやってきた。写真でもそうだ、『長崎は今日も雨だった』。

担任の牛尾は何度も家にやって来た。学校に來いという。教師としての評判が赦さないんだ。成績落第者のための授業もあるという。いざ覗いてみれば暴力者気取りのぬけさくどもが、まじめに机にむかって、笑いものもいところだ。どうしてやつらなんかと勉強するのか。おれは廊下で口笛を吹いた。10人ほどが怒ってでてきた。そのとき麻田という、ちゃらちゃら



した女が来て、おまえも勉強しろといった。1回だけという名目でおれは加わった。山田が寄って来ておれをからかった。それきりおれはでなかった。はっぴいえんどや、ゆらゆら帝国を聴き、時間を潰した。

おれは絵入りの歌詞集をつくって、長谷に渡した。喜んでくれた。そして8組できらわれものたちと話し、かれら、かの女らがどうしてきらわれるのかを理解した。そしてじぶんがきらわれものなのも、当然理由があった。つまり集団とのコードを持つてない。それは隠語でもいいし、笑い方でもいい。とにかくそれがおれたちにはなかった。不要なコードが多すぎる。ひとこというためにどれだけの手練手翰が必要か、おもっただけでも嫌気がした。

じぶんにとって不快なものとは不快ではない。その点、みな素直ともいえる。郷家麻衣は8組で教師の手伝いをしてた。毎年だれかに虐められてるらしかった。それも小学校から。おれとおなじだ。あるとき、透がいった。あいつとは話すな。――けれども、おれがだれと話そうがそいつは、おれの自由だ。おれにはそれほどまで他者におもうところがなかった。あっちが接触してくる以上、そこに悪意がない以上は拒む由しはない。卒業式のまえに写真を撮った。小6とおなじくなんとか友衣子のちかくに寄りたい一心だった。でもおれにはもう野心はない。じぶんで刈ったひどい坊主頭で、ぶかっこうなまま端っこに立ってた。どうすることもできない。細見のやつが青縁の眼鏡をかけてる。色気づきやがったか、このおかまやろうは。卒業式で、でたために歩いて賞状をとる。予行演習すらでていなかったからだ。みなが怪訝なつらをした。どうでもよかった。帰ろうと廊下へでたとき、中島のやろうが声をかけて来た。じぶんの卒業演説をじぶんで褒める。にやにやにやにや、と。

#### 自画自賛じゃねえか。

おれがいうのを遮って、あるいは聞えないふりをして、まだ自慢をつづてける。こいつはふるってる。こんなやつを支持するくさったやつらしかここにはない。やつの隣の眼鏡やろうは1語も口を利かず、微笑とともに黙ってる。それもまたむなくそがわるかった。やつらを置いておもてへでる、道。家まで15キロばかり歩く。



\*

福知山線に乗ってた。道場を過ぎたら桜が土手をつづき、斜向かいの女の子がふたりはしゃいだ。気分はわるくない。エレファントカシマシ『浮世の夢』を聴きながら、これからゆく学校の、その正体について考えようとしてた。受験結果発表だ。受験の日はひどい雨で、片足を水でいっぱい溝に突っ込んでしまった。きょうはいい天気だ。三田駅に着き、ふたりの女の子を追いながら歩いた。どっちも途中ではぐれてしまった。受験は合格だ。なんてこった。おれは答案をともに埋めることもできなかったというのに。有馬高等学校定時課程への入学が決まった。おれとしてはどうでもよかった。公衆電話で母に伝えた。それから電車でもどった。鼻がむずむずする。花粉がいたるところに舞ってた。駅ビルのオアシスで何人もの、制服姿とすれちがった。どこにも友衣子はいなかった。祖父は姉の進学祝に2万をくれてやったが、夜学のおれにはなにもなした。ただ時計をくれた。そいつは随分あとになって売ってしまった。なかなか代物らしく3万の値がついた。

入学者説明会の日。おれはレコードを買った。サニーデイ・サービス『24時』と椎名林檎『勝訴ストリップ』だ。入学説明会には遅れた。怒り顔の父が怒声をあげた。やつはいいたいなにに怒ってるんだろう。怒っても、おれのものを毀してもおれ自身の魂しいを毀すことなかできやしないのに。わざわざ自身の無能を見せつけてるだけじゃないのか。入学式でおれはじめてじぶんの中学の評判のわるさを知った。学生証の写真を撮りにいったとき、全日制のやつらがおれの出身校を訊いた。

塩瀬あたりにいったほうがよかったんとちゃうん？  
もうひとりが来ていう。

友だちできたんか？

ああ、できたで。

そのあと、かれらと出会うことはなかった。ほかにも女の子たちが山口をわるしぎまにいうのが聞えた。おれはうすうす感づいてはいたが、それでも少しショックだった。そのあと体育館で同級生たちと顔を合わせた。おれのうしろには強面のヤンキーが3匹もいた。一瞬ここへ来たのを悔やんだ。訓示を聴き、それから写真を撮った別館に移った。みんながなまえを呼ばれる。おれが呼ばれとき、女の笑い声がした。小迫恵だった。不愉快なくそ女。

おれは2日めに休んでしまった。父はおれの室で暴れた。そして正座させ、3時間も4時間も怒り、午前2時によく終わった。ちようどラジオではエレファントカシマシのライブを放送してた。それがどうしても聴きたかった。録音したかった。でも、だめだった。おれは父の満足することばを、正解としてだすために6時間をかけた。おもいだしたくないことばでいっぱいになった頭を水で冷やした。くそ。翌日学校へいった。西宮名塩の阪急オアシスで、かの女の声を聞いた。

ミツホ！

友衣子だ。かの女は田中良和と連れ立ち、歩いてる。まるでカップルだ。似合いの雛人形みたいなふたりに妬心を憶え、怒りにふるえる。そしてかの女の笑顔がおれの胸に痛い。光り。あいかわらず落ちぶれてるおれ。かの女はおれがいまどうしてるか訊く。おれは答えた。そして逃げたくなった。かの女の輝きに耐えられない。まだ時間も早いというのにわかれた。切符を買って列車を待つ。おれは後悔した。もったかの女について知ることでもできたのに、田中のやろうに1発喰らわすことだった。でもおれはもどれなかった。

学校はなにもかわりはなかった。柄のわるいやつと、そうでないやつがいた。ただ比率がわるいほうへかたむいてた。小学校と中学校がおなじだった小迫と前田というふたりの女と、中学が一緒に、試験でも一緒だった村雨は3人ともわるいほうだ。宮原というやつがよく声をかけて来た。おれたちは気があって話し始めた。そのいつぼうで不良たちとは仲がよくなかった。

便所で照屋と近藤にからかわれたときだ。おれは「やめろよ!」といった。照屋は凄んだ。細長い軀に金色の鶏冠とさかが生えてる。

調子に乗んなよ。

でぶの近藤といえ、「あのひとに謝れよ」ばっかりだ。ひとのことを気遣うまえにやることあるだろうよ。少なくとも豚が豚を喰うのは感心しない、そうおれはおもった。――でも、しだいにやつらの仲間がおれを追いつめようとしてた。クラスでいちばんだとおもった北甫由子は近藤に誘われて一緒に帰った。北甫はフリースクール出身の色白の女の子だ。妬心から、家路に就く。阪西というでぶ公がおれに話があるといった。でも、あしたにすると行って去る。どうやらでぶに縁があるようだ。太宰治『ろまん灯籠』を読みながら、ひとりきり電車に揺られた。

翌る日の放課後、やつらの群れが出口を塞いでた。おれは洗剤の容器を片手にした。目潰しくらいにはなるかも知れない。廊下から校門を見る、色とりどりの猿どもがおれのことを狙ってる。勝てっこない。せつちんづめだ。おれは校庭にむかつて窓をあけ、繁みのなかへ身を隠した。終列車がやって来るまで。

\*

宮原明とはじめて口を交わしたのは、やつが毀れたおれの眼鏡をいじってからだ。怖い顔してるってやつは笑った。やつはバンドをやりたいがってた。でも家にあるギターは親類の子供に毀されてしまったという。おれたちは音楽について話した。体育の時間、宮原におれは近藤が不良だといった。かれはそいつを告げ口した。とにかく下っ端と見做した相手からなにかをいわれるのがきらいなでぶなんだ。おれが夜の道を下校してるとき、やつはやってきた。小迫と一緒に歩いてる。かの女とは小学4年のころ、演劇部をやってた。

おい、おまえ、おれのこと不良やいうてるそうやな！

やつの強い口調に面喰らった。——だっておまえがそんなことばを遣うからだよ。

なにひとりでびびっとんねん。

照屋さんも怒らせてなあ！

あいつは関係ないだろう！

あいつっていうたな、照屋さんに教えてやるからな！

覚悟せえや！

ふたりが駅前の来るまでおれは追った。鉄板入りの鞆を持って。おれはでぶの近藤にちかよって震えた声でいった。おい、おれを嘗めるなよ。おれは照屋なんかに負けるか。虎の威を借る豚野郎！——おまえら全員、壁蝨<sup>だ</sup>どもを殺してやるからな！——あたり構わずわめいた。小迫は嗤った。それが悔しくてやつを鞆で撲った。

おい、女の子にしていることやないやろ！

ああ、わるかったよ。

ちゃんと謝れ！

ごめんなさい。

ずっと小迫は嗤ったままだった。後日、京都の養老院への訪問を控えてた。おれは色紙に「さっさと死んだほうが迷惑がからない」と書いて問題になった。どうでもいいことだ。けれども長生きだけが取り柄の余剰精神には我慢ならないものがある。照屋がおれの胸ぐらを掴み、凄んだ。どいつもこいつもその手の漫画の読み過ぎだ。たったいちど「あいつ」と呼ばれただけで。大した沽券、見あげたまごころだ。

おまえ、おれのことアイツっていうたそうやな！

ええ、いいましたよ。

なんやと、おい！

やつはヤンキーよりも、広告看板に鞍替えしたほうがいいとおもった。よく目立つだろう。ピンク色のパンティを穿くがいい。よく似合うだろう。おれは頭をさげた。1回きり、軽く蹴られただけで終わった。見かけによらず、卸しやすい。それでも小迫はおれのことをぶちのめしてやると息巻き、近藤がいった、

学校終わったらおまえ、大人しく来いよな？

どれくらいかかる？

車で迎えにいくから待っとけや。

放課後になって、おれは近藤にふたりぶんの手紙を渡し、窓を飛び越え、校庭を突っ切った。端っこのフェンスはひくく、隣家に繋がってる。そいつを登って飛び降りた。やつらのだれひとり、追いつけない。そのいっぽう、小迫はおれの家へ電話した。バックにやくざがいるとわめき、おれが帰ってきたときには落ち着いたらしく、撲った落としまえをつけろといい、手紙の内容に突っ込んで来た。女は撲られてもの文句はいえないとか、やくざの情婦は人間ではないなどとおれは書いてる。そして最後に「金が欲しければ警察署にでも、裁判所にでもいけ」と書いてた。ひとを怒らせるのがおれの得意だ。電話口でかなり立て、ひたすら怒鳴る。小迫は冷静になったのに、おれだけが燃えてた。姉や妹がうれしがった。低能な女たち。明くる日、校門で近藤に出会した。やつはおれに謝り、さきを急ぐおれにむかって、

待ってよ、ナカタくん。

か弱い声でいう。チェックのシャツがなんとも不格好だ。やつの脂身がべったりと浮かぶ。でも、おれはやろうになにもい

わなかった。ほかのヤンキーどもとおなじく、じぶんから辞めるのが眼に見える。やつはこれから動物農場にもどるのか、それとも屠殺場か。いっぽう<sup>すがめ</sup>眇の小迫は黙ったままで、照屋もなにもいわない。やつの取り巻きたちも。おれは、じぶんでじぶんの身を守った。ただそれ以外の撰択肢がなかっただけだ。

おれは宮原に誘われて遊んだ。けれどゲームもプリクラもおもしろくない。金のむだだ。ひたすら余剰でしかない。少なくとも男同士でやることじゃない。こんなことを好くのはなにもない閑人だけだ。おれは閑人と友人になっただけか。野球部にも誘われたが、おれは頑なだった。スポーツなんてものは苦手だ。あるとき、体育の授業でおれはなにもなかった。端で立ってるだけだ、幾度もからかわれて、しぶしぶ加わり、バスケット・ボールを追う。やがて綴木が笑いながらいった。

なんや、できるんや。

北甫が答える、

やる気になったんとかやうん？

おれは怒ってなにもいえなくなっていしまった。くそ、あの淫売どもめ。かわいくおもしろい、気になりはじめた北甫にいわれるのは、もっといけすかない。悔しい。かの女は緑色の上着がよく似合ってた。情報処理の授業のとき、かの女のうつむき顔におれは惹かれてしまった。色白で切れ長の眼に惚れた。もう救われる見込みはなかった。いずれは蔑みのなかで蜂の巣だ。おれは感情に蓋をした。夏になって小学校の創立記念式典があった。中邑夕子という6年時の転校生が司会役だ。色黒で、口さがない女。おれはレコード屋までいくために姉妹と車に乗った。かの女たちは式典で演奏することになった。おれにはそんなもの空々しいだけだ。おれが『エレファントカシマシ5』を買って帰る。姉がいった。

長谷さんが会いたいっていった。

会ってどうなることもない。おれが会いたいののは友衣子だけだ。深夜、ムーンライダーズのシングル盤を聴いた。『Sweet



bitter candy 秋ゝ冬』だ。『ミュージック・スクエア』で知った曲だ。そのころ、早生まれで、1歳下の北野拓郎とはよくふたりで帰った。かれはおかしなやつだった。みんなにきらわれるか、嗤われるかだ。いつも罐チューハイをまわし呑みしながら歩く。かれは自動車が好きだった。その手の雑誌をいつも学校に持って来てた。みんながうんざりするほど、車の魅力について喋る。あるとき、おれは漫才の台本を書き、かれと一緒に演じないかと誘った。そのせいでしばらくかれは休んでしまった。かれこそおれにとっての聖人だった。かれは父親の仕事を手伝ってるらしい。名ばかりの体育祭にかれの姉が来てた。みな嘲笑った。

幾度か、名塩駅でかつての同級生と出会った。でも友衣子とはいっさいなかった。かわりに中井が穢らわしく絡んできたり、榎田が鼻でおれを笑い、大寺という男が卑しい笑みを投げかけたり、小山と寺島がおれに気づかず去ってったり、碌なやつらじゃなかった。あるときは坂本姉弟に会い、父親の車に乗せてくれたこともあった。楽器を持った小川鐵平と話し、セッシヨンしようといったこともあった。でも、どうしたわけか、大抵はくそだ。

\*

午。起きると犬がいる。牝の子犬だ。おれはスメハチで撮った。フィルムはモノクロだ。学校から帰れば、やつがどっかにくそをしたと父がいた。いやに嬉しそうに燥いでた。おれは自部屋に籠った。おれには話もなく、犬を飼うのが信じられなかった。なんて仕打ちだ。おれの意見も存在もどうだっていいとわかった。おれは猫を欲しかった。子犬は近寄るたびにおれの手を噛んだ。それはそのたびにやつのけつを蹴り、うしろ足を踏んづけた。しだいにやつはおれに懐くようになった。おれはやつを自由にさせたかった。幾度もリードを外し、そとへ放してやった。こんなところにはいるべきではないのだ。おれもお

まえも。どっかの映画で聴いた科白に、『犬好きは身勝手、猫好きは尽くす』というのがあった。おれは後者だった。犬の濡れた媚態がごく卑しくおもえてならなかった。

仕事はなかなかなかった。洋食屋を落とされ、給油所を落とされた。あとは面接にすらならなかった。自己アピールなんざおれにはできなかった。他人の靴を舐めるみたいなことが赦せない。仕事は探せばある——そんな父の辞はいんちぎだった。おれは大人でも子供でもないろくでなしだった。仕事をしろよと父はいう。それは砂漠で水脈を見つけるみたいなものにおもえた。やがて夏休みになった。またおれは下男として家の仕事に使われた。屋根裏部屋は完成した。つぎは離れの屋根を補修した。朝から夜更けまでやり通しだった。こんなのはおかしかった。おれだけが家の仕事で、みんな楽をしてる。成績がいい？——そんなの関係ない。室内を片づけ、今度は裏庭の間伐をやった。なんでもありだった。父のおもうところ、仕事は無限にある。夏のあいだじゅうずっと父の休日大工につきあわされた。母屋の瓦をはがした。屋根裏を半分解体し、そこに室をつくるつもりだ。ばかげてる。叔父が手伝いにきた。信じられない暑さだった。タール紙で覆った屋根のうえに木杵を打ちつけ、薄い緑やら、ピンクのまぬけた板瓦を差し込んでいく。それが朝から晩まで、暮れても明けても家の仕事で、父の仕事がそのころ、おれを縛りつけていた。おれはやつが死ぬこと、そしてじぶんが永遠にとでもおもえるような仕打ちから解き放たれることをひねもす願っていたものだ。

夏は容赦ない。おれは長い髪をかきあげながら作業に従った。もはや気力もなく、逃げ場のないわが家。もともとあった屋根を潰してできた室で、角材を伐り、釘を打ち、電動ドライバーでねじを締めあげる。あるいは廃材の釘抜きをして指から血を流す。おれも父もどうかしていた。——おい、こら！

父の手がおれの頭を掴み、そのまま移動する。ちいさな丸椅子におれを押しつけると、散髪が始まった。鋏でめちゃくちやにやつはおれの肩まであった髪を剪ってしまったのだ。おれは抵抗もできないほどに熱に魘されていた。それはやつだってお

なじだったかも知れない。ともかくおれの頭はとても人前にだせないようにされてしまった。これからどうすればいいのか。見当もつかないでベッドでうなだれる。母はおれの頭を見ていった。

どうしたの？

なにが起こったのかはじぶんでもわからなかった。どうして力づくでも抵抗しなかったのか。けつきよく、床屋にいくしかない。おれはタオルを頭に巻き、音楽雑誌を手に這入った。撰んでおいた、好きでもないミュージシャンの髪型にしてくれといった。えらく、みじかく剪られたもので撰べるものは少なかった。父はおれが物心ついたときにはすでに裏庭に鉄骨を組み、はなれを建て始めていた。10年も経ってから、母屋を改築し始めた。でたらめな建築だった。いつもどこかをつくっては、どこかを毀していた。果てのない愚行がおれを掴まえる。やがておれが免許とカブを手に入れるまで、逃げだせるまで、家での仕打ちはつづいた。はなれの2階と地下室に、ガレージの上の小屋、ガレージのうしろの小屋ができた。でも、いまではだれも使っていない。執念が先走るなかで家は増殖した。父は偏執狂にちがいない。姉や妹たちはおれをせせら笑った。いまではトーチカみたいな汚らしい家で、造りすぎた室を持てあましてひとり、父が棲んでいる。隣人たちが眼を背ける。やがて理由をつくって母は家を棄てた。やつを見棄てた。そしておれは街の生活をどうにかこうにかしているわけだ。たまにおもいだすことがある。家族というものが毀れながらもあったことを。母や姉や妹たちがどこでどうしているかなんて、おれにはどうでもよかった。かの女たちのことなんか呼びでないから。

ふりかえると、家は父そのものだった。大きな心臓が土のうえに建っているという幻想。おれはその幻想からやつとのこと、脱げだした。もはや帰ることのない土地で、ふかぶかと土を穿つけものたち。あるいはあの村に取り残されたひとびと。閉じ込められるような感覚をどれほどあそこで憶えたか。おれは水を呑んだ。午後から夕方にかけて日が傾くまで。家は父そのものだった。おれはなんどもそこから逃げようとしていた。

気分がわるくなって自部屋に籠もる。The pop groupが叫んだ。"Don't call me pain! pain! pain! pain! Don't call me pain!"——夏の終わり、タワーレコードでエレファントカシマシ『奴隸天国』、eastern youth『雲射抜ケ声』を買った。黒縁眼鏡をかけた。シャツも明るい赤や緑にしてみた。みんな注目した。わるくないようだった。女の子たちが褒めてくれた。いい気分だ。「まえの髪型も女の子みたいで可愛かったのに」——と綴木がいう。いったい、どんな美意識でそいつをいつてるんだ?——当惑を憶えた。ただおれは以前、はじぶんで髪を切ってただけだ。まるきりおかっぱだったけど。散髪代を親に頼むのがいやだった。

町田康や、車谷長吉を読みながら授業を受けた。あるいは坂口安吾を読みながら受けた。おれは数字が苦手だややすい四則計算すらできず、幾度も恥ずかしいおもいをした。若い女の数学教師はおれを心配してたらしい。からかわれもした。西内という年上のヤンキーくずれが笑った、

近くの小学校にいったらええ。

放課後、綴木がいった。

ナカタくん、ユウコを送ってやって!

でも北甫は坂を颯爽と降ってる。自転車でだ。かの女はあつというまに見えなくなった。追いかけることもできない。宮原がおれのあとを着いてくる。正直、もう、やつが鬱陶しくてならない。

きょう、いやなことがあったんやろ?

そう執拗に問う。答えは否だ。本心からそんなものはなかった。さっきだって由子と話せそうだったんだ。それでもやつは喰い下がる。おれは一瞬左眼でやつを見た。

おれのこと、睨んだやろう!

やつは激昂し、おれの胸倉を掴んだ。「見まちがえだろ」——おれはいった。やつはおれの背囊を掴み、あくまで責めにかかる。いったいどういふつもりなんだ。おれは背囊をそのままやつの手に任せ、帰途に就いた。相手にしてられなかった。胸や首はやつの指で傷だらけになった。翌日、学校から電話があった。リュックは職員室にあるという。おれが登校したとき、宮原はすでにいた。

しばらく距離を取ろう。

そういったのはおれだった。男女のなかでもなくせにだ。おれは見当ちがいところで暴力に走るやつにはうんざりだった。やつは挨拶だけでもしようといったけど、おれは次第にそれすらしなくなっていた。放課後の掃除、宮原は阪西に怒ってた。なにがあったのかはわからない。からまれたらしい。帰り道、おれはいった。

触らぬ神に祟りなしだ。

宮原はその辞に感動したといった。おれとしてはただのでまかせでしかない。なぜそんな眼に遭うのかは当人にもわからないといった。やがて宮原は白石や阪西からいやがらせをうけてるといった。かれはなにか道具を使って脅しを受けてるらしい。白石はおなじ中学出身の不良だ。やつをどうおもうかっておれに訊いた。近藤の時をおもっておれは本音をいわなかった。

きらいではない。

やつはおれからレコードを借りた。10枚もだ。特にくるりが好きらしい。それから雨の夜だった。やつは白石に挑みかかった。傘でやろうを滅多打ちにした。おれは廊下を決して覗かなかった。おれがやつを庇ってやらなかったのが原因だってわかってるからだ。不良たちが色めいた。照屋がいった、

ナカタくん、やつの住所知ってるか？

いいえ、忘れしました。

忘れた？

それでおれたちはそれきりだ。やつは退学した。おれは金のために父の仕事を手伝った。かつて父が働いてた尼崎の金属加工工場で清掃夫をした。おれはギターを買った。青いサンバーストのストラト風だ。『ライブキング』という支那製。母のガットギターよりもはるかに握りやすかった。フェンダー・アンプも手に入れた。宮原に電話をかけた。やつは怒ってて、ひどく罵倒された。

貸したものの返してくれよ。

なんやねん、いまさら！

落ち着けよ。

たしかにおれがわるかったよ。

おまえ、きもいねん！

電話かけてくんない！

当然だ。おれはやつを見棄てたんだ。けっきょく貸したレコードは返ってこなかったし、やつの両親はそんなものはどこにもないといった。みんな棄てられたんだろう。学校にはやつの両親から苦情来た。父はでるトコでたらええといった。でもおれはそんなことしなかった。おれは『奴隸天国』を聴いたあと、酒をしこたま吞んで、夜の道を歩いた。そしてまず嘉村大介の家でおだを挙げた。やつを罵り、おれは音楽をやってるんだとわめいた。つぎに上村透の家の玄関でくだを巻いた。

おれは三島由紀夫を読んだんだ、

永井荷風を読んだんだよ！

おれはかつてのようにはかじゃない！

やつはいった。

おれの高校の先生がいうとったわ、

しょうもない大学いくらいなら短大いったほうがましやとな。

帰り際、「これから自殺する！」と叫んだ。それから寺内の家にいった。呼び鈴を鳴らしてもだれもでない。竹村の家を探した。みつからずに雨が降ってるなかを闇雲に歩いて帰った。次の日はひどい宿酔いと頭痛だけが残った。ひどい頭痛、父の車で三田へいった。帰りは雨だ。おれは駅から歩いてた。途上、ワンカップを買って呑みながら道路工事に出会した。作業員がいった、——あの車、女の子乗せたまま行きよった！——なにが起ったかはわからない。ただ酔いながら雨を浴みてた。

\*

授業中、ヤンキーどもがうるさい。けれどもかれらの個体数は時間とともに減っていった。生態学を学ぶのなら打ってつけのマルタかも知れない。小迫なんか呵られ、「いま歌詞書いとんねん！——邪魔すんな！」とわめいた。あんなくそばかがいったいどんな詞を書いて、どんな音楽に合わせる気なんだ？

あるとき隣の永易黎<sup>れい</sup>がいった、「おまえ、耳のかたちがええな。ピアスせえへんか？」——断った。そのころのおれの習慣といえば、授業のあとに黒板をきれいに拭くことだった。どういうわけか、そんなことをはじめ、放課後の掃除まで頼まれるようになった。さすがにそいつはいやだった。綴木に頼まれてもおれは断った。どうしようもなく気まぐれで、いい加減なやつに見えただろう。

\*

あるとき、おれは寺内の家のそばを通って駅まで歩いた。なにげなく裏庭を覗く。わずかに開けられた窓と立てかけられた角材が見えた。どうやら業者が出入りできるように工夫したらしい。そしてどうやらもう、かの女たちは棲んでないらしい。その夜、おれは忍び込んだ。からっぽの室を抜け、階をあげる。右手にいけばかつてのかの女の室だ。昔しのかの女をおもいだす。素敵な洋服を着て歩きまわる、かの女の姿を。そこに立ってしばらくおれは眺めた。ただそれだけだ。いいや、射精したんだ。床に精液をぶちまけてしまった。

\*

年の瀬になって由子は髪を安っぽい茶色に染め、ばかっぽい赤いパーカーを着て、教室に入った。そしてヤンキー女と親しくなったようで、声をあげて、笑っていた。おれはぞっとしてしまった。かの女があんなになるなんてとおもった。じぶんの恋人でも、家族でもないくせに、かの女のその行為がおれをつよく苛んだ。かの女はフィリススクールの出身だったし、いじめもあったかも知れない。もしかすると、かの女は似合いもしないことをやって過古にむかって牙をむいてるのかも知れない。そうもおもった、でも、耐えられないひずみが自身のなかに取り残されたパズルみたいに、わだかまって、漂ってる。かの女はじぶんの好きがわからないのかも知れない。かの女を感化したらしい、ヤンキー連中を心底憾んだりもした。かの女を変えてしまったものを自分勝手に呪わしくおもい、そして沈黙した。

ぎりぎりの成績で2年めにあがった。小迫も前田も村雨も退学してた。小迫はまだ保ったほうだけど、前田美香は1学期の



初めて停学を喰らって辞めてた。集団で喫煙してるところを押さえられたらしい。かの女はおれをひどくきらってる。母はかの女がひとりグリーンハイツから麓へ歩いていくのを見たといった。それに退学もかの女の母親から聞いたともいった。どうでもいいことだ。やがてみんながやる気をだし、授業は難しくなっていた。吉本と飯尾と木長という編入生が入って来た。みな年上だった。いちばん若い木長という女も1年上だった。あとのやつらは少なくとも5年喰らってた。おれはかれらと仲良くやろうとした。でもなかなか、できなかった。あるとき、永易がやって来た。

おまえ、ギターでやってるってほんまか？

どこで知ったのか、やつは知ってた。情報処理の山田経由だろう。授業中にそんな話をしたんだ。

一緒に同好会にいかへんか？

おれはいくことになった。年長の男と、年下の女がいた。やつらはすぐに消えた。帽子のなかのゴキブリみたいに。その夜、おれとやつは『古賀ちゃん』という居酒屋で呑み、やつは室に泊まった。やつは母親がいうには永易も詩や小説を書くらしいかった。おれはかの女に駅まで送ってもらった。

夏になって棚卸しの仕事を母が見つけてきた。釣具屋『フィッシュ・オン』。店子の出入りが激しい場所だ。おれはいちばんめの妹と一緒にいった。どっかで見たことのある顔があった。松本美枝と郷家麻衣だった。休憩の時間になってようやく郷家と話をした。おれはギターをやっていると、レコードを買う予定だとかいった。

来年も来る？

かの女は去年緊張のあまり寝込んで、この仕事に來られなかったと聞いてた。おれはといえば日にちをまちがえたうえに寝坊した。——ああ、金が要るからな。——氣どった調子でおれはいう。賃金は現金払いだ。6千と半分。帰り道、生協のスーパーへいった。耐ハイの罐を手にとる。そのとき、近所の主婦がおれを見た。驚いた顔でこっちを見る。おれは弁解しようと

慌ててかの女を追った。けっきょくやめて酒を買った。残りの金で bloodthirsty butchers の "yamane" に Number girl の "SAPPUKEI" を買った。おれはたびたび学校を休むようになり、大阪のレコード屋をまわった。当時、「食えない、やっていけない」と音楽雑誌でばやいてたキングブラザーズの音楽に惚れた。まず赤盤を買い、つぎに星盤、そしてバルブ盤を買った。おれの気分にぴったしだった。知らないあいだにおれは由子が好きになってた。かの女の甘えるみたいな仕草がたまらなかった。でもかの女は10歳もうえの男とつき合ってるってった。まわりが子供に見えるとも。放課後、永易とギターを弾きながら、かの女をおもった。おれは孤立してる。だれにも話かけられないし、冗談もいえなかった。というわけでトリスを買って学校にいった。呑みながら授業を受ける。鬱積したものを晴らそうと何度も酒を呑んで授業にでた。まわりのやつらは笑った。30まぢかの中澤という女が驚きの声をあげる。――そんなつよいの呑めるの！

おい、酒臭えぞ！

すごい臭いやな。

そこへ担任の濱崎が入ってきた。――ナカタ、こっち来い！――見つかって停学になった。自習室でひとり反省文を書いてると綴木と北甫と西谷が入ってきた。綴木がいった――字、きれいやな。――北甫が微笑んだ、

もうわるいことしたらあかんで。

木長というあばずれはすぐに辞めた。おれと永易と白石でよくつるんだ。でも実際には道化役として、あるいは金蔓として招かれただけだった。ある晩、みなで酒とサラダを買って永易の家にいった。酒を呑んだ。テレビを観ながら好きな女優をいあった。やつの父親がテキーラをだしてきた。おれは呑んだ。やつの室で白石がリキュールをおれの口に突っ込んだ。そしておれの陰茎を触る、皮カムリだとわめく。おれは三上寛の『ひびけ！電気釜』をがなる。《風呂屋の婆のせんずりだ！》。気がつく倒れ、口から泡を吹いてた。便所にむかって階を降りる。みつけれなかった。物置に迷い込み、そこで失禁して

しまった。ようやくそこをでて、風呂場へ走った。シャワーを浴びて正気になろうとした。おれはなんてことをしちゃったんだ！——翌日はスウェットを借りて授業にでた。どうしても授業にでるとやつはうるさかった。あたまが痛み、からだが震える。あとになって菓子折をやつの母へ渡した。リビングでは弟が炬燵で眠ってた。かれは出席日数が足りず、中学を留年することになってるらしい。中学を留年だって？——そんなことがあるのか？——母親に訊いた。

制度が変わったのよ。

はじめてライブハウスにいった。雨のなか、神戸チキンジョージへ。エレファントカシマシとハリーの共演だ。遅れてしまった。ちょうど『俺の道』が終わるところだ。新曲はおれの耳に馴染まなかった。とくに『勉強オレ』のリフを聴いて、なんて不似合いな曲をやってるんだとさえおもった。それでもアルバムを聴いてるうちに慣れた。その頃、西河奈津という旭川の14歳と文通をはじめた。かの女はインディー・ロックが好きで、学校ではマンドリンをやっているといった。でもたった半年でかの女のほうから音信が途絶えてしまった。おれにはまだなにもかもが早すぎたんだ。対話なんざできちゃなかった。はじめに輸入盤を買った。Cursiveとeastern youthの splitted。日本とちがいテープで封がされてはがしづらかった。そのあと fugazi の "Red Medicine" と The good life の "Black out" をずっと聴いていた。おれは学校にいかなくなった。学祭もどきの催しで、羞ずかしいめをやらかしてしまったからだ。緊張して歌も唄えず、ギターもろくに弾けなかった。下級生どもが笑った。だから休むようになった。おれは学校を辞めると担任にいった。

いちど社会にでてじぶんを試したい。

担任は感心したみたいで、それがいいといった。おれも湧きでる勇気を感じながら帰った。でも帰って来ると父は怒り、姉が室に入ってきた。高校だけは卒業してといった。そしておれの本棚を眺め、安吾の『白痴』を見つけ、授業で安吾をやっていると。『日本文化私観』だ。おれはそいつを要約してみせた。姉がうなずく。かの女とわかり合えたのはこのときだけだ。

秋の午后、父はおれをカブに乗せ、名塩まで送った。

勉強しろ。

おれはいった、

おれ、ばかだから。

苦々しいおもいで三田にいき、坂を上った。途上、ジュースをいっぽんくすねた。丘に登って市街を一望する。なにものの寵を喪うのが怖い。棲む場所を探そうとおもい、鈍行列車で京都の深草までいった。ちょうど国語の授業が最后通告だった。急いでもどった。授業に間に合わなかった。落第だ。でもどうしてか、おもった。点数をあげればなんとかなるかも知れない。それからは放課後、ねばった。補習を受けまくった。数学は55点まであがった。ほかの科目もましにはなった。教師たちは「やつをなんとかできないか」——そう考えはじめた。でも最後の試験に近づくほど、むずかしく、むなしくなった。居残りもやめ、帰るようになった。数学の御膳がおれを追いかけて来た。

落第決まってきついんはわかる、

でもあきらめんと最期までやろうや！

でもおれは帰った。時間はみるみる失われた。そして試験、数学は45までさがった。なにをやってもだめなんだ。保健のテストでおれはわざと回答を書かなかった。あるいは書いたところを消した。ほかの教科もなげやりだ。翌る日、保健体育の濱崎は失望を露わにして迫った。

どうしてあんなことをしたんや。

おまえをなんとかしてやりたい、

先生らはそうおもってたんやぞ。

ほんとうにそうなのかも知れない。でも、なにをやってくれたというのか。いまもってわからないままだ。喪失。濱崎は転任してった。恥ずかしいおもいのなか、つぎの年度を待ち、落第の顛末を『京都旅行記』という短篇にした。なにもかもがやりきれないなかで始まり、終わる、そしてふたたび始まる。

\*

いちど落ちてしまったら、そいつを受け入れるしかない。学校はあたらしく3年制を導入し、下級生のほとんどそれだった。おれは天神の丘をのぼる。ミニ・バイクが追い越す。うしろには北甫が乗ってる。おれが廊下までたどり着くと、かの女がおれに笑いかける。——ナカタくん、おはよう、さっき歩いてたね。どうしようもなく恥ずかしい。でもそいつを隠してあくまでポーカーフフェイスに徹した。それしかできない。やがて父のしつこい命令で原付の免許をとった。それまでの2年、家から駅を、麓から丘を1時間と半分かけて通ってた。免許を取ってわずか半月、事故を起した。176号を西宮北から三田へむかって走ってるとき、おれはべつのことを考えてた。眼は路上の中古車ディーラーやカップルに注がれ、左折のために減速した、白い冷蔵庫ワンボックスカーへと追突した。あたまを窓に打ちつけて倒れ、カップルが警察を呼ぶ。冷蔵庫から女が降りて来る。驚いても怒ってもない。みじかい検分のあと、連絡先を交換して学校へいった。父は激しく怒った。ぶつかったことにも、速度をだしすぎたことにも。ちよつとまえには「多少の速度超過はいい」といったくせに。夜、長い叱責のあいだ、気分がわるくなった。ひどい嘔き気が襲った。診療所へいくはめになった。

そのあとも数回、事故をやらかした。近所のせまい丁字路でセダンとぶつかって、その屋根を転げ落ちたり——無傷だった、山道のカーブでかぜに煽られて倒れたり——多くの血を流し、カブを再起不能にした。これらすべてのとき、まったくべつの

ことを考えてた。でも運転に慣ればこっちのものだった。週末、いつも図書館へいった。あるいはひと気のないところで陸を引いて眠った。早朝、父から逃れるために。それでも時折、先回りした父によって苦役へとかりだされた。いつだったか、飯尾がおれをあざ笑った。おれはやつの職場と知らずに面接にいった。やつが不意に現れた。

こいつ、もと同級生ですねん。

こいつ、落第したんですわ。

にたにたと嬉しそうな笑みを浮かべてた。このやろうは赦せない。けれどもおれにできたのはフェンスに放尿することだけだ。けつきよく仕事のほうも新三田にいつて欲しいといわれ、断った。あまりに遠すぎる。それから半年後の11月、永易の誘いで三田郵便局の配達夫になって過ごした。莚を吸い、焼酎を呑んだ。最初の給与支払いのとき、宮原を見つけた。明細をもらう列にやつもいたんだ。おれたちは眼を合わせた。たったそれだけだ。おれは最悪の局員で、配達は遅く、まちがひも多い。ロッカーの鍵を失くしたせいで、頻繁に水を私服にかけられた。退勤したのに、時間内にさぼっていると密告されたこともあった。卑怯者が多すぎた。おれは辞めた。ネットに詩を投稿し、なんとか人生を変えようと藻掻いた。

あいもかわらず、数学の授業では失態を繰り返した。たかが90分の6がわからないと考えた。御膳に詰問される。以前トでは84+6が92になってる。うっかりそのようなことを書いたからだ。6ではわれないと考えた。御膳に詰問される。以前におれの計算の遅さを相談し、しばらくほっておいてもらうように頼んだはずだったけど、だめだった。執拗に答えを求められ、パニックになる。しまいにおれは「じぶんは遅いから、ほかのやつにやらせればいい」などと情けなくもいった。それでも御膳はなおも追いつめて約分を求める。全世界がおれを見てる。汗が滴る。15が答えだった。あとでノートを見て、さらに羞じた。

落第したあと、さらに落第した北野拓朗が年下のわるがきどもに虐められてた。おれはなるべくやつらから守った。でもか

れは来なくなった。むりもなかった。おれは18になり、まだ詞を書いていた。曲はまったくできなかった。16のとき、多重録音や環境音によってつくった、ミュージック・コンクレートがただひとつの作品だった。ギターはまるで巧くならない。おれは歌詞としても、詩としても通用するものが書きたかった。書いたものを匿名掲示板や作詞サイトへ投げつけた。いくつかな年代のやつらと知り合った。おれは19になった。いつだったかはわからない、けれど、はじめて詩を書いた。『ぼくの雑記帖』。みじかい詩だ。それから次第に詩の世界へと深く入っていった。そして歌詞はやめた。音楽への夢も遠ざかる。ドラムを手に入れるもヘッドを買い替える金もない。売ってくださいと岡村っていうクラスメイトにしつこくいわれた。いまおもえば売ってしまうんだ。いっぽう、おれが学校を辞めるという噂がどういったわけかだ。西内がおれをえらく心配して「辞めるなよ」といった。なぜかれがそこまでしたのか、まったくわからない。生活体験発表で由子が壇上に立った。でもおれはそういうを見逃してしまった。心底悔やんだ。そのあとかの女と丘をのぼりながらいった。

作文、読ませて欲しいな。

だめ。

聴きたかったよ、北甫さんの朗読。

だめやって、ぜったいに読ませへん。

そうかの女はかぶりをふって笑う。あいかわらずかわいい。その春、映画『書を捨てよ町へ出よう』をはじめて観た。中学生のころ、国語便覧に載ってたかれの顔が脳裡に残ってる。おれは寺山修司に惹かれ、かれの作品を読む。ほかの詩人じゃ、草野心平と田村隆一とギンズバーグ、それから藤森安和が好きだった。映画について調べるなか、劇中歌『母捨記』には原詩があり、作者の森忠明を知った。かれの高校時代の作品らしい。詩集はでてるか？——でてる。原詩は、その詩集に収まっているのもわかった。夏になって本屋に問い合わせた。けっきょく出版社に在庫はなかった。作者に直接、電話してくれというこ

とだ。値のするものだったし、すぐには電話しなかった。そのまま日々は過ぎ、やがて脳裏から薄れてった。

\*

匿名掲示板に大阪での朗読会が告知されてた。おれはさっそく参加を申し出、パンフレットとポスターのデザインも引き受けた。大学生と社会人にまじって、はじめて舞台に立った。場所はフェスティバル・ゲートの『コロシアム』。すぐそこはどや街。まずは片平誠の詩集から1篇、それから『ぼくの雑記帖』を読んだ。緊張でかすれた声は小さく、早口になってしまう。なんとか立て直そうとする。客はみな真顔だ。なにを考えてるのか、わからない。当然。――負けた気分だった。終わって一息入れる。共演者のひとりが、自作の詩がよかったといってくれた。その朗読会には文藝投稿サイトで知り合った、荒木田義人も来てる。おれはかれのまえで日本酒を呷った。かれは笑った。

呑めるんやあ。

ふだんは化学教師をしてるといふかれは、朗読会の主宰人とおれとでなにかしようといった。3人のうち、ふたりは三田市に棲んでるのがわかった。会が終わって打ち上げをした。酒を呑んだあと、カラオケを朝までやった。そして喫茶店へ。もうくたびれてた。みんな元気だった。おれは早退した。冬。荒木田さんに呼ばれ、おれは酒場にいった。三田のジャズバー『♪』。内装はひどいものだ。どっかで印刷したらしい、ブロックノイズまるだしの画像がいたるところに貼られ、壁は木目の合成樹脂パネル。おれはバーのまえでなんどもためらってから入った。そんなところに入るのはまったくのはじめて。幾度か、話し合いした。神戸での朗読会に参加することになった。朗読ではなく、パンフレットのデザインと、演奏にかぶせる音楽のため



に。安い作曲ソフトと波形編集ソフトを使い、4つの曲を書いた。音楽の基礎もなつてなかった。それでもいいものが偶然できて、かれに渡した。ディジュリドゥ奏者、鍵盤奏者、ギター奏者が加わることになった。ほかの出演にもそれぞれ音楽がつき、琵琶法師や、ロックバンドや、打ち込みの人間が参加。大阪での主宰人、古溝真一郎、楠木菊花、そのほか2人。場所は三宮センター街、靴屋トピックの角を曲がってすぐの、地下だ。なにかもかが終わったあと、みんな酒を呑み、鍵盤奏者の白石さんの家に招かれた。ワインを呑む。――気分がわるい。――便所にいつてぜんぶ吐いた。ひどい悪酔い。けつきよくうごけなくなつて泊めてもらった。あしたは誓文祭だ。ピアニストとその妻、その息子。おれのことかたびたび話にでる。パンフレットのことや、音楽のこと。かれらも'60年代の文化が好きらしい。昼になつてようやくからだを起した。鉛の塊。きれいな奥さんと子供、そしておれとで町へでた。車で。ダッシュボードには内田百閒の文庫があつた。

ぼくも好きなんですよ。

とくに『東京日記』が。

でもエッセイはあまりおもしろくありませんね。

エッセイもおもしろいよ。

かの女と銭湯に生き、軽食もとつた。でもスープを呑むのが精一杯だ。夕方になつて三田に着く。本通りにある喫茶店で、荒木田さんと合流した。白石さんも、祭りに出演してるといふ。おれはじぶんの不明を詫び、甘酒を買つて電車に乗り込んだ。それから月にいちど、酒場で朗読した。荒木田さんはいつも吉竹というギター弾きと一緒にマイクに立つ。おれにも仲間がいたらなあとおもつた。でも、けつきよくはじぶんでなにかもしなければならなかつた。詩も音楽も演出もぜんぶ自身でやるしかなかつた。ひとと一緒になつてなにかを成したことなんか1度だつてない。おれはいつも、どこでもひとりだつた。

ある晩、三田ボウルの地階の故買屋で、おれはベン・フォールズ・ファイヴのアルバムを見てた。中古にしてはえらく高価

い。ほとんど定価だ。そのとき、かの女が声をかけてきた。

なにしてんの？

由子だった。年長の男と一緒にだ。わるくいえば男たらしともいえた。男がどうすれば喜ぶかを知ってる。でも、おれには大事な存在におもえた。ずいぶん長く話せた。

仕事なら紹介してあげるよ、

いつでもいつて。

おれはなるべく平静に見えるよう話した。内心はびくついてた。あこがれの子だ。しばらくしてある夜、中澤という年長の女をふくめ、みんなで飯を喰いにいった。焼肉屋だ。5人でいった。おれ、永易、白石、中澤、綴木。おれはチェーンの緩んだカブに乗り、あとは中澤さんの車に乗った。永易は、おれが失禁したのをかの女に暴く。中澤さんはまさかという顔をした。永易がつづけた。

おまえから借りたレコードなあ、あれ全然理解できん！——『解体的交感』のことだ。

おれにもできん！

おまえの趣味、マニアックすぎるねん！

そのあと永易の提案でおれたちは天神公園で呑むことになった。酒を買い、みんなで集まった。おれは焼酎を買ってった。さんざ呑んだあと、おれは向井たちと音楽の話をしてた。向井はおなじ齡で2度も落第してた。やつはメロコア好きで、おれはきらいだった。あまりにガキ臭い。やつはXのドラムを賞賛した。おれはけなした。あんなものは派手なだけだと。酒の力でなんでもいえた。帰りにひどく酔った、上林とかいう女がいった、——ナカタくん、柳川さんのこと好きなんやろ？——上林はかの女の親友だった。齡はおれとおなじだ。永易や白石たちもおれが柳川という子が好きだとおもってた。かの女はおれ

の配達区内に棲み、落第してから、はじめて声をかけた女の子だった。でもそれだって白石に「消しゴム借りてくれ」といわれたからだ。——柳川さん、消しゴム貸してくれない？——でも生憎、興味が無い。おれは上林に否定した。かの女は曖昧に肯く。おれは気まぐしくなって矛先を変えた。永易が気に入ってる、生野さんについてだ。かの女はもうずっと学校に来なくなってた。

どうしてるんだろう、あの子。

まあ、修学旅行のことで悩んでるらしいし。

とにかく、おれたちはよく呑んだ。ほかにも焼き鳥屋にいった。その帰りに向井を乗せて家に帰った。やつはおれの室を永易のに似てるという。ふたりで夜通し、音楽について話した。セックス・ピストルズのライブ盤を聴いた。それからやつが壁にへたな詩を書く。朝になって名塩駅まで送る。名塩にはやつの女友だちがいるという。

ナンパしようぜとおれはいつて、やつが笑った。——女つかまえて、おれだけ帰るんかい！——やつが卒業できたかどうか、おれは知らない。やつにはポルノ・ビデオを貸したままだ。川島和津実と堤さやか。おれは室に帰って夕方まで眠った。他人を室に入れるのは中学校1年以來だった。

\*

修学旅行は熱海と千葉と東京だ。旅行のまえ、由子がおれにねだる。かの女にせがまれてとにかく嬉しかった。小躍りしたくらいに。

ナカタくん、

ぬいぐるみ買ってきてよ。

行き先にはデイズニールランドもあった。新大阪の駅、おれはババングの『旅人でない人が居るのでしょうか』を聴きながら、ほかの連中を待った。やがてそろそろと通路をむかって来る。新幹線ははじめてだった。名古屋で途中下車、おれはタワーレコードで時間を潰した。それから熱海で1泊、あたりを写真に収める。次に千葉で1泊、最期に東京で自由行動だ。おれはデイズニールランドなんかきらいだった。食事券を渡され、あたりをうろつく。昼餉にいったものの、まともな料理はなく、午に白身魚のフライと米を頼んだ。そいつを喰って胸焼けし、屋内の湖を臨む喫茶店でアイス・ドリンクを呑むと、時間をかけて土産物を買った。姉と妹たち、そして由子。かの女には眠り顔の、熊のぬいぐるみを買った。値段が張ったけど、とても似合いいにおもえたからだ。それが終わると、さっさとホテルへ退けた。パレードにはいかなかった。テレビでは『にほんごで遊ぼう』っていうおかしな番組がやってる。やがて同級生たちが帰ってきた。おれは地階にいつて酒と握り飯を買った。

ナカタさん、見つからんようにしてくださいよ。

岡村というドラマー志望のやつが窘めるようにいう。けれどもかれらだって隠れて莧をやった。灰皿がないから洗面台の水で火を消してる。おたがいさまというわけだ。罐ビールをあげ、小林旭を聴く。あしたは東京だ。そうおもうと胸のなかが高ぶった。翌日、おれはひとり神保町へいき、小宮山書房で『書を捨てよ町へ出よう』の地方巡業のパンフレットを買った。8千円だ。帰ってきて由子にぬいぐるみを渡した。包みをあける。

わあ、眠ってる！

かの女が喜んでくれ、うれしかった。いずれ去っていくかの女をおもい、なにもいえないのを呪った。おれはあいかわらず淋しい男だ。週末に示し合わせて会う相手すらいない。携帯電話も持ってない。宙ブラリというバンドを見るために十三ファングダンゴへ2度いった。eastern youth と FOUL の共演を観にいちどいった。半券にサインをもらい、ハイネケンを呑む。

いい気分だ。でも淋しさにかわりはない。いったいどうやったらおれはおれの仲間を見つけられるんだろう。そうおもいながらバンドメンバーたちとビールを啜り、あたりを眺めた。ほとんどやつが友人や恋人を連れて来てる。おれにはなにもない。

やがて永易、白石、そしておれは授業を中抜けし、酒や焼き鳥をやって停学になった。おれは不本意だった。抗えないまま連れられ、1万も巻かれ、ばれてしまったからだ。やつらは金があるとおれにたかった。じぶんではいっさいださない。おれは体のいい子分ではなかった。白石なんかおれから金を借りて返しもしないじゃないか。こんなことがあつては堪らない。どうしておれには本物の友人ができないのか。透にしろ、宮原にしろ、どいつもこいつも贗者ばかりだ。でなければガリガリ亡者でしかない。せめて放課後まで待てくれないのか、やつらは。――父はきびしくおれを責め立てた。やつの沽券をとことんまで傷つけたらしい。そんなことはどうでもよかった。

けっきょく校長へ椅子を投げ、永易は永久停学となり、白石は単位をとって繰り上げ卒業が決まった。おれはなにもしなかった。ただ反省文で文章技能を高めただけだ。いつもは慇懃な教頭がえらく感心してて、ざまあみやがれ、と呟く。おれは教室にもどって本をひらく。梶井基次郎、あるいは織田作之助を。まわりの若々しい顔たちがどうにもこうにも苦手だ。そいつを気取られないよう、本のなかへ深く潜る。

校舎へとつづく坂道を迂回して、おれは家並みのあるほうを歩いた。由子が2学年したのヤンキー男と笑い話しながら歩いてる。なんだってあんなガキなんかと。妬心に溺れ、おれはかの女に見つからないようにゴロワーズを吸いながら、遠くの道を選んで歩いた。かの女はあんな男たちが好きなのか、それとも心の空白を埋めてくれるものに無文別なだけなのか。遠い記憶への防衛反応なのか、じぶんへの仕返しなのか。おれのなかで問いが生まれ、その問いがさらなる問いかけを呼ぶなか、おれは聴くまいとして、校舎につづく道を辿った。

\*

もうじき由子とは会えなくなってしまう。おれにはどうすることもできない。かの女の進路を知ることすら。1月4日、ようやく森忠明に電話した。夕方に起き、そのまま勢いでダイアルした。——もしもし、ナカタと申しますが。

はい。——低くてぶ厚い声だった。

詩集を買いたいんですが。

おお、いいですねえ。

きみ、幾つですか？

19です。

ぼくも詩を書いてます。

『現代詩フォーラム』っていうサイトに投稿してます。

残念だけどメカは扱えないんです。

そのあとサイン入りの詩集が送られてきた。ついで『立川エクテビアン』という冊子が送られてきた。なかのエッセイ『立川誰故草』でおれのことが触れられてた。それも実名でだ。封筒には『貴作読ませてください』とあった。おれはできたばかりの詩もあわせてすべてを送った。そうしてしばらく、作品を送りつづけた。ある日、短歌を送ったときだった。それも『田園に死す』を真似たまづいものだ。おれはそのなかで父殺しをやった。電話がかかってきた。とったのは父だ。とてもきまりがわるい。かれはおれの短歌を褒めちぎった。短歌なんて国語の授業でやっただけだ。詩集をだすのに50万いるという。金額に怖じ気づいてなにもいえなかった。

春——卒業生を送る会があった。榎原先生がおれを掴まえていった。——ナカタ、なにかやってくれよ。おまえは詩を読んでいるんやろう？——ええ、できますよ。——べつにわるい気はしなかった。もしかすれば宣伝に繋がるかも知れない。もしかすれば由子がなにかいってくれるかも知れない。そうおもって廊下を歩く。——しばらくして山田先生と出会った。かれはいう。

おまえなあ、あいつらはただでおまえを使う気で。

ちよつとは考えて返事せえよ。

おまえ、ちよつとな、あたまつかって稼げ。

夜、ふたりでモス・バーガーまでいった。榎原はたったそれだけの金しかださなかった。おれはチーズバーグを喰い、ソーダを呑んだ。

おいナカタ、どないするつもりでやねん。

詩を読んでやりますよ。

ぜんぶ儂が用意してやるからな。

わかりました。

送る会、おれは滝廉太郎の『憾』を使った。そこに先生からいわれた『魔王』を乗せる。陳腐だったが撰択肢はない。曲を2回リピートさせ、ノイズを加えた。おれの朗読はよかった。でも最後の《腕のわが子はもう死んでいた》という詩句に校長や、下級生が疑問をもった。校長は「感情が籠ってない」といった。もつと震える声で読めといった。詩が3人称で書かれてある以上、作品の外側の声は感情的であるべきでないというのが、おれの解釈だ。下級生はただのばかものだった。詩のわからないやつらは悲惨だった。けれども、わかるやつはもつと悲惨だ。おれは喋った。ジャズバー『♪』でのことも宣伝した。

だれかが笑う。おれが席につく。吉本さんだけが振り返って笑顔を見せた。由子も綴木もなにもいわなかった。どうしようもなく淋しかった。いたたまれなくなつて帰途、ジャズバーで酒を呑む。そしてもういちど音楽に合わせて『魔王』を読んだ。寺山の『田園に死す』を読んだ。幕。それからひと月、かれらかの女らは卒業式に立った。おれは惨めで、つらかった。できることはない。だれもみんな、なにもいつてくれない。式のあとの立食会、まるきり、存在してないみたいにおれはいた。だれも構うものはない。菓子をつまんだ。首藤という年下の男がおれにギターの弾き方についていった。

ナカタさん、F押さえますか？

ああ、できるよ。

こうですか？

からっぽの手でコードのかたちを取る。セーハで6弦を押さえる。——いいや、こうだ。——おれは親指で6弦を押さえるかたちをとった。かれは感心した顔でどつかへいった。御前があらさまにおれを無視してる。まるきり、眠気と怠惰のなか、進級した。教室には3人しかいない。拓朗はもう来なかった。——幕。

\*

4月、あたらしくできた店、焼肉屋『わかまつ』との話が決まった。正直に言えばそのまえにもラーメンやの接客に受かってた。でも、客を烈しく怒らせてやめてしまった。『わかまつ』じゃあ、おれは雑用係だ。仕事はほとんどなかった。余分なボールペアリング。きのうの片づけや支度や調理補助、肉の味つけと盛りつけ。給与はえらく低かった。なんにも使えない金。酒を呑むしかない金。客も少なかった。中学時代の女子が3人いる。ある夜、おれはへまをやらかした。米を炊き忘れたんだ。



ほかのやつがレトルト米を買いに行く。気まずい。それきりおれは夜からはずされ、昼の3時間だけになった。三上寛の詩学校にいくために何度か休んだ。やつらはばかにして、おれの詩を見せろといった。おれは持ってた。だれも読まなかった。古溝真一郎は東京へいった。

朗読ライブの2度め、おれは自作の『雪のてっぽう』と、森忠明の『母捨記』を読んだ。リハでは藤森安和『十五歳の異常者』もやったけど、怖気づいてできなかった。3度め、場所はジャズ喫茶『JAM JAM』だ。おれの出番はなかった。店長の娘がとびきりで朗読もよかった。かの女は演劇をやってるらしい。おれはたとえば、オープン・マイクで1篇のみ、あとは受付と会計だ。ふてくされながら家に帰った。ひどい冷遇ぶりだともい、酒場にもあまりいかなかった。ある夜、『ルパン三世』のビデオを借りてきた。機械にセットする。音だけ、画面がノイズだらけだ。おれが試行錯誤していると、父が帰ってきた。

親父が死んだ、いまから岡山へいくぞ。

鶴の一声だった。あるいは鶴の。おれには抗いようもなかった。こんな夜の8時に、岡山へいく。それは気狂い以外のなにものでもない。女たちは愉しくテレビを見てる。なんと美しい家族だ、けつくらえ！——父と夜のハイウェイをいった。車は少なかった。やがてサービスエリアが見えた。女どもが退屈そうだった。男はおれしかない。かの女らをどうやって幸せにできるか、そいつをおもいながら、店内をまわってコーヒーのLをひとつ頼んだ。呑むのは父だ。夜のハイウェイを山奥へといき、さみしい田舎にきた。柩とともに1夜を迎えるのが習わしだった。午まで眠った。祖父の死体は暑さからか、大口をひらき、薄目をあけていた。醜かった。惨めな死にざま。だれもがそうなるんだ。おれはロートレアモンとニーチェを読み、眼のまえで女の子の絵がでかかど載ったライト・ノヴェルを読むでぶの従兄を軽蔑してた。しかし、それだっていまにすればどんぐりの背比べ。どちらにしたって誉められたものじゃない。

息子さん、よく本を読むのね、うちのも読書が好きで。

伯母がいつてあとから来た母が返す。

ええ、じぶんでも書いてるんです。——しかし母がおれの書いたものに興味をもったことなど1度としてなかった。やがて出棺のときがきた。祖父の製材所はもうなくなつて、かれの後妻は人形みたいにうごかず、なにも話さない。表情もなく、パイプ椅子に同化してる。おれは犯罪ものの科白だけを書いてた。祖父は昔し祖母を追いだした。わたしが9つのときにかの女は死んだ。葬式で泣いたのはあれがはじめてでoshiまい。腹違いの若い伯父がきれいな妻と、そろいの服を着たふたりの娘とともにいた。われわれのなかでいちばん清潔で幸福そうにみえた。昔しかれにもらったプラモデルをおもいだし、それからまたうつくしいかれの妻をみた。髪がみじかい。昼餉を喰った。ビールを呑んだ。父は知らない女に、おれが留年したことや、妹が不登校になつたことを自慢するみたいに話した。恥知らずのくそつたれ。おれは怒ってビールをさらに呑んだ。父は愚痴をいった。あの後妻が<sup>おんな</sup>なにもかも勝手に処分してしまつたと。製材所も養豚場も屋敷もぜんぶなくなつたと。店の1軒もない通りを歩き、やがて燃え尽きる祖父の終の烟をコンクリートの長椅子から眺めた。ひとりだけ煙突の見えるそとにいたんだ。烟が午のなかに失せていくにまかせて、犯罪小説をわたしは考えながら蓮の花托をみた。無数の眼がおれをみてた。恰幅のある男がいった。——そいつを天麴羅にするとうまい。

でも気味がわるい植物ですね。

夜になってまたもハイウェイを走った。父と母たちは悶着をやりあい、べつの道をいった。おれだって父とは一緒にいたくなかつた。途上、コンビニエンス・ストアに寄った。コーヒーを買ってでいてこうとしたとき、店員の女たちがいつせいに笑いだした。おれはいった——つまりあんたらはぼくがおかしいんだ！——またも車に乗って、父の憤怒に身をまかせた。やつのおもりをするのはもうあきあきだ。母と姉妹がどうなったのかは知らない。どうしておれだけが父と一緒にでなけりゃいけないんだ、——おれは夜の1部になりたかつた。夜の鮭とともに去りたかつた。

\*

相野でマラソン大会のボランティアにかりだされた。なににもすることなんかない。おれは隠れてウイスキーを呑む。遅れてきた走者たちはぶざまだった。給水所の水をガバガバ呑み、紙コップを投げ棄てる。あるいは水を嘔きちらし、呻く。なんともおぞましかった。帰りの駅で、おれはひとり莩を吸った。ゴロワーズの両切りだ。向井がいった、やるやん！——堀井というからだのでっかい、お調子者の後輩と列車に乗った。おなじく後輩のかわいい子が立ってた。おれはかの女と堀井をくっつけようとおもい、かの女に席を譲ってやれとけしかけた。けっきょくかれらは立ち話をするだけで終わった。かの女は黒髪のおさげで、眼鏡をかけてた。やがて眼鏡もおさげもやめて、髪をみじかくして染めた。おれは帰ってから「われら走者」というビート詩を書いた。

焼肉屋はやめてしまった。寝坊してそのまま電話で辞めるって告げた。どうせ金にはならない。学校に行く。たった3人の教室。みんな卒業してしまった。岸本という小さいのがいった。

みんなで学校に休まず来ないと、

だれかが休むとやる気を喪う。

どうだっていい。おれは詩の催しのために何回か休んだ。三上寛の詩学校や、ジャズバーでの朗読におれは時間を使った。4年の在校生が3人とあつては学校も授業なんてどうでもよくなった。中学レベル、もしくは小学レベルの問題をだした。あたらしい数学教師はおれが『ツアラトウストラ』を読んでもることにやたら感心してた。おれはあいかわらず数字がだめだった。『算数入門』という本を知り、そいつを読んだほうがいいのか、かれに相談した。どうやらあまり効験はないらしかった。あ

るとき、先に卒業した、西谷が保健室にいた。かの女はおれのことを年上だとおもってたらしい。

おない歳やつたんや。

上林もそうだった。落ち着きや、静かさのせい、12で20を演じたり、15で18をやったり、16で19におもわれることもあった。やがて年も暮れて生活体験発表、作文披露のお鉢がまわってきた。おれはエフトウシエンコの『早すぎる自叙伝』からの引用と、じぶんの短歌、そして好きなふたつの短歌を載せて人生について語った。「かれはニーチェを読んでる」と数学教師がほかの教師にいうのが聞えた。どうだっていい。おれがなにを読もうが、それが地位向上につながるわけでもない。校長をばかみたいに感動させてしまった。おれは3番手に選ばれ、「高校生フォーラム」へでることになった。

20を過ぎて高校生なんて羞ぢでしかない。会場じゃあ子供たちがガヤガヤやってた。舞台ではいかにもじぶんを見せたくてたまらない連中がいる。大袈裟に他人ごとを語る。大西麻里奈という娘がとびきりのかわいかった。惜しむらしくはかの女の作文には当事者意識がなく、ひたすら他人事だった。世界の貧困も、戦争の脅威も、かの女自身との共犯関係を語ることなく、ただ叫ばれるだけだった。貧困が！——戦争が！——あらゆる対立が！——そんなことをいったってしかたがない。かの女はけっきょく野次馬だ。物見遊山をやらかしてる。自身の生から産まれないものに価値はない。つぎは演劇部の女が小芝居とじぶん語りをやらかした。途中でなんども科白がつまってしまった。おれはじぶんの出番が来ると、さっさと読んで舞台を去った。自作の短歌を作文から削除した。大学にいくといった。受賞したのはみな女の子たちだった。とんだ茶番だ。女ったらしのロリコンやろうどもが審査を呑みこんでるらしい。おれは怒って作文をやぶり棄てた。友人の自裁を核に語った青年がいた。かれだけだ、自身を素直に書いたのは。ロビーにでると、かつての書道教師が寄ってきた。おれの作文を褒めちぎり、燕の巣を奢るような口ぶりで罐コーヒーをくれた。

いい作文だった、大学絶対いけよ。

おれはそとへでた。そして帰り際、中華料理屋でビールと餃子を頼んだ。ビールは来なかった。おれは自販機でビールを買い、できるだけ遅く教室に帰った。担任の榎原は怪しんだが、どうにかごまかした。おれは敗北感でいっぱいだった。もはやどうすることもできなかった。詩ではだれにも勝てない。おれは絵を描くべきなのか。それとも音楽か。ジャズバーでの朗読はなくなり、詩の活動はなくなった。いちど『誌のボクシング』にもいつてみた。姫路くんだりまでだ。『好きなもの』というビート詩をカンペなしで読んだ。主催人は「どうして定時制についての詩を書かないのか」と壇上から訊いた。おれにとつてそれは特別でもなんでもない、日常でしかないから書かない。けれども「書いたことはある」とだけ答えた。主催人は「まずそれを書くべきだ」と宣った。おれは撰考から落ちた。あんなものは詩と無関係な、朗読芸しかない。うちに帰ると父が「受かったなら、ちよつとは支援しようとおもったのにな」といった。ふざけやがって。そんなはずはない。やがて高校生フォーラムの冊子が届いた。大西さんの写真も載ってる。父は勝手に読んで勝手に怒った。

ここには書いてないことがある。

うそを書いてるのとおなじだ！

つまるところ、働きがわるいことや、成績のわるいことも書かなきゃならないらしかった。でもそんなことだれが聴きたがるのか？——おれにはわからない。おれはニーチェを読み、冬の夜を過ごした。はやくこの家からでなければならぬ。——くさっちまうまえに、くさっちまうまえに、くさっちまうまえに！——小学校じゃあ、タイムカプセルをあける年だった。おれはなんにも入れてない。それでも友衣子やみんなに会いたいと期待した。1年待った。郵便や報せがないか、探しまくった。けつきよくなくなにもなかった。おれはクラスの勘定にさえ洩れてる。でもそれを直視するのは怖い。成人式にもいかなかった。神戸のにいくか、西宮のにいくか、三田のにいくか、わからなかった。それに貸衣装を着る気分ですらなれなかった。くわえて毎年テレビでやってる、「新成人の暴走」にも飽き飽きだった。

その日は、けっきょく朝6時から手斧を持って薪を割った。靄のなかで父とともに。なにもかも終わってから衛星放送の日活アクション映画をたったひとりで観る。アクションスターのなかで、だれよりも穴戸錠が好きだった。いまごろ、かつての同級生たちは笑いあい、それぞれのつがいを見つけてるところだろう。おれにはなにもなかった。なにもできなかった。おれにはほんとうの友だちがいない。だれもおれに声をかけてはくれない。だれもおれのことをおもってはいない。その淋しさに眼をそむけ、テレビ画面にむかう。赤木圭一郎と穴戸錠の映画『拳銃無頼帖 明日なき男』がやってる。男たちのガン・ファイトを眺めながら、頭のなかじゃあ、ずっとかの女のことを考えてる。

\*

20歳になった。おれは禱った。7月3日。おれが、おれのままで幸せになれることを。友衣子がおれのアパートへ訪ねてくれるのを想像した。朝が来た。甚平姿でカブに跨がり、名塩桜台まで降りた。いちばんちかいコンビニエンスで、フィリピン産のウォトカを買った。やつと齢を気にせずに酒が買えた。帰ってそいつを牛乳で割り、ネットでピンサロを探した。三ノ宮に手頃なやつがあった。“Red Room”——まさかストリンドベルリから採ったのか。ルイという嬢に眼をつけた。昂ぶったまま予約を入れた。夜、おれはサンキタ通りから路次をあがった。店のまえ、男が嬉々しく出迎え、招き入れる。ルイ嬢はまだ来てなかった。おれは待った。店員がべつの女を宛がうと申しでた。断った。どうしてもかの女がよかった。みじかい髪は友衣子や由子をおもわせたし、太めだがひとの良い顔立ちにそするものもある。やつと嬢が来たとき、おれはかの女的笑顔に救われるみたいな気分だった。一緒に裸になってシャワーを浴びた。つよく勃起した。

わざわざ、わたしを待っててくれてありがとう。

おれは氣後れしながら横になり、口づけをし、ちからなく抱き合った。

おれ、きょう誕生日なんです、20歳の。

おめでとう。

たったひとり、かの女だけが祝ってくれた。そして飴を渡してくれた。でも、けっきょく発射できなかった。帰りの電車のなか、少し勇気がでたような、未知のなにかに飛び込んでいけるような気分になった。飴を甜め、神戸から尼崎、そこから西宮名塩までやり過ごした。ルイさんの顔をおもい浮かべながら。それでもけっきょく芽生え始めた勇気は、そのまま失せてなくなり、またしても退屈と怯えが溢れだした。もはやおもいを寄せる対象はいなくなった。どうでもいい連中があちらこちらで勝手に交尾してる。おれは由子をおもった。友衣子をおもった。どうやっても会えない存在についておもいをめぐらした。いったいどうすれば、かの女たちに近づけるのか。考えるだけ無駄だとはわかってはいても、それをおもわずにはいられない。このままどう生きてもおれの人生は碌なものにはならないと、詩や音楽がほんとうに救ってくれることなんかないということにも気づいてた。どれもがつかのまのやすらぎだ。できることはなにもなかった。ただ時間が過ぎる。可能性が目減りしていくままだ。狂おしいくらい、大人になったかの女にどうしても会いたかった。1年待った。けれどもどこからも誘いはなかった。おれはなまえをかき消され、だれもないところへ追い放たれた。怒りと淋しさのなかで、ただ立ってるしかなかった。おれにはやっぱり友だちがいない。近所の連中だって報せてはくれなかった。おれはずっと待ち焦がれてた。友衣子に会えることを。でもどうしようもなかった。あいつらは人非人だ。おれのことを生きたまま焼き滅ぼしてしまうんだ。ちくしょう、おれには敗北しか待ってやしない。おもてへでて、夜の道をただ歩いた。どこにもおれを求めてくれるものはない。ただ寂寞が広がって、なにも聞えない。明日はまた父の仕事だ。隣の庭に貯水槽をつくらなきゃならない。さっさと眠って図書館へいくだけだ。翌朝、おれは逃げそびれてしまった。父に捕まって穴掘りだ。ひとの自由を奪うほどのことにはおもえなかった。土、

また土。おれは昼餉の途中で逃げた。故物屋や、図書館をまわってただただ時間を潰した。帰って父の怒りに曝されようとも、もはや気にすることはない。どうせやつはおれよりさきにくたばるんだ、おれは愉しむだけだ。

\*



だったらどうでもいいぜ、

勝手にするがいい

おまえのようなやつを淫売というんだぜ

おまえが砂の城を建てようが

銀河の果てに安全地帯をつくろうが

知ったこっちゃねえんだよ

その薄汚い粘膜をおれの車につけるんじゃない！

たしかにおれはおまえの兄を殺した

妹を売りにだした

それもこれもおまえの2点透視が崩れ、

町をめちゃくちゃにってしまったからだ

どうする？

おまえの下半身は養分を欲しがってるぜ

でもおれはガス・スタンドじゃない

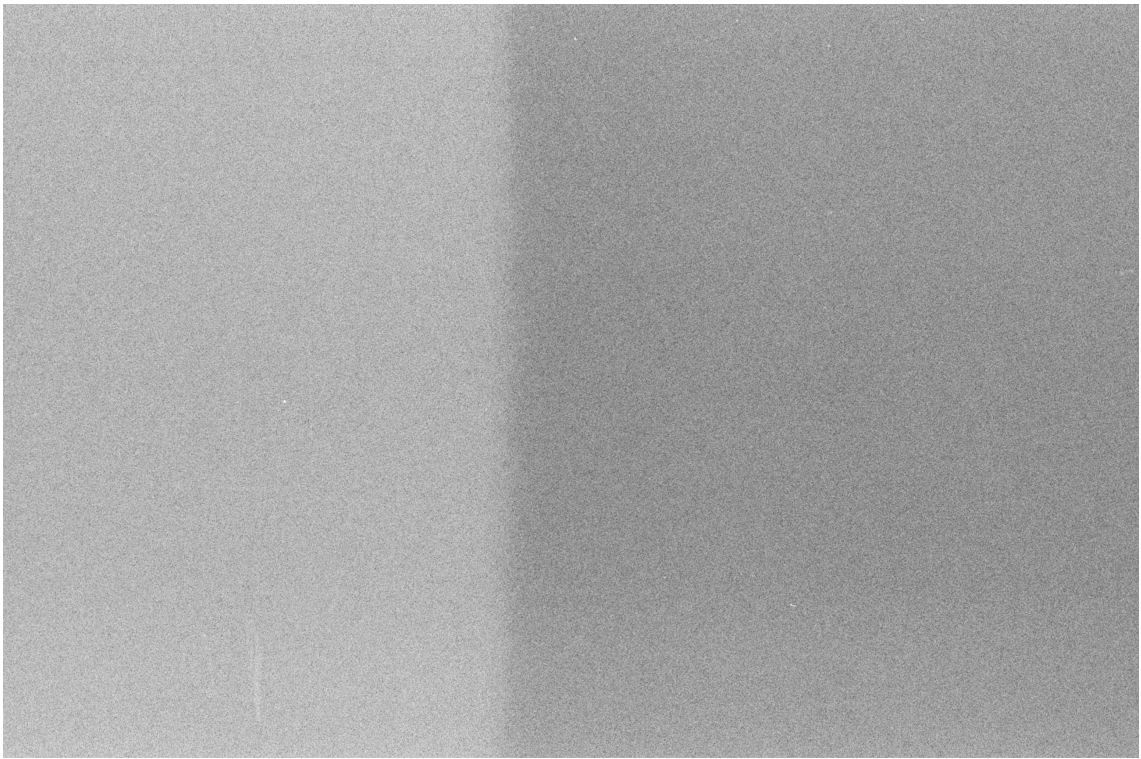
勝手に燃えあがってみんな燃やしてしまえ

おれはおまえを愛してる

たったそれだけのことでおれの消滅なんて話があるか！



孤独のわけまえ



\*

どこにもいけない。榎原は英知大学を奨め、情報処理の山田から奨められたのは京都建築大学校だった。父とふたりポンコツに乗って京都までいった。ひとのいない森のなかにそいつはあった。父は建築士をさせたがってた。けれどもおれは数字に弱い。体験授業でバリアフリーを撰んだ。インテリア・デザイナーのほうがよかったかも知れない。3年すれば、だれにでも製図ができると教員はいった。おれにはできそうになかった。むしろ隣にある伝統工芸の学校で壺でもつくっていたかった。教室をまわり、しまいに寮を見学した。小奇麗な室だった。ここなら安心して創作ができそうだった。父の監視もない。ここにいこう。おれはまたポンコツに乗って帰路についた。

この距離なら原付きで通えるな。

やっとこの男から離れられるはずなのに。けっきょく、なにもいえなかった。ろくでもない筋書き。灰色のなにか。大学受験はいまさらなにもできない。おれは酒場にいつて荒木田さんに話しをした。

サンダヴィンチって知ってる？

いいえ、知りません。

三田でやってる美術学校やねんけど、そことか、ミツホに合いそうやとおもうで。

いっぺん資料請求してみいな。

やっぱりおれは美術をやるべきだ。ズブロッカを呑み、ゴロワーズを喫んだ。なんとしてでもあの家からぬけだしてやる、そうおもって家路に就く。eastern youthを聴きながら、カブに跨った。その夜、資料を取り寄せた。サンダヴィンチも含め

て美術やデザイン、音楽もだ。まともな世界がだめだということをわかってた。だれにも受け入れてくれないのも。けれども父がいった。「金のむだだ、ものになるかわからない」って。

たったそれだけで終わった。吝嗇家の父は冒険はしない。しかたなく英知大学を受けた。落ちた。3万かかった。なにひとつ勉強はしなかった。仕事を探さねばなるまい。そういったことはやりたくなかった。やればやればじぶんの底が見えるだけで、ちっとも幸せになんかならないことは想像できた。春だ。卒業だ。おれはまともな服もなく、薄汚れたシャツで迎えた。帰ってきて父が来ていたのを知った。

どうしてもつとまともな格好をしないんだ！

服を買う金がないからだ。おれには仕事を探すつもりも、自身がまっとうであるとうそをつく気もない。それでも父はしつこく仕事を探せといった。とりあえず、おれは三田で職を探した。永易が働いてたクリスタルの面接が募集してた。齒並びのひどい小男とコーヒーを呑んだ。落ちた。あたりまえだった。失業者は溢れて世界の縁から零れそうだった。ややあって工員の職をみつけた。面接は職安でやった。まさかそんなところに人足寄せがいるとはおもわなかった。アクティスの津地というでぶが担当者だ。作業服から腹が迫りだしてた。仕事は朝から、自動車部品のシリコンを、その飛沫を拭き取るだけ。残業は3時間もあった。上役はちびで、金髪のでぶ眼鏡、顎髭つき。なにもかもに憤然として、おまえの態度が気に入らねえといった。おれはあたまをさげ、それらしい態度を演じた。やつは満足して破顔した。豚野郎、くたばれ——とおもった。

工場で人間のままでいるにはどうしたらいいものか、おれにはわからなかった。だれが教えてくれるのかもわからなかった。翌日の昼休み、上履きのまんまおれは脱走した。カブに跨って永遠におさらばしたということだ。立ったままの仕事は合わなかった。おれは給与を取りに津地に会いにいった。タイヤがバーストしたために約束の時間は過ぎてた。

おれをなめるんじゃねえと津地は仰った。

おれは中卒でいちからやってきたんや、いまは家族もいる！

だからどうしたんだでぶ公さま。あんな仕事をやらせやがって。

すみません。

どうしてもできなかったんです。

きみはほんとうにやりたい仕事はないんか？

なにも浮かばなかったから、短歌をやりたいと答えておいた。

それは師匠とかについて、景色とかを眺めながらするんやろう？——仕事といえるのか？

いまのぼくにはそれぐらいしかおもしろい浮かびません。すみません。

まあ、ええやろう。また仕事を紹介するから、そんなときは電話をくれ。

電話なぞするものか。おれは酒を買った。6千と半分があった。あれだけの立ち仕事をしたのにこれっぽっちしか入らない。世界は儂い。貧しいひとびとにおれが加わるときが来た。愛しいものはどこにもいない。村上も北甫も幸せにやってるだろう。どっかのやろうどもと。今宿まことでマスを搔いてるときだ。電話が鳴った。クリスタルからだった。もういちど面接したいという。三ノ宮でだ。補欠要員になれたんだ。ペーパーテストを経て合格が決まった。でも気分はちつともよくなかった。溶接、測量、塗装、どれもみんな親父がおれにやらせたいものでしかない。いつになったらおれは絵を学べるのか、バンドを組めるのか、文学をやるのか、女の子とつきあえるのか。なにも見えない。持ち時間はもうない。工場のなかで老いていくしかない。合格を母に伝えた。じぶんを苛んできたあらゆるものを呪った。父、母、姉、妹、たちのわるい同級生、たちのわるい女ども、くそでばかな教師ども、ひとの機微を知ろうとしない、すべての世界のひとびとを。おれはその研修所で1週間ちかくいた。毎晩呑み歩いた。どの店も人間味があつた。新入社員はみな年下だった。女の子も数人いて、山本という娘が気

になった。ロッカー室の狭い廊下で、おれは今東光の『悪太郎』を読んだ。

ぶ厚い本！

そういつてかの女は笑った。かわいい。見習いはアーク溶接、電気溶接、グラインダー、それから測量になった。数字を扱うようになって、おれはまちがいばかりしでかすようになった。じぶんにはできない。日報にうしろむきなことばかり書きつづった。じぶんは不要な人間だとか、消えるべきだとか。いつも座学で机を蹴っ飛ばす教官もそれには堪えたらしい。朝鮮人の講師とともにおれを懐柔にかかった。かれらの声にうんざりだ。もうやめよう、そうおもうと早かった。おれは家に帰り、そして会社に電話した。

東京にいつて作家の弟子になります！

やめたほうがいい、いまの会社がどれだけいいか、きみはわかってないんだよ。

いいえ、ぼくは詩人になります！

きびしいぞ。

それでもかまいません！

泣きながらいった。母が聞いてた。朝になっておれは父から7万を借りた。やつは喜んだ。これから会社の寮に入るといい、荷物をまとめた。そして駅へいき、梅田で降りた。夜行バスなんてはじめてだった。

\*

新宿の朝。大きな鴉たちが地上に降り立つ。おれは小壠のウィスキーを買ってやりながら西武あたりを歩いた。やがて地下



へ。山手線のホームに立ってド・ルーベの音楽を聴いた。ベルモンドの映画『オー!』が入ってる。ひとびとがひっきりなしに来る。列車もまたそうだ。場が静かになるまで待てなかった。おれは神田を目差して乗った。

あたりまえながら、どの古本屋も閉まってる。喫茶店で売却するつमりの本を読んだ。『ドキュメンタリー家出』、『地平線のパロール』、『暴力としての言語——詩論まで時速100キロ』、『さあさあお立ち会い——天井棧敷紙上演』、芳賀書店版『書を捨てよ町へ出よう』やなんか。旅草の足しにするつもりだった。おれは詩人になるんだ。おれは森忠明に会いに行く。本を売ってから立川を目指した。夜。森氏の家を見つけた。呼び鈴がない。しかたなく大声で呼んだ。返事はない。ちかくの居酒屋『たつの』で休んだ。冷酒を頼む。女将がとてもやさしかった。おれが神戸から来たのを知ると勘定はいいといった。おれは立川ホテルに室をとった。7階の室。森家のポストに「立川ホテルにいます」とだけ書いて託を入れた。やがてフロントから電話が来た。

友達というひとが来ています。

階下へいくと、とても大きなからだの男がいた。かれが詩人・森忠明だった。180以上はゆうにあった。ふたりで「たつの」に挨拶にいった。女将と旦那が畏まってあたまを下げた。そしてかれの家にあがった。日本酒を呑みながら話す。

つまりこれから弟子としてやっていくことだね。

おれにもやつと居場所ができた。生きるよすがが見つかったとおもった。翌日からいろんなところをまわった。高島屋の寿司屋や、谷川俊太郎の自宅、寺山修司が10代のころ入院してた川野病院やなんか。その裏手には墓場があった。《秋風や人さし指はたれの墓》——詩人のことばはちからに溢れてた。でもおれは棲むところを探せなかった。都下の物件をひとつ見ただけだ。風呂なしので月3万の物件に20万の入居費用がかかる。話にならなかった。金もなくなっていくなか、焦りだけが大きくなってる。そんなとき、渋谷の園田英樹を紹介された。かれは演出家で、アニメの脚本も書いてた。桜でいっぱい公園で

対面した。

神戸から来たって聞いたから、きみが少年Aかとおもったよ。——森忠明は関東医療少年院でかれと対面してた。まさかそんな。

おれの戸惑いを隠せず、桜の咲き誇ったあたりいちめんへとかれは導いた。

よく見てごらん、ここにはきみを知ってるひとなんかないだろう。

かれのアパートメントに泊めてもらい、芝居の稽古を見学した。オリンピック記念青少年育成センター。踊りやら即興芝居やらをやった。お寒い代物だ。学生の馴れ合いと見分けがつかない。そいつが終わればバーミヤンで若い女の子たちを侍らかし、いい気分で飯を喰う。羨ましくもおもったが、こんなものはおれの目指すところじゃなかった。かの女たちはいった、森先生に似て面長だと。都心で室を探すべきだと。金丸さんというきれいな女のひとが、おれを舞台に参加させようとしてくれた。詩の朗読でだ。かたちだけのオーディションの日、おれは偶然見つけた林檎ビールを呑んだ。食堂へ入ってきた園田はいった。「酒呑んでやるつもりか？」——うっかりしてた。こんなときに酒を呑んでしまう。けっきょくオーディションには落とされた。環状線に乗って立川を目指した。かれから電話があった。おれはでなかった。森先生に起ったことをいった。

園田のわるいところはさ、——森先生が語った。

馴れ合いばかりでわるいところをいわないことさ。

もうずいぶんまえになるけど、芝居が終わってやつは懇親会なんかやるわけ。

駄目だししねえんだよ。

おれはすぐに懇親会やめさせてさ、ひとりひとりだめだししたよ。

あいつ、泣きそうになっててさあ。

おれは実家へ電話を入れた。父はかんかんだった。おれは東京に棲むんだ！——なにをいってもだめだった。母はいった。せつかく就職で喜ばしたのになんということをしたんだと。ふたたび立川ホテルに泊まった。急な高熱と腹痛でたまらなかった。朝、医者に行った。急性胃腸炎だった。おれは金を使い果たした。

それでも『たつの』にいくとただで酒が呑めた。女将さんは店屋物まで注文してくれた。カツ丼を持って来た老父は森先生の姉君を憶えてた。かの女について語った。すぐく礼儀正しい子だったらしい。旦那さんはおれを「このひとは文学ばかなんだ。投資するよ」といって2万くれた。でもおれはむだづかいをした。支那人のマッサージで、足の長い美人と過ごした。森先生の秘書、高橋恵子に荷物を預かってもらう手はずだったけど、いけなかった。かの女や、園田氏はおれを破門すべきだとつよく主張したらしい。当然。

けつきよく残った本も売ることにした。旅行鞆をロッカーにおき、リュックサックを担いで、新宿から神保町まで歩く。陽が落ちたころ、法政大学のまえを通った。学生たちが愉しそうだった。なのにおれは21歳で、どこにも居所がない。頼るものも、守ってくれるものもない。なんていうざまだ。歩けるまで歩き、公園で寝た。そして信濃町を通り、カソリック教会で水をもらった。着いたときには夜だった。そして翌日は土曜日。どこの本屋も軒を閉めてた。なんとか売れるところを探し、それでも、たった2千円にしかならなかった。負け戦をずっとやってるみたいなんだ。暑くなった街区をいきつもとどりつして、おれは母に電話した。金を無心した。1万円をせしめ、バーでビールを呑み、ゴロワーズを喫んだ。大阪行きのバスを待つてゐるあいだに金はなくなった。旅行鞆も盗まれてしまった。また無心した。おれはゴールデン街をぶらついた。スメナ・エイトを抱えながら行きつ戻りつしてたら、女のひとが声をかけてきた。

あなた、なにしてるの？

写真を撮ってるんです。

どっから来たの？

神戸です、家出したんですよ。

まあ、そうなの？

一杯吞ませてあげるわ。

街の案内板によればそこは新宿初のゲイ・ボーイの店らしい。でもかの女はとても男には見えない。ふたりで静かに話す。

あなたはなにになりたいの？

詩人です。

あら、わたしの知り合いにも詩集をだしたひとがいるのよ。

かの女はウイスキーのハーフロックをだし、閉店後にもういちど来るようにいった。おれはそのあと、ブラックみたいなスナックで女将と話した。かの女は帰って地元で働くべきだといった。でもウーロンハイ1杯で5千円もぼられてしまった。帰りの金がない。おれはふたたびゴールデン街のあの店へいった。ふたたびハーフロック。あたらしいことはなにもない。

唇の厚いひとつて、情にも篤いのよ。

かの女はいう。おれはまたしても1万円、母からせびった。夜は路上で本を読む。そのとき、地面の新聞に眼がいった。「高田渡死去」。生きてるうちに見たかった。どうすることもできない。高架下で眠る。朝、激しい怒鳴り声があった。老人がおれに蹴りを入れる。——おらあ！——ここから失せろ、このやろう！——おれは起きあがってやつを蹴り返した。

おれはバスを待つただけなんだよ、なんで蹴るんだ！

おい、おれはヤクザだぞ、おまえなんか殺せるんだ！——おれは頭に来て警察を呼んだ。しばらくすると老人は拾いものらしい雑誌を二束三文で売ってる。やつ場所のためにどうしてこんな眼に遭わなくちゃならねえんだ。おれはバスに乗っ

た。どうすればひとりで生活ができるのか、わからなかった。悔しいおもいで車窓を見つめ、遠ざかる町を少し憾んだ。

\*



\*

フルーツ・フラワーパークでの話が流れたあと、神明工場が米の投入役を求めてた。脱穀機に重い米を流し込む。採用された。ミラーの『梯子の下の微笑』を持ってった。ふたりの若い男が退職をひかえて嬉しそうだった。仕事は単純だった。いややつがひとりいるらしい。そいつはリフトを運転してた。リフトが運んだ米袋を開封し、脱穀機へながした。父が勝手におれの鞆をあけた。ミラーを見て激怒した。職場に本などもっていくな！——というのが新しい訓示だった。理由を聞いても答えない。従わないことでおれは、その謎を解こうとした。しばらく経って、やつは気に入らないことに怒ってるだけなんだと合点した。福知山の脱線事故のあとだった、『たつの』の女将から電話があった。おれが巻き込まれたのか、心配してくれてた。あの事故で亡くなったひとで知ってるのは、小学生のときに通った床屋の女将だけだ。

仕事は粉塵による鼻炎がひどく、2週間でやめた。米の粉が吹きあがって来る。マスクをすればよかったんだ。でもそんなやつはいない。三田の駅前で電話をかけた。やめますといい、途中で切ってしまった。それでも金は入って来た。おれはもういちど東京へむかった。とりあえず路上に坐った。老いたルンペンがよってきた。

よお、あんた、どっから来たんだ？

神戸からです。

なにしてる？

いまはなにも。仕事を探してます。

おれはきょう金が入るんだよ。そのまえに飲みもの、奢ってくんねえか。あとで返すから。

痩せたからだに半袖を着て、金はなさそうだった。それでも、おれは老人を信じて飲みものを買った。見返りのためじゃない。かれは亢奮ぎみに「おまえに11万やるよ!」といった。11万は来なかったが、かれがよくしてくれた。もとはやくぎで、移民2世、妻が死んでから路上に入ったといった。菓子パンやスピリタスをわけてくれた。2日たっておれはいった。

なにか仕事はありませんか？

ホストなんてどうだ？

あんた、いい顔してるしなあ。

あるいはシンナーでも売るかだな。

しかし最近じゃあ警察がうるせえからなあ。

飯場とかないですか？

倉庫とか？

そういうのならいっぱいあるよ。

翌朝、地下道でかれは手配師にひきあわせた。話はすぐ決まった。小さな路線をひきつぎして飯場、加藤組へ来た。そこは八王子の住宅地のなかにあってトタンで覆われてた。まずは食堂に招かれ、ひさしぶりに飯を喰う。つぎに湯に浴みだ。『東京流れ者』を口にしてしていると、湯加減はどうかと声がする。

問題なしです。

室は大部屋で数十人との共同だった。莚に黄ばんだ壁をながめると、男らが帰ってきた。かるく挨拶をします。あとはなんにもできることがない。10時の消灯までうごけずにいた。ノートを広げて発想を待つ。観察されてるようなさわりがあった。たしかにだ。このまえにも所沢の中村組という飯場にいた。室が決まるまでコンテナハウスのなかに入れた。室は、3



人組の相部屋で、室の入り口にはアニメキャラクタの等身大パネルがあった。初日、中目黒のアパートメントにいかされた。基礎工事の手元作業。コンクリートの打設のため、鉄骨をブラシで洗った。地上へは仮設階段がある。昇り降りするたびに揺れ、怖かった。昼食、おれは弁当を忘れてしまった。それを察したのか、老人が菓子パンをくれた。夜、仕事から帰って来ると、室の長らしいのが凄んだ。——おまえ、挨拶もできねえのかよ！——ぶっ飛ばされたいのか！——こんなところにはいられない。あたまのいかれたおたくやろうなんざごめんだった。おれはさっさとでた。

やつに出会ったのは、翌々日だった。やつはワゴンの窓際でけだるそうにしてた。現場は大日本印刷・事務所ビル。黒い鉄骨をむきだしにした陰茎のようにみえる。からだがまるでうごかなかった。足場を組むのを手伝ったり、ガラだしをやっているあいま、倒れそうになる。不安定な仮設階段はめもくらむ揺れをくれた。

そこのおまえ、足場を組め！——おまえ、おれより喰ってるんだろが！——もっと動け！

ひよろ長の男が罵声を浴みせるのを黙って聴いてた。こいつを叩きのめして、スコップの味見をさせてやりたい。休憩のとき、おれは氷をタオルに包み、頭にあててた。雨季をまえにして夏は来てる。地下の詰め所に降り、じぶんの飯場の卓を探す。そこにはあのちびっこがいた。

「大丈夫か、あんた？」——じぶんでもわかるほど顔が青くなっていた。坐って相手をみた。160センチ、あるかないかのちびだった。でもこいつだって要領よくやってるんだろう。涼しい顔をしてる。どんなことでも抜かりなしといった様子だった。おれは自身を憐れみ、ただ腰を降ろした。

歳は？

今年で21だよ。

おれとおなじじゃないか！

やつは笑って莚をさしだした。いっぽんとして喫む。つまらねえ代物だ。酒を吞みたかった。やつは村下渉と名乗った。

「おれはじつはやくざなんだよ」とやつはいった。14歳からかかずの非行を重ねて来たとか、もとは金髪だったとか、年上の女と実家で暮らしてるとか、医者にハルシオンを要求して拒否されたとか、そんな与太を喋った。じぶんには別に仕事があつて、そこは高給で楽ちんだ、おまえも来ないかといった。声。

なんでこんなところにいるんだ？

しくじりをやらかしてよ、組長の命令で来たんだ。どうだい、こつちをでたらいい仕事がある。——のらないか？——おれは警戒して遮った。いや、おれもでたら用事があるんだ。わるかったな。——こんなやろうとは離れるべきだとおもった。それでもだんだん。ふたりで話すようになった。晩酌のビールをやつとわけあい、やつが仕事についておれをフォローしてくれることもあった。しかし飯場にも労働にもあきあきしてた。とてもおれのからだに合わない。詰め所ではやいた。

もうやめるよ。

やめてどうする？

地元に戻って工場にでももどるよ。

もどれないだろ。

さあな。

おれの仕事についてこいよ。来週の金曜日に満期なんだ。

どんな仕事だ？

それはいいない。でもあんたのことが心配なんだよ。

ある晩、どぎつい仕事を終え、公園にいった。やつがおれを待ってた。——とりあえず、組長に話しをつけてきた。月20万

はかたいぜといった。——それでどうすればいい？——まずは組長のまえで手品をしてもらう。——仕事の内容は？

電話をかけるだけでいい。多重債務者にだ。

それでおれたちが肩代わりして利子を儲ける。

あんたなら、ひと月はなにもしなくてもいい。

いい出会いに恵まれてる。うれしくおもった。やつの満期で飯場からずらかることにして室へもどった。盆休みになった。

8月12日、金曜日。やつは満期。おれは酒壇を鞆にしまいこみ、やつのあとを追った。やつは遅いといった。手元には盆休みの5千円あった。まずはバスに乗って駅をめざした。やつがさえずる。聴くに耐えなかった。

おれはまえにいちどバスの運転手をしめてやったよ。

おれが1万しかもってねえっていったらよ、

そいつ、そんなじゃ支払いにならねえと抜かしやがった。

おれはバスからやろうをひっぱりだして、

停留所の看板でぼこってやったよ！——あれは傑作だったなあ。

土下座もおまけだ。

そんなことがやつにできようとはおもえなかった。おれはやつから見えないように酒を口にした。——おれたちは環状線に乗りこんだ。雨脚はつよくなり、やつは落ちつかず、いらだちをもろだしにしていた。そして目的とはちがう飯田橋駅で降りてしまった。おれたちはパチンコ屋に行くことになった。雨が降りだした。帰ろうかとおもった。どこへ？ やつがいうに金を作るという。おれが店内をうろちよろしっているとやつがおれの肩を小突いた。——おい、来る気ないだろ！——いや、あるよ。

——手品の道具がいる。ビニール紐とばかちよんカメラを買って来い！——やつが千円札を1枚きり渡した。追い立てられる

ようにおもてへでた。商店街をみつけ、紐とカメラを用意した。やつが喰わせものとはわかってた。それでも20万のきらめきは、なかなか消えてくれなかった。パチンコ屋のまえで2時間待ていたらやつがあらわれた。黙ったままだ。換金の列にはくわわり、なにがしかを受けとった。いずれおれはこのことを書くんだ。やつをしつかり見る必要がある。でも、おれのほうも焦ってた。ようやくにしてやつの地元にきた。上野だった。

ここじゃあ、おれもそれなりの顔だ。

敬語で話せよな。

ああ。

ああ、じゃねえよ。

わかりましただ。

わかりましたよ。

観月荘の4階に室をとった。古い宿だ。寝台がふたつ、姿鏡が1枚、冷房、テレビ、便所、廊下にはビールの自販機。室に入ろうとしたとき、やつは「バイバイ」と手をふった。

どうすんの？

やるよ。

なんでおまえのホテル代まで払わなきゃならねえんだよ！——どうすんだよ。——やり場を喪って、シャワーを浴びた。

——その態度じゃ、うちの組長も切れんべ。金が欲しいだけなんだろう？——うちの会社、入ったからには、それなりの働きをしてもらわねえといけねえんだよ。おまえから金貰いたいぐれえなんだよ。おまえ、甜めてるだろう、こっちはやくざなんだよ。おまえなんてすぐに殺せるんだからな。すぐ、ふてくされるしよ。——耐えかねて、やめるとおれはいった。

それじゃあ、おれの面子はどうなの？——ホテル代は払います。——兄貴や彫り師は呼んであんの。払わなかったらどうすんだよ。怒られるのはおれなんだぜ。室の頭金も払ってんの。払えよ。身分証なんかなくなつて探せるんだぜ、てめえの家族に取り立てるぞ！——やつは激昂して捲し立てた。うんざりだ、おれはおまえを信じてたんだ。しばらくしてやつも大人しくなった。たがいにビールを流し込む。やつが話した。組長が今夜これないという。かわりにここで手品をやつて写真にとるといった。

おまえまず、裸になるんだ。

裸で手品をやるんだよ。

戸惑つておれが脱ぐ。やつがおれをビニール紐でしばりつける。しかしそれだけだった。あとは要領を得ず、紐はけつきよく切られてしまった。おれの全裸をやつが写真に収める。いったい、こいつはなんなんだ？ 問いかけのしようもない。おまえ、そこでせんずりしろ！——おい、手品はどうしたんだ？——裏切らせないためだ。

テレビが光りを放つ。ポルノだ。いつまでも勃たなかった。いやものを浮かべて勃たないようにした。父の顔や、クラスでいちばんの醜女をおもひ浮かべた。やつは痺れを切らし、おれのうしろに立った。やつはズボンを降ろして態勢をつくった。

おれが入れてやる。

痛くはない。

それだけはやめてくれ！——あわやぶちこまれそうになった。やつはしぶしぶ、じぶんの寝台へもどった。おれを睨む。坊主頭で、やせぎすで、しかし態度と声だけはでかい。いっぱしのちんぴらやくざにふさわしい声色じゃないか。おれは怒声を浴びてゐるしかなかった。けつを奪われかけて寝台のうえで正座した。

まぢめにやれよ！

すみません。

まぢめに働く気もないんだろう！——（その通り！）

楽して金が欲しいっておもってるだろ？——（その通り！）

もう仕事の話しはなしだ！

聞きながらおれはじぶんがなぜこんなことになったのかをおもいめぐらした。たしかにおれは楽がしたかった。大金を得たかった。まぢめでもない。でも、おれはじぶんの居場所が欲しかった。

だからっておまえ、逃げるんじゃないぞ、おれには調べがつく！

逃げればおまえの家族だってただじゃおかねえからな。

おれが紹介するから、おまえそこで働け。

それとも金持ちババアのヒモにしてやろうか？——（喜んで！）

金はいいです。とにかく帰してください。

このホテル代だっておれが払ってるんだぜ、そうはいくかよ。

やつはおれの鞆からノートを引き抜き、なにやら店やひとのなまえを書きだした。ひどい悪筆かとおもえば、きちがいみたいにきれいな楷書だ。地階の電話で、飲食店だかの番号を調べた。104に何度もダイヤルし、そいつを書きとめた。見つからない店のほうが多かった。わずかな答えをたずさえて戻った。——おれの先輩がやってる店がある。おまえ、そこいけよ。ボーイの仕事だ。一生懸命働いて母親に仕送りでもしてやれ。そうしたら前に仲が悪いっていった親父ともよくなるだろうしな。休むときはちゃんと連絡してこういうんだ、明日はがんばりますのでお願いしますってな。そうすりゃ認めてくれる。——さつきまでけつの穴にぶちこもうとした相手にいう科白か？——おまえには夢とかないのかよ？——詩人だ。——なんだそれ、

小説とどちらがうんだ？——なんにも思いつかなかった。——まあ、おれも駅前で酔って買ったことがあるけどな。いいちやいいし、よくわからん。——ただただ時間が過ぎるのを待つ。——明日は早いんだ、もう寝ろ。

やつは灯りを消した。肛門が痛みだした。やつは眠ってる。おれはまたしても急性胃腸炎にやられた。便所で嘔吐し、いきんでもいきんでも腹はおさまらず、夜通し便所にいた。肛門がただれるように温く、それはきつと紫をしていたにちがいない。逃げだすこともならず、紫色、それだけがあった。朝、ホテルをでる。具合はまだわるい。やつもまだ不機嫌そうだ。——これ、おまえが処分しろ。おれの裸を撮ったカメラだった。やつはやくぎでもちんぴらでもなく、ただのおかまやろうかも知れない。——その鞆、ロッカーに入れろよ。

まるで家出してきましたっていつてるようにみえる。

でも。——おれはためらった。

でもじゃねえよ。

ロッカーの金あるか？

金はない。くそ。やつは朝餉を喰いに蕎麦屋に入った。おれは自由になったというわけだ。でもやつの裏切りは淋しかった。とりあえず駅の商店や古本屋を見てまわった。飯島耕一の『アメリカ』という救いようもなく、つまらない詩集があった。そのあと、もしものときをおもって交番へいった。とんでもないでぶの警官がいた。不機嫌な顔して立ってた。女房や子供に豚呼ばわりされたせいかも知れない。おれは話した。けつの穴と手淫のほかを。——それであな、裸の写真を撮られたんだね？——なんの抵抗もしなかったのか？——仕事の手に入るならと。——カメラは？——返してもらいました。——ちょっと署のほうで、もういちど話してくれるかな？

ふたりしてちかくの警察署へいった。若い刑事は軽装で、半袖のボタンシャツにジーパンだった。おれは取り調べのせまい

室に入れられた。かれは20代らしかった。おれはもういちど説明した。飯場でのこと、やつの素性、仕事のことやなんか。犯された女のような気分だった。恥ずかしく、そしてけつの穴がむずむずする。警官は諭すようにいった。田舎に帰って仕事を探せ。でぶと一緒におもてへでた。

高校はどこ？

有馬高校です。

名門じゃないか。——定時制であることはいわなかった。おれは高架下のルンペンたちに会いにいった。かれらは眠ってた。おれに気づかないふりをしてた。立川で森先生と会い、3千円を借りた。立川基地跡を歩き、かれはおれの俳句についていった。——《帰らぬといえぬわが身の母捨記》、これ季語ないけど秋だよな。——おれは終夜営業のレストランで夜を明かした。金なんかすぐになくなった。母から金を無心しながら2日、3日を路上で過ごしたあと、夜行バスに乗った。窓をながめ、去っていく町をみる。そのまま夏は終わりにかけてた。おれは、またしても失敗した。どうにもできなかった。夢、そして救い。なにかもかもが安普請の書割みたいにくずれていった。舞台くずし。陽炎座、あるいは。これからまた家での生活が待ってる。そして父も。光り。昏がり。《栄光への欲望はきみを捨て去るだろうか。それがきみを捨て去れば、それとともに、かつてきみを駆り立て、きみをして製作するように、自己実現するように、自分自身の外にでるように強いていたあのものもろの責苦も姿を消し去るだろう。それらが消え失せれば、きみはじぶんの存在に満足し》——満足するわけがない。シオランはつづける。《自分の限界のなかに戻り、そして覇権と法外なものへの意志は克服され》ない。《廃絶されてしまうだろう。蛇の支配から逃れたきみは、もはや昔の誘惑のいかなる痕跡も、きみをほかの被造物から分かつていた烙印の痕跡もとどめはしまい》、いいや痕跡は残りつづけるだろう。それほど栄光の引力は強く、おれを呼ぶ。くそ。《それでもきみが人間であることは確かなのか。せいぜい意識を持った植物なのだ》——おれが植物なら、あんたはなんなんだ？——おれは蕪か、それとも馬



鈴薯か、それとも豚草なのか。バスはやがて西日本に入った。滋賀のサービスエリアで尿いばりしながら、古い書についておもいめぐらす。夜、光り、そしてやはり夜。

\*

## 緑色の王国

きみとファックしたいがためにぼくの死が準備される  
だっときみはこの世にはいないんだもの

最後のインターチェンジ

サービスエリアで使いを待ってるあいだ、  
ずっときみのことを考えてる

使者は緑色のマントを来て

はるばるテキサスから生田川まで

ほら、高速の出口でさ迷ってる

あの亡霊がそうだ

ぼくがきっときみをファックするころ、

あたらしい王国がダック・アウトにされちまう

じゃあ、みんなレインコートを着な

そいつでパーティーにでかけようぜ

\*

帰ってからというものの、おれは小説を書こうとしてた。じぶんの体験したすべてを書こうと藻掻いた。父はそいつをやめさせようと、おれのノートを検閲した。なにが書いてあるか。じぶんが侮辱されてないかと探った。いちばんめの妹は、おれの詩をきれいごとと罵った。家族みんなが教養を持たず、他者の領域を侵すことしかできなかった。しかも質のわるいことに、それを正しいとしてる。おれはだれにも本心を見せず、抗った。夜の公園でヘッセは『荒野のおおかみ』を読み、ウィルソンの『アウト・サイダー』を読んだ。なにを書いても、ものにはならなかった。題名や着想だけが浮かんで消えた。11月の朝、おれは油罐に炭を入れ、火をつけた。そして横たわった。室に煙が充ちただけで死ねなかった。今度は殺虫剤を呑み込んだ。けつきよく何時間も嘔吐し、頭痛のなかで起き上がった。死ぬのはむりだった。1週間も頭が痛かった。

もう詩を手放したいとおもった。そしてはじめから音楽を学びたい。ことばなんていうちいさなものにはかまってられなかった。詩は不毛でありつづけた。おれをひとから遠ざけ、人生から遠ざけた。こんなことやるべきじゃなかった。ヤマト運輸の求人を見つけて面接にいった。なまえを書くだけでよかった。おれは冷蔵倉庫で働くことになった。寒いなか、カブの鍵を失くした。おれは兵庫ベースまで歩くことになった。3日歩いて、それっきりだ。こんな僻地で歩いていけるわけがなかった。おれはひきだしをひらいて原稿用紙を取りだす。村下渉のことを小説に書いた。『おかまやろう』という短いのができあがった。おれはそいつを森先生へ送った。かれはいった、

棄てろとはいわない、いまはしまっておけ。

いま書くことじゃない。

それじゃあ、いったいいまのおれになにが書けるというんだ？——まったくわからなかった。

\*

年があけ、まだ3ヶ日もあけてはなかった。いきなり父はおれの室に入って、給与明細をだせとわめいた。おれは働いてなかった。そんなものがあるはずもない。寝台や背中を蹴りあげ、暴君さながらに吠える父は醜かった。賞味期限の切れたパテみたいだ。おれはあてもなくカブに跨って倉庫街をまわった。うそでもいい、かたちだけでも明細をだしてくれるところはないか。あるはずもない。古買いや古本屋で時間をつぶし、ニッカ・ウィスキーを呑んだ。夜は早く、陸はしずかに暮れてる。ふと中学校にいったみた。夜。校門を登ってなかに侵入すると、消化器を見つけてあたりに噴射した。涙で眼のまえがいつぱいになる。

それから酒を片手に丘を登った。小学校が見えた。そこからすぐ西へ折れば友衣子の家がある。品があってきれいだった。世界でいちばんの大切な秘密、かの女を好きだということ。かの女を好きだったころの、その淋しさのすべてが溢れた。おれはなんのために生きて来たのか。どうしてこうも劣っていて、いまでも何者にもなれずにいるか。友人？——恋人？——家族？——そんなものはどこにもない。くそ。つながれた、囚われものの自由しかない。くそつたれ。みんなでおれをばかにしてなにが愉しんだ？——暗がりのなかでアクセルをかけ、一気に家まで帰った。親父なんか、殺されたって文句はいえまい。誕生は災厄でしかなかった。だから愛されない、やさしさのない世界なんかにつくらえ。道。泣きながら走り、家にもどった。なにごとかを父は叫ぶ。もはや人語ではなかった。おれはそのおもづらを右の拳で撲り飛ばした。そして転がった鉄の棒を持ち、暴君に挑んでった。——親を撲ったな、おまえ親を撲ったな！——どうなるかわかってるんやろうな！——棒を奪われ、

おれは靴のまま家のなかに入った。父のコンピュータを床に叩きつけた。そして食卓を蹴りあげる。女どもは白痴みたいに立ってるだけだ。おれはもういっぽん、『無頼』をあけて呑んだ。父がそいつを奪い取ろうとする。酒が零れてしまった。ちくしょう。このくそやろうめ。

なにをする！

酒呑んで暴れる、おれの親父にそっくりだ！

親撲ったらどうなるか、よく憶えておけ！

けっきょく父が怖かった。おれは蒲団を持ちだすと、森のなかへ入った。段ボールを極みたいにかたちづくって、なかに蒲団を敷く。しかし雨が降ってきた。慌てて自治会館で雨宿りした。明けてから家にもどった。母だけがいる、——お姉ちゃんですら出て行け！——いわれてるのに。ちゃんとしな、あかんで。そう一方的にいわれて、どうにかなるやつがあるのか、おれには疑わしい。少なくとも姉は金と機会を与えられ、神戸大学じゃないか。おれには人格否定と暴力しかない。おれがつくった室のなかで、おれのつけた暖房を浴びてる。求人をはたすら捲った。救い主を求めて毎日めくった。おれが義務を果たすまで権利はないということだ。落ちこぼれには相応の罰を味わってもらう。憲法にある《勤労の義務》を果たしてない。でも《基本的人権》や《職業選択の自由》、《最低の文化的生活》はどこにいったのか？ 《生存権》は？——2時に三田ボウルへいった。故買屋でパワアコミックス版『ルパン三世』全巻と映画『殺しの烙印』を売っ払った。

夜のスーパーで時間を潰す。まえから薄々気づいてたけれど、アルコール中毒かも知れない。なにかあるたびに呑んでしまう。いまだってウィスキーを呑んでる。金がなくなっていく。どうしたらいいんだろう。あしたには面接があった。大阪だ。蔵書の処分も兼ねてた。不安だった。どこにいつてもだめな気がした。おれは拗ねてた。物心ついたところからだ。ひとにかまってもらおうと必死だった。カブで帰り、公園に停めた。塹を求めて森を歩いた。雪が降り始めた。しかたなく自治会館の庇

の下で横たわった。浅い眠りのなか、7時まえに起きた。室に本をとりに行った。でも面接先の控えを台所へ忘れてしまった。そとへでると雪が降り積もってた。カブは坂でスリップ。足を傷めた。使いものにならない。丘のうえまで押し、林道へ隠した。歩きだすも雪で転んだ。なんども、なんどもだ。バスに乗って駅に着いたときには午前10時をまわってた。あきらめて阪急ルートに決める。女の子がふたり話してるのを盗み聞いた。知り合いの男について陰口をやってた。

原付きしか持ってない。

派遣なんかやってる。

就職をちゃんと考えてない。

耳が痛かった。畜生。11時にやっと大阪。本の売れそうな店を探す。ひとつの店に入るも、店長が5時にならないと来ないといわれた。12時、おれは歩道橋をぶらついてた。女がやって来て、アンケートだといった。ファッションについての。おれは製薬工場の社員といううそでもって答えた。でも実際に面接を受けてる。雪の日だった。眼鏡を失ってその話は抵当流れとってた。やがて日暮れ、本を売りにいった。けっきょく『映画評論シナリオ』も寺山修司も藤森安和もギンズバーグもパゾリーニもあわせて千円だった。200円でコーヒーを呑んだ。100円でチキンバーガーを喰った。面接先もわからないまま、それらしいとおもう街区を歩き、夜の列車で帰った。森の畦でじっと夜をあかした。おれはひとと話しがしたかった。少しでも語りたかった。おれに友人はない。自己を再認識し、相互理解を得ることもない。人生をちゃんとしたところへ移したい。手っ取り早く話し合い手を得るには仕事が必要だった。どうにもならなかった。わたしは作曲法を片手に曲をつくりはじめた。あるとき、祖父がおれの室に入ってきた。酒壇まみれの室を見ていった。

呑むなどはいわんが、ちいとは控え。

それに働いてから呑め。

働きもせんで呑むもんやあらへんがな。

1月19日、映画『探偵事務所23』の続編を観た。カブはおじやんだ。父に見つかって後輪に細工がされてある。エンジンをかけても走れない。――疲れた。なにもかもがどうにもなくなってきた。父のやる報復的処置は、おれからやる気を奪い取った。不毛のなかの不毛。また雨が降りだしたとき、おれは空き家へ忍びこんだ。車庫だけはあいてて、自由だった。さっそく宿が決まり、蒲団やら本を運び入れた。金は母の財布から抜いた。小銭ならなにもいわない。1週間にいちどチキンガーガーをまとめて買う。夜になってミラーを読み、蠟燭の火で、日記を書いた。ものごとはわるくなるばかりだった。当然。

朝、家にもどった。母だけがいる、――またもお姉ちゃんですら出て行けいわれてるのに、だ。どっかにおれの聖家族がいるにちがいない。おれのための暖かな家庭があるにちがいない。そうおもって押し入れのなかで待つた。もちろんそんなものはなかった。母の金を1万くすね、父が帰るまえにおれは疍へもどった。蠟燭に火をつけ、腹這いになって本を読む。「北回歸線」だ。おれは半年までそこにいた。椎名麟三を読み、主要作品を読み終えた。雪も寒さもなくなって夏になった。そんなときに家の主が家族とともに来た。シャッターがひらく。老人と娘と孫。弁解をして室のものを片づけた。

あんた、何班なんだ？

3班のナカタです。

ものはひどくたまってた。ウイスキーのポケット壘を山に棄てた。本とノート以外のものはほとんど棄てた。つぎの疍を探した。廃屋のガレージに決めた。そこなら30年放置されてるし、なかにはごみが棄てられ、寝転んでいけば表から見えない。でもすぐに父に見つかった。おれはガレージから引きずりだされた。

ここはおれの家だ！

おまえの家じゃない！

まず家の掃除をしろ、飯ぐらい喰わせてやる！

くたばりやがれとおもった。こんな美しくない世界なんかいつ滅んでもかまわない。

おまえはどうするつもりや？

まえにじいさんがいったように寺に入るよ。おれは根負けしていった。もう疲れ切ってた。だれでもいい、どこでもかまわない。おれの存在を認めてくれる、やさしさのあるところへいきたかった。祖父がさまざまな寺へおれを連れてった。信仰を学びたいとおれはいった。どっかの山奥の寺がおれを受け入れた。車の免許を取りなさいと住職がいった。おれは2ヶ月近くかけて免許をとった。ちゃらちゃらした若者でいっぱいだった。おれに勝手な渾名をつけて呼ぶものもいた。あいからわず、最悪なやつが寄って来る。最後に指導員から「おまえは免許を取っても1年は運転するな」といわれた。たしかに憶えはわるかった。寺に入っても飲酒と文学が問題になった。おれはジョゼ・ジョヴァンニ、ギャビン・ライアルやドナルド・E・ウエストレイク、リチャード・スタークに夢中だった。犯罪小説を企て、ノートいっぱい草稿を書いた。そして隠れてはウィスキーを呑み、森のなかで惰眠を貪った。住職の娘がとびきりの美人だった。大学院生で、性格は辛辣だった。1度だけ腹の立つことがあった。住職の弟子が来て、おれに蒲団を畳めといった。おれはでたらめに畳んだ。

ちゃんと畳め！

男が叫んだ。くそ。その鍛えあげられたからだは土方のほうに向いてる。

おまえ、お母ちゃんから教わらなかったか、畳み方ぐらい？

いいえ。

憐れな女だな。

そう吐き棄てた。畜生。たしかにおれはそういった所作をまったく教えられずに生きてきた。母について擁護できない。け



れどもそのいい草はなんだ？——おまえのなにがすぐれてるというんだ。三田で腥坊主やってるだけじゃねえか。くそつたれ。1ヶ月しておれは寺を辞めた。どうしても作家になりたかった。父と祖父がやって来た。

ぼくは作家になりたいんです。

そうか、——と住職は頷いた。

水上勉という作家が晴れた日は耕し、雨の日は本を読むといった生活をしていた。

かれはいま幾つだったかな？

少しまえに死にました。

坊主が顔を顰めた。蝗でも呑みこんだみたいな顔だ。おれは父の車でうちに帰った。尋問がはじまった。父がこれからどうすると訊く。おれは、日雇い派遣にいくといった。祖父は、それから何年も寺へ詫び状を書きつづけた。どちらも、まだ生きてるのか、知らない。もちろんのこと。

\*

高度何メートルかで魂しいを見下ろす

ひとのかたちをしたものや

さそりのかたちをしたもの

猫のかたちをしたもの

かたちを失った多くのひとびと

こいつは公共空間の夢に過ぎない

さようなら日本、さようならアメリカ

また逢うことのないように

ぼくはぼくの魂しいを呑みこむ

きみが失ったものを

ぼくが見つけることは

できるかもしれない

でもぼくが失ったものを

きみが見つけることはできない

\*

目醒めるとレッドネックが立っていた。もうひとり知らない白人も。白人は金というより銅色の髪をして、明るいテラー・ド・ジャケットを着ている。かれらに連れられて映画館のなかで話があった。かれらはそれぞれがった電話で、ロージーに薬を売っているという、Yことイエーガーに連絡をとった。毀れた映写機からとつぜん、映画が流れる。『ポイント・ブランク』だ。ウォーカーが撃たれ、物語りが始まる場所だ。そしてフィルムが静止する。知らない男が入ってきて、スーツケースをあけた。一見して紳士風のその男は細身のからだをねじるようにして椅子に坐った。

ここいらの元締めはわたしだ。

fiveと呼ばれている。

fiveはいい医者だよとYがいった。いい精神科医だといった。Yは黒い髪をうしろになでつけている。ボクサーくずれといった感じだ。——fiveがいった。「わたしは組織が欲しい。わたしの命令で殺しをやれば硬いだろう。この田舎だ。掃除はたやすいもんだ、日本人。——ひとひとり最高300までだ」。

おれはロージーを助けたいだけだ。

殺しはしたくない。

そうはいかない、きみはもう立派な内通者だ。——話は決まったね、Y。——もちろんだ、five。——わたしの手に回転式と、自動式とが握られた。わたしには殺すつもりはなかった。だが、あきらかにあやしいのはYであって、ほかじゃない。わたしはいった。見せ金は？——ロージーの薬は？

ばかをいうなよ。

わたしはまっとうな医者なんだ。

アンブルだつてきれいなものさ。

わたしはなにもいえず、かれの指示を聞いた。この映画館に関わる人間を消していった。ひとりひとりと。どいつもこいつもなぬけだった。平気なつらで地下鉄にいたり、競馬場で両足を伸ばしたり、死体になるか、Yの餌食になるかは、ほんとうにかれらの自由だった。このあたらしい生活にロージは馴染んだ。じぶんのきらいなやつがぜんぶ殺されるって昂ぶった。たしかに1週間もすれば、らりらりのロージを知る、淫売野郎がいつきに消えた。わたしは報酬を片手にロージを抱いた。眠りそうになった。Yに狙われている気がしてカウチから落ち、ラジオをつけた。モダン・ジャズ専門局で不安を掻き消した。わたしはかれを殺さないといけないのか。

眼がさめるとからだがうごかなかった。ロージが笑っている。わたしに薬をやらせたらしい。床に縛りつけたれたみたいだ。わたしはカフカの虫を連想した。ロージが林檎をもっている。やめるんだ！——やめろ！——声がでないのに叫ぼうとした。ロージは仲間になって欲しいみたいだ。わたしのからだにぴったりとからだをくっつけて、酩酊のなかで一緒になった。気分がよくなってきた。5時間も経って薬は切れ始めた。シャワーを浴び、炭酸水をあけた。ロージが口づけをし、わたしはわるい気分じゃなかった。電話だ。次の仕事がやって来た。

ビルを殺れ。

わたしは戸惑った。ロージに話をした。——ええ、ビル伯父さんを殺してよ。——なにがあつたんだ。——あいつらと一緒にわたしを騷りものにした。——確かなのか？——わたしを疑るの？——おれにはわからない。——Yが手はずを整えるはずだった。しかし映画館へいったとき、そのビルしかなかった。

きみはまだいるのかね？

Yがあなたを殺せといってます。

きみは正気とはいえないな。薬で洗脳されているんだ。わたしはだれの敵でもない。ただの予備役で、銃砲店の主なんだ。——そういったせつな、かれはわたしの首に両の手を突っ込んで来た。首をロックして、扉へ叩き込む。どうすることもできない。わたしははかれの足を蹴ってあいだをつくる。そして空砲を撃った。

きみがおれを殺す理由は？

Yしかそれを知らない。

なぜだ？

わたしはきつと連続する殺人であたまがおかしくなっているんだ。Yを呼ぶべく電話をとった。——いったいどういうつもりがあつて、ビルを殺さなきゃならない。やつはロージを監視している。この町からでられないようにだ。

あなたがやったらどうだ？

そんなにその老いぼれが大事か？

そうじゃない。おれの目的とはちがうんだ。

目的なんか必要ではない。——待ってろ、おれが殺してやる。

おれはビルにいった。逃げるならいまのうちだと。——おれは保安官だ。やつらには負けん。だがおれがやったことは赦されないだろう。ロージに眼をつけたのはおれだ。かの女に電話してハンクが危険だといったのもおれだ。いまさら逃げてどうなるんだ。——ビルは映画館へ失せた。わたしはホテルに帰った。ロージは、グラスをやりながらわたしを待ってた。わたしもグラスをやり、ふたりで一緒になってしまった。これでいい。これでいいんだとじぶんにいった。いまごろビルは処刑

されているだろう。知ったことじゃない。でもわたしは殺人には飽き飽きだった。ロージを連れだして逃げたい。でも村はやつらでいっぱいだ。Five、Y、もしかして全員殺さねばならないのか。またも電話があつた。なまえの知らない声のあと、また知らない声がした。

きみが殺し屋の日本人か？

ああ、そうだろうな。

きょうはビルが死んだ。

あれはおれじゃない。YとFiveが殺った。

連中が？——どうして？

かれらに聞いてやってくれ。

日本人、かれらを殺す気はあるか？——でないとこの映画館がもたない。のっとられる。

Fiveはそのつもりだ。——とりあえず主要人物をぜんぶ映画館にあつめてくれ。——いちど話しをしよう。おれはホテルの地階に降りてビールを買いにいった。帰ってきてエレベータを待っているときだ。だれかがちかよってきた。ロビーの年老的黒人だった。わたしの肩に片手を乗せ、苦い笑みをみせた。またか、とわたしはおもい、身を躲す心づもりをした。かれはいった。

あんたがどういうつもりかは知らない、知りたくもない。

あいつらは、——組織といえればいいのか、

もとはといえはおれたちを私刑し、

奪いとってきたやつらだ。

その果てが組織だ。役人やら警官を抱き込んでる。

あの映画館だってもとは、おれのダチ公がやってたんだ。

いいかい、日本人。

おまえが組織につくんなら、碌な死に方はしないだろう。

やつらを潰したいなら、いつでも相談してくれ。

じゃあ、楽しい旅をせいぜいやっておくれ。

一方的に喋ってでていった。かれの顔の片面には、ふるい火傷の痕があった。いったい、どうすればいい。助けを乞うのはたやすい。でも、それがだめだったら。失敗に終わったら。ロージーもわたしも生きてはないだろう。黒人たちだって無事では済まない。わたしはエレベータに乗り、そいつが成層圏に達するまで待つ。生憎、最上階は8階だった。なにも考えたくはない。ビールをあけ、ひとり呑んだ。

\*

雪は11匹の

うなり

宝ものみたいな足音といっしょ

もしくぼくに息子がいたら

馬をあげる

もし娘がぼくにいたら

猫をあげる

飛び上がる声が

知らない近所の娘をしてる

もう少しで

何もかもが家庭という墓場に吸い込まれ

見えなくなっていくのだから

ぼくは幸せさ



\*

ヘルキャスト三田支店で登録した。最初にあてがわれたのは神明倉庫のピッキングだった。雨のなか、傘もなく、岡場から流通センターまでバスでいった。雨は激しい。伝票通りに米袋を台車に積み、おもてに並べる。たったそれだけだったが、荷崩れしないように積むのはむずかしかった。最後に台車をラップに巻いて終わりだった。みんな疲れ切ってた。ひとりの30男がラップの巻き方ができてない！——そうわめき、地面にあったラップを蹴りあげた。どうしてこんなくそ仕事で怒るのか、わからない。

ヤマトでのメール便仕分けや、冷蔵倉庫、食品工場、チョコレート工場、ミネラルウォーターの箱詰め、日用品の仕分け、だいたいそんなところにいった。でもけつをわることも多かった。朝、集合場所にいても合流しなかったり、途中で帰ったり。支店長からあと1度でもやったら出禁にするといわれた。おれは半年、我慢した。大晦日、コンビニ商品の仕分けをあてがわれた。夜勤だ。おれが仮眠をとろうとすると父が喚いた。いちどきりの夜勤に仮眠はいらんということだった。意味がわからない。おれは森のなかで眠った。40分と半分かけてテクノパークの『ウエダ』という倉庫にいった。仕事は簡単だった。コンビニ商品の仕分けだ。店舗ごとに品物をふりわけると。時間は長かったが、なんとか熟<sup>こな</sup>した。途中で帰った男がいた。仕事のやり方で注意され、いなくなった。おれは8千円を手に入れ、はじめてカティ・サークを呑んだ。金が尽きた。

夏になってフルキャストには飽きてきた。Tシャツの購入を強要されるのにもうんざりだった。あるとき、ヤマト運輸へいった。みんながフルキャストから買った1枚500円のシャツを着てた。老人がいった。

なんでおまえはシャツを着てないんや？

洗濯にだしてゐるですよ。

ここではヘルキヤストのシャツを着る、

それがヘルキヤストのルールや！

老いぼれは支店に電話をし、おれが働けるか問い合わせた。目立たない格好であればということだった。けれども卑怯なことに半年後、やつらはシャツの購入や保険料を強要したことはない、事前に説明もした、同意のうえだとほぎきやがった。ちくしょう。――男妾どもめ！

おれはシステム管理業務とやりに手をだした。8時間と16時間の交代制だった。倉庫で知り合った相馬という中年には「やめておけ」といわれた。でも倉庫で稼げないのがわかってた。長い研修のあいだ、おれは隠れて『雨季の象形』、『光りについで』の短詩篇』というふたつの詩を書いた。業務はきつかった。郵便事業の下請け。時間通りにくそ長いコマンドを入力し、ふたりで確かめてエンター・キーを押す。8時間はなんとかもった。16時間はどうしようもなかった。はじめは休憩ばかりだった。それが朝方になると、みんな大忙しで、媒体投入やコマンド入力をやった。脳みそが羽根を生やして、そのまま飛んできそうだった。疲労と眠気でおかしくなる。それでも週払いで10万近く入った。でもおれにはむりだった。そのあと2日働いてやめた。父が金を入れろとうるさかった。おれは有り金の3万をくれてやった。いったいなにに遣ったのか、いまでもわからない。おれは大阪野音でエレファントカシマシの20周年記念特別公演を見た。音響がいまいちだった。息継ぎもひどい。特に『うつらうつら』はひどかった。

秋になっておれはヘルキヤストにもどった。カタログの仕分けや、ハム倉庫の仕分けがあった。前者では破損品の酒を、後者では展示用の塩漬け肉を戴いた。それから長期の案件で照明器具の倉庫に行くことになった。オーデリックの下請け、OSS西宮物流センター。いまはもうない。おれはスポットで1回来ていたが、へぼな運営のせいで遅れてしまった。経験者のや

ろうがけつをわり、道案内がいなかった。それに元請けのなまえすら教えてくれない。運営は電話で道案内を試みた。おそらく地図を見ながらだったんだ。第3公園の手前だった。でも実際にはヤマト運輸の斜向いだ。おれは賃金を減らされた。支店の人間は調べるといったが、答えは永遠になかった。

おれは2階に配属された。いちばんきついところだった。入庫も出庫も数が凄まじい。フロア・リーダーの東はおれを憶えてた。遅れてやってきたくずだと知ってた。やつは一見にこやかに見える。しかし青白い肌と濃い髭の剃り跡が不気味だ。しばしば冷たい顔でおれをなじった。あとは女3人。中年女がふたり、そして中窪由里というおなじ23歳の女の子がいる。かの女はうつくしかった。かの女はいつもつらそうだった。おれは早く仕事を憶えてかの女を支えようとした。それでもおれもかの女も週に2日は休んだ。出庫はどうってことはない。でも朝の入庫と棚づけはどうしようもなかった。やがて中年女はひとりに減った。激烈な数の品物が入ってくる。どこの棚につければいいか、それもわからない。品番も順番もでたらめだらけだった。それでも東は「早く、速く」と急かす。そしてつまらない冗談をいってたり、おどけたり、その度におれに同調を強いた。それでも眼鏡のなかの細い目は笑ってない。雨の日、カブが動かなくなった。雨の日はかならずだ。それでも父はこれに乗れとうるさかった。おれは中古でジョルノを買った。こいつはよく走った。代金は母に払わせた。おれは笑いを強要された。うんざりだ。東はほかの連中の陰口をいい、同調をうながした。うんざりだ。帰りに赤坂峠の居酒屋に寄った。店主は口髭を生やした老夫で、かつては生野に棲んでたという。かれによれば、表の駄菓子屋の主人は数年前に自殺したという。ちいさいころ、よくいってた。

1月。雪が積もった。父はおれに姉の車のタイヤ交換を命じた。おれにだって仕事があるのにだ。ジャッキで車体をあげ、ボルトを外す。そして、ひとつづつタイヤを外し、冬用に換えた。そしてボルトを締める。おれはどうやって仕事にいく？——スクーターじゃだめだ。もしかすれば姉が乗せてくれるかも知れない。そう願った。しかし姉と父は走り去り、おれは歩

くことになった。遅刻は決定だ。おれは1時間かけて職場にいった。その夜、父はかんかんだった。ボルトの締めが甘いとわめいた。事故になったらどうする！——もちろん、姉から感謝すらなかった。

夜、室のむかいの小屋で父はずっとなにかをやっている。大きな窓のせいで光りはもろに入るし、気になって眠れない。深夜になっても終わらない。当然、あしたも仕事だ。おれはthe Doorsを聴きながら、そいつが終わるのを待ってた。父が怒鳴る、——その変な音楽をやめろ！——おれはやめなかった。さらに音量をあげた。やつはおれの室まで突っ走り、怒鳴る。やつは呑みかけのかけの紙カップを投げた。おれは立ちむかって、やつを罵る。拳をふりあげる。母が降りてきた。ふたりのあいだをわって入って来る。翌日、室にはカーテンがかけられてた。

あるとき、中窪さんがおなじ道場町に棲んでるのがわかった。かの女は宮崎からひとりで働きに来たらしい。最初はキャデヤをやり、それからアパートを借りたという。おなじ世界にこんなかわいい娘がいるんだ。おれは熱くなった。年がけて外部から男がやって来た。フロアの改善のためだという。やつは歩き回り、ひとりごとをぶつくさやって消えていった。なんのために来たのかはわからなかった。そんななか中窪さんが辞めるという話をひとつに聞いた。おれはジョニー・ウォーカーの緑を買って、涙とともに呑んだ。好きなラジオ番組『真夜中ラジオ・ユアーズ』も終わりだった。翌日、かの女は来なかった。おれは荒れた。入庫品を潰してまわった。出庫場で、福山通運担当の童顔ちびにからんだ。調子乗んなや！——やつは声を荒らげた。酒量は日毎に増える。ロッカーに清酒を入れた。東のやろうから圧力がかかって来る。かの女がやめるといふ日、おれはかの女にいった。

寝不足なんだよ。

わたしも夜明けまでゲームしちゃって。

夜通しギターの練習をしてたんだ。

Doorsってバンドの曲だよ。

洋楽？

そうだよ。

むつかしそう。

わたしも高校のとき、バンドやってたよ。

ベースとギターまだ持ってる。

最近ゲームばかりだけど。

おれはそのとき、ひどい肥満体だった。でもかまうもんかだ。その日、さまざまところでかの女と話した。どうせ最后なんだ。なんだってありじゃないか？——ちがうか？ おれはだす予定もない本のゲラを渡し、かの女とわかれた。最後の頁に「好きでした」と書き殴った。かの女は「またね」といつてくれた。もうこの仕事とおわかれだった。翌日、福知山線に乗ってどっかの無人駅までいった。雨が降ってた。翌日、東はおれをちびとともに嘲笑った。仕事が始まってすぐ、やつが追いかけて来た。

おまえ帰れよ！

やる気がないんやったら帰れ！

知らねえよ。

おれ、年上やぞ！

知るかよ。

中窪さんが辞めたんや、休まれたら迷惑や！

おまえ、次の仕事じゃちゃんとせえよ。

おれは定時にあがらされた。まだまだ仕事はあった。帰って電話が来た。支店長からだった。おれは臍首になった。ハーパーを呑みながら、さっそく会社へ乗り込んで、ありったけを喋った。おれは中窪さんが好きだといった。東がほかの連中をわるしざまにいつてるとも。最期に本をだすといった。金城という上司が「でたら絶対に買う」といった。酒に酔ったままジョルノに乗った。グリーンハイツへの登る坂で、転んでしまった。星。まえの車が停まってひとが降りてきた。

さやちゃんのお兄さんですか？

どうしてそれが？

顔が似てるから。

ライトの縁が割れた。おれは帰ってみずからを慰めた。仕事を喪ったのを父にいうつもりはハナからなかった。いつも通り。隠して、ばれるまで黙ってた。あるとき、酒を買いにでた。量販店のちかくに飯場があった。まさかこんなところに。おれはさっそく話をしにいった。仕事が決まった。けち臭いところだった。室の暖房もテレビも1時間につき、100円だ。原付きを置くのでさえ金をとられる。2月の寒さのなか、おれは耐えた。仕事は三田で、古い側溝の表面をモールドで削る作業だ。一緒になった池田老人と岡野さんと打ち解けた。でも1週間しか持たなかった。無断で寮をでて、かつてスーパーマーケットだった廃屋に入った。塵箱のなかに疳をつくった。ビールケースと段ボール、毛布を持ち込んだ。寒くて眠れなかった。ちかくの量販店で、ほとんど毎日酒や罐詰をくすねた。岡野さんがときどきやって来て、飯を喰わせてくれた。でっぴりとした50過ぎの男だ。ずっとこの手の仕事をやって来たのか、そいつはわからない。

ええ仕事があるんや。——かれは播州訛でいった。

どんなんです？

造船や。

とにかくきみのことが心配なんや。

紙になまえと住所を書かされ、かれはファックスでそいつをどつかに送った。あやしかった。そんなとき、ほかの派遣屋にもいった。頼みの冷蔵倉庫の案件はすぐに終わって、喰い扶持がなくなった。加古川にある印刷工場ぐらいだった。おれは何度も母に無心した。3千円、あと2千円。母がもうださないといったとき、おれは怒り、厨の鍋を床にぶちまけた。夕餉がむちやくちゃになった。いちばん下の妹は泣き叫んだ。それ以来おれを憎悪してる。

またしてもおれはヘルキャストへ仕事を乞うた。6日経って、あたらしい仕事が決まった。キムラユニティーの倉庫は鹿の子台にある。10日契約だ。ひろくて、きれいな倉庫だ。まえにもきたことがあるのに気づいた。そのときは稼働前で、物流レーンの動作確認をした。おれは入ってきた荷物を台車で運んだ。そして種類別にパートタイムの女たちへ渡した。ときにはエレベーターに乗って冷蔵室に入れることもある。楽ちんなものだった。みんないいひとたちばかりだった。はじめて気持ちよく、仕事ができた。冗談をいいあったり、時間があいたときには倉庫内の清掃もじぶんからやった。朝7時半から16時半までの仕事だ。

ナカタくん、うちに直接雇用で来ない？

フロア・リーダーの岩寄さんがいった。うれしかった。でもおれには家がない。父に家賃を払うのも癪だった。そしてヘルキャストの規定では、派遣先との直接雇用は背信行為として禁じられてた。おれは断ってしまった。これこそ人生最大の愚策だ。食堂へ行って飯を喰う。高校の後輩がひとり働いてる。堀井という陽気なやつだったけど、いまでは物静かな男に変わってた。おれがだれかということも気づいてないらしかった。やがて契約を満了した。フルキャストの営業におれは感謝をされた。会社のイメージをよくしたと。だからどうだっていうんだ？——職場のひとびともう会えないのがさみしかった。金を

受け取って、虚無を感じた。雨が降ってた。おれは綴木智恵美と再会した。

ナカタクくん？

ああ。

なにやってんの？

派遣？

わたしも派遣で働いてんの。

ナカタクくん、肥った？

ああ、そうだよ。

おれはものを盗んだ。ミチコ・ロンドンの革財布だ。しばらく捕まるかどうかで怯えた。それから神戸市立図書館の分室で、おれは本を漁った。なにかおれの心にあったもの、よく似た魂しいを探した。そのとき、ブコウスキーという作家を見つけた。数ページを捲ってみた。わるくない。『町でいちばんの美女』、『勝手に生きろ！』、『ポストオフィス』——どれもがおれにむかって語りかけてる。そのとき岡野さんから電話がかかった。おれは渥美組という飯場にいたことにしてた。2万入ったという、たったそれだけかといった。おれはこの金でまっとうに仕事を探すべきだった。しかし甘言に従い、岡野さんとともに、芦原橋まで来た。あたりはずっと雨で、仕事はない。呑み代で2万は消えてった。真鍋呉夫を読みながら、俳句をつくった。1週間、仕事はなにもない。あるとき、社長がおれを呼んだ。

京都にいつてくれるものを探してるんや。

京都ですか？

茶畑の仕事や。



もう入ってから7日が経ってた。寮費も溜まってる。おれは高槻支店へ移った。丘のうえでまたしても仕事を待った。なにもない。酒を呑み、本を読んだ。犯罪小説のあらすじを書いた。世界におれの居所なんざない。落ち着ける場所は、おれのなかにしかなかった。おれは丘を降り、図書館をみつけた。ブコウスキー、あの作家が待ってた。『パルプ』を持ちだして読む。おもしろい。主人公ニック・ビレーンの無軌道ぶりが素晴らしかった。酒場やオフィスでのいざこざが、その言葉づかいがおもしろい。でもおもった。こんなものを読んでなんになるのか。2週間仕事がなかった。やつとあてがわれたのは住宅のコンパネ外しだった。汚らしい男と電車で現場まで。炎天のなか、家の土台からバネルを剥がしつづけた。暑さであたまが膨れそうになる。水を何度もあたまにかけた。

岡野のやろうから電話はなかった。ようやく来たときやつはべつの現場でずぶ濡れになったとか、どうでもいいことを喋った。仕事はどこにある?——それから幾日経って、茶畑の仕事が来た。田村という若い男と一緒にだった。かれとの話は気分がよかった。昔バンドをやったことや、自動車工場で働いてたことなんかを聞いた。うまくうちとけた。そのいっぽうで畑仕事はきつかった。傾斜をあがったりさがったり。これじゃあ、腰を痛める。2日めが終わったころにはおれを外す話しのできた。寮費の滞納で日払いも貰えず、おれは怒って農家に電話した。働いたぶんの金を貸せといった。すると今度は営業から苦情が来た。振り込め詐欺と呼ばれ、仕事あるある詐欺だと返した。あらんかぎりの悪態で答え、おれは室の荷物を持って三ノ宮までいった。どうやったら居宅保護を得られるか。市役所に行くと、灘までの切符を渡された。無料宿泊所があるという。おれはいった。施設はふたつにわかれてて、その日泊まるだけのものと、死ぬまで過ごすだろ老人たちがいた。朝8時、おれは実家に帰った。家の仕事をさせようと父が待ってた。うんざりさせられるばかりだ。おれはスポーツ新聞を買って、求人を見た。岡野に電話した。やつは仕事の紹介を露骨にいやがった。愛媛にいららしい。おれはやつから1万円をせしめた。そいつとはそれつきり。なんとも湿気た話だ。

\*

ひさしぶりに北六甲台に来てみた。スーパーマーケットで数回、葡萄酒を盗んだ。おれは小学校のまえをうろつき、塀のむこうを見た。学童たちがわいわいやってる。課外授業かなにかだった。もうとつくに20歳の年を過ぎてる。タイムカプセルや同窓会といったあつまりにも呼ばれてない。気分がわるかった。悲しみがこみ上げてくる。たまらない。だれもかれもおれをきらってる。葡萄酒をもういっぽん盗み、公園のベンチに横たわった。子連れれた母親たちが眼につく。起きあがって壘を干す。坂をあがった。酒屋のまえで買ったビールを呑んだ。そのとき、パトカーが来て、眼のまえで停まった。降りた警官どもが慌ただしくおれを囲む。なんなんだ、いったい。

通報があつて来た。あたりをうろつく不審者やと。——こういうとき、モリエールならどう考えるだろう。

おれには関係ない。

関係ないことないやろう。

子供をじろじろ見とつて。

憶えがないですね。

とにかく話聞くから、車に乗れや。

おまえ、どつから来たんや？

あれで。——おれはジョルノを指差した。けれどすぐにごまかした。車に乗って山口幼稚園にほどちかい交番へ連行された。——おれはビールを呑みつづけた。やつらはおれの鞆のなかを調べた。あるのはノートと点鼻薬のみだ。背の高い、がっ

しりとした警官がニタニタしながら尋問にかける。——おまえ、あそこでなにしてたんや？

母校のそばを散歩してなにがわるい？

ふざけんなや、おまえが子供をじろじろ見てたって聞いとるんや、

ほんまはおまえ、小さい女の子が好きなんやろ？

やつが顔をぎりぎりまでちかづけていった。おれはかぶりをふった。怒りと辱めでなにもいえなかった。——ええ加減にせえや、おれらは手加減せえへんぞ！——やつがおれの実家について訊く。おれはでたらめな住所をいう。やつらはおれのビールを奪い、屑入れに叩き込んだ。20分ほど経っておれは観念した。住所と電話番号をやつらに伝えた。さらに30分して母が来た。母はおれに放浪癖があると宣った。こんなことがまかり通っていいのか。おれはジョルノを停めた歩道に向かわせ、降りてそのまま跨った。ふり返りもせずに去った。当然のことながら行き場はない。数日しておれは家に帰った。金もなく、盗みをやる気にもなれなかった。またしても父が命令を下す。

きつい家の仕事が終わっても労ってくれるものはない。おれは夕餉に着いた。食べ終わると妹がわめいた。「皿を洗え！」。うるせえ。じぶんでやればいいんだ。父は姉妹にも仕事を与えるといったが、それは永遠になかった。姉妹の室をつくり、空調をつけ、窓ガラスを嵌めても、ありがとうのひとこともない。おれはそんなことがあたりまえのところになんかいたくなかった。おれだって生きてて存在がある。だのになぜここまで追いつめられなければならないのか。1度落ちたものは1生そのままなのか。

あるとき、おれはジョルノを廃車にしてしまった。丸坊主でブレーキが効かず、そのままフェンスに突っ込み、フレームを曲げてしまったんだ。せつかくの足もなくなってしまった。田舎暮らしは楽じゃない。名塩駅まえの公園で夜を明かした。また大阪で仕事を探すことにした。新聞の求人があまりあてにならないことはわかってる。大阪駅前ビルの地下でそれをおもっ

た。「アシスト・パワー」の人足寄場から多くのひとがでていった。ここに仕事なんかねえと。でもおれはしがみついていた。これ以上どっかにいくのに疲れてたし、金がなかったからだ。軽作業の名目で門真まで連れてかれた。せまい室のなかにマツトレスのない寝台、テレビがある。扉には覗き窓があった。寝台におれは坐ってモリエールを読んだ。『いやいやながら医者にされ』だ。あるいはシェリダンの『悪口学校』を。夕暮れ、食堂へ降りた。事務所にはおれの仕事 came た。トラックの運転、それも相野まで。面接でいったはずだ。運転は不得意だと。ちゃちな耳輪をした男がほかにやれるのがないといった。なんの保険もなしに他人の車に乗るほどおれもばかじゃない。朝になって断りにいった。それが恨みを買った。まったく仕事をもらえなくなった。おれは服を着て夏帽をかぶり、階下へと降りた。セメントづくりの小屋で老人夫がシャワーを浴びてる。窓ガラスもない。丸見えだ。

あんたも仕事なしかい？

ええ、入ってひと月もね。

おれは3回だ。これじゃあ、どうにもならん。

寮の無料期間がぎりぎりに迫ったころ、ガラス工場の仕事が入った。機械の移転前に、手作業で材料を運ぶ。室内は暑く、休憩は20分ごとだ。分煙用の仕切りがある小屋のなかで休んだ。休憩室のテレビジョンは子殺しを報せてた。またか、とだれかがいった。おれにも憶えがある。公園で母親にやられたのがあったつけ。今度は雨のなかで少女が死んだという。雨のなかのひと殺し、——レイモンド・チャンドラー。どうだっていい。

どうせ、また母親がやったんだろ。

水を呑みながら始業を待つ。飲みものを買う金もなかった。拾いものの、ペットボトルに水道水とくる。まあ、どうだっていい。とにかくガラス工場は機械を入れ替えるあいま、手作業で材料を運ぶやつらを欲してた。うなりながら熾き火を秘めた

釜のまえに、天井からダクトが降りてる。材料のガラス片はそこから落ちてきた。はじめは少しづつだったのが、しだいに大きな流れになった。スコップではどうにもならなくなって、ベルトコンベアがおれたちの手で運び込まれた。流れてくる材料をスコップでさらに奥へと掻きだす。高熱のなか、ひとつきりの幸運は20分ごとの交代だった。おれはすぐにばててた。きらめくくず山をみつめ、呼吸を整えようとする。そのとき、老人が怒鳴る。――おまえも動けよ！

休憩室で声をかけられた。

きみ、いくつ？

24です。――若いつてことがなにか罪惡のようにおもえた。男の顔は赤黒く、疣があった。ちいさな疣だ。

ほかに仕事なんていくらでもあるだろうに。

ないですよ、宿なしじゃ。

夢とかないの？

詩とか短歌とかでなんとかやっていきたいですね。

小説は書かないの？

ながい文章は苦手なんですよ、

書きたいのはやまやまですが。

その日のことが終わると、下着まで濡れてた。びたびたと皮膚にくっつき、歩きづらい。われわれのワゴンの隣には、ラリー仕様のミニ・クーパーが深緑して坐ってた。おれは水を呑み、べつの男が喋るのを聞いた。車は南にむかって走る。――おれがきみの齢のころはあぶくでな、どこにいつても大金で雇ってくれた。面接で「おまえ、いくら欲しいか？」訊かれて、「50万」っていったら、むこうは「雇ってやる！」。そんな調子で毎晩、高級な酒場にいった味もわからねえたかい酒を呑んだ。

家も2件建てたし、息子もできた。なにやってもうまくいく、いい時代だったな。——かれはまるで今日の一切がないかのよう  
に話しつづけた。かれの家族がいまどうなってるのか、どうやって飯場に落ちたのかがおれのあたまに残っただけだ。

きみはまだ若いんだ、パチンコ屋の棲みこみになればいい。

おれはほほ笑みで応え、眼をそらした。これ以上我慢ならなかった。寮にもどるとふたたび狩りにでた。5つもまわって壇  
いっぽんと、パン1個しか得られなかった。そろそろ潮時らしい。おれは食堂にいつてカレーライスを喰った。だれかが見て  
るような気がした。事務所へいつておれは前払いのぶんをとりにつた。2千が手に入るはずだった。

まだ1度めの出勤ですよね？——ええ、そうです。

それなら前払いは千円になります。

5度以上出勤すれば2千円だせますよ。

逃げだす金も得ることもできなかった。翌日もおなじところに派遣されたが、それきりだ。まだ何日もその仕事はあつた  
が、おれだけはすされた。営業曰く苦情が来てるという。いくら力を使ったところで、ないものはどうしようもないことに気  
づいた。

なんとかあたまをさげておれはうんと遠くの、廃棄物の処理にあてがわれた。飛び交う蠅たちのなかで塵芥を仕分けるのだ。  
まずは空き罐だ。とにかく臭かった。くさった液体がそこらじゅうを流れ。おれの顔に飛びかかる。そこへ蠅がおれの口や耳  
の穴にむかってくる。——さておつぎは家具や鞆や買取不可のおもちゃどもだ。材質ごとにでっかい箱にわけていく。ウイス  
キーをみつけた。でもだれかが持ててしまった。とにかくおれはのろくさかった。たった1日、北へむかっただけでお払い  
箱にされた。仕分けられたのはおれ自身だった。おれは町へでた。図書館があつた。万引き対策の本をみつけた。たしかこん  
なことが書かれてあつたともう。——犯人は世間とはずれた、あるいは汚れた服装をしている、とあつた。おれは便所へいつ

て自身を鏡にみる。靴がそろそろお役ごめんだ。その夜さっそく靴屋にでむいた。手に入った。

昏い室に入り、とがった皮靴を磨きながらおもった。これは生きた気分じゃない。死んだものの気分だと。入寮以来はじめてテレビをつけ、夕べのニュースを眺めた。自殺の話はない。靴屋の話もない。そしておれの明日についての報せもなかった。よい気分ではないが、そうもわるくない。死体もわるかない。おれはズボンを降ろし、シャツを投げた。じつくりとまたぐらをつかみ、おもいうかべた。むなくそのわるくなるほど照明の効いた室で、まず装飾つきの木椅子がおかれる。2脚だ。いっぽうにおれが坐る。そこへ20歳過ぎの童顔の女が現れる。とにかくばかげた、幼稚なかつこうをしてる。お帽子つき。少女めかした、そのおもざしがおれをやさしく蔑む。ふいにかの女の御足がカツとひらめいた。ぬかるみを通ってきたかの女の白い運動靴がおれのまたぐらをしつかりとらえ、おさえつけてる。おれはそのまたたきに茎を温くさせられてしまい、――あとはかの女のされるがまんま、しかし仕返しはたっぷりとくれてやる。2回戦。引き分け。薄洋紙がなくなった。疲れているときにむりな射精はしてはならない。それを忘れてた。肛門から痛みだして便所へ駆けこんだ。いきんだ。なにもでない。いきんだ。なにもでない。でそうなさわりがある。この症状のなまえを教えてください。24歳、男性、当方無学。だが1時間ほどでそれはやんだ。手加減してくれたんだ、だれかが。残ってた酒をきめ、もういちどかの女と姦りあおうとしたが、勃たなかった。身を横たえて深夜まで眠った。次の日、ほかの口入れ屋にいつて仕事を求めた。パナソニックの工場があった。どこもくそつたれな携帯電話を要としてた。そんなもの、もったこともない。しかし面接のことをうっかり営業に話してしまった。つまりここをでたいということだね？

それではどこもやとってはくれません。

あくまでここにおいて金も貯めて寮費も清算したかった。おれには苦情がたっぷりでてた。とりつく島もない。生きていくにはどうすればいいのか。

でもきみはまだ若い、ほかにだって当てはあるやないか？

ぼくだって、広告に「軽作業」とあったからここに来たんです。

文なしでそとにでたら死んでしまいますよ。

給与、払ってくださいよ。

もう寮費でなくなつた。

黙っておれは7階にひっこんだ。ふたたび温くなった、またぐらをもみしだき、勃たせようとした。しかしおれの内なる女らは、みなそっぽをむいてた。しかたなく、階下へでると、狩りにでかた。その日は白葡萄酒を呑んだ。贗キャビアもおまけだ。翌日になって営業の男がおれを訪ねた。色黒で髪を逆立てた、眼の鋭いのが、おれを見据えていった。――いま、何人ものひとにいつてまわってる、――退去してくれるひとを。芝居がかった、癪な喋りだった。

でもぼくは文なしですよ。

男は財布をだして千円札をだした。

これはおれのポケットマネーだけど。

おれは受け取ってしまい、おまけにやつのだした、自主退寮者のリストにもなまえを書いた。その日のうちにでていかなければならない。しばらくして雨が降りだした。おれはまたでかけてウォトカを盗みだした。雨が激しく降った。おれはでるしおを喪い、唐辛子入りのウォトカを呑んだが、いっこうに酔わせてもらえなかった。しかたなく鞆を手に入れにいった。翌日の朝、月曜日に営業の、ほかの男が室をあけようとした。おれは鍵をかけてた。覗き窓から男が声をだす。

なんでいるんや！

おれは寝台に横になってそれを眺めた。けっこうな眺望だ。まるい眼の男はわめく。



きのうまでだっていったろうが！

なんているんや？

雨が降ってたんですよ。

そんなの関係ない。

でもあれじゃあ、でられない。

関係ない！

おれは金だつてないんだからな。どうしようもないんだ。

とにかくここをでろよ。

おれは芥葛を冷蔵庫に隠しておもてへでた。1階の階段のうらへ立ってたら、やつは芥袋をもって降りて来た。よう、とおれはいった。やつは怒って携帯電話を握った。

はよう、いねや！

イネ？——どういう意味だ？

とにかく失せろ、警察呼ぶぞ。

やつが携帯電話に手を展ばした。おれは逃げた。おれに千円くれた、営業に出会した。やつのつらは涼しげだった。

いまからでるのか？

ええ、そうです。

なんとかかなりそうか？

さあ、わかりません。

でも若いんだからな。大丈夫だ。

おれは終始笑顔で答えた。やつはきつとおなじような科白を携えて、また千円で追いたてにいくところなんだろう。けちくさいくそやろうどもだ。そのうち、やつらの本社がみえ、女子社員がでていくのがみえた。とろくさい顔だ。でもじぶんじやいいとおもってるくちだ。日の光りがいまいましかった。公園の便所にいつて顔を洗った。そして夜を待つ。腹のぐあいがわるくなつた。上腹部が脹れてるようなさわりがある。残った金でポカリスエットを買い、呑んだ。なんにもよくならなかった。夜になって、おれは量販店へいった。酒は呑めそうになから、ダンボールをもらうことにした。

おもてのダンボールをひとつ欲しいんですが。

あれは購入されたお客さまのためのものでして。

お願いします。どうしてもいまいるので。

ちょっと聞いてきます。

店員は去って、うしろの列がおれをみつめてる。しばらくして戻ってきた店員は、いちまいかぎりを条件に赦してくれた。さつそくおれはもてにいつていちまい、しかしでかそうなやつを撰んだ。公園のベンチに腰をおろす。さいわい仕切りはない。『三文オペラ』をひらく、盗賊は釈放された。物語は終わった。そのつづきは現実のなかで探すでしょう。おれは陸をひき、作業着をかぶった。

明けてすぐおれはスポニチを買った。求人欄のためだ。ちかくに3軒の飯場をみつけた。そのひとつにむかった。しかし1日でくびになった。事務所へ自己紹介する時間をまちがえてしまった。おれはもうひとつのやつにひっかかった。場所はアスホールから、まったくはなれてなかった。おれは水を呑んだ。はらわたが温くてしかたがない。そして息も苦しい。寮夫妻はやさしいひとたちだ。食堂でラーメンを喰いながら話をする。

きみはまだ若いんだ。こんな仕事はさっさとやめたほうがいい。

金ができたらまともな職に就くんた。

そうよ、まだいくらだって可能性はあるわよ。

そのとき、妙な生きものが床を走るのをみた。なんだこれは？ そいつはくそ忙しく走り回ってじぶんの餌場をみつけた。齧歯類の1種らしい。おれは腹に違和感を憶え、寮母にいった。

すみません、胃薬ありませんか？

散薬をもらい、すぐに流し込む。まだ夕方だったが、横になりになった。よくないことばかりだ。はらわたが温い。水を机においた。テレビは病院から払い下げられたもので作りが変わってた。画面が異様に小さく、音を聞くのに手間がかかる。しばらくして眠ることができた。しかし夜中になってそれはまわってきた。痛みだ。鳩尾と背中がいつぺんに痛み、締めあげられたかのような。どっちにからだをむけても痛みはやわらがない。それでどころか、どんどんふくれていった。慌てておれはノートを破くと、簡単な遺書を書いた。このままでは死ぬとおもったのだ。――《父、母へ、葬式はやらないでください。書きものはみな棄ててください》。

死を待つにしても苦しみは過大すぎた。おれは階下へ降り、おもてへでる。病院をさがしはじめた。幸いにしてちかくそれを見つけた。夜間救急窓口、そいつが開くのを待った。老婦人がふたり、おれをけげんにみた。おれは見返さなかった。ただなにかもが過ぎ去って消えてしまえることのみが望みのように感じられてしかたがない。何時分かが過ぎて、ようやくなかへ通された。おれは免許証をだし、文なしと告げた。ロビーには灯りがなかった。おれの顔には脂汗がしたたり、坐っているのもむずかしかった。

あの子、ぜったい盲腸よ。

あんなに脂汗流して。

老婦人たちがささやく。さらに1時間待つてようやくおれの診察になった。血やレントゲンなんかをこなしてついた病名は、急性膵臓炎といった。はじめて聞く代物だ。1ヶ月の絶飲絶食。すぐに寝台が用意され、点滴がはじまった。痛み止めがよく効いた。ふたたび眠りに落ち、明日がやってきた。痛みは2日めがいちばんひどい。さらに機械へとつながれ、全身コードだらけになった。夜、意識が混濁するなか、父がやってきた。そとづらだけはいい男だ。

遺書があつたって聞いているから、

どうせ妙な薬でも呑んだんでしよう。

勝手なことをいいやがって。浮浪者として入ればよかった。7、8日経って一般病棟に移された。痛みはまだひどい。しかし1日中、なんども痛み止めを求めるほどではない。コードもはずされて身軽になったおれは毎日、障碍用の、ひろくてきれいな便所で、灯りもつけないまんまみずからを慰めた。喰ってなくともでるものはでたし、あいかわらず空想のなかの女らはいかしてた。つらいのは空腹だった。おれは病室にもどると、すぐに料理を喰い、女らと語らう光景を思う浮かべた。1ヶ月経って外出がゆるされるようになった。おれは本を手に入れ、読み始めた。『燃えつきた地図』はいまひとつだ。『ライ麦パンのうえのハム』はまあまあだ。『ありきたりの狂気の物語』は最高だ。ある夜、医者がおれを呼びだした。若い看護婦をひきつれて、別室で横にならせた。

これから股の毛を剃ろうとおもう。

医者も若かった。こんなことしたくないだろう。

ズボンとパンツを降ろして欲しいんだ。

ここですか？

おれは看護婦をみた。両方を降ろしておれの陰部があらわになった。看護婦が陰毛の1部をそぎ、そこへ点滴針を突き刺した。——これで1日に何度も刺したりせずに済むだろう。——陰部、そして仮性包茎をみられた恥ずかしさで便所に駆けこんだ。あたらしいネタで2発抜いた。もう退院だというところになって飯が来るようになった。質素なものだった。米と汁と漬物。それでもおれには豪勢だった。毎日の楽しみが飯だけになった。ある夜、またしても親父がやってきた。

「おまえ、これからどうするつもりなんや?」——どうって?——この入院費や!——払えないよ、またべつのところにいつて稼ぐまでだ。——おまえなんか、いったいどこが使うんねん?——求人欄をみて、ぶつつくだけさ。——それでどうやって生きていくんや?——姉ちゃんは大学院までいつてIBMいっとんやで、おまえは遊んどるだけやんか。だからどこにいつたつて首になる!——黙ってやつが叫び、なじるのを聞いてた。おれは病院からどう逃げだすかを考えてた。また数日経つて、ようやくまたぐらの点滴がはずされた。おれは荷物を整理しだした。飯場へもいつておいてきぼりの鞆をとりについた。——若いのに死のうだとおもうな!——そう叱られた。そしてまたモールで酒をくすねた。もうなんともなかった。翌日、置手紙を書いて病院をでた。なけなしの金で電車に乗り、中心街をめざした。そこではじめて盗みがばれてしまった。おれは監視員の中年女にひきずりこまれ、警官どもを呼ばれた。

この鯨泥棒め!

警官たちは威嚇したが、それは連行されず終わった。おれは商店街の入口に腰を据え、眠りに入った。作業着入りの手提げ鞆を枕に、本やなんかの入った鞆をそのままにして。夜明けまえに起きると鞆はなかった。おれはどっかに落ちてないか、棄てられてないかを探った。どこにもない。いままで書いた作品も、蒐集したポルノもパアだ。ハーパーを手に入れ、そいつを呑んだ。朝がやってきた。またしても求人をめくった。ひとつ、よさそうなのががあった。公衆電話にかけ、手配師を呼ぶ。公衆電話を切る。金がなくなった。

ほんとうに若いな。

こういう仕事は？

経験は？

まえにアシスト・パワーという飯場にいましてね。

おれんともその系列だよ。

営業とでもけんかしたのかい？

ええ、そうです。そんなところです。

どうやら大阪で軽作業を仕切ってるのはアスホール・パワーらしかった。なまえはちがってどれもがやつらの系列ということだ。これじゃあ、どうにもならない。——いちど訊いてみるよ。男は電話をかけ、おれのことを照会しはじめた。しずまりはすぐにやんだ。

わるいな、兄ちゃん。——だめだとさ。

たったそれきりで車はでてしまい、おれにはもう頼るものがない。おれは知ってた。それだけだ。世間で通じるひとびとはみな、どちらかの椅子に坐ってて、物事を色分けしたり、なまえをつけたり、指をさしてあざ笑える人種だということをだ。セオドアとかいう詩人のいったとおり、おれも《行列した犬を笑えない》んだ。だれかおれにいつてくれ、まだ間に合うと。おれはどや街にむかって歩きながらおもった。もう正后過ぎだ。

\*

いろんな飯場にいった。なんとかできる仕事を探して歩き回った。体力もスキルもないおれにはどうしようもなかった。飯だけは喰えたが、それだけのことだ。尼崎の名優建設から亀山ブランドの工場へいった。マイクロバスに鮎詰めになって転びそうになりながら通った。1階の片づけした。なんともものんびりしててよかった。寮には同世代のやつらがいた。福岡や千葉から来たというのがいた。そのなかでおなじ齡のやつが声をかけてきた。一緒にコンビニへいき、おれはジョニ黒をくすねた。それから歩いて宮内町の本籍地を訪ねた。そこには叔父がいる。かれはおれに金をくれた。

工場での仕事は配置が変わり、プラント内の夜勤になった。職人の手元だ。おれは嫌気が差して辞め、膀胱炎の再発で安藤病院へいった。そして神戸の済生会病院にも入った。ぜんぶ膀胱炎だ。そしてどこにでも父が追いかけて来た。叔父はおれに祖母の遺産を渡すといい、それで室を借りろといってくれた。でも安い物件でも初期費用は30万ちかくだ。けつきよく酔って暴れたのがばれて破談になった。そんなとき三田駅で北野拓朗と遇った。激しい雨が降ってた。傘のかわりにスポニチを広げた。おれは黒ジャケットにカッターシャツだった。けれども革靴を喪い、作業靴を穿いてた。これから飯場にいくところだった。プラットホームでかれはおれに気づき、破顔した。阪神タイガースのシャツを着てた。けれどもかれは忘れものをしたといい、買った切符を払い戻しに階をあがってった。それがかれを見た最后だ。

そのあと大衆演劇に入った。沢龍二というひとが派遣切りになったひとびとを受け入れてる。そんな記事を見て、おれも応募した。話がまとまるまえに西成のセンターあたりでうろついてた。名優でいっしょだった福岡の少年が炊きだしの列にいた。給与未払いのまま追いだされたらしい。おれはといえばスーパー玉出から買った鰯フライで腹を悪くしてた。

一緒に行動しようよ。

そう誘われ、劇団にもいきたいといわれたけどおれはかれをおきざりにした。やがて劇団かつきへ配属された。豊岡の竹野駅に着いたときにはもうふらふらだった。みな薄汚い連中だ。趣味はパチンコだけ。かかっている音楽も夜の繁華街を凝縮した

みたいに最悪なものだった。音色を増やせば曲がよくなるとおもってるばかりのがつくったものだ。下手をすればたった1小節できりで、お役御免のパートもある。

興行は海沿いの村にホテルでだ。窓からは時化が見える。讀賣テレビがおれをドキュメントとして撮影する。かれらは土足厳禁のマットに靴のままあがり、おれに「派遣切り」という辞をいわせようとした。芝居はどれもおなじようなものだった。人情者か、勧善懲悪もの。退屈だった。おれはセットや小道具を入れ替えたりしながら過した。生憎おれはそうでなかったし、嘔吐く気にもなれなかった。かれらはやらせも堂々やる。おれに舞台を雑巾がけをさせ、それを先代が見る。そして科白、「舞台はきれいにしろ、そこは役者の鏡だ」と。かれらはそんな陳腐なものを大真面目にやる。そしていう、「これ以上はやらせになる」と。馬鹿じゃないのか。ひと月経って、静岡へいった。狭い坂道にバックでトラックを入れる。夜更けから朝まで荷物を運んだ。床に穴のあいた古いバーカウンターに荷物をおいた。朝になってみなに金が配られた。おれだけなかった。はつきりとした説明もない。あるとき役者のひとりがあった、ミツホは本ばかり読んでる。わるいことじゃないが、もつとひとと話しないと成長せんやろ。——いったいなにを話せばいいのか。舞台のあいだじゅうずっと短歌を綴ってた。角川短歌へ応募するつもりだった。讀賣テレビのディレクターがいった。「歌詞を書くのならひとを紹介する」。静岡では化粧の練習がはじまった。おれは役者なんかなるつもりはなかった。親方たちが帰ってきた。親方とサシで話したいといった。おれはやめるといった。そとへでると女将にいった。

おれは裏方がやりたかった。

役者なんてなりたくなかった。

あんたなんかにはできるのは役者だけや！

女将がわめいた。うしろから親方が撲りかかってきた。



よくも女将をばかにしてくれたな！

顎をやられ、とつさに石を掴み、やつを睨んだ。親方がいう、

こいつやらかす気やぞ！

やがて2代めがきておれを宥めた。帰りの切符と6千円を与えて去っていった。たったひと月で終わってしまった。おれは実家で短歌を清書した。120首をつくり、そこから50首を森先生に撰んでもらった。なんとか受かればいい。そうおもってつぎの仕事を探した。

六甲工芸社は山口町にあった。夜、歩きながら求人広告を見た。老婦人が箒を持って立ってる。かの女が社長だった。さっそく面接の約束をして歩いて帰った。父はもはやカブを貸してくれなかった。歩いて町までいった。仕事はプラスチック製品の検品だ。理由をいって遅れていった。ペットボトルの蓋に気泡や傷がないか確かめて仕分ける。クリーンルームの作業だ。休憩のとき、若く、不運そうな男がおれに寄ってきた。いかにも不運そうで、うす昏くて、近寄っては欲しくない類いだ。

ヤマチュウにいたよな？

ああ、そうだ。

いっつも絵を描いてた印象がある。

ああ、暇でね。

暇やったから？

おれにはだれだか、わからなかった。仕事が終わって酒を買った。CCをいっぽん。そして呑みながら歩いた。いつのまにやら、手提げ袋を失くした。CCとスタークの『殺人遊園地』があったのに。おれはさらに酒を買った。精神病院まえのバス停で眠ってしまった。気づくと男がいた。おれの服を掴み、なにごとかわめいてる。おれにはどうすることもできなかった。気づ

いたときには、セーターいちまいで暗い隧道を歩いてた。いったいじぶんがなにをしてるのかもわからない。どうにか知ってるひとの家を見つけた。赤坂峠のアカサカ氏。かれは著述家だ。中学生のときにも泊めてもらったことがある。タクシーを呼ばれ、おれは名塩グリーンハイツで降りた。眼鏡もない、帽子もない、ダウンジャケットもない。まさに身ぐるみを剥がされた。

おれは仕事を休んだ。奪われたものを探すためにだ。ダウンは河で見つかった。帽子と眼鏡はだめだった。最初の給与で7千が入った。眼鏡に遣うべきだったが、「失したものを買うためにしばらく日雇いで働きます」といつてしまった。金はすくなくなつた。PC操作やパレットの積み卸しも期待されてた。でも、おれはなにもいわずに辞めた。キャリアアップを望む男を責めないでくれよな？

\*

いろんな求人当了た。寝坊したままやめることもあつたし、いくら稼げたこともあつた。あるところでは面接に商品券をくれ、そいつでスコッチいっぽん買った。仕事にはいかなかった。またぞろ父にせつかれてまたも面接先を探した。大丸ハムに決めた。暑さはひどく世界中のどんなアイスクリームが溶けてるだろう。歩いて田尾寺から流通センターまでいくことになつた。でもいかなかった。丘をあがって、スーパーマーケットへいった。まずは酒だ。小壇のズブロッカを見つけてくすねた。ふたたび入って今度は鮎を狙おうとした。空間把握にむりがあつた。性急でもあつた。しかもこの店舗には監視カメラの盲点がない。あつても狭すぎる。おれは無理やりでてつた。店舗脇の路次で私服に捕まつた。ベルトをやつは掴み、おれをバックヤードへ連行した。おれはガラ受けになつた。でも住所をいわなかつた。電話番号も。親を呼ばれるのは最悪も最

悪だ。警官どもがつめよる。

おまえのこと識ってるぞ、反則金支払用紙届けにいったとき、おまえの姉さんがでたぞ！

けつきよくは電話番号を吐いた。歳を喰った警官がおれのノートを見聞してた。——これはなんだ。——小説だ。やつが笑った。父がやって来て、ほかでもやっていると仄めかした。そういった不都合を自慢するみたいというのが、おれの親父なんだ。おれはあわてて遮った。——牛尾先生のところで金を借りたんです。——實際あの教師から金をせびったのはたしかだった。たった千円。酒を呑むほかに使いでない金だった。帰りの車のなかでおれと父はいがみ合った。おれは北インターの出口で車を降り、歩きだした。こんな気分はたくさんだ。おれは歩いて三田は弥生が丘まで来た。永易の家を目指して、とうとう見つけたとき、雨が降りだした。留守だった。日は暮れてる。ノートいちまいに手紙を書いた。

高校時代にレイくんお世話になったナカタと申します。

いまはちかくの公園にいます。ここ数日ともに喰っていません。

所持金も尽き、仕事も失い、どうしていいのかわかりません。

どうか助けてください。

お願いします。

おれは公園で眠った。ちいさなベンチにからだを載せ、雨を凌いだ。すると来たんだ、永易の旦那が。かつてジゴロみたい

な風貌は失せ、丸坊主に髭面だった。

やっぱおったんや。

うちのおかんはいたずらや、いうてたけど。

それからやつの家で休んだ。おれはやつからせしめてやろうとうそをいった。家にはだれもおらず、連絡もできない、じぶんは放浪の果てで、ひとりぼっちになったと。翌日、うそはあっさり暴かれて母へ電話が繋がれた。やつの母親はなかなか抜け目ない。永易とおれは車で出かけた。郵便局員の家だ。おれの知らないだれかだった。やつがおれのことを話し、仕事がないかと訊く。おれはもう郵便はうんざりだ。でも内勤ならできないこともないだろうといった。話しが曖昧なまんまスーパーへいった。おれが捕まったマックス・ヴァリュだ。車からでようとしないうれを永易が笑った。

どないしてん？

ここで万引きやって捕まった。

なに盗んだんや？

鮎だ。

貰えたか？

いや。

やつは笑った。それから3人寄ってボンゴレをつくった。もともとはスパゲッティをつくるはずだった。でもおれが余計なことをいって変更になった。電子レンジで使う茹で器じゃあ、茹で汁を使えないといったからだ。あまりにも愚か。おれは赤ワインを呑みまくり、ふらついている。——呑んだくれやな！——けっきょく実りのある話にはならなかった。永易の家では母が待ってた。コーヒーを呑み、話した。——息子には放浪癖があるんです。——知ったような口を効きやがって、このくそ女。

おれは深夜徘徊したって、深夜まで苦役をしようが無関心だったくせに。まったく救いがたい。おれはけっきょくまたあたらしい仕事を探すしかなかった。たいぶ臺の立ったババアがやってる口入れ屋にいった。流通センターでの仕事だという。内容は飲料水の開梱作業。おれは2日しか持たなかった。やる気はあった。しかしどこかがわるいんだ。ババアがいうにはおなじように宣告されて、そこから返り咲いた女だっていたらしい。でも、理由がわからない。もしかしたら終業後にボトルのコーヒーをくすねたのがいけなかったのかも知れない。ババアは予定の期間を充たさずに鹹首になった場合、給料を減らすとほざいてた。けれども「法律事務所と労基に相談する」といったら満額の金が入って来た。2万。阪神競馬場を見学にいった。テリオペペを永易にプレゼントした。やつと呑むために。ふたたび、やつはおれを拐かし、焼肉屋で1万奢らせた。気の弱いおれがだめなんだ、ちくしょう。けっきょくテリオペペもやつがほかのやろうと呑んじまった。

\*

なみはや紙業は瓢箪山にあった。飯もガソリンもなにもかも、じぶんの稼ぎからださなきゃならない。2日の研修のあと、ひとりでトラックに乗った。天敵は子供会のやつらだった。新聞紙をもっていこうならやつらがわめき、むかって来た。おれは慌てて紙を載せ、車で突破した。いいやつもいた。近所の老人は新聞紙と一緒にビールをくれた。かれの手首から先は両方ともなかった。それでも巷の人間よりも人間だった。

おれの車がパンクしてしまった。おまけに免許の更新が迫ってた。おれは父に借りようとした。だめだった。なんとか友人に借り、伊丹の更新所までいった。でもそれからすぐに鹹首になった。おれは社員から2千円せしめ、求人を見た。京都の風俗でボーイを探してるらしい。ひとまず西成へいった。路上でシャツを撰んでるとき、男が現れた。かれは浮浪者を施設や病

院に案内するブローカーのみたいなものだった。でもべつに金をとられるわけじゃない。

さっそく自立支援センターで浮浪者の入所施設を手配してもらった。自彊館といった。そこではさっそく喧嘩さわぎに出会した。老人が若い30男にむかって「ちんどん屋みたいや」といった。若いのは激しく怒り、老夫に掴みかかり、撲りつけた。ちんどん屋が悪口として成り立つなんて、車谷長吉の小説でしか読んだことがなかった。入所して2日、激しい背中痛みに襲われた。飯も喰えない。西成区職業安定所、つまりセンターの病院に診てもらった。またも急性膵臓炎だ。1ヶ月の加療だ。でも、けっきょく外出中に呑んだのがばれて追いだされた。病院をでたあと、ブローカーに遇った。かれは退院祝いに鮎を奢るつもりでいたという。礼をいって歩きだした。そこへ自転車に乗った老夫が現れた。話しかけて来る。酒を奢ってくれた。しつこくじぶんの室に泊まるようにいった。おれは用事があるとかぶりをふった。気味がわるい。それでも、けっきょく根負けしてかれの白ゆり荘にいった。針仕事で生計を立ててるといふ。痩せてて背は高い。おれは酔ってふらふらだった。そして眠つてるときだ、やつがおれの顔を舐め始めた。耳の穴に舌を突っ込まれた。おれは驚いて眼を醒ました。

なんでこんなことを？

あんただってわかってるんやろう？

あんた、家族もいないのかよ。

息子がいる、孫もいるで。

でも、こんなのまちがってる！

なにがや？

おれはそこをでた。やつは追って来る。暗がりのなかを走り、ホテルに泊まった。気持ちわるくなってシャワーを浴びた。犯された女たちの気持ちがほんの少しだけわかった。それから家に帰った。ヘミングウェイの短篇集ばかり読んだ。『兵士の

故郷』の気分だった。病院で知り合った老人から電話がかかって来た。——会わないか、ということだ。かれは元やくざで80を超してた。おまえに5千円やるよ、スープも奢るといわれた。でも合流できなかった。おれはシリト―をまねて掏摸の少年についての短篇を書いてた。でも最後まで書けなかった。ひどい争いをやらかした。おれは父に掴みかかって、テーブルに叩きつけた。おれは酔ってた。さんざんに吠えまくった。姉のおもづらを撲り、いちばんめの妹に階段から突き落とされ、警察を呼ばれた。「ポリ公なんざきらいだ」といつてかれらの好奇心を刺激した。でもそれ以上なにもいわなかった。翌朝、父はいった。「おまえに手切れ金をやる」。20万とிட்ட。まず10万を受け取った。でも、それでなにができるというのか?——室だって借りられない。おれはさっさと使い果たした。手に入れたのはソフト帽だけだ。次の10万を父はださなかった。「そんな無駄遣いをするやつにはやらん!」。おれは怒ってまとも荒れた。

とりあえず入院できるところを探した。三田宝塚病院にிட்ட。医者が自裁したというところだ。ロビーでカミュの『ペスト』を読んでたら、幼い少女が寄ってきて覗き込む。——これは病氣の話なんだとおれはிட்ட。かの女によつてはどうでもいいことだった。おれは医者と話をつけ、入院になった。ところがあまりにひどい薬物依存者が多すぎた。どうしたわけか、本棚の本はみな背表紙が剥がされてる。看護人たちは屈強な男どもで、無表情を決めてる。薬の説明もせずに患者の口へ放り込む。いったいここはなんだ。畳部屋でおれは横になった。みなが持つてる私物用の箱がない。夜になってひとりの老人がおれのことを漁る。小銭が盗られた。朝になって鞆を見た。日本画用の筆がすべて折られてた。いったいなんでこんなことが起きるのか。おれは医者に抗議した。老いぼれにも、弁償しろとிட்ட。おれはそのまま退院した。いまだに2万の請求が来る。

おれはコーン・ウイスキーを呑み、交番へிட்ட。救急車を呼んだはずが母がやって来た。おれは呑みつけ、母の車にゆられた。おれは母性をいまだに知らない。おれのなかには父権しかないんだ。ともかく母はすべての判断を父に任せ、黙認してた。おれがなにをされてもそうだ。小さいころ、夜の11時まで正座で説教された。父は亢奮して収まりがつかない。そこへ

母が歩いて来る。一瞥くれて去る。助けはくれない。おなじように女たちも一瞥で遠ざかるだけだ。かの女たちがどこへ去っていったかなんて男たちのだれも知らない。いちばんめの妹がいった。

これからほーくんのこと、あんたって呼ぶわ。

おれが働かないのを妹が酔ってなじった。おれのほうも以前、キャバクラ勤めのかの女を女郎長屋の蛞蝓なめくじと揶揄したらしい。生憎、憶えはなかった。そいつを父が暴露し、妹は激しく怒って、財布から3万ばかりだし、

さっさとでてってや！

おれは金を掴もうとする。父がそれをやめさせた。おれの手が入った室に棲み、おれの苦役のうえで胡座をかい、おれの不出来をみなが責め立てた。妹はいつしかいなくなり、室の荷物もすべてなぜか残ってる。ひとはおもってる以上にたやすく消えてしまうものだ。おれだって傍からおなじことだ。ただ仲間も恋人もないから出戻りを余儀なくされるときがある。でもおれも帰らないときが来るだろう。金色の斧によって、書物みたいにこの忌々しい土地を分かちたい。そして銀色の鍰で飛び出す。おれにはきれいな羽根があって、どこまでもいけるんだぜ。手に入らないものはない。なにかもこの手のなかだ。深夜ずっと起きて詩を書いた。そいつはちよいとブローティガンみたいだったかも知れない。いまはなにかも忘れちゃった。おれは大阪にむけて旅支度をはじめてる。今度はきつとうまくやるさ。

\*



かつて「夢のなかの同窓会」という短篇を書いてた

ノートを喪って

いまはもうこの世には存在しない

わたしはずっと

わたしを見棄てたものの正体を

明かすことに夜をつかった

短篇の内容はこうだ、

古紙回収業者のわたしはそこを誠首になり町へでる

ひどく酔って罫を求めてると

かつての同級生たちに出会すのだ

求められない自身を拗ねて

かれらに絡む

でもわたしはそれを夢とおもってる

かれらに金を恵んでもらって

中之島を臨む河岸にて

眠る

あさになってわたしはポケットの金に気づき

本を買いに歩く

しかし河に落ちて死ぬ

れもんの匂いが遠くからして来た

運河に光りが差し、

水死人を

悼む

謹



\*

映画館に着いた。声の主を求めてわたしは扉を叩いた。はじめにレッドネックがでた。わたしを招き入れて舞台まで歩く。スクリーンのまえにはY、裏にはBと、見たことのない顔があった。かれが社長ことスコフスキイだった。緑色の眼でわたしを見る。太りかけたからだをスーツで匿い、銀縁の眼鏡が光ってみえた。楽に話しを進めようとかれはいった。登場人物全員が焦っていた。出し抜かれまいとゲームを始める。ナイト、クイーン、ポーン、あるいは桂馬。机のしたで足を蹴り合う子供みたいに、意地のわるさが際立っている。わたしはだれを殺すのか、だれから殺すのか、だれがいちばんロージを苦しめたかを算段に入れた。そいつはスコフスキイと、ハンクだ。

狙いはなんだ、現ナマか？

そうだ、——でも贅沢はいわない。

YとBはわたしを睨みつけ、牽制する。社長はレッドネックを呼び、金を持ってくるようにいった。指3本を突きだした。わたしはナイフの柄をポケットのなかで握った。やがて現金が来て、社長が受け取った。素早く勘定を済ませ、わたしのほうに差しだす。立ちあがってテーブルを見下ろした。不意にうしろから撲り倒された。レッドネックだ。長いあいだ眠った。ひさしぶりに眠ったような気がする。夢のなかでテーブルレコーダーがまわっている。録音室らしい。でも歌手も技師もない。わたしはだれかのために青い馬を育てている。首のみじかい、おかしな馬だ。やがてレコーダーがとまって、スピーカーから滝田の声がした。わたしはかれに助けを求める。

テーブルのうえにわたしがいた。からだを縛られ、どうしようもない。足も手も首もだめだ。社長がわたしを見下ろしてい

た。自由になりたいか？——自由には金がかかるんだよ。きみは少しばかりついていた。でも、まちがった道を歩いていたらだよ。——わたしは黙って天井を見た。蜥蜴のマリアッチが描かれている天井をだ。なぜこんなところにいる？ ツアーはどうした？ 音楽はどうしたんだ？

きみがYやIveを殺るのなら放してやろう。

わたしに忠誠を誓うんだ。

選択の余地はない。けっきょくわたしは1週間でふたりを殺すことになった。わたしはあたらしい銃とナイフを授かった。黒人には気をつけろともいわれた。わけは訊けなかった。それから町へでて、あたらしい宿に就いた。ラジオに耳を凝らした。Cursiveの“What I have done”が流れている。懐かしい歌だ。ひとりぼっちでアルバムを聴いていたときをおもいだす。

わたしがYを殺したのは火曜日の雨の日だった。午後6時、ダンスクラブのマスターとして働きにいくかれを尾行した。車はスコフスキイが手配した、ラッピング・トラック。炭酸ジュースの広告がでかどか載っている。やつが駐車場に車を停めた。車を降りた。店へ入る。姿は消える。わたしはトラックをやつの車のまえに停めた。でられないように。ラジオに耳を傾け、口笛を吹く。そしておれも姿を消す。夜になって霜が降りてきた。やつが駐車場にもどるまで、手前のレストラン・バーで食事をとった。ありきたりのステーキに、つけあわせの野菜と赤インゲン豆、そしてコーヒーを味わい、窓の隅から様子を伺った。やつは駐車場で慌てていた。携帯電話でどこかへかけている。おそらくその管理人だ。わたしはバーをでる。ポケットのナイフに構った。やつを殺させてくれ。お願いだ。ロージーのためだ。

どうかしましたか？

車がだせないんだ。

Yの顔が一瞬、静止した。声もない。

なにしに来たんだ？

車を取りに来たんですよ。

ナイフでやつの腿を刺した。下から突きあげるようにして。感触はない。倒れかかったやつを蹴りあげ、脇腹から腰を挟んだ。やつは膝を折って崩れ落ち、頭を打って仰向けになった。雨が血を洗い、やつのからだから体温を奪っていく。死はもうじきだ。わたしはトラックに乗って走り去った。そのあいだずっとハミングしていた。ラジオから流れる、Joy Divisionの《But I remember when we were young》——わたしはまた宿を変え、考えた。愛についてどれほど勇敢であっても、感情にふりまわされる愚かものであってはいけない。つぎはEve医師だ。かれをどうするか。おれはなぜこんな諍いにこだわり、ひとまで殺すのか。殺せるのか。ずっと心のなかにあった復讐心かも知れない。父への、母への、同級生たちへの。

医者は隣の村に棲んでいた。金曜の夜。寒さはずっとひどい。家はくすんだ黄色や灰色になって、植え込みの植物は伸び放題だ。荒んだ生活が見えた。しかし、車は真新しいアウディだ。道へ油を撒く。車の動線にたつぷりと注いだ。朝、車はおもいどおりに滑って、路肩に突っ込んだ。わたしはやつを助けるふりをしてドアをあけた。エア・バッグが作動し、やつは気を喪っている。わたしはやつを棍棒で叩き殺した。返り血が顔や服を濡らした。いい気分じゃない。わたしはじぶんの車に乗った。またしてもラッピング・トラック。顔を洗い、服を着替え、タオルと一緒に荷台に隠した。もちろんのこと、警察だって黙っちゃなかった。いくら内通者がいようが死人が多すぎる。それにおれは失った仲間を待つひとりのよそのものだ。叩けば埃がでる。おれはロージーのところへいった。あとひとり、スコフスキイさえ殺してしまえば終わりのはずだ。そう信じてかの女を抱いた。電話がかかってきた。ハンクからだ。

この豚殺しめ！

いきなりなどうしたんだ？

おれは失せろといったはずだ。

なぜまたおれの妹に手をだすんだ？

かの女を傷つけたひとりはおまえなんだぞ。

いったいどの口がいつているんだ？

わたしは怒って電話を切った。

ここからでよう、ロージ。

だめよ、わたしは。

もうなにもできやしないって。

長いあいだ、窓を眺めた。どこにも警官の姿はない。だが確かにリストには入っているだろう。やがて夜になって、ロージは眠った。アルコールと睡眠薬をまぜていた。とめようとしたときには、もう口のなかだった。わたしはかの女を寝台まで運び、寝かしつけた。坐ってかの女を眺めた。おれはどうしても、かの女から離れたくなかった。ハンクの白いピックアップがモーターの裏手に駐まり、かれが降りて来た。まっすぐこちらにむかって来る。そして寝台のロージを見、わたしを見た。

組織のやつらを怒らせたみたいだな。

ああ、そうらしい。

おまえは何人、殺すつもりなんだ？

わからない、ただかの女を救えればいい。

おまえなんかに救えるはずがないさ。

薬はあんたが渡しているみたいだな？

長い沈黙がずっとつづき、やがてハンクは階下へ降りていった。そしてそのまま朝までどっかに消えた。光り。翌朝、わたしはやつを問いつめた。やつはたやすく吐いた。ロージーのために薬を買っていること、ふたりは近親相姦まがい仲であること、その暮らしをずっとつづけるために組織とつながっていると。関係を解消する気はない、やつはそういった。わたしはやつを撲り飛ばしていった。

そんなことはまちがっている、もうやめるんだ！

いやだ！

ぼくはロージーが好きだ！

騒ぎを聞いてかの女が降りてきた。

「なにをやっているの？」——わたしはなにもかもをぶちまけた。かの女は怒ってわたしの襟を掴んだ。——あなたにはなんの関わりもない話よ。さっさとでてって殺しでも繰り返せばいいわ。なんたってあなたがいちばんの鴨だもの。たかがひとりの友人がいなくなったからって大騒ぎして、情けないとは考えないの！——わたしを連れて去りたいなら、そんなことはもうほっとくべきよ！——ロージーが吠えた。

わたしはなにもいえなくなって立ち尽くす。太陽がじりじりと高くなる。わたしはふたりを宥めすかし、ベッドに横になった。やがてロージーがわたしを慰めに来た。酔ったロージー、キメたロージー、憐れなロージー。わたしはかの女の愛撫に応えて、抱き合うと、シャツを脱いだ。もちろんズボンだって。

\*



やさしい、

しとやかな痴性に埋もれて、

ぼくは暮したい

夏の絵葉書

禽獣を描いて閉じ込める

まったく人間というのは善を圧倒し、

悪を見ない

それぞれがそれぞれの失寵を懼れ、

軛を待つ

水平線のむこうがわで

神々よりも退屈した男が携帯テレビジョンで『日本の話芸』を観る

平和があるかぎりには敵を欲しがる

われわれは手を洗うまえにきみを殺したい

われわれが愛し合うためにも



\*

家にはいられない。またしても愛隣地区へいった。そしてセンター付属の病院で診察を受けた。精神科を受けたいという入院できた。おれのあたまのなかには、世界の果てが、ここではないどこかがあった。ジャックスの『腹貸し女』を聴き、モンティ・パイソンを聴き、婦長から借りたジャンス・ジョプリンを聴く。外出禁止だった。毎日、ブラックコーヒーを呑み、詩や散文を書いた。あるとき、看護婦に本を買いにいつてもらった。ブコウスキーの詩集『モノマネ鳥よ、おれの幸運を願え』だ。こいつは難ものだとおもった。どう読めば、愉しめるのかがわからない。不眠症の夜、おれは突然なにもかもがわかった。ブコウスキーの詩を愉しめるようになった。とくに『単』という詩がよかった。おれは新聞記事を読み、それを引用しながら『広告』という詩を書いた。つぎつぎに詩が生まれた。どれもひとびとや歴史や文化を憎悪してた。『喫煙所』、『天使』、『停留所』、『脅迫者』、『検品』、『前線』、『不眠』、『吉報』、『正午』、『悪意』——悪態をつき、世界を罵った。

ひと月経ち、丹比荘病院の精神科へと移された。そこは男女共同だった。鳥取さんという女の子がよく話しかけてきた。長尾という老人とも親しくなった。おれは新訳のホイットマンと万葉集を買って読んだ。絵を描き、詩を書いた。そこへ背広をきた憂鬱の大きな塊りが「わたしも絵を描きたい」、「わたしも詩を書きたい」といつて近づいてきた。やつはどの患者からも毛嫌いされてた。おれは画材を貸してやった。顔も見たくはなかった。みんながいった、相手にするなど。おれは詩をまとめ、冊子をつくった。そいつを永易に送った。

長尾老人の使いにいたり、外で酒を呑んだり、おれは満喫してた。高価い葉巻を買って喫煙所で味わった。森先生にも作品を送った。だがあるとき、飲酒がばれてしまった。引き出しに隠してたワインも見つかった。おれは牢獄へ入れられた。そ

してそこをだされ、いつ外出が自由になるかと医者にいった。にやにやしながら医者はいった。——きみはずっと外出していい、退院だ。看護師たちがでていけと促す。おれは慌てて長尾老人のところへいった。

ここを追い出されるんです。お金を貸してくれませんか？

きみにはまえにもあげたよ。

この絵をあげます。これでどうか——じぶんの描いた静物画を渡した。

わかったよ。きみに投資する。

話もおもしろかったし。

2千円を得て西成区役所へいった。保護科から精神福祉士を紹介された。アルコール症であるのを話し、入院への検討が始まった。けれども、けっきょく実家に連絡されてしまった。父がでて迎えにいくという。おれは切符代を渡された。12月の寒さのなか、駅に降り立つ。雪が降りそうだった。やがて父の車が見えた。乗り込んだ瞬間から面罵された。正月までに仕事を探す約束をさせられた。

おれは夜勤の荷物流しになった。昼は、シャンプーの箱詰めをした。どちらもくだらなくことだった。おれはサラ金で10万を借りた。上津台へいき、アウトレットモールで半額のダウンを買った。9千円。廊下で父に出会した。——そんなもん買う金あったら、全部よこせ。

なにいつてるんだ、仕事するにも金がいるよ。

だったら早くでていけ！

防寒着ぐらい仕事にはいるだろ？

そんなものぜんぶワークマンで買えるわ！

飯代やガソリン代はどうするんだ？

さっさと金をだせ！

こんなやつと話すのはむりだ！——おれはカブに跨って仕事にいった。たった2日で仕事を辞め、20万を借りた。愛隣地区のどや街、おれは安いホテルに泊まって求人をめくった。土方も飯場もうんざりだった。データ入力の求人があり、いつてみた。出会い系サイトのさくらだった。女になりすましてメッセージをやりとりする。タイピングが遅いといわれ、採用されなかった。おなじように幾つかの入力作業にいつてみた。おなじことだった。つぎはポルノビデオの男優、これもだめだった。貧相なからだと女性経験のなさを知られたただけだ。次にゲイパブの面接へいった。身ぎれいな小男が案内した。狭い階段をあげ、室に招かれる。黒いベッドがならんだ。そして冊子がたくさん置いてある。表紙にはゲイのカップル、そしてエイズの文字。——おれは靴をもっておもてへでた。けっきょくなにもできなかった。金はなくなっていく。おれはルート配送の仕事を見つけ、滋賀へいった。面接を受け、寮に入った。でも仕事は、冷蔵庫の組み立て作業だった。バックパネルを4人がかりでつくる。現場主任らしい老夫がいった、——だれだ、こんなとろいやつを連れてきたのは！——こいつは反撃しないやつにしか、そんな口は叩けまい。

おれはその日辞めた。流れ作業なんざできやしない。金を握って大阪へ帰った。次の朝だった。キセルして和歌山までいった。ソーブランドの店員になるためにだ。社長はいきなりおれに1万をくれ、そいつで靴を買えといった。からだがもうくたきた。酒でいかれてる。出勤初日、這うようにして店にいった。薄汚いビルディング。裸婦の彫像。赤茶色。——おもてでずっとそとに立って、客が来るのを待った。来なかった。夜になってようやく客だ。かれらの車をおれは配車した。車をぶつけないか、気が気でなかった。休憩時間、おれはネクタイを路上に棄てて愛隣地区に帰った。足が痛かった。突き刺すような痛みが内側からする。跛を引くみたいに歩く。おれはホテルをとって横になった。おれにはなにもできない。おれにはなにも

書けない。そんなとき、永易が訪ねてきた。

仕事、見つきりそうか？

いいや、全然。

なんか紹介できたらなあ。

おれたちはそとにでて貧民窟を見学してまわった。おれは幾らか酒を呑み、またも金を減らした。足の痛みはひどくなるばかりだった。腿のつけ根まで痛みはひろがり、歩くのがつらかった。永易はいいやつだが、おれはその陽気さについていなかった。いつしか股間までが痛くなり、眠ることもままならなくなった。おれはまた西成区役所へいった。そして新生会病院を紹介された。アルコール症の専門病院で、和泉中央にある。入院するまでホテル・ポパイに投宿することになった。料金はあと払いでだ。どや街の図書館で本を借りて読んだ。あの新今宮文庫は驚愕もので、ブコウスキーもあり、ノーマン・メイラー『タフガイは踊る』があるかとおもえば、コリン・ウィルソンの『暗黒の祭り』があり、さらにはドイツ文学の『犬』やロシアの労働文学全集もおかれてあった。入院当日、おれは車でブルーベリー・ジュースを呑んだ。金はなくなった。終着駅からバスに乗り、病院にいった。まるでなにもないところに病院、そのさきには十字路があった。けれど天使も悪魔もない。車のない通り、角地のコンビニエンス・ストアだけが明るい。

受付にいくとおなじ姓の女の子がやって来た。おれはじぶんでアルコール中毒だといった。かの女はじぶんで認めるひとは珍しいといった。足の痛みのこともいった。治るのに時間がかかるらしい。はじめは閉鎖病棟に入れられる。いちばん奥の室。40ぐらいの男が声をかけてきた。窓を指す。

あそこに3本の樹があるだろう？

あそこで3人が首をつったんだ。

そういつて、喰いながら蒲団に潜り込んだ。小さい悪魔みたいだった。なんなんだ、ここは。おれははやくも後悔しはじめた。一般病棟に移され、外出が赦された。永易が見舞いに来た。庭に坐って話をした。やつはジョイントらしいものを持ってる。ふたりでまわして吸った。なんにも感じなかった。あたまがくらくらしたただけだ。あるとき、富山から来た青年が見舞いに来た。蟹谷くんといった。かつておれがつくった連作動画のファンだった。ふたりで駅までいき、牛丼を奢ってもらった。2ヶ月経って、おれはまたしても酒を呑んだ。3回も。牢獄に入れられた。娯楽室に『自由こそ治療だ!』という本があるのはなんの皮肉だろう。こんなものは医療とは呼べない。ただの暴力だ。和氣院長なら鉄格子と婚姻できるかも知れないが、おれにはできない。隣の牢獄では老人がずっと叫んでいた。

看護婦さん、看護婦さん！

ここは看護婦さんのおらん病院か！

それから転院が決まった。浜寺病院だ。そこでは外出禁止だった。ひとと月我慢した。またしても蟹谷青年が来た。おれは横になったまんま話をした。かれは発達障害を抱えてるといった。おれもそうも知れない。ずっとずっと感じてたことだ。おれは恐らく学習障害で、数字に疎いんだ。だからいつも計算に躓いてしまう。恥ずかしい眼に遭う。早くそれを明らかにしてもらえない。おれは『カーヴァーズ・ダズン』と『拳闘士の休息』を読みながら過す。あるいはブコウスキーの詩集『水に焼かれ、炎に溺れ』の原著を眺めた。いつになったらおれは自由になれるのか、そしてだれといった口づけをするのか。まだまったく、なにもわかつちやいなかった。いまわかつてるのは、おれはろくでもない男だということではない。作品はずっと書いてないし、もはやなんの靈感もイメージも見えなくなってる。さあ、長男よ、おまえ、どうする？——おまえ、どうなる？





\*

愛隣地区の貧窮院、今池平和寮に入所した。もう5月だった。ふたりづつの室で、マスにかくこともできない。でも同居人は居宅保護が決まってすぐにでてった。週に1度は新生会まで受診にいかなくてはならなかった。車で1時間以上、受診までに1時間以上、帰るまでに3時間以上かかった。町のあちこちで喧嘩や諍いが起こり、不審者たちが跋扈してる。なんとも刺激的だ。月々のわずかな金でネットカフェにいき、詩を清書した。そして森先生へ送った。通りで自転車の男女がわめく。

ついて来い！

勝手にいけや！

そういった小競り合いはうんざりするほどある。かとおもえばひとりの男が数人から撲られ、倒れるのを見たこともあった。撲ったやつらは消え、そのあとになって警官たちが現れる。たぶん捕まりはしないだろう、そうおもっておれはシャツターを切る。あるときは年増女がおもむろに放置自転車のサドルを盗もうとする、郵便局からでた男が両脇を警官たちに捕まれて歩かされる、パトカーが来る、ふいに年増女が連行される、そんなこともあった。あるいはまえからやってきた年増女が、

これどうしたらええ？

そうわめきながらおれに近づく。手にはテレフォンカード、それも漫画『白鳥礼子でございます』の絵が描かれてある。急のことに返事につまった。「わからんのやったらええわ！」と女は絶叫し、去ろうとする。そのとき路上に男が倒れてて女はかれを「起してやれ！」とどうしたわけか、おれに命じ、おれがそうするとまるでじぶんの手柄みたいにわめき、そばに停まってるカブから封筒をだしてなぜ男に渡す。カブを男のものだとおもったのだ。でもそれはどうみても配達員のものだし、

男は見るからにそうじゃない。——こういった理不尽さと和解できなくばこの町では暮らせないのだろう。どこに発狂人がいるのかわかったもんじやない。沖縄出身の呉屋という男がおれの担当になった。おれは毎日欲求不満を抱え、町を歩きまくり、夏のあいだじゅうずっと、おれは絵を描きまくった。携帯電話の料金を払うために。でも金にならなかった。おれは西大寺までいき、永易黎に会った。

山頭火みたいな気分や。

《うしろ姿のしぐれてゆくか》ってか。

いや、それやなくてなあ、でもおもだされへんねん。

とにかくおれの仕事場にいやや、

おまえの絵、買ってくれるかも知れへんし。

内装業者の事務所でおれは絵を描いてみせた。色鉛筆の静物画だ。かれらはおれを画材屋に連れていき、筆や絵の具を奢ってくれた。おれは3本の筆といくつかの岩彩を撰んだ。もっとしたたかに1万円分ぐらいせしめるべきだとあととおもった。おれは古本屋で昔の絵葉書と一緒に『野獣の性生活』という本を買い、やつに送った。

ある夜、面会があった。永易が来てた。やつと夜の町を散歩した。やつの恋人にも会った。おれの送った絵葉書は古すぎて機械に挟まり、遅れてとどいたという。あいかわらず陽気で、愉快的やつだった。三角公園では夏になると、反戦団体が嬉しそうに戦争の危機を叫んでた。へたな歌、へたな太鼓、センスの欠片もない、ひどい代物。とにかく夏のあいだずっとそれがつづいた。職員とともに大阪障害者労働センターへいった。目的は、発達障害の検査だ。運動機能や、言語能力、絵を描いてイメージを診る検査やなんかをした。おれはやはり障害があった。言語能力は一般よりも優れてるものの、数字に弱い。動作が鈍い。想像力が高い。運動・作業が鈍い。数ヶ月してから、精神障害者手帳が交付された。毎日、腹をすかしてうろつきま

わった。だいたい日本橋までだ。中古レコードを眺めて過ごした。難波までいけば古書センターと、タワーレコードがある。ジュンク堂はかなり遠かった。隠れてアルバイトをしながら暮らした。

秋の暮れ、階下でカラオケがはじまった。歌ってやろうかと降りた。でもおれが入る隙はない。娯楽室に入ると若い男がいた。場ちがいで、派手で、ひたすら幼稚なキャップにパーカー、黒縁眼鏡の見慣れない顔だ。どうしたものか、かれはいきなりおれにいう。

イギリスのひとですか？

え？

イギリスのひとですか？

なにいつてんだ、このくそがき。若いというのにこいつは頭が逝ってる、かわいそうに。これじゃあ末期、ナムサンだな。おれはそうおもったけど、よく聴けば「自立のひとですか？」といってるのがわかった。

入所者だよ。

ここじゃあ、ただひとりの20代だ。

つまりあなたは入所者でただひとりの20代、ということですか？

やっぱりこいつは末期だ。もう手の施しようもない。おれはそうおもいながらだんだん腹が立ってきた。話が理解できれば肯げばいいものをいちいち無意味な要約をして鸚鵡返しにする。なんてやつなんだ。

ぼくはひまつぶしでDSやってるんです。——だれもそんなこと訊いてはいない。

DSって知ってますか？——知ってるよ、ばかどもの電気式おしゃぶりだ。

莚は吸いますか？——だれか教えてくれ、こいつ、アンケートでもやってやがるのか？

吸うけど、いまは持っていない。

それは持つていたら吸うということですか？

おれは娯楽室からでていった。くそつたれ。話を通じねえ。そして莚と燐寸を持つてもどった。やつの眼のまえで吸うも、やつはもうおれに関心がない。眼も合わせない。かわりにおれの燐寸を見た老人が「燐寸持つてくる！」とくそがきに告げ、急いででてった。そしてがきに燐寸を見せる。もちろんのこと、がきにとってはどうでもよかった。

屋上の大きな水槽のせいで冬になっても蚊が湧いてる。夜びって殺しまくる。年の瀬、おれは古書センターにいた。セールのラックに帯つきのブコウスキーとカーヴァーをみつけて買った。いい気分で寮に着いたとき、冷たいなかで首をかすめた。父が立ってた。だまし討ちに遭った気分。役人も職員も事前に報せてくれなかった。もう一生会うことのないだろう人間をおれは睨みつけた。おれは父との話しを拒んだ。役人がいった、

お父さんは、あなたことを心配してるし、

あなたに絵を習わせてもいいといってるのよ。

うそっぱちもいいところだ。そとづらのよさ、あの男にはそれしかない。カミユの辞を懐いだす。《たとえ絶望にすっかり、とりつかれていても、あたかも希望をいだいているかのように振る舞わねばならない。——さもなければ自殺しなければならなくなる。苦悩になんの権利もない》だとさ。年があけた。おれは劇団『犯罪友の会』へいき、団員募集に駆け寄った。主宰と雨のなかを歩く。おれは詩を書いているといった。かれは現代詩がきらいなようで小説はどうかといった。物語はずっと書いてない。おれのなかでずっと空まわりしつづけてた。劇団に着いて話を聴く。おれの顔を見ていった、

きみはいじめを受けてきたんじゃないのかい？——おれは肯いた。

やつぱりな、——きみみたいな子はみんな表情に乏しい。

でも舞台をやつていればよくなるよ。

それから劇団の活動を写真で見た。おれの好みじゃない。それにチケットノルマもある。最初のうちは求めないといった。それでもなんだか場ちがいのような気がしておれは辞退した。帰りしな主宰から、「小説を書きつづけなさい」といわれた。おれもそうしたかった。それから3月11日、地震だ。そのときおれは天下茶屋駅にある天牛堺書店で古本を見てた。ゆっくりとからだが揺れる。おれは病気にでもかかったのか?——やがて揺れは収まり、おれは歩く。片手に眼鏡、もう片手に罐の清酒。天井のはずれから光りが一瞬貫いた。痛い!——焼けるような痛み、右手に虫に刺されたようなあとが残った。なんだ、これは?——考えようもなく、役所の酒害教室へいった。帰り際、地階のテレビを見た。空撮される平原。テレビ画面には〈RONG MOON 漂流中〉とあった。水がゆっくりと覆いかぶさっていく。東北らしい。おれは右手をさすった。寮に帰るともうだめだった。手の腫れと寒気でどうにもならなかった。清酒に右手を着け、恢復を願った。翌日、レントゲン検査があった。おれは右手のことを医者に行った。相手にされなかった。痛みは1ヶ月つづき、腫れは収まらなかった。丸々と膨れ、そのあと数年治らなかった。おれは偽名を使って、ドカチンに入った。USJでガラ出し。耐えきれず、逃げだしてしまった。ヘルメットを脱ぎ、地上階の扉をあける。ユニバーサルシティ駅から新今宮へ帰った。1時間でトンコした。ひとつひとつの記憶が、棘になって刺さる。落ち着かず、眠れず、考えられずにいる。どうにもならないまま寝台のうえで過ごした。夜、シヤウウッド・アンダーソンの短篇集を読み終えた。

4月になっておれは両親と新生会病院のロビーにいた。おれに居宅生活訓練をさせるべく、医者の意見書が書かれた。障碍であることで積年の疑念がいくらか晴れた。両親は医者のもえでおれの藝術センスとやらを話題にした。図工でつくった作品のことを、おれは憶えてないもののことを熱心喋った。場ちがいな話だ。不愉快でしかたがない。どうしてこうも自身の理解と無理解をいつもとりちがえているんだろう。飛田新地の一角にそのアパートはある。おれは隠れて毎日酒を呑んだ。ノック

ピンは直後に酒を呑めば無効になるってことを知った。永易が遊びにきた。飛田をひと通り案内したあと、一緒に呑んだ。父にはやつがいったとおり、絵画教室の代金を払わせた。やつはやつぱり渋った。けっきょく2週間分だけだした。おれは金欲しさに詐欺の片棒を担いだ。通販の健康食品を女のなまえで受けとる。そいつは1回こっきりだったけど、2万と半分が入った。そいつで中古のラップトップを買ったけど、不具合が多すぎて返品した。

そのいっぽうで森忠明とは断絶した。かれの手紙にあった「バーチャルな印象」という評に激怒して、最悪といっていい罵倒文学を送りつけたからだ。朝から呑んで吐きちらかす、そのてまえにきてた。ゆうぐれどき、ほんのおもいつきでダイアルに手をかける。その声は冷め切ってた。

で、——なに？

作品を送ったのですが。

ああ、届いてるよ。

どうでしたか？

どうでしたかじゃないよ。

あんた、おれに破門してくれって書いてきたんだぜ？

そんなやつがどうでしたか、なんてよくいえるな！

あんなきたならしい詩なんか送ってきやがって！

あんたはどうしてそう品がないんだ？

詩なんか猫かぶりでいいんだ！

あんたは酒に溺れてどんどん品がなくなってる。

あんたそれが自分でもわかってるだろ？

それをなんだ、三流雑誌に載って、

へんな女からわけのわかんない評がついたくらいで調子に乗るなよ！

あんたはみんなに迷惑をかけてるんだ、

おやじさんにもおふくろさんにも姉さんにも妹たちにも施設のひとにも！

あんたは本当に家へ詫び状を送ったのか？

あんたうそつきだからな、あんたの書いたことなんてひとつも信じられない！

あんたは姉や妹たちが嫁げなくなるようなものを書いて平気なのかよ、

だったらいますぐに死んじまえよ！

おれは品のないろくでなしでうそつきだとおもった。はじめからからねじくれている。かつておれに品があったとはおもえない。ただ化けの皮が剥がれてきたんだ。飯場を転々としたり、空き家の車庫で寝たり、公園で暮らすようなことがなければ、もう少し品があるように装いつづけることができたかも知れない。でも遅かった。

あんたがおれについてとやかくいうのは許すよ。

それは許しますよ。

だけどな、あんたが寺山修司についてくだらないこと書いてみるよ、

おれはあんたのことを探しだして殺しにいくからな！

おれはあんたをいったん破門するよ。

あんたがもしも寺山修司について、

あなたにしか書けないようなやつを本1冊分書いたら許すよ。

できなかったらそれまでだ。

おれは酒に酔ったまま寮にいった。夕食はカレーライスだ。酔いどれて、じぶんがどれだけ酔ってるのかもわからないまま。職員がおれを捕まえた。いちどでも呑んだら追放のはずなのに、おれはわかってなかった。

けつきよくは実家に帰ることになった。あたらしい区の担当者はかたぶつの女で、薄汚いシャツに無表情を決め込んだ。さらにしばらく経ってもういちど森忠明に電話した。かれはいった、——あたらしい師を探してくれ、きみのことがわからない。——おれにはもうゆき場がない。

\*

かつて夢遊病者だったことをおもいだす。知らないうちに家をでて裏庭に立ってたことがある。じぶんがなにをしてたかまったくわからない。呆然とする。帰って来ると、室のものは破壊され、郵便局の給与で買ったオーディオ・セットも、ギターもドラムもなかった。本と音楽だけがかろうじて無事だった。おれの室は物置になり、おれは隣の室で寝た。しばらくして祖父がやって来た。一緒にアルコール専門の診療所へいくという。そいつは元町にあった。車を走らせ、駐車場へ。地上を歩く。汚れきった防寒着を来たルンペンが路上に仆れてる。垢と煤と埃やなんかで汚れきったダウンにサンダルを穿いてる。

おまえもいつかあなるわ。

やつが吐き棄てた。祖父は聞えないふりをして歩く。こういった人種とはつき合えない。診療所は暑い。待ち時間は長く、診断は早く、短かった。おれは完全なアルコール中毒だった。発汗と震えがひどかった。そのあと3人で喫茶店にいった。



あんなところ、むだやな。

ああ、そうやな。――祖父が頷いた。

通院はなしになった。かれらはおれがアルコール症だと信じなかった。家に帰って睡眠薬を呑み、眠った。翌朝から草刈りだ。しかしおれにはもう父に従う気はなかった。毎日なにもせず、家人に隠れて飯を喰った。井に米と卵とマヨネーズをかけて。それからまた小説を書き始めた。ノートに酒場の情景を書く。とにかくアクションから物語を始めるべきだとおもった。若い男と女が主人公だ。題名は『旅路は美しく、旅人は善良だというのに』とした。これはベケット『ゴドーを待ちながら』からの借用だ。21歳、東京から帰ったおれがもし女と出会ってたらと考えて書く。ふるいラップトップで書き進めていった。貧窮院にいたころのバイト代が入った。テーマパークのCFエクストラだ。4千円。それでアメリカ産のウォトカを買い、牛乳で割る。うまい。父のいない夜、インターネットをやりながら作品を書く。ほかにエッセイや詩論も書いた。季節は秋になった。あるとき、祖父がやって来た。おれは酒を呑み、短篇を書いていた。かれはいう、

おまえにはわるい血が半分入ってる。

おまえもむかしはええ児やったやないか、イヨ？

儂らが来て、その帰り際、泣いてまで「ついていく！」て、いうてたやないか。

あんときのおまえはどこにいったんや？

儂が死ぬまでにまともになつてくれや。

夜、家族が鍋を喰ってた。おれも腹が減って地階へ降りた。妹ふたりが食べてる。おれも、とおもって手を延ばした。いちばん下の妹が払い除けた。おれを睨んだ。おれは怒って撲りつけた。そしてテーブルをさかさまにした。母が来た。おれは台所の木椅子で、祖母の仏壇を打ち鳴らした。扉がはずれ、遺影が床に落ちた。おれはかの女に情があった。でもこんなものは

ただ物質で、生前のかの女とはなんら関係はない。母がやめると叫ぶ。おれは木椅子をテレビにむかってなげた。おれは酒を呑みつづけた。母が妹をつれて病院へいった。帰ってきた父は荒れた室を見て怒り狂った。おれの棲む物置に入ると、本やCDを足で蹴飛ばし、挙句に裏庭に投げ飛ばした。おれの密造酒をあたりにぶちまけた。おれはまったく無抵抗で蹴られつづけた。「おまえは女の子の顔に傷をつけたんやぞ！」——暴れる父も怒りさえ発散できればすぐに大人しくなった。動物園の猛獣と代わり映えない。おれはいちばんめの妹の室に入ってベッドで寝た。かの女は荷物を置いたまま数年まえ、でてったきりだ。壁にはホリプロのオーディションにでたときの書類が貼ってあった。眠るもつかのま、父に追いだされ、おれはまたしても物置で小説を書き始めた。

べつの夜、午前3時。いきなり帰ってきた父にアメリカ産の安ウオトカを奪われた。無職のおれはやつを罵りながら、追いまわし、眼鏡ごとを左眼をぶん撲った。おれの拳でやつの眼鏡が割れ、拳は眼鏡の縁で切れ、血がシャツに滴り、おれはまた親父を罵った。やつには因果応報ということを教えてやらなくちゃならない。

返せ！

酒を返せ！

おれの人生を返せ！

おまえが勝手に棄てたおれの絵を、おれの本を、おれのドラムを、おれのギターを！

そんなもん、みんな棄ててやったわ！

誇らしげに父がいった。凋れた草のような母たちが、姉と妹たちがやって来て、アル中のおれをちつと眺めてる。おれはかの女らにも叫ぶ。おまえらはおれを助けなかったと。おれが親父になにをされようがやらされようが助けなかった。もういちど父を撲った。悲鳴をあげ、逃げる父にはかつての暴君ぶりは見えず、被害者づらをしてカウチに転げ落ちた。怒りと破壊だ

けが父子の共通項だった。やられたら倍にしてやりかえせ。父や祖父の血がおれのなかで熱くなる。豚殺しの末裔。おれは小説を書きつづけた。随筆やコラムも書いた。おもに貧民街の暮らしについてや、世界の縁から零れたものたちについて書いた。そして第2の短篇『光りに焼かれつづける、うち棄てられた冷蔵庫のブルーズ』を書き始めた。でもこの家からはもうできない。10月を過ぎてたし、あたらしい場所が必要だった。おれは父の財布から金を抜くと、荷物をまとめ、家を出た。車をひとつヒッチハイクして。乗ってた老夫妻は父を知ってた。やつがダンス教室なるものに通ってることも。失笑を洩らした。

いちど西成にいったが、引き返した。どやの無線LANが使えず、苦情すると追いだされた。当然返金もなしだ。三ノ宮で降り、夕方区役所にむかった。おれはてっきり追い放たれるとおもってた。でも、これまでのこと——仕事や病院、飯場、どや街、障碍について洗いざらい話したら、救護支援を案内された。カソリック教会が棲む場所が決まるまで金を貸してくれるらしい。山手の教会まで急いだ。5時には閉まってしまう。なんとか間に合って話した。カプセルホテルの予約とメシ代とを頂いた。ホテルは無料のコンピュータがあった。ネットも使い放題。ビールをやりながら、おれが文藝サイトに詩の寸評を書き始めた。まえまえから眼をつけてたところだ。『文学極道』という投稿掲示板に怒りを込めたコメントを書いた。どいつもこいつもアカデミックやろうだ。室が決まるまでにいろいろあった。急性胃腸炎を起したり、酒に酔って仆れたりした。そしてアルコール専門の神経科で詩を書いた。ちいさなメモに『さまよい』という長いものを書いた。手応えがあった。そいつを文藝サイトに投稿した。黒エという女から、『まったくひどい代物ですね。〔初稿〕とありますが、書き直す価値もありません』といわれた。おれはかの女に猥褻な科白を次々と投げ、サイトから追いだした。『黒いおまんこエちゃんよ、おれとエミリ・デキンソンごっこしようぜ!』などといった。

19歳のとき、おれは朗読会のパンフレットづくりでかの女の詩を読んだ。そんなことはすっかり忘れてた。おなじように

酒の勢いを借り、さまざまものを罵り、傷つけてた。あつというまに鼻つまみものになった。《1発やらせろ!》とも書いた。おれはわるい意味で識られるようになった。強烈な敵ができれば、強烈な味方が現れるとおもって。でも、けつきよく大した敵も味方も現れることはなかった。

12月15日、ようやく室が決まった。役所には父と母といちばん下の妹が来てた。だれもがしずかに怒りを湛えてた。おれはすっかり王様気分で、壁を突き抜けるように歩き、ケース・ワーカーに挨拶した。しかしだ、年末に金を使い切ってしまい、おれはスープだけで14日間を凌ぐこととなった。赤い座椅子に坐ってガニマール版のアルベール・カミュ評伝を読み通した。読み終えて、サルトルとボーヴォワールほど卑怯なものはないとおもった。

\*



\*

年があけておれは鱈腹喰い、呑んだ。永易に電話をかけ、あたらしい住所を報せた。電話は父が買ったものだった。じぶんで買うつもりも、それをやろうは赦さなかった。それでもって料金はおれが払うはめになった。おれはじぶんの作品を売りにだそうとした。それまでの作品をスキャンし、絵葉書を刷り、ほうぼうで話しをした。扱ってくれと。

夜だった。近所の新古書店『ブックス・カーリーズ』が取り扱ってくれることになった。おれは店のポスターなんかをサービスでつくった。たった数百円の売上だったが、じぶんには価値があるということをやうやく実感できた。作品見本輯を共同出版する話も浮上した。けれども店は移転計画のために閉店してしまった。どこかへ移ると店長から聞いた。いつになるかはわからなかった。店長の中島さんはきさくで、おれがなにかを買うとき安くしてくれたりした。the Doors の海賊版をタダでくれたりもした。

永易におれは状況を報せた。しばらくしてやつが仕事をくれるといった。たかり屋にしてはめずらしく、報酬も2万だ。内装工事の手元だ。おれはさっそく西大寺に乗り込んだ。1日めを終え、やつの恋人宅へいく。古民家を改装したアパートだ。ジンのボトルがやたらとある。3人並んで眠ることになった。寝室の本棚、そこにはチャンドラーや村上龍があった。おれが読んできた本ばかりだ。おれのほうが気が合うんじゃないかと一瞬おもった。おれは眠った。朝、おれひとりだけだった。階下へいく。すると毛布をかぶったふたりが身を寄せ合ってた。どうやらおれは眠ってるあいだに嘔吐したらしい。

車に乗って現場へいく。おれは前金で酒を呑んだ。もちろん隠れてだ。ウイスキーのミニチュア壺を何本も入れた。けっきよく仕事にはならなかった。やつから貰ったジャンベを持ってふたり電車に乗った。大阪方面だ。おれが路線をまちがえる、

やつが咎める、おれは「くそ！」といってやつのいるホームへ急ぐ。帰ってくると、やつから私信だ。《酒やめるまでおれとミカに近寄るな》。

翌年の夏になって、永易が電話してきた。おれの絵をオフィスに展示したいという。おれはかまわないといった。ただし展示料はもらう。するとやつは絵を売ろうといった。昔のよしみだ、こればかりはしかたない。そうおもってうなずき、絵を送り、展示案やポスターを仕上げて、神戸から西大寺くんだりまで行ってやった。やつはポスターを気に入らないといった。場所である、椿井市場が目立ってないといい、「bargain sale」という個展名や展示方法にも難癖をつけた。だったらぜんぶじぶんでやればいい。後日、ふたたび西大寺のオフィスに訪ねた。資料用の素描く“The Outsider Art”と直かに書かれ、市場の各所に貼ってあった。これほどの侮辱はない。そいつはいままでみたこともない悪意だった。やつは笑ってる。おれはポスターを造りなおしてた。でも印刷の予算まではない。やつは興味を示さなかった。手持ちのラップトップで確かめようとすらしない。アウトサイダー・アート——それは手垢つきの過古だ。それはすでに体制のものだ。おれは真夏の市場でひとり汗をかき通しだった。飲みものも喰うものもなく、オフィス番をさせられた。椿井市場にはひと気がない。だれも通りはしない。こんなところで個展はむりだ。夕方になってやつが帰って来た。おれは展示する絵にもやつの文字が入ってるのに気づいた。

どうしてくれるんだ？

ああ、買い取ってやるわ。

でも宣伝になったからええんちゃう？——宣伝になんてなってるんかない。

夜。おれたちはトラックで通行どめに遭った。工業用扇風機を運んでるときだ。やつにとってのいつもの道が塞がれてた。やつは警備員を面罵して——ここを通せとわめき散らした。歩きながら叫ぶ。——責任者呼べ！——おれはハンチングに隠しきれない恥ずかしさでいっぱいだ。やつがもどって来て警備員に呶鳴った——そんなんやから、そんな仕事しかできへんねん！

警備員は小さく「このばかがッ」といった。するとやつは真っ赤になってかれに飛び込んでった。地面に叩きつけたれたかれが「警察呼んでくれ!」と悲鳴した。おれはやつを撲るべきだったかも知れない。とめるべきだったかも知れない。しかし、そいつはまるで屁をひってから肛門管をしめるようなもんだ。きつと『拳闘士の休息』っていうやつだ。トム・ジョーンズはイリノイ生まれの作家である。やがてひとびとがあつまりはじめた。そのなかには非番の警官を自称するものもいた。それでもやつはひるまずにわめきつづけてた。やがて警官が横断歩道のむこうから歩いてきたとき、おれに運転しろといった。

どうして?

免許ないから、

ばれたら困る。

おれはエンジンをかけ、サイドブレーキを解き、警官がたどり着く寸前にロウ・ギアに入れて発進した。やつは角をいくつもまがらせ、追っ手が無いのを確かめさせた。それから運転を変えた。痛風で左足が痛む。

「こんなことが週に何回もある、でも、あの警備員は仕事に責任感がなかった」——ピアスマミれの顔でアクセルを吹かした。そのとき口にはできない感情をおれは自身に感じとってた。ふたりで扇風機を事務所の壁につけようと苦戦しながら、やつはいった——おまえの学習障碍なんて甘えだ。おれはおもった、——杖や車椅子は滅ぼすべきというわけ?——取りつけた礼もない。ハーパーを呑んでからやつの室まで眠りにいった。そこには喰うものも、呑むものもなかった。やつはけっきょく身銭を切りたくないだけのやろうだった。本棚の目立つところに『超訳・ニーチェの言葉』がある。そのばかげた本でいっぺんにすべてを諒解した。このくそつたれは超人にでもなったつもりなんだ。そしてみんながそうなるべきなんだって信じてるんだって。そして友情はおれを必要としてないというのがわかった。

翌朝、おれは体調を理由に帰った。夕暮れ、酒を呑む。twitterになにかもを暴露した。憎悪にたやすく傾いてしまった。



もつとちがうやり方があったにちがいない。でもおれにはやつとの見えない主従関係をぶち破ることしかできなかった。やつからの着信をとらず、代わりにショート・メッセージで応じた。

おれは対等に話しがしたいんだ。

生活保護者が対等なわけないやろ！

やつの正体がわかった。ずっとおれのことを下位に見てたんだ。だから金があればたかるし、なければ用なしなんだ。そう  
だ、やつはじぶんに従うものを探してただけだ。翌朝、父が来た。永易から電話があったという。おれの書き込みをすべて消  
せと要求した。父は完全に永易の側に立って喋った。いったいおまえになにがわかるというのか？——後日、おれがやつの1  
件をたれこんだのを知って電話がかかって来た。——おまえは友だちを警察に売ったんやぞ！——なにをいっても無駄だった。  
やがて夜になって公園を若者たちが騒ぎまわってた。男たちと女たちの嬌声に耐えきれず、アパートを降りる。おれはわめ  
いた。女たちがキモイなどとお得意の三文字言葉をいった。おれはそのなかのひとりに狙いを定め、パンチを繰りだしたがや  
つらの足はすばしっこく、ひとり残らずに逃げられてしまった。ようやくおれは気がついた。バンテージを忘れて、重量もす  
でに超えていることを。そして最悪のことにもはや若者ですらないということ。

\*

ほかにも酔ってらんちき騒ぎをやらかした。あるとき、階下で少女がわめいてた。母親に喰ってかかってた。おれは「うる  
せえ！」と怒鳴り、階下へいった。少女にむかって「なにをそんなにわめく必要があるんだ？」といった。母親がおれに謝っ  
た。真冬にエアコンが効かず、駄々をこねてたらしい。おれもかの女に謝った。後日、郵便受けで少女に出会した。おれは朝

から弾き語りにでて帰りだった。ひどく惹かれた。黒髪のショート・カット。大きな眼。うつくしい。なにもかもがよかった。でも、すぐに母娘は引越してった。

\*

群馬の女性が眼をかけてくれるようになった。澤あづさという筆名で、整体師だった。遺伝性の眼の障碍で、どんどん視野が狭くなっていると聞かされた。こういったことはどういう態度で接すればいいのか、まだわからない。かの女はおれの小説をたかく買い、金を払いたいといった。ほんとうに金が送られてきた。5千円。おれには手製本の詩集を送るしかなかった。かの女はおれの人生の話をよく聴いてくれた。おれはかの女にすっかり甘えてた。でも送った第2詩集には反応がなかった。おれは失望し、それからはどういわれても心を入れて応えなくなった。かの女はあくまでおれの小説が好きなのだ。詩で培ったものを小説に活かそうとしたのは正解だったが、詩そのものは相も変わらず退屈な抒情詩で、心情に共鳴するか否かのものだった。

おなじころ、医者をしてるといふ女とも知り合った。筆名は「無名」。へたな酷評で知られてた。かの女はおれを煽った。もっと暴れてください、もっと酷評してください。でも金はくれなかった。――あなたにお金をあげても酒を呑むだけです――その通りだった。澤あづさと並行してかの女にもおれの人生を語った。かの女はじぶんよりも澤あづさが尊重されてるとおもって嫉妬した。あるとき、かの女のtwitterを見た。幼い娘の躰について辛辣に書いてた。どうやらその娘は発達障碍らしかった。じぶんの母を懐いだしてやりきれなくなった。おれはメールでなじった。かの女はうろたえ、去ってった。教えてくれた電話番号にかけたけど、でなかった。それっきりだ。傷つけたことはわかってる、でもどうしようもない。ほかに何人

かの女たちと話をした。遠くに棲む女たちと交信した。おれは酒と怒りに狂ってたし、ほとんどの場合、やさしくはなかった。ひとりだけ実際に会った女もいたけど、とてもおれの好みじゃないし、深夜にかかってくる電話にも辟易してた。かの女に会い、かの女にわざときらわれて、それきりだ。女たちはいったいどこへ消えていくのか。おれにはわかりようがない。どんな男だってそいつは知らないだろう。おれはかの女たちの餌食になるほかはない。おれがかの女たちを捕まえることなんかできやしない。おれは素面であろうと、酔ってしようと、いけないやつで、ろくでもないやつだ。かつて映画館でおれは声からかけられた。でもおれは臆病で、かの女からの誘いをむだにってしまった。もっとおれなりのやり方があったのかも知れない。いいや、そんなものはないだろう。だれかと一緒になるなんて考えもつかない。おれを愛してくれ、おれに触つてくれ、——そうはおもっても声にはできない。やがて季節がかわって、呑みながら町を歩き、やがて遠いおもいでの方まで飛び、愛してた女たちを視た。かの女たちとのつながりなんかありはしない。それでも懐かしいおもいのなかで、かの女たちを抱きしめた。抱きしめつづけた。やがて涙がながれ、おれのなかのおもいがすべての路上を伝うまで、泣いた。おれにできることはなんだろう。もはや多くの人間にきらわれ、孤立のなかで可能性を失いつづける。ひとは時間に敗北するしかないということをいやでも意識させられる。どこにいるんだ、おれの恋人、おれの聖家族たち、おれの友人たち。おれはまたしても社会にもどっていくしかないのだろうか。みずからの無力さをこんなにも識りながら、どうやって戻ればいいのか。星が銀色に光り、おれは見あげる。かつてあったものに、喪われたものに心を展くためにだ。

でも、むだでしかない。わかっている。おれは帰ってノックビンを呑んだ。酒はしばらくやめたかった。でもこんな薬、すぐには効果がでない。おれはいまでも愛しかつたものの幻しのなかで、おれは倒れた。それから眼を醒ましてジェイムズ・サリスの『黒いスズメバチ』を再読した。映画『オン・ザ・ロード』を観た。『ピカソになりきった男』を読んだ。さまざまな声がさまざまなところから聞えて来る。おれはいったいどうすればいいんだ？——おれはでたらめに電話をかけた。永易の母親

がでた。やつはおれとのがあったあと、自裁を図ったという。子供ができたのは知ってる。でも自裁は初耳だ。おれのせいだ、おれが追いつめたんだ。

\*

しこたまに酔ったあるとき、おれは公園のそばを歩きながら卑語や猥語を叫んだ。おまんこしろ！——やりまくれ、やりつくせ！——そしてふたりの恋人たちを室にあげた。おれはギターを弾いてみたり、なんにか、ちょっとした会話らしいものを作ろうと苦戦した。そのうちに女の子のほうがおれの絵を褒めた。「豚のためのスケッチ」という水彩画で、そのころの代表作だ。かわいいといった。おれは気持ちが高ぶってかの女にあげるといった。そして希死念慮を吐露した。男は死ぬなんていうなとじぶんの連絡先を書いた。女の子は中国人だ。そのあといちどだけ電話をかけた。それっきり。

\*

無人の村

を撃て

殺しのハミング

とともに

だれもいなくなった台所で

水と水とが対話する、

14匹の鰐たちが

ガードレールに沿って歩く

おお、マリルー！

いい加減に床屋だけはあけといてくれ

鰯の髭を落としてやるためにな！

13/07/03

\*

金曜日の夜。わたしは保安官助手に連れられて遺体安置所に来た。滝田らしき死体があがったらしい。射殺体だ。凍てついた湖岸に守られ、きれいなものだった。まちがいなくやつだ。わたしはしばらく黙って立っていた。さまざまな手続きが待っていた。でも動けなかった。しかたなく一晩だけ、待ってもらった。わたしはいつたいたいのためにたくさんの血を流してきただのか。そいつは虚無以外のものでもないようだ。ロージーと一緒に酒を呑んだ。安いバーボンだ。工業用水の味がした。多くの死者、それもじぶんが殺ったやつらの死にざまが、わたしの眼を覆い尽くした。滝田を殺ったのはロージーだ。でも、かの女を責めたところでしかたがない。過古のわるいおもいでがそうさせたのかも知れない。それ以上の追求はできないだろう。わたしはもつとましな酒を求めて宿をでた。酒場をいくつかまわって、ロージーのもとへ帰る。手にはカティ・サーク・ストームがあった。べつにこれだっていいものじゃない。でもヘヴン・ヒルよりかはずっとましなはずだ。外套を脱ぎ、カウソーターに投げ、ラウンジで待つ、かの女のために、2杯の酒をつくった。わたしはコロナ・スマトラに火をつけ、赫くて大きな鰐みたいなソファに坐る。ロージーは媚びるような眼差しをしてわたしを見た。

映画、観ないか？

どうしたの、急に？

なんでもいい、とにかく観よう。

ふるい日本映画だ。題名は『野獣の青春』だ。暴力以外のなにものでもない映画だった。

へんな映画ね。

そうだ、おかしい映画さ。

わたしたちが映画を観終わったあと、電話がかかって来た。社長からだった。土曜日の夜、劇場に来て欲しいということだった。ロージーも一緒にだ。たぶんわたしたちは殺されるだろう。もうYもFiveもない。まったくの用済みだ。

社長はおれたちを殺すだろうね。

かもね。

わたしたちは抱き合った。唇を奪い合い、手を握って寝台に横たわった。かの女がじっとわたしを見る。わたしもかの女を見る。翌朝、ハンクのピックアップに油を積んだ。腕時計を使って簡単な発火装置をつくり、夜を待つ。どれも映画や小説で憶えたことだった。すべてを神が拵えたとしたら、やつもわたしも地獄行きだ。わたしは死体安置所ですべての手続きをした。もういちどだけ滝田の顔をみた。大麻をやっている最中だったんだろう、気持ちよさそうな顔している。胸にあいた穴が釣り合わないほどに。大使館に連絡した。わたしはまったく無知だった。こういったとき、どうすればいいか、かれの家族を探して報せるにはどうしたらいいか、遺体の帰国をどうしたらいいか、まったくだった。保安官に半分まかせ、わたしはかれの遺品をまとめた。旅行記を書いたメモ、手紙の草稿、ライブ会場の連絡帳、カメラやなんか。

夜が来た。おれはひとを殺したんだ。報いを受けるべきかも知れない。丸腰のまま、映画館までロージーといった。いざとなれば発火装置がある。レッドネックとメキシコ人が扉のまえに立っている。わたしたちの挙動をすべて見張っている。スクリーン裏ではスコフスキー社長が待っている。どうしたらいいのだろう。ためらいながら社長のまえに立つ。

ひとを殺した感想はどうだ？

報いを受けるしかないというところです。

ほう、えらい心がけた。

わたしにはもう帰る家も国ありません。

友人も死んでました。

もはやなにも残ってはないのです。

スコフスキイはわたしのことが真意からのものを図っていた。銀縁のなかで両目が左右に動く。わたしとロージーを比較べて、思案している。長いあいだ、それがつづいた。わたしは気がおかしくなりそうだった。ここで殺されるのか、はたまた別の場所か。そのとき、おもてで大きな音がした。映画館の扉から炎と煙が入って来る。やってしまった。レッドネックとメキシコ人が消化器を持って出入り口に走る。やつらは風に煽られ、火だるまになってそのまま見えなくなる。スコフスキイは裏口にむかって突っ走る。そして銃を抜き、まえをむいたまま、わたしたちへむかってを撃つ。おもての扉が焼け落ちる。ピックアップが爆発し、火は受付を乗り越え、客席にまで迫る。

わたしはロージーの手を引いて裏口まで走る。スコフスキイが裏口に鍵をかけていた。ふいにロージーが銃を抜き、鍵穴を数発で打ち抜き、扉を開ける。ちょうどスコフスキイがじぶんの車に乗り込むとこだ。マット・ブラックのメルセデスへ。やつがふりむく。その顔は白い、——白すぎる。ロージーがやつの顔を撃ち抜く。穴のあいた顔はマグリットの絵みたいだ。ふりむきざまにかの女はわたしをも撃つ。わたしは仆れ、わたし自身の銃痕に吸い込まれていく。やがてなにも見えなくなった。

\*



他人のなまえも

職業も

詩に見える

失ったおもいで

みたいなものだ

ぼくはきみではない

ぼくがどんな変わろうとしても

詩句や切字はぼくの皮膜から放たれる

かつてプールサイドで

きみを見た

カミングスのみたいに

きみのこと

書けたらよかったのに

ぼくはぼくでしかない

きみはきみでしかない

\*

寝台に横たわって、ずっと点滴を受けてた。'13年6月。赤十字病院。気温はずっと上昇傾向。見舞いに来たのは西村玄考という詩人だけ。リルケ集、映画『night on earth』、そして蜜柑をたずさえてた。気分はずっと沈んだままだ。夜になれば泣き、本を読んだ。恋愛小説だ。『秒速5センチメートル』。そんなものはそれまで読んだことがなかった。かれが帰ったあと、蜜柑を喰った。そして夜になるとまた涙を絞り、メモを書いた。すべてはかつて好きだった女たちについてだ。中窪さんには会えない、北甫はどうか、村上なら、もしかしたら。淋しかった。おれはもうじき29だ。最後に友衣子と話してから、もう13年が経つ。タイムカプセルのときは呼ばれなかった。同窓会にも、クラス会にもおれは無縁で生きてしまった。成人式にもいってない。来年には30になる。かの女に会っておもいを告げたい。退院したら、facebookで探してみよう。やがて朝の光りが神々しくおれを包んだ。見事だった。天使の羽根みたいだ。正体不明の多幸感ともにおれは病院をあとにした。

おもったとおりだった。SNSには多くの同級生がいた。おれは知ってるやつに片っ端から友だちリクエストを送った。でもおれはだれの友だちでもない。でも、友衣子のアカウントは共通の友人なしではリクエストができないようになってたからだ。やるしかない。かの女の男友だちがいった。友衣子はもう結婚してて、最近出産したことを。タイムカプセルだって20年の10月に開けられてた。50人の同級生と3人の教師が集まってた。かの女にリクエストを送った。反応はない。メッセージにも返事はない。それらを発散しようと、かの女へおもいを同級生の女たちに告白してまわった。みんな笑った。本心かはあやしいものの。しばらくして松本美枝が、小学2年生時のクラス会をひらいてくれることになった。あのときの担任は今宮、おれにはじめて詩を教えた人物だ。友衣子はいかわらず、おれを黙殺してた。そんななか、おれはジンで泥酔のうえ、

ガラス戸に突っ込んでしまった。からだじゅうガラスと血に塗れ、気づいたときには昼だった。おれは役所にいった。ケース・ワーカーに会った。かの女はすべて知ってた。ガラスに突っ込んだことも、酒を呑んだことも。

どうしてそんなに呑むの？

ぼくは孤独なんだ！

そんなやりとりがあったらしい。そのあと一緒に医者にいき、帰ってきたという。すべて憶えがなかった。クラス会には、いかないうちがいいともいわれた。でも、おれはどうしてもいきたかった。けつきよくクラス会にいった。まるで喋れなかった。おれには話すことがなかった。波河がいる。遅れて透がきた。子供をつれて。幹事の松本美枝、仲島、小山、そしてなまえのわからない女たち。徹が、かの女ら呼び捨てにしている。おれにはできない芸当だった。松本は郷家についていった、女子校にいつてじぶんよりも弱いものをいじめてたと。教師はおれの、いまの詩を好きになってくれなかった。徹はすぐに帰った。おれはウォーホルの画集を見つけ、今宮にいった。

ウォーホルは母性を知ってるが、父性を知らない。

ぼくはその反対です。

大きな画集の角が松本の息子のあたまに当たってしまった。おれは慌てて、子供を見た。松本があやす、大したことじゃない。帰り際になってかの女に礼をいった。呼んでくれてありがとう。太りぎみのからだを抱え、おれは帰った。店をでると仲崎の夫が車を止めてる。何人かを残してアディオス！——そうおれは叫んだ。うしろのみんなが笑った。小山夏海がいった、

おもいだしたわ、ミツホ、雨の日でも晴れの日でも、「きょうは清々しい日だなあ」っていったよね？

ああ、そうさ。

それこそがおれだよ。

隣に東森という女がやって来た。おれの歩調が遅すぎる。小雨がもうずっと降ってる。どんどん雨脚は強くなる。どうしようもない。――「おれは好きな子がいたんだ」とかの女にいった。かの女は、おれをいじめてたやつを友だちにしている。おれは悔しかったよ。――ああ、よくあることやん。――んで友衣子から返事はなかった。――女にいった。こいつは妹を虐めてたやつだということを、そのときおもいだした。

おれは自殺したい！

女が笑った、――ミツホ怖い！――妹をいたぶった淫売。駅でみんなとわかれるとき、おれはまたアディオス！――といった。もうだれも笑わなかった。室に帰ってから、うっかり障碍者手帖を忘れてしまったのに気づいた。松本に送ってくれるように頼んだ。数日してとどいた、封筒にはかの女の住所が書かれてなかった。ちくしょうめ、おれを侮蔑してやがる。おれはSNSで愚痴をぶつけた。かの女のいいわけに怒った。忘れただけだといった。おれは話題を変えたが、けっきょく《けつでもまんこでも喰らいやがれ》と12回くりかえした果てにブロックされた。なにかもむなしいだだけだ。おれはもういちど村上にメッセージを送った。かの女が好きであること、放浪生活や病いのなかいしたこと、絵や文学、音楽を学んだことを、自殺するつもりであるのを長々と書いた。するとようやくかの女が答えてくれた。かの女は慌ててた。むりもない。

《いまちよつと手が放せないんです。無礼講で話しませんか？》

《わかりました》。

《いろいろと苦労されていたようですね。私のこと、おもっててくれてありがとうございます！ 勇気がでたよ！》。

《こちらこそありがとうございます》。

《でも、私には19歳で自殺した同級生がいます。働きながら好きな美術の道へ進んだ矢先、事故で死んだひといます。

奥さんと子供さんを残して若くして亡くなられた方もいます。わたしは命を粗末にするひとはきらいです》。

おれは戸惑って弁解を並べた。そんなつもりじゃないとか、どうかしてたとか、でもわるくなるばかりだった。会いたい。絵を見て欲しい。そんなことをいった。かの女の男友だちがおれをかつて虐めてたと拗ねて非難までした。嘉村も蒔田もいけ好かなかった。

《あなたの記憶にある私は今でも中学生の私なんです。彼らだって同じだけの年をとり大人になって過去の自分を恥じることもあるだろうし、私だって思い出たくない過去などたくさんあります。そんなことを言うと、あなたにしたら、どうせたいしたことないのだろうと思うかもしれないが、あなたにとってはたいしたことなくても私にとっては大したコトなんだよね。価値観は人それぞれ。人との距離の取り方も人それぞれ。ただ今の私に言えることは、正直、あなたに対して少し戸惑いがあると言うこと。それは好きとか嫌いとか軽蔑するとかそんなコトではなくて、私なんかあなたの人生を左右してしまうことになって良いのかと言う戸惑いの方が大きい。自分に責任は持てても人のコトまで責任を持てるほど出来た人間でもそんな器の人間ではないと思うから》。

それが最後だった。あとは、いくらメッセージを送ってもむだだった。おれは荒れた。かつてのいじめっこたちにことばで復讐した。男でも女でも容赦はない。田中良和や義村廣、久保江里菜や竹村紗代——ほかにいろんなやつらに悪態をついた。女たちはすぐに謝った。男はだれひとり謝らなかった。それでも久保なんかは男友だちに「いじめられた」と訴えた。男がおれにいった、友だちをいじめるな！——やつの親は友衣子の親と親戚同士だった。おれがやったことを正しいとはおもわない。ただおれがいわなければ、やつらは黙ったままだろう。竹村にしたってほんとうに謝ってるかはわからない。久保よりはちゃんとした返事があって、ちゃんとした言葉が遣えるのはたしかだし、真摯におもえる。それでも「やり返してやる」とタイムラインに書き込んだ。中学時代の知り合いが私信が寄越す。

《やり返すって言うけど、まず方法がおかしいわ。あれこれ受け入れられへんやら昔のことと言う前に、今の自分が人とちゃ

んと向き合えるようになるうや。相手の現在とか状況考えずに攻撃するとか、童貞よりよっぽど信じられへんよ。陰で言うん嫌いやからはつきり言うけど、同級生で今は関わりも薄い人達に迷惑かけるなんて、最低やと思うで。これ読んでロミオ状態にならんといてな。当たり前的事言うてるだけやから》。

最低？——上等じゃねえか。おれはさらに攻撃範囲を広げた。でも怒りは収まらなかった。何人かの女がアカウントを閉じた。でも満足しなかった。おれはタイムラインに憎悪を綴った。あらゆるものへの憎しみと怒りを。とめてくれるものはいなかった。おれを友だちとおもってまちがいを指摘するものもなかった。だれもが黙った。じぶんに仲間のないことをふたたび確かめた。年が暮れても、ずっとおれは泣いてた。姉の婚姻を識ったのもSNSだった。やたら画数の多いなまえの男と一緒にあったらしい。画像のなかのかの女笑顔。まったく白痴的で、粕にも劣った女だ。おれだって金さえあれば美術学校や音楽学校に入って大いにその才能を拓かれてるはずだった。いまだって才能は確かだ。それを見抜ける人間がどこにもいなかったただけだ。姉はおれの苦役を知りながら、勝手に羽根を生やして消えちまった。その羽根のためにおれがどれほど苦しんだかなんぞ、なんともおもっちゃない。おれは何度かメッセージを送ったけど、返って来なかった。しかも好きな映画は『セックス・アンド・シテイ』と来る。ろくなもんじゃない。あんな穢らわしいショー・ビズのなにが いいんだ。知識はあっても知性はないにちがいない。

おれは悲しい映画を幾度も観た。そのなかでも『talk to her』は白眉だ。ある種の極点とっていい。あるいは『みな殺しの靈歌』もそうだ。悲しみと憎悪の極みだ。おれは友衣子をおもって『点描』や『茎』という詩を書いた。詩が溜まって、久しぶりに森忠明へ送った。《師弟の仕切り直しをしてもいいレベルの作品だ。特に『点描』、『埋葬』、『清掃人』がいい》——葉書にはそうあった。なんともうれしかった。おれはあたらしい詩集をだすことにした。そのために詩を書き、写真を撮った。年があけてサンプルがあがった。誤植がひどかったけど、海外のペーパーバックみたいでよかった。なんとか4万貯めて、42

部だった。長谷や小谷、長福、もちろん友衣子にも送った。小谷と長福以外からは返事はなかった。もしかすれば、じぶんみたいなやつが読んでくれるかも、そうおもって中学にも献本した。返ってきた。手紙もなく、素っ裸の本だけ。電話してみた。生徒にふさわしくない、そういった教員がいるという。無然とした喋り。もしかすると、かつてのじぶんみたいな、——それでも友衣子のこと、おれのあたまはいつもいっぱいだった。じぶんのいったこと、やらかしたことを悔やみつづけた。いずれ死のうと考えながら作品を書いた。自殺用に「バルーン・タイム」も買った。7千円也。いつのまにか知り合った女にも詩集を送った。好意をもって評も書かれた。その夫の詩人も『港』という詩に1頁さいてくれ、まちがいだらけの引用のなかで褒めてた。それでもおれ自身は不安であつたし、あちらこちらで悪態をついてた。かの女はおれの悪態や憎悪にSNSで「いね！」の印をつけた。おれはさらに不安になった。けっきょくかの女とは憎悪し合って終わった。

蟹谷青年がおれの室に来た。詩集を買いに来た。おれは蔵書を見せた。ふるい漫画本が幾つかあつた。特に自慢の品は、アキシヨンコミックス版の『ルパン三世』だ。2巻めしかなかった。それに「あの青白き城を見よ」という話に破れがある。かれは手にとった。日活映画『危いことなら銭になる』のソフトをおれにくれた。大好きな映画だ。

\*

朝の公園でギターを弾き語ってた。若くて、小さな男がやって来た。旅をしてるっていう。生活保護を受けながらだ。その日もホテルからでたところだったらしい。救護支援だ。——神戸は早いな、もう灘区にアパート見つけたぞ。——ふたりで話しながら歩いた。路上の占い師ですら保護を申請するらしい。あいつら、とやつはいった。情報網を持つてる。——あいつらなんていっちゃいけないよ、とおれは返した。わずかながら路上で過し、施しを受けた自身にとってルンペンたちは、失礼

な気がしたからだ。

\*

森先生の伝で詩集は売れた。曲づくりも順調だった。機材を揃え、多重録音で曲をつくった。ほとんど生煮えだったけど、おれはたしかに表現のなかで生きて、人生ではとくに死んでた。おれはあたらしいことに飢えてた。ライブハウス『バックビート』、そいつの出演者募集を見た。電話をかける。ブッキングが決まった。20分5千円。おれはじぶんの曲を流しながら、詩を読んだ。声はうまくでなかった、呂律もあやしい。しまいに即興で喋ってはみたものの、ひどいありさまだった。しばらくしてスタッフから誘いが来た。2曲で500円、わるくない。そのころには歌ものをいくつか、つくってた。おなじかたちで3度、舞台にあがった。ライブで歌った。友衣子のイメージが曲のなかにも生きてた。そしてまた冬が来た。12月、ある金曜の夜、メッセージが来た。

《ひとを傷つけるひとはきらい!》。

友衣子からだった。返事を書くこうにもブロックされてできない。なにもしなくなってしまう。たしかにおれはひとを傷つけて来た。でも、ひどい仕打ちだ。おれのいいぶんすら聞いてくれないなんて。自身を忘れるまで酒を呑み、ライブにでた。痛風で足が痛い。演奏はぐだぐだ。あらぬことをマイクで喋る。だれもが無表情だった。翌日は投票日。おれは中田満帆という男に投じた。きみはその男を知ってるか？

そして月曜日。おれは取材と称して献血センターや、パチンコ屋をまわった。政府との癒着、換金システムの違法性、古物商としての存在、どれも相手にされなかった。駅前のパチンコ屋では店員にうしろから掴まれ、そとへ突き飛ばされた。警備



員たちがおれをみた。おれにひとを殴れるだろうか。おれは右手の拳を胸のまであげ、内側にひねりを加えた。そして店員のおもづらに突きあげる。やつの鼻にヒットした。やつの長身が揺れ、眼鏡が吹き飛ぶ。おれははじめて他人を撲った。警察を待ちながら、町のひとびとを見た。警察車輛のなかで喋り捲った。喜劇師のように。取調室でもでたらめな英語を喋り、まわりを笑わせた。担当の野柳部長刑事ははじめ、モニターに映るおれを東南アジア出の外国人だとおもったらしい。おれは道化になることで不安を打ち消そうとした。子供時代からの処世術だ。夜になって留置場に入れられた。みな眠ってるみたいだった。はじめて他人を撲った。やつは鼻の骨を折り、上顎に罅を入れられた。おれはいったいどうなってしまうのか。拳を眺めた。まさか、おれが？

12月15日、おれのなまえは215になった。この葺合警察で今年215番めに勾留された容疑者というわけだ。留置場はひろく清潔だった。とりあえず、蒲団を敷いて一晩眠った。翌朝取り調べのつづきがはじまった。その日の行動を逐一喋らされた。単に移動だけでなく、呑んだ酒に対する反応までもが繰り返された。へとへとになって答える。自身の事実が疑わしく感じられ、なぜ話しているのかさえもわからなくなってくる。あつというまに昼飯だ。房に帰って喰らう。うまかった。味つけが濃い。ラジオ放送が短くあった。公共放送のニュース番組のみが流れてた。ほとんどなにを喋ってるのか、くぐもって聴き取れない。それが終われば音楽がしばし流された。歌謡曲の唄なしの変奏がかかった。

しばらくしてから物品購入の日が訪れた。おれはノートとペンを所望した。けれどペンは持ち込み禁止指定で、署員から借りるというかたちになった。23日に届くとすぐに書き始めた。まずは「短篇メモ」だ。《まだまだわたしには中長篇はものできない。『月曜日と出会うとき』をふたつの短篇にすることにした。まずは冒頭から女と車で出発するところまで、つぎは老人との場面のみ。——もしかすると、車中での一夜の件も独立できるかも知れない》。つづいて『自裁にむけてのノート』を書き始めた。《かの女はおれを否定した。終わりまでひとこともなしにだ。そしてわたしはひとを撲った。果して望み叶わ

ず、報道されないことがわかったが、事実は事実だ。この留置場をでたら、匿名でこの事実を広める。そしてマスメディアに訴求しよう。そして1月中旬に創作を片づける。女を諄く。種を蒔く。とりあえずは公衆電話から神戸新聞へ「問い合わせ」だ。つぎに匿名掲示板へ。そのつぎに文藝投稿サイトへ密告。あとは流れに任せる。死にむかって。つぎにかの女にむけての手紙を考えた。絵葉書ひとひらきりにしよう。あの絵を使おう。絵の題名はまだない。——こうしよう、『酔いどれた女祈禱師』だ!——《この葉書をあなたが読むころ、わたしはすでに死んでいる。あなたが素直に「きらい」とか「気持ちわるい」といつてくれればどれだけ救われただろう。わたしはただ普遍性のある会話がしてみたかった。わたしはあなたと再会したかったのだ。あなたがわたしをどうおもおうとも、わたしはもう怖くはない。なぜなら、あなたの仕打ちによって、沈黙によって、わたしは死地へと追い放たれたのだからだ。けれども、この事実もわたしの存在もあなたはたやすく忘れてしまうのもわかっている。たやすくあなたは黙殺できるのだ。まるで地方紙のちいさな求人欄みたいに、一分と経たずに忘れてしまう。——男は愚かに死に、女は愚かに生きる。——だれかがそう書いていた。あなたはこれをどう捉え、どう解釈するだろうか?》

留置場で本とノートを買った。ヘミングウェイの短篇集『何を見ても何かをおもいだす』、チャンドラー『ロング・グッドバイ』、エリクソン『ライフサイクルとアイデンティティ』、原奈『さらば長き眠り』を。担当の野柳はなかなかいい人物だった。30後半、むくんだ顔で、淫売屋めぐりが趣味、人情味があった。しかし、そんなものの檻のなかだからこそ善いようにおもった。おれはいろんな映画に准えて犯行や心理を語った。かれは笑った。

17日の水曜日。朝になってすぐにバスへ乗った。どうやらそこは水上署だった。ゆっくりと車庫に入り、薄青い扉が開く。だれかがでてくる。けれどいつこうにバスには入って来ない。なんのために来たんだ?——そのまんまで署をはなれ、神戸地検に乗り入れた。そして繋がれたまんま冷たい階段を昇らされた。サンダルを履いた素足が切れそうな寒さだ。なかに入ると、右手に職員の詰め所、左手に牢が並び、真ん中を狭い廊下が奔った。紺の制服をまとった公僕どもがふたり1組になって、

被疑者たちの拘束を解除し、しかるべきところへぶち込んだ。果たして検察では拘留延長を喰らった。おれはじぶんの罪を直視できてなかった。検事にむかって自裁したいといった。遺書の書き方を教えてもらった。その夕べ、野柳が心配しておれのところに来た。おれはノートに自裁について書きまくった。

途中で留置場に支那人が入って来た。ほかの連中と好きな歌を唄ってるとき、おれもbloodthirsty Butchersの『時は終わる』を唄った。するとゴ・コウというなまえのかれは、おれにノートを差しだした。歌詞を教えて欲しいということだった。書いてやる。――「コレ、ワタシへ、プレゼント」と嬉しそうにいった。かれはすぐに釈放された。ある朝、野柳部長刑事がでかけるといった。手錠をかけられ、それを隠す、特製の布カヴァーをかけられた。そして車に乗せられた。現場検証だ。ひさしぶりの外界に肺の外気で引き千切れそうだった。かぜに皮膚が強ばった。車は大安亭をはなれ、いっぺんに三宮駅の高架下、パチンコ屋のまえにきた。現場だ。胃がひきつった。苦い味が奔った。それでも刑事たちは平然としてる。ひさしぶりの外の世界が懐かしかった。

かれらは写真を撮った。そこをはなれると、今度はわがアパートメントへむかった。懐かしい、恥ずかしい気分だ。下車すると、刑事たちに囲まれて階段を昇った。室の鍵はあけっ放し。心配はいらない、だれも訪ねては来ないから。――室に入って、あたりを見渡す。盗まれたものはない。ここで精神障害者手帖と自立支援医療受給者証の撮影してから押収した。そして帰って来ると、署の最上階まで昇り、だだっぴろい道場で犯行の一連を再現させられた。背のひくい、ひ弱な警官を相手に、拳をくりだした。しかしやはり背はひくすぎる。おれが左上にむかって右肘を撥<sup>ば</sup>条<sup>ね</sup>にして拳をくりだしたというのに、かれの顔はちかすぎるんだ。ぎこちない動作は下手な新派劇の芝居をおもわせた。笑いのない喜劇。写真を何枚も撮られて昼、房へ帰された。昼飯だ。ちいさな扉があいて弁当箱と箸の抱き合わせが入れられる。赤い弁当箱に黒い箸。ジュリアン・ソレル、青い種子。蓋をあげると長方形のなかにカレーライズときた。スプーンはない。そいつを箸で掻き混ぜる。カレー・ルウがま

んべんなく米に搦んだら、筐の角を利用し、箸で掻き上げながら口に運んだ。なるたけ早く喰わなければならない。またしてもラジオがなにかいってる。なにをいってるのかはわからない。見あげる扉のむこう、看守の守に湯気があがってる。きつと茶を沸かしてるんだろ。ふたたび眼を降ろし、筐のなかのカレーをみた。喰い終えると、ふたたび看守がちいさな扉をあけ、手を入れ、弁当箱と箸と湯呑みとを回収した。おれは日記を書く。

《もうここでの生活も厭きてしまった。なんとか勾留から解かれない。もう夕刻だ。ただただ腹を空かすだけ。弁護士は来そうにない。たぶん翌る日の勾留期限の日だろう。なんとかして来週中にはでたいもんだ。なにせ今年中に冬の海が見たいからだ。自裁についての決心は頑なだ。もう感情にふりまわされるのはごめんだ。HとT先生に連絡をとろう。Jの親には謝っておこう。Fにも手紙をだそう。かの女にはZへの謝罪を伝えてもらうためにだ》。

みんなに謝ろうとも考える。でも、いまさはどうやって?——それにかれらかの女らに謝ってからといって、友衣子がおれを赦すとはおもえない。

《じぶんを大切にできないものに他者を大切にすることはできない》——そうノートに書いた。使い古された科白。でも、その通りだった。おれはたぶん友衣子が好きなんじゃない。ただ過古に、幻しに、美しいものに、しがみついているだけだ。ほんとうはだれも愛してなどない。時間をもてあまして考えた結果がそれだった。《午后から午睡する。しかし悲しくてみじめな夢を見た。発狂したわたしが実家を訪れ、吠え声をだす、そして車に乗って丘を上る。「友衣子が憎い、友衣子が憎い!」と叫びつづけ、さらに「そんなにおれを殺したいのか、友衣子!」と叫ぶ。毎年縁日にいかなかったこと、中学3年を不登校したことを悔いた。車のハンドルが定まらない。あまりにも苦しく覚醒させた》——12月25日、とうとう起訴通知が来た。人生の再建を考えたり、眠ってるまに嗚咽を漏らしたり、また文学におもいを馳せたりした。たとえばヘミグウェイ短篇集。『だれも死なない』、『一途な雄牛』がいい。特に後者はおれの写し絵だ。

\*

年明けに拘置所に送られた。ひよどり台の無機質な住宅地にそいつはあった。拘置所への道すがら、一緒になった男たちの話に耳を傾ける。どっちも執行猶予内にことを起し、捕まったらしい。ひとりとは同棲相手を撲ったといった。たどり着いて刑務官がおれの荷物を調べた。ノートの内容も調べられた。——おい、ナカタ。おまえ、自殺するもりなんか?——ノートに書いておるが?——いいえ、小説のためですよ。おれはすぐにペンを所望した。しかし購入はできても房内に入れることはできないといわれた。おかしい話じゃないか、書くことになんの問題があるというんだ。もちろん、おれは抗議した。数日経って別室に連れられ、「ペンの持ち込みは認められない」という回答を得た。理由?——そんなものはない。なにも書けないなかで苛立ちだけがあたしくなった。まったくひどいところだった。未決だというのに囚人扱いを受け、おれは安定剤と睡眠薬をだしてもらった。医務室から帰り際、おれは死ぬといって泣いた。老いた刑務官がうろたえた。担当の若い刑務官はあいかわらず、ひどい罵声を浴びせた。房にもどるときだった。

番号は!

やつが叫ぶ。おれがじぶんのをいう。眼に涙を溜め、そしてきり返す。

あなたの番号は?

寒さのあまり、死人がでたという拘置所。毛布をかぶることすら赦されず、寒さのなかでずつと震えた。眠るときは枕の下に本を積み、ズボンもジャケットもそのままに蒲団を、——赦されないことだが——顔までかぶって眠った。2度の簡易裁判があった。検察は声を荒らげてた。おれの発言に「意味がわからない」と吐き捨てた。けっきょく執行猶予が下された。3年

6ヶ月。ひよどり台に帰ると、すぐに釈放だ。ひと気のない道をいき、団地まえのバス停で加納町まで乗った。おれはウィスキーをしこたま呑んだ。日が昇り、日が暮れても。ある夜、酒で膨張した舌が咽につまり、呼吸と意識に障碍がでた。救急車を呼んだ。相手にされなかった。おまけに言語障碍まで起きた。おれは役所にいき、入院先を探してもらった。湊川病院に決まった。そこがどんなにひどいところか知らなかった。人間扱いされなかった。ひどい辱めに遭った。初日、おれはみずから施錠の室を撰んだ。しかしアルコールの離脱症状は苦しく、おれは主治医の後藤まどかを呼んだ。からだの血がぜんぶ溢れて皮膚を突き破ろうとするみたいな感じだった。医者が来た。おれは施錠なしに変更してくれといった。女の主治医はドアを閉めようとした。おれは手でドアを押さえた。女医が看護人たちを大声で呼ぶ。おれは力づくで逃げだした。どの扉も窓も施錠されてる。おれは端っこの病室に隠れた。老女がいた。ちびの看護人がおれを探してる。

どこいったんや？

けつきよくおれは見つかってしまった。病室にも戻されず、拘束され、服を脱がされ、隔離室へと連行された。おとなしくしていればなんとかなるとおもった。どうにもならなかった。とても人間のいるところじゃない。はじめての夜、ホストか美容師みたいな男が夕餉を運んで来た。髪を染め、日焼けしてる。ふざけた調子で、喋りかけて来る。おれはとにかく水が呑みたかった。

すみません、水をください。

それから氷も。

わかったよ、すぐにもってくれからね！

しばらくしてそのおかまやろうがもどって来た。小さな紙コップのなかには、たしかに水があった。けれどもみじかい毛が幾つも入ってる。おれは戦慄した。なんていう懲罰だ！——でも、呑むしかなかった。抗議すればなにをされるかわからない。

後藤先生にいつてください、ぼくはもう正気だと。

はアーい、いつておくねー。

室のうしろには壁があり、そのうへはガラス、そして廊下があった。そのむこうに窓。山に身を寄せ合う家々が見える。そしてつよいライトが終日、照らしてる。おれは夢を見た。中学校をさまようおれだ。廊下を走ってる。「そんなにおれを殺したいのか、友衣子!」。窓をあけ、頭から地上に飛び降りる。死ぬ。――目が醒める。またしても呼吸が止まっていた。その症状を何度訴えたことだろう。舌が膨張して喉を塞ぐ。看護人のだれひとり相手にはしなかった。やつらには心がなかった。シオランがいうように《苦しみを知らないものは「存在」とは呼べない。せいぜいのところ「個体」でしかない》ということだ。ずっとあとになってじぶんが睡眠時無呼吸症候群だと知らされた。隣の牢獄では老人がずっと捲し立ててる。天皇系の由来云々や、歴史の人物についてだ。どうやら躁の状態らしかった。ようやく離脱症状が治まった。わたしは室の便器でくそをするのを赦された。看護人の見てるまえでだ。もはや恥もなにもなかった。おれはなんとか時間が過ぎるのを待つしかなかった。ほかの室からは四六時中、わめき声が聞えた。理性と自己を失った呪詛の声がやまなかった。おれは1週間でそこをでられた。おれがでるとき、あたらしく牢獄に入れられる患者を見た。痩せ細った老女だった。もはや動けない、声もだせないだろう、患者に拘束具を嵌めてた。どうみても衰弱してる。なんてやつらだ。ひとつてに病院のバックが創価学会だと聞き、すべて合点した。おれは長いこと拘束されてたせいで、足や手がうまく動かなかった。感覚が鈍い。施錠なしの室、そして外出許可を得た。おれは電車でアパートまで帰った。もう夜だった。警官たちが幾人もアパートのまえにいた。知らないふりで通り過ぎた。警官のひとりが追って来た。おれはけっきょく捕まって、病院にもどされた。外出許可は無効になった。そして事務の醜女が財布を寄越せとおれにいう。年下のくせに礼もへつたくれもない。

財布をだしなさい。

いいや、金なんか大して入ってない。

いいからだしなさい。

規則なんだから。

おれは預かり金をとられなくなかった。預ければ1日数百円取られ、そのうちゼロどころか、マイナスになっちまう。なんとか追っ払った。小さなけつをふりふりながら醜女は去る。やがて個室からやがて大部屋に移された。隣人の鼾がひどかった。そんななか何人かのひとびと知り合った。かれらはいった。「やっとまともに話せるひとに出会えた」と。ひとりは甲狀腺を、もうひとりは統合失調症を患ってた。おれはなんとか退院か転院したかった。けれどもおれは父の了解がなければならなかった。なぜそうなったのか、いまでもわからない。おれは父を呼んだ。やつの答えは「一生入ってろ」だった。どうしようもないけつの穴。

作業療法がはじまった。おれはそのコンピュータから現状報告をSNSに書いた。ゆまという女とメッセージを交わした。詩人の佐々木英明から詩集のデータを送ってもらった。facebookのアカウントを消した。そして退屈しのぎに携帯プレーヤーとJoy Division "Unknown Pleasures" と bloodthirsty Butchers 『no album 無題』を注文した。そして母に本を送ってくれるように頼んだ。湯本香樹実『ポプラの秋』、チャンドラー『さよなら、愛しいひと』、原奈『私が殺した少女』を。いっぽう父は2番めの妹を連れ、欧州旅行にでた。かの女の大学院進学を祝って。食堂では気狂い女がおれにまじないをかける。

あなた、大卒？

いいえ。

でも大卒に見える。

そう？



あたいたいひと、それともわるいひと？

わるいひとだ。

かの女は悲鳴をあげて去る。たしかにおれはわるいやつだった。あそこで4ヶ月も過ごした。おれは恋をした。城石さんという10歳もうえの女性患者だ。なにかと話しかけてくれ、心配してくれた。おれのためにアイマスクや耳栓を買ってきてくれたりもした。かの女は鬱病といった。入院患者のひとりにしつこく口説かれてた。そいつは神戸に棲む、あるシンガーソングライターのなまえと経歴を騙ってた。かつて《だれにも知られずに死んでいくしかないさ》と唄ったシンガーだ。かの女は医者やみんなのまえで泣き、退院してた。おれはといえば2月になっても、3月になっても、4月になっても退院できなかった。おれはベッドでゲンスブールの評伝を読みながら、カーテンも仕切りもない病室のなかでまなぎしの地獄に耐えてた。城石さんが父を電話で説得しようとしてくれた。退院させてくれるように。父はおれの悪行を嬉々として暴露した。だめだった。しばしば城石さんと電話で話した。かの女はいった、

ナカタくんのお父さん、へんやで。

じぶんの息子の恥を嬉しそうに話してて。

おかしいってあれえ。

かの女からいわれていちばんショックだったのは、おれの声が父のそれにそっくりということだ。そんなこといままでもおもったこともなかった。いちど車で父と実家へいった。その途上、おれは車を降りようとした。父は半狂乱になっておれの髪を掴み、車内へもどした。なぜそこまで世間の体面を気にするのかわからない。家ではむちゃくちゃな暴君だというのに。おれは臨床心理士との面談を希望した。やって来たのは社会心理士で、映画の話をしてだけだった。かれは町田康のファンでベースレス・バンドをやってるらしい。それでも1回につき千円。べて7千円なり。中程度の患者が集う東病棟に移され、さらに

時間が経った。そこは女のほうが多い。いちばん不気味なのは公衆電話を占領する女だ。かの女は繋がってない受話器を耳に当てて何時間も立ってた。だれもかも暗く沈んでる。生気を奪われ、ただよろよろとさまよい歩く亡霊みたいなものだ。いたいだれがこんなひどいものへ追いやったんだ？——なにがジェーンに起ったのか？——後藤は臨時勤務のため、話ができるのは週に2回ぐらいだった。おれは我慢の限界だった。——先生、ぼくの問題は根深いものですよ、じぶんでもわかってます。たぶんそれは口唇期からはじまってる。

ああ、ユングが提唱した概念ですね。

いまから解決するには両親と対話するしかないし、立会人がいる。

考えておきます。

かの女はなにも考えてなかった。将棋の駒みたいなかたちの、ぶさいくな顔に濃いアイ・シャドーを塗りたくって、小さな眼と自身の権威を守ろうとしてるだけだ。でもからっぽでしかない。6月半ばに入って、ようやく退院できた。晴れて釈放というわけだ。長い入院のせいで保護費は減らされてしまった。ケース・ワーカーは若い女に変わった。おれは城石さんたちとカラオケにいった。ロックばかりを歌った。それからかの女に告白なんかしてしまった。かの女にはわかれた夫と、そのあいだに成人まぢかの子供がいた。かの女がうまく受け流してくれた。

ひどい病院に監禁された反動で、おれはおかしくなっていた。統合失調症みたいだった。病院で出会った男が毎日訪れた。かれこそ統合失調症だった。当人は金属加工会社の御曹司で、将来は決まってるらしい。かれは仄めかしがひどいといい、ラジオがじぶんを監視してるといった。おれはひたすら酒を呑み、陰謀論を読み、反戦デモに中指を突き立てたこともあった。公衆酩酊で3回も連行された。外国人に絡んだり、アカペラで唄ったらしい。

ある夜、室にもいられずに町をでだ。躰に異常を感じ、朝までさまよい、肌着を失い、素裸にジャケツトを着て、コンビニ

へいき、みずから警察を呼んでくれるように店員にいった。体感幻覚だった。記憶は混乱し、ありもしない記憶があたまのなかを駆け巡った。野柳さんがおれを庇ってくれた。それから叔父に電話をかけ、家族の歴史を聴きだした。アル中の祖父からアル中のおれへと繋がるすべてを訊きだそうとした。かれがいうように「中田家の酒はわるい酒」というのは正鵠を得てる。生前の祖父のことや、学生時代の父のこと、英語の発音を褒められ、秀才とおもいこみ、3人の家庭教師をつけたこと、ふるまいもことばもみな祖父の写しでしかなかったことやなんかを。完全なる行動遺伝学ってやつだ。

祖父は初め、連れ子のある戦争未亡人をものにし、つぎの婚姻で3人の娘をもうけ、ふたりの息子を得る。その長男が父だ。つぎの婚姻で息子をひとり、そして最後の婚姻で息子をひとり。受精時に4度も母体がいったということだ。祖父は性のうえで達者、そして業物だった。いっぽう父は欲の塊だった。やつのやり口はこうだ、親戚中をまわってかれらを助けてやる。それからじぶんがいかに貢献したかをわめいて、なにもかもを搔っ攫っていく。——おれが金をだした。少しでもだした。だから権利は、ぜんぶおれのものだというわけだ。なにもかもを訊きだされて叔父は怒った。「えげつないな、きみ。もう近寄って来るな」。

音楽教室の見学にいった。島村楽器へ。ピアノの講師は村上友代といった。おれは友衣子の妹かとおもった。そんなことはないのにだ。みじかい髪、切れ長の眼、甘えるみたいなの、やさしい声。——レッスンを予約して帰った。でも、熱中症にかかってしまった。血を吐いて倒れた。中央市民病院や光風病院、垂水病院と転々とした。光風がいちばんよかった。静かできれいだった。飯もうまかった。でも、無理やり退院してしまった。どこにいても安住できなかった。そして夜の町を半裸で歩いたり、自身のからだに放射能に汚染されてるといった妄想にかられた。そいつも収まって8月、はじめてキングブラザーズを観た。無料の、ちいさな催しでだったけど、ぜんぶ知ってる曲で嬉しかった。客に飛び込んだマーヤの足におれは触った。おれはどうしても村上友代のレッスンが受けたくて闇金に電話した。そいつで2万5千円を得た。携帯電話を契約して、やつ

らに渡した。こいつは名義貸しで、おれも犯罪者というわけだ。40万の借金ができた。音楽教室に入会したものの、月謝までは払えない。おれはけつきよく、かの女へのうしろめたさを得ただけだった。バックビートに電話をかけ、ライブ出演のブックキングを頼んだ。20分5千円で。当日、ヘリコプターがやたらとうるさかった。体調がわるかった。リハーサルを抜けだしてスポニチをひらき、姫路の仕事を見つけた。ライブをすっぽかして、列車へ乗った。仕事はリフォーム会社のセールスだった。あまりに退屈で1日しか持たなかった。帰ってニュースを見る。どうしてヘリが飛んでたのかを知った。母子の心中だ。復興住宅の浴槽のなかで。おれよりもいくつも若い女だ。かの女には父も母もなく、弟だけだったという。だれも助けることができなかったというわけだ。

\*

酔ってたびたび、おれは電話をかけまくった。家族をやっつけようとして。おれの怒声に、父も母もすぐに切った。おれはそのたびに警察や消防や救急に伝をかけ、ぼけた父の安否確認や、病気で倒れた母、あるいは火事になった家について喋り、呼びださせた。憎しみに日夜、ふるえてた。そんなときだ、口座の金が抜かれてるのに気づいた。父だ。おれはタクシーで実家に戻り込んだ。返り討ちに遭い、メッタ打ちにされた。やつは鉄の棒をつかった。帰り道、おれは酒を呑み、電車に乗った。泥酔してた。痛みのなかでおなじ駅を過ぎたり、もどったりした。そしてどっかに降りて、切符をふたたび買おうとした。5千円を入れた。取り消しを押す。金は戻ってこない。駅員にむかってわめいた。かれらはあきれてホームに入れた。おれは嘔気を憶えて駅からでた。そして歩き、どっかの公園で眠った。男女の声がする。おれのポケットを探り、金を持っていく。おれは動けない。眼が醒めて歩いた。タクシー乗り場にいった。車輛に乗り込み、三ノ宮を目指した。しばらくして金がない

ことに気づいた。呆然としてなにもいえなかった。おれは警察を呼んでもらった。執行猶予中だというにやらかしたんだ。仮設の葺合署に連行された。容疑は詐欺罪。乳房のでかい女警官に卑猥なことをいった。ぴっちりとした赫いタートルネック。かの女の手には縄があっておれの腰に繋がってる。エロかった。酔ってふざけたまま、田舎の警察署まで運ばれた。町の留置場はどこも満員御礼だった。翌朝、ほかの留置場へ移された。篠山警察署だ。相部屋の芦田真司という若いやくざものと打ち解けた。27歳で、背はひくい、細く、しなやかからだをしてる。テレビ芸人みたいに早口で喋った。ふたりでばかばかしをした。笑いあった。やつがやってる地元のパトロールと称した集団暴走や、薬の手入れがあったとき、どうやって切り抜けたか、そういう話がおもしろい。

でも、やつの逮捕理由で気分がかわった。婦女暴行だ。シャブで高ぶったままナンパして無理やりに突っ込んだらしい。やつは薬の運び屋をした。じぶんでも大麻を育ててるといふ。妻とふたりの子供がいる。やつは謝罪文の書き方をおれに訊いてきた。そしておれに仕事をくれるといった。運び屋だ。1週間で200万。やつはおれの保釈に手を貸すといい、でたら家に来いといった。おれはやつが妻が差し入れた本に連絡先を書いた。やつはおれに背中に入れ墨を絵に描いてくれといった。いっぽう隣の房では山健組の若いのが警官とやりあった。やがて室が変わって芦田とはわかれた。おれはヤク中の老夫と、微罪で勾留された中年のふと一緒になった。でぶは西脇市に詳しかった。母の実家の近くにあったJRAの厩や、商業施設の閉鎖も知ってた。やつはすぐにでて青年が入ってきた。不良でもやくざでもない。なぜこんなところにいるのかがおかしかった。おれはリリー・フランキーのエッセイを読みながら、かれの容疑について考えてみた。答えはいらない。

おれの担当は、でぶの刑事で、白縁眼鏡をかけてる。洒落てるつもりかもしれないが似合っていない。もうひとり禿げの老刑事が一緒だ。おれのいつてことを片っぱしから否定した。おれは犯意を否定し、金がないことに気づいてなかったといった。ずっとそいつの繰り返しだ。エレベータで留置場にもどる。

ナカタ、おまえ、身長いくつやねん？

174  
ですよ。

もつとあるやろう。

だったら、どうだってんだ？——おれは房に帰ってノートをひらいた。怒りでペンを走らせた。《11月18日／本日、取り調べのみ。またも障碍について逐一話す。相手のでぶは脂だけで、内面といったものがない。やたらに「一般では」とか「普通だったら」とか「まともな人間なら」と言う。そもそもわたしはかれらの志向や価値観などによって、10年以上も狂わされてきたというのにだ。なぜかれらのひとやものに対する見識に頷く必要があるのか。だれも答えてはくれない。わたしが考えもなしにタクシーに乗ったいっぽう、かれらが大した考えもなしに一般人を云々するのは同根だ。けっきょくは使っている脳の部位がちがうだけである。ただかれらが悪質なのは、あきらかに権力や地位を利用して政治的判断でひとを「孤立のなかで疎外するか、抹殺する」というところにある。霜山徳爾にしろ、中井久夫にしろ、文学や人間をわかった気だけで、なにもわかってはいない。患者をねたに金を稼ぎ、みずからの立つ階級から降りようとはしない。そんなところに詩は存在しない。日本は精神や心理、脳についての認識はお粗末なものでしかないうえに、医者や臨床心理士は金のこと以外考えない。弱いやつは薬物と暴力と蔑みに、孤立と過古と未来によって宙吊りにされ、死んでいくだけだ。わたしはそいつがまちがいだと本能でわかっているから、あらゆる表現方法を身につけてきた。わたしは自身を作家とも詩人ともおもっていない。きょうも他人がいうから便宜上、そう名乗ったまでだ。ほんとうはただのなんでも屋だった。好きなことをやり抜くしか、わたしにはできない。少なくとも、集団心理や政治的判断で自身よりも弱い、劣ってる、醜いⅡ悪とした対象を苦しめてなんの呵責もない、それどころか、父権的暴力によって生存権を奪おうとする、かれら政治的人間に少しでも歯向かおうものならこのざまだ。拒絶を喰らい、孤立のなかで苦しみ、気がつけば檻のなかだ。いけすかない。こんな社会は毀されてしまえ。なんとしても叩き

潰さねばならぬ。さもなくばこの国を棄てて、ほかへ移るしかないだろう。どこか湿度の低い、涼しい土地でなにかもやり直したい。人生の再建だ》。

次の送検でなんとか精神鑑定に持ち込んだ。芦田は組織から弁護士を派遣してもらった。釈放されるみたいだった。でも署をであれば制裁が待ってる。怯えながら警官に泣き言をいった。

助けてくれ、

おれ、殺されるかも知れへん。

おれは光風病院で話をした。まえに葺合で会ったことのある、留置場づけの警官が昇進しておれを待ってた。

おれのこと、憶えてる？

ええ。

それから老いた女医をまえに自身について語った。ずいぶん早口に。でもさんざんむこうに遮られて、けっきょくは酒をやめないさいで片づけられてしまった。帰り際、車のなかで昇進した中畑刑事がいった、

あんなに大人しかったのによ喋って驚いたわあ。

なんとも恥ずかしい気分だ。おれはかつて大衆劇団にいたことを話した。かれは納得したように頷く。ふたたび篠山まで帰り、ノートをひらく。《11月25日／精神科医がいに救いがたいかをおもい知った。けっきょくやつらのやりたいことは、ひとを分類し、利益になる薬を与えることだ。わたしはまたしてもアルコールの問題のみを過大評価された。わたしには長年抱える別の問題があり、それがアルコールへと繋がっていることに気づこうとしない。老女の医師はわたしの話を遮り、これを聴かなかった。またしても紋切型の反応。こういった光景がつづくにつれ、医学への不信が高まる。わたしのもっとも厭うところは感情の制御ができないことについてだ。ことに怒りや悲しみが湧きだすとき、手がつけられなくなる。これには成人ま

での体験が深く根を下ろしているのは確かだ。しかしだれもそれを汲んではくれない。もはや想像力を働かせようとしない怠惰なひとびとには、なにもいうまい。読み取る意思のないものからは去ってしまうほかないだろう。』

釈放の条件として垂水病院へいくことになった。青年がだされたあと、おれがだされた。老刑事は退院したら電話をくれといった。垂水の永龍医師は失礼なやつだった。みてくれはよかったが、それだけだ。神経質に垂れた前髪が整髪料に塗れてる。権威に陶醉したさまがありありと浮かぶ。父がおれの口座から抜いてることは、おれの妄想として扱われた。――「お父さんの気持ちもわかってあげなさいよ！」だよ。

そして森忠明との交流も妄想だと断言された。なんてやろうだとおもった。自閉症スペクトラム障碍と診断された。おれはひまつぶしにビジネス書を読んだ。『金持ち父さんと貧乏父さん』といったくだらない本だ。時間が赦すかぎり読んだ。あるとき、でぶ眼鏡がテーブルから声をかけてきた。

きみ、本読むの？

ええ。

大卒？

いいえ。

それつきりこちらを見もせず、やろうはテレビにむかった。なんなんだ、この男は。髭まみれの若い葉中にも大卒かと尋ねられた。おれはちがうといった。薄笑いで、――うそでしょ？――というのがやつの返事だった。おれがおもってる以上に世界は偏見に充ちてた。高卒は本すら読まない。ただそれはおれの問題ではない。かれらの問題だ。なにも反論はしなかった。おれは3日で退院し、室に帰った。患者のひとりがいったことをおもいだす。「2度と来るなよ」。冷たい眼をしてた。おれはまた酒を呑んだ。ヘルキヤストのばかどもから未払いの給料をせしめた。――もう2度とうちの会社にはかかわらないでくだ



さいね！——百貫でぶがいった。どうにもしやがれよ、人足寄せ。なぜかおれはアジア系の外国人のふりをして電車に乗り、道や路線を尋ねた。おもしろかった。女どもがみな親切になった。けれどもサンキタ通りのチンピラにもおなじことをやってしまった。みんな笑ってた。でたらめだが発音がよかった。おれが日本人だと明かしたとき、やつらのひとりから1発喰らった。それでもおれはむかってた。記憶は途切れ、気づいたときには血まみれのまま歩いてた。警官に連れられ、顎と口を縫われた。そしてそのまま室に帰された。ひどい顔だった。しばらく腫れあがった顔で、あたりをうろついてた。さぞや、見ものだったにちがいない。ひと月と半分して、抜糸してもらった。傷は完全には消えなかった。

\*

スロヴェニアから郵便が来る。日本人女性から画材や現金が贈られてきた。おれのことを少しでもおもってくれるひとがいるのは嬉しかった。かの女とは11年以来ずっと交流がある。おれが電話番号を知ってるふたりめの女だ。さまざまなひとがおれの作品を、人品骨柄を善しといってくれた。ただ申し訳ないことにおれは多作ではないし、気まぐれで書いているところも多かった。だから作品の質にむらができてしまうし、一貫性に欠けるところもあった。毎日、作品を書き、技術を磨いてる連中からすればインチキもいいところだ。そのいっぽう野崎義成という画家が、はじめてちゃんと描いた油彩を買ってくれた。温かい手紙もくれた。けれどもおれはかれに絶縁されちゃった。おれが絵の宣伝を手伝って欲しいと頼んだからだ。神戸で売り込みができなければ、東京でもおなじだというのがかれの回答である。そのときおれはひどくうろたえ、かれから送られてきた手紙をぜんぶ棄ててしまった。おれはかれの誇りに疵をつけてしまったんだ。あれからまとも油絵を描かなくなった。金がかかるというのもある。でも描いてるとかれに対しての申し訳なさや羞恥が勝って、なにを描けばいいのかがわからなくなっ

てしまう。これはどうやっても治らなかった。おれはまた水彩へもどり、油絵の道具も家財も物置にしまってる。どうすることもできなかった。

ときおり父と電話で口論になることがあった。だいたいはおれが酔って電話をかける。そしていままでされたことの対価を払えと捲し立てる。それについて父のいうことは決まっていた。

おまえはたいしたことなんかなんもしてへんやろ！

おまえはいつも仕事いいつけたら逃げとったやないか！

おまえはできがわるいからしごいてやったんや！

おまえ、韓国みたいなやつやな。いつまでも日本に過古のことでたかる！——そういった。中田家も、母方の村上家も、もとは大地主で保守を気取ってた。没落した今でもだ。さすが家庭教師を3人もつけてた男だけある。いうことがちがう。生憎、たまに父が買った、右派の広報誌や『正論』みたいなおたわごとは卒業済みだった。中学生のときはそんなものをおれも読んだ。小林よしのりの『戦争論』とか。愛国美談はものごとのある側面でしかないことをいまではわかってる。そんなものに突き動かされるのはごめんだっし、そんなものを全体であるかのように語る連中にもうんざりだった。おれは国に殉じるつもりもないし、そうだったことはどこぞのマツチヨに任せておけばいいとおもってる。どこへいっても爪弾きされるなら、好きなことやってくたばるほうがいい。

おれは電話を切って、ため息を吐いた。なんともやりきれない気分。父との和解なんぞあり得ない。そう結論づけると、酒を買って呑んだ。そして長いこと、空想癖を遊ばせてじぶんの空虚さを埋めることに、ただただ熱心になっていたんだ。

\*

そいつはまったくの偶然だった。おれがひまつぶしに郷里について調べてみたときだった。両親の、というよりも父の家が画面に映った。ろくな剪定もされてない、荒れた庭木や植木、錆びた柵、錆びた門、腐った鉢植えたち、犬のくそ、母屋のまえを覆う、くたびれた室みたいになにか、積年の汚れで溺れてる犬小屋、ガレージのうえのなぞの小屋、むきだしの建材、雨風に冒され、変色した木の壁、すべては灰色ががってて、とても不気味だ。ホラー映画のセットにも見える。とても生きるものが棲んでるとはおもえない。ひどいものだ。父は隣の土地も買い取ってた。そっちには駐輪用の小屋と、作業小屋、畑があった。むかし、間伐のさなかに山火事を起しかけたこともあった。おれはこんな場所で育ったのだ。ぞっとした。もう2度と見たくはない。

投稿もせず、あたらしい詩集もだせず、そうこうするうちに、おれは32歳になってた。有馬高原病院に3度入院したあと、カウンセリングにいくようになった。これがよかった。話をすれば心も軽くなってた。おれのなかで友衣子の印象は、どんな薄くなっていた。11月、イベントの設営や洗い場で働き、それからバーテンダーの職をみつけた。'17年1月、おれは波河繁雄の実家にいった。かつての同級生は迎えてくれた。かれの母親もおれを憶えてた。しかし、ふたりのあいだの断絶は隠しようがなかった。かれはおれの漫画のはじめての読者だった。かれとお節の残りを喰い、スポーツ中継を見、将棋をした。音楽の話もしたが噛み合わなかった。かれはJOEというバンドに熱心だった。

ミツホ、日本の音楽やったらなに聴くん？

え、くるりとか。

ふつうやな。

あとエレファントカシマシ。

やつは笑った。

ひねくれてるなあ！

映画は、——恋愛映画とか観いへんの？

『バッファロー'66』が好きだよ。

パンクやなあ！

おれも好きやで。

それからそとへでた。スーパーマーケットはなくなり、家が建ってる。駄菓子を買ってた米屋はべつの店子が入ってる。そのまま坂を下りて丘を降りる。途中に小山の家がある。かれには中学生のころ、嘉門達夫を教えてもらった。秀才で英単語をいつも諳んじてた。かつて勤めてた『わかまつ』が見える。いまでは中古車ディーラーだ。狭い駐車場に車が並んでる。おれたちはコンビニへ入った。おれは白ワインのポケット・ボトルを買った。浪河はあきれてる。帰りはべつの道から丘をあがった。その道は友衣子の家にもつづいてる。おれはひどい気分だった。なんとか、かの女の家を過ぐ。今度は小学校だ。おれはでぶとっていいからだをなんとか運んだ。

ミツホがよく遊んだのってだれなん？

え？——上村かなあ。

あいつも気が強いのか、弱いのか、よくわからんやつやったな。

どうしてミツホは、おれんところに來たん？

とにかくだれかに会いたかったんだ。

ミツホは過古にこだわりすぎやで。

かれはドストエフスキーやニーチェを読んでたけど、これといった見識はなかった。おれの詩集を読んで「だれにむけて書

いてるのがわからない」といった。読み手としかいいようがない。べつに特定のだれかのために書いてるわけじゃない。細野晴臣の『終わりの季節』という歌をおれはおもい浮かべてた。《たしかな言葉はさようなら》だ。口にこそださなかったが、かれとも訣別するときに来てた。今年結婚するという。

おれは室に帰った。友衣子に最後の葉書をだした。《ぼくはストーカーになるつもりはありません》とか《あなたがいちどでも返事をくれたことに感謝します》などと書いた。友衣子の友人嘉村大介に電話をかけた。苦楽園で装飾品の修復や加工をしてる。「おまえと話すんは時間の無駄や」といつて切られた。つぎに長福に電話をかけてみた。はるか鹿児島で写真館をやってる。かの女はおれをかばったためにひどい眼に遭ったらしかった。なにもかもが終わった。やっぱりいまさら謝っても、なにも変わらないんだ。それからすぐ漏斗胸の手術を受けた。へこんだ胸の骨を金属のバーで持ち上げ、固定する。想像を絶する痛みだった。手術が終わって数日は歩けもしなかった。そのうちどうにか立てるようになって、歩行訓練をした。それからバーテンの仕事にもどった。痛みはひどい。べつの手術法を撰ぶべきだった。けつきよく再入院することになった。フェリーで高松へ。琴電とバスで医大へ。ひどいありさまだった。

酔っぱらいの接客は苦手だったし、酒のなまえや、作り方を憶えるのはやっかいだった。それでも愉しかったし、5月まで働いた。肉体が限界だったし、オーナーの未亡人とも諍いを起した。かの女は、ほかの従業員の悪口をおれに吹き込んで来る。これには参った。いうほうは楽だろう。でも聞かされるほうは堪らない。そしてかの女はおれのことをほかのやつらに吹き込んだ。たかがおれがコースターのデザインを好いといわなかっただけで。おれは悪態について去った。

6月には個展を控えてた。個展会場は『ブッカード・カフェ』、栄町だ。そこを紹介してくれたのも栄町の雑貨屋だった。その店でおれは絵葉書を売るつもりでいた。でもけつきよく予算が合わなかった。個展が決まった夜、店主はおれに上海料理をふるまってくれた。そんなかれもいまはもういない。香川へいつちまったからだ。おれは個展のためにたった、いちまいだ

け新作を描いた。なんとか描けたといったほうが正しい。それは人間の足を生やした馬の絵だ。

\*

ようやく童貞を棄てた。飛田新地の青春通りでだ。女は若かった。声は酒焼けしてた。でも肌がとてもきれいで素敵だった。かの女が服を脱ぎ、おれのコックにコンドームを着させる。やがて挿入のときになった。かの女の孔のなかにおれの茎が入られる。すべてがかの女の導きだ。とんでもない痛みが奔る、駆けめぐる。その痛みのなかで闘牛をやる。呼吸がどんどんどんどん荒くなった。でもけっきょく射精障碍でいけなかったんだ。でも女の子の手を繋いだり、髪を撫でたりするのは、ほんとうに心地が良い。かの女のなまえはいちばん下の妹とおなじだった。それを知った一瞬、かたまってしまった。それでも終わってしまった。ますます友衣子のことはどうでもいいことになった。古傷はやがて消える。作品の登場人物であって、現実の、生身の人間でなくなっていく。帰りしなサムライ・ブルーのユニフォームを着た女の子を見つけてしまった。——ちくし  
よう、かの女とともにしたかった！

おれは島村楽器へいった。村上友代が話しかけてくれた。

ああ、ナカタさんじゃないですよね？

ええ。——教室以外の仕事もなさるんですね。

はい、空いてる時間はこっちの手伝いもします。

そろそろ、曲を録音しようとおもってるんです。

かの女はデモを聴いてくれるといい、教室への再入会も奨めてくれた。でも、しばらく経って店長が断るといった。数年ま

え、予約をしながら来ず、月謝も払わなかった、しかも酒呑みだと、小太りの眼鏡から電話が来た。おれは酩酊してかの女のSNSに触ってしまった。かの女はアカウントを閉じ、それからは石橋楽器に変えた。そっちのほうが品物もサービスもよかったからだ。おれはあたらしい詩集を編んだ。もう2年も。けれども売るには在庫がいる。オンデマンドでいくら宣伝しても買い手はつかない。もつと安く、手頃な商品をつくらなきゃない。絵葉書、あるいはポर्टフォリオ、小さな画集や写真集、ことばが少なくて済むものをつくらなければとおもった。詩がわかるやつなんてこの世にいったいどれほどいる？

生活保護費は減らされていくだろう。おれには障害者可算があるが、それでもまえよりはきびしい。懲罰的で、家父長主義の世界がどこまでおれを追いつめる。なんのために？——みんなと一緒に苦しむためにか？——おれはそんなもの受け入れないからな！——壊れた椅子や、汚れた服、観たい映画、どれもままならなかった。べつに贅沢がしたいわけじゃない。おれだっていつまでも淵を歩くわけにはいかない。でも、ひとに使われるのはもういやだ。それまでの労働体験がすべてを物語ってる。単純労働者として人生を終わらせるのはいやだ。ただじぶんのために働きたい。だれかの利益のためでなくだ。おれが学んだのは、だれかに雇われ、使われるのは人生にとって有害で、毒でしかないということだ。毒よりも虚無のほうがましだ。昼夜、罵声を浴びながら働くなんて魂しいがどうにかなっちゃう。そんなものはうんざりだ。ハートランド・ビールを呑み、ストーンズを呑んだ。おれは立ちあがって窓を見た。だれもない公園、ラブホテルの群れ、そして野良猫たち。——恋人が欲しい。——空想や夢のなかの女たちはもはやおれのなかに現れてくれない。たったひとり、おきざりにされたおれは見棄てられた田舎者だ。遠いあこがれのなかで、なによりも惨めなじぶんが透けてみえるくらいに孤立してる。

\*

夏、人生が終わったのに生活がつづく。ラングストン・ヒューズみたいに《ここからどつかに去っていくんだ》というおもいがずっとある。ずらかりたいとおもう。あまい考えた、こっから離れるなんて。でも、街の生活に蝕まれてどうにもいかなくなってる。家賃は高く、4万7千もする。おれは深江浜や西灘の倉庫をうろつき、右のものをひだりに、うえのものを足許へ動かしてるあいだ、ずっと脱出について考えてた。いまのまちがいを抜けだしても、あるのはちがったまちがいであって、またそいつに喘ぐのはわかってる。でも情況を変えようとせずにはいられない。夜から朝までの日払いの、半端仕事。はした金のためにあくせくとしながら、長年の脱出願望をこの手に掴もうと汗を流してた。でも短期の肉体労働はさまざまな面で不利だった。税金のこと、保険料のこと、給与のこと。ぜんぶが見るに堪えなかった。おれの仕事は、ほとんどが東灘だった。倉庫街。まちがっても中央区内ではなかった。日当がせいぜい8千の夜勤をやっつけて、ようやく8万ほどつくった。ジェイムズ・エルロイ式にえば、おれはフルタイムの与太者だった。

ごくごくはじめ、仕事探しに口入屋をまわってるあいだは、旅のことはそれほどの関心でもなかった。新潟は十日町へ移動できればいいとおもっちゃなかった。なんとか身に合った案件にありつき、金が溜まって来て、願望ふたたびってわけだ。まずは青森にいくこととした。もう数年もまえからいくと公言し、果たせないままだった。青森の詩人、佐々木英明をたぶんうんざりさせてた。手紙のなかや、電話でもいつかいくといったままだった。9月10日、最後の仕事をやって、12日のバスを予約した。青森では市街劇が終わったあとだ。はずれ馬券をくず箱に棄て、町をぶらつく。競馬はまったくだめだ。『投資競馬ストーリー』という予想システムに金を払ったけど、せいぜいのところ1日2千円ぐらいしか、当たりはなかった。まあ、おれだって2千円しか使っちゃないが。真夏の街を歩き、4万1千円の物件を見つけた。風呂も便所もひどいが、室はひろかった。6千も安い。引っ越しをして、さらに働いた。

それから旅へでた。まずは東京までいこう。けれどもバスをまちがえてしまった。タツミ交通とタツミコーポレーション。



まったくなまえの似てるバス会社がふたつ。おれはまちがったほうに乗ってしまった。乗務員とやり合った。おれがまちがったのを知ったやろうは横柄な態度をとった。おれもそれにあわせて態度を変えた。するとやろうは丁寧語で「京都で降りてもいいです。料金は頂きません」といった。下手な芝居だ。こういった手合いはくそ喰らえだ。相手が弱ければ際限なくがめるんだ。夜の京都で後続のバスを探した。だめだった。ネットカフェを探したけど。京都の田舎らしくえらく割高だった。そこでバスのキャンセルを伝え、外へでた。おもったよりも空気は冷たかった。おれはゲストハウスを探した。二軒だけ見つけたものの、どっちもスイートしか空いてないと来る。鼻っ柱を折られた。

しかたなく、またもぼったくりのネットカフェでバスを予約した。翌朝9時だ。おれはバス停まえのペンチで寝た。朝方、老人が声をかけて来た。軽装で、生業のわからないのが。

仕事探してんのか？

いえ。

もし興味あったら造園の仕事せんか？

東京に用事があるので。

そうか。

連絡先、くださいよ。

おれはまたしても、おかしな手配師に誘われてしまった。翌朝、バスに乗って東京を目指した。東京は12年ぶりだった。21歳のとき、2度上京した。なんとか暮らしを立てようとした。だめだった。飯場に潜りこみ、自称やくざのおかまやろうにあわけつの穴を奪われそうになっただけだ。やつはいまどうしてるだろう？——そんなくだらないことをおもう。滋賀や御殿場を越え、窓は暮れ、やがて川崎の重工業地帯を過ぎる。丘のうえで寄り添い合いながら建つ小さな家々を見てるとわびしく

なるよな？

新宿でひと——詩人の古溝真一郎に13年ぶりに会った。かれとは神戸での朗読会以来だ。居酒屋で話した。おれはかれの詩をまったく知らなかった。かれはおれの詩を「予想通りにはじまって予想通りに終わる」といった。おれは最近詩が書けてないことや、精神的に落ち着いてしまったこと、小説を書いてると話した。かれは契約社員をしながら妻子を養っていることとだった。それから東口で文藝同人『裏庭文庫』を主宰してる佐藤青年と待ち合わせた。まだ20歳と半分らしいかれとともに中野へいった。かれの実家も、かれの棲家もそこにあった。アパートは4畳半、風呂なし、共同便所。まさかこんなにも禁欲的な暮らしを送ってるとはおもわなかった。かれと銭湯へいき、室に泊めてもらう。かつてこの町には陸軍中野学校があって、かれの祖父はその出身らしかった。

かれの作品を読んだ。内容以前だ。伝えようとする工夫も意思もなにもない。国語の問題だ、文学のではない。かれにそういった。かれはおれの作品を三島のようなだといった。舞台が日本だというのに、それらしきがないということだった。おれは三島を短篇でしか読んだことがない。それにまったく馬が合わなかった。

翌朝、ネットカフェにいった。文章をまとめた。森忠明にも電話した。もちろんのこと、会うつもりでだ。けれどもかれはいまはだれとも会いたくないといった。会いたくなったらじぶんからいくと。おれは神田や秋葉原をぶらついた。入るはずだった金が入ってなかった。車のオークション会場の仕事で入るはずの金だ。作業確認の紙を提出してなかった。電話口でおれは苛立ち、汗を流した。しかたなしにぶらつき、電気街や古本屋街をまわった。小宮山書房にはめばしいものがなかった。ポケミスの専門店でシャブリゾの『さらば友よ』を買った。

夜、道に迷ったためにバスに乗れず、逃してしまった。ほかのバスに乗ろうと東京駅までいった。でも空気がなかった。寒い夜、寝るところもなかった。さんざ歩いた挙句、かわいい女のおれのところに来た。支那人マッサージだった。いっぺ

んは断ったものの、かの女を探して雑居ビルの一室へ入れてもらった。マッサージもなしに眠った。けつきよく、次の夜もバスに乗れなかった。しかたなく上野駅のちかく野営した。ペパーミント・アイスを食べながら。朝、上野から青森行きのバスに乗った。青森駅に着いたとき、夜の8時だった。まっくらななか、月を見る。手のひらにぢっと汗を掻いてた。乗り遅れたことで会う相手に詫た。かれは2日の休みまでとってた。夜明けまでを市内唯一のネットカフェで過ごす。京都より安かった。旅草も乏しいなか、朝の町をうろついた。駅まえの公園で、ひとり旅の男が寝袋で眠ってた。こちらはジャケットしがなく、寒い。あちらこちらをさまよった。駅の待合があくまでが長かった。おれは風呂にも入ってないからだで暖をとり、ひたすら待った。

ようやく朝の9時、詩人の佐々木英明と落ち合った。上下をブルージーンで決め、キャップをかぶり、白鬚を生やしてる。垢抜けてて、若々しかった。やさしい顔で笑った。――きみがナカタくんかな?――かれの車にゆられて三沢まで。2時間ほどかけてむかう。閉鎖されたホテル、寂れた観光地を過ぎる。帆立が名産らしく、いたるところに幟や看板が立ってる。ぼくは旅がきらいなんだとかれはいった。海外でもホテルに籠もってた。さらにかつて西脇の女の子と文通してたとも。かぜが強い。雨も降ってきた。眠気に襲われながら車窓にシャッターを切った。やがて町も村もなくなり、ふるいロードムービーみたいないっぽん道に来了。その果ての森に寺山修司記念館があった。そこでほとんど写真を撮らなかったのが口惜しい。寺山修司の本棚に村木道彦歌集を見つけた。館内を見、昼になって佐々木館長とともに昼餉を迎えた。――おれが読んで来た本について訊かれる。町田康や、車谷長吉、村上龍、ほかに織田作之助や梶井基次郎なんかのなまえを挙げた。そして館をでて温泉に行く。その途中のこと。市街劇の出演者が稽古で泊まったという大きな温泉旅館に寄った。「由緒のあるものなんかここにはない」と英明さんはつぶやくようにいった。池も滝も建物もすべてあぶく景気で、東京の会社に造られたものだという。車を駐めてかれは降りた。洪澤榮一を祀った神社と移築されたかれの邸宅があった。

気狂いぢみてる。

英明さんはいった。

木も一緒に移したみたい。

でもここにあると、いんちきという感じがする。

車をだして旅館からでると、駅が見えた。そして古い線路が朽ちたままになっているのにも。旧十和田駅だった。

あそこに製材所があつて小さいころ、寺山さんの遊び場だったんだ。

あの駅、もうじき毀されるらしいですね。

うん、再開発でなんにもなくなっちゃうんだ。

あそこは蕎麦が美味しくてよくひとが来るんだけど。

ガソリンスタンドで給油を済ませ、温泉へ。その道すがら、寺山修司が小学生のころ、かくれんぼをしたという神社や墓場、古間木小学校の跡地などを案内してもらった。かつて寺山母子が棲んでいた場所や、寺山食堂の跡地にも。寺山修司がどんなじめを受けてたかや、かれの母親がどうして九州にいつてしまったかを問わず語りのように英明さんが話してくれる。——ただ出稼ぎにいったわけじゃなかった。小雨の降りはじめた三沢はずいぶんと淋しい顔をしてた。《排除されるということにすごく興味がある》と晩年の寺山は三浦雅士との対話で語ってる。そこには単純に興味だけでなく、みずからの経験も含まれてたんだ。灰色の雲が地平ぎりぎりを流れてる。温泉のあと三沢市内のホテルに宿をとって貰った。宿への途上、三沢のアメリカ通りを過ぎる。東京の会社による再開発のなれの果てだ。そしてプリンセス・ホテルにチェック・イン。ずうずうしくも泊まらせてもらった。夜、2軒の呑み屋を佐々木さんとまわった。まずはバラ焼きを喰い、麦酒を呑んだ。つぎに焼き鳥屋へ。テレビでは皇室特集がやってた。——あれはぼくらの王じゃない、とかれはいった。縄文の血筋には無関係だと。それはよく

わかってた。おれの父方もおそらくは。最後に全国チェーンの居酒屋で呑んだ。話は詩や文学についてのことが多くでた。わたしはべらべらと酔ってしゃべりすぎてしまった。そういった話題については黙っていたほうが幸福だというのに。好きな作家や、影響を受けた作品、寺山修司作品に触れたきっかけなんかを話した。

ナカタくんは、だれにむけて書いてるの？

それは、読者としかいようがないです。

それじゃあ、だめだよ。

詩というものはまづぼくを書いて、それからきみを書かなきゃ。

読者じゃだめだよ、詩は2人称で書くんだよ。

3人称であってはいけないんだ。

おれは連日の酒と移動でだいぶ参ってた。おもったよりも酒に打たれてしまい、なにをどう話せばいいのかわからなくなる。英明さんは森忠明との出会いや印象についても語った。ハイティーン時代の作品を衝撃だったといい、はじめて逢ったときのことでも精しく話してくれた。女の子と同棲してるとき、突然ドアをノックし、誌の朗読会に誘ったのが、そうだったという。

「ぼくからすれば森さんは詩人じゃなくて作家だよ。森さんはちゃんと世間と渡り合ってる。でも詩人っていうのは逃げちゃうんだ。ぼくもちゃんと渡り合わずに逃げてしまった。詩人は成熟を拒絶するところがある。ひとはいつか成熟しなくちゃならないけど。寺山さんもそうだったし、ぼくもそうだし。谷川俊太郎さんもそうかも知れない。森さんの弟子だったら、小説とか童話とか散文を書いたほうがいいよ」。——最近、詩が書けないんです。短ければ短歌や俳句になるし、長いものは散文になっていしまいます。——それでいいんじゃないかな？——英明さんは笑うと深沢七郎に似てた。でもいわなかった。

詩で読んでいた、ナカタくんのイメージと実際会う、ナカタくんがあまりちがってて驚いた。

もちろんいい意味で。

もつと詩にあるような攻撃的なひとかとおもった。

話は、おれがかれに送った若い女詩人の作品に及んだ。ちんすこうりなの『女の子のためのセックス』だ。かの女はおれの詩集を買ってくれ、肖像画の依頼をしてくれた。見ためもいい娘だった。けれども、かの女を作品をどういっていいのか、わからなかった。おれは友衣子になぞらえて女性観を語った。友衣子はもはやおれの18番中の16番だ。英明さんがいう。

セックスがあったからといって愛があるわけではないし、

結婚したからといって愛があるとは限らない。

愛があってもむすばれるとは限らないだよ。

結ばれなかったとしても愛はあるかも知れない。

ホテルへの帰り道、英明さんにいわれた。――ぼくや森さんや三上さんが、あなたを引っぱっていくことはできない。ぼくはもう70の老人だし、こんな年寄りに期待するようじゃだめですよ。――慢心を見透かされたようで、おれは頷きながら「このままではいけない」とおもい、ホテル・プリンスで台風の夜を過ごした。朝、ホテルをでる。六ヶ所村を経由して恐山まで連れていってもらう。もんじゅはもうじき廃止になるとおれは聞いてた。補助金は英明さんも手にしてるという。おれの格安スマートフォンが圏外になった。入山料を払ってもらい、ふたりで入る。台風直過だというのに、駐車場には観光客たちの車があった。激しいかぜでまっすぐに歩けない。夥しいほどの風車がおれを迎えてくれた。英明さんは倒れた風車をそっと直した。映画『田園に死す』にあったみたいなの禍々しさはなかった。そのかわりに露天風呂があり、まるでつげ義春の旅行記みたいに大らかなものを感じた。まさしく流れ雲旅、あるいは貧困旅行記だ。かぜに足を獲られながら、湖まで進む。湖水がかぜに煽られてむかって来る。小石や砂に巻き込まれる。水子の慰霊碑があった。おれはシャッターを切りつづけた。車に戻りな

がら「以前はもつと湯気がでていた」という。

昼までに青森駅へ。ここでお別れだった。かれは千円札をいちまいくれ、「あそこの食堂、蕎麦が美味しいよ」と笑った。次にいくときは列車にしようなどとおもいながら夜のバスを待つ。図書館で時間を潰した。やたらに映像ソフトがそろってる。しかもパズリーニがぜんぶある。かわいい子のいる席のちかくで『狂った日曜日、おれたち二人』っていう本をひらいた。やがて女の子はいなくなり、おれはバス停に立った。ふたたび東京だ。サヨナラ、アオモリ、ハナイチモンメ。

青森から東京へもどった。早朝、コンビニの便所を借りる。おなじバスの女の子が尿意を堪えて待ってた。足踏みしてる。もう少しすれば洩らしたかも知れない。まったく、かわいいぜ。そこでまたも佐藤青年の室で泊めてもらった。かれと合流したとき、しこたまに酔ってておれはふらふらだった。からだはあちこち痛んでるし、痛み止めは暑さで溶けてしまった。夕暮れ、新宿だか、どっかの公園で寝てるとき、電話があった。若い女詩人ちんすこうりなからだった。なにを喋ったのかは憶えてない。半分眠ったまま応えた。そこへ裏庭文庫の佐藤青年。――なにやってるんですか？――そういわれてしまった。かれの誘いで飯を喰うことになったものの、もう喰えなかった。喫茶店で話し、銭湯へいったあと、かれの室に泊めてもらった。おれは疲れ切ってた。ひどい腓返りを起しながら、中野からふたたび上野へ。そこから新潟は直江津を目指す。夕方まえに着くも美佐島へいく電車をいっぽん乗り過ごしてしまった。

この旅の目的は、そもそもシェアハウス、ギルドハウス十日町へいくためだった。移住の下見をするつもりで。もはや神戸の都市生活に辟易してたし、気分を落ち着けて暮せる拠点が必要だった。いわゆる限界集落というやつなのか、ひとはほとんどいない。ギルドハウスの住人にはわたしが会ったうちで、7人ぐらい。あとは出稼ぎにいつてると聞く。共同生活のなか、夕餉はみんなでつくる。おれは味噌汁ばかり。とりあえず、6日滞在することにした。みんな若かった。馴染む自信がない。ひとりだけ白鬚の老夫がいたが、あとは20代、30代だった。相手に快くおもわれるにはどうしたらいいかをよく知ってるひと

びとばかりだった。いささか氣後れした。あるとき、白濱という女の子が梅酒をおれにわけてくれ、一緒に呑んだ。かの女はかつてラジオ・パーソナリティをやったという。おれには冗談のひとつもいえなかった。それにほんとうに移住するには、アパートの荷物や、仕事や創作をどうするかが大きなネックになった。引越しの費用だけで数万はかかる。そこへ衣服や免許、ラップトップやなんかが圧し掛かる。さて、どうしたものか。ハウスの本棚にあった手塚治虫の『アドルフに告ぐ』を読み、考える。やはりしばらくは、神戸で働くしかない。バーベキューをしたりして6日間を過ごした。直江津駅から大阪梅田へ。カーテン嚴守の、息苦しいバスに乗って帰路に就いた。いい加減、神戸の町をでてみたかった。でもおれには物が多すぎたし、蓄えもない。とにかく身動きがとれなかった。おなじところにずっといるのは苦しい。おれはずっと放浪してきたし、いまさらずっとおなじ場所で生きられるとはおもえなかった。いまの土地に着いてもう7年が経ってる。ろくでもないことばかりだった。多くのものを傷つけて来たし、多くのものに傷ついて来た。そんなやりとりはもう沢山だ。どっかの山邊の小さな家で静かに暮らしたかった。でも、そのいっぽうでひとと出会い、触れあいたかった。仕事をするなり、ひとの集まるところで活動するなり、転換がいる。それでもうごけずにいた。帰って来て旅日記をまとめた。そいつをブログに放り投げ、あたらしい仕事を探した。週末はいつも映画を5本観て、感想を書き、通りを歩いた。地下街には素敵な女の子がいた。地下鉄には素敵な女の子がいた。センター街には素敵な女の子がいた。どこへいってもかの女たちがいた。燃えつきた地図を抱え、さ迷うみたいに、おれは歩き、かの女たちを決して視るまいとした。かの女たちを不快がらせまいとした。けれどそうした抑圧は役に立たず、どうしてもおれは視てしまう。そして苦い嫌悪をみずからに科してまぎらわせた。

\*



乱高下する切り株のなかで

羽根をもがれ

声を喪ったけものが休憩してる

ちょっと待った、ぼくが書こうとしてるのは、

そんなけものの生態ではなく、

魂しいなんだ

またいつかつづきを書くから、

タイムマシンに乗って待っててくれないか？

\*

だれにもなりたくはなかった。おれはおれになりたかった。おれは手当たり次第に求人に当たった。寮のある求人だ。でもどこもだめだった。工場勤務は、超過勤務と過剰労働なしには成り立たない。まるで経営者がみずから無能であると告白してのようなものじゃないか。また深江浜や西灘の倉庫で働いた。消耗しただけ。あるとき、出屋敷で仕事があった。その帰途、おれは、おれの本籍地へいつてみた。そこは父の建てた祖母の家であり、店であり、叔父の家だ。もうだれも棲んでない。叔父は数年まえに心臓発作を起し、それから実の母と暮らしてるといった。崩壊寸前だった家屋を直して途中らしい。そういえば父はゲスト・ハウスをやるつもりだとひと伝てに知った。でも廃材らしいアルミサッシや、ステンレスの扉は、とてもまともな旅行者が来るような外観じゃない。西成のどやと変わらない。いや、それよりもひどい。やつはやはり建築様式すら解してない。でたらめだ。雇われるものとして生きた父の最後の夢はなんとも惨めなものだった。技術も知識もなにもかも、美点があつてこそそのものだ。美意識は金で買えないところにある。おれはそいつを写真に撮って始発へ乗った。家系の呪縛から目醒なかつた男、父を殺せなかつた男、雨が降り始めた。父について、もはやなにもいうまい。

おれは喰いつめて尼崎の飯場に潜りこんだ。でもけっきょく仕事にならなかつた。半日でやめ、べつの建設会社へいく。そこで飯を喰うと、歩いてアパートまで帰った。線路沿いをずっと歩いて。おれは遠まわりになつて、けっきょく7時間もかかった。きびしい晩夏だ。おれは京都で知り合つた造園業にも応募した。枚方までいって、その飯場に、かつて入つたのを懐いだした。室もおなじで、壁には懐かしい柚木ティナの、ヌード・ポスターが貼つてある。デビュー当初は好きだった女優だ。おれは黙つて駅にもどり、アパートへ帰った。

\*

12月、空調整備の仕事をみつけた。貿易センターの隣だ。おれは初仕事、なんともなく過ごした。でも手持ちがなくて昼餉の金を建て替えてもらった。そして2日め、休んでしまった。そしていい態度をとれなかった。あつというまに終わった。派遣元のビジネスサポート・ヤマトは、昼食代、制服の洗濯代とその送料で4千円もおれから筆った。救いようのないけつの穴。そして年の終わり、入院した。有馬高原病院へ。室にいるのもいやだったからだ。主治医の女の子はおれの理想、そのものだった。仰木舞衣先生。ここにいればかの女と、友だちになれるかも知れない。けれどもまたほかの患者を見て落ち込み、退屈に厭いた。ボルタレンを観ているまえで入れろ、という看護人のばかさにも勘弁だ。主治医に詩集を渡して、おれは2日めに無断退院して室に帰った。病院から電話があった。

ナカタさん、病院にもどる意志はありますか？

いいえ。

わかりました。

今後どのようなことになっても入院はお断りさせていただきます。

室には喰いものも、呑むものもない。そして仕事もない。かつては受かったようなものでさえ、年齢と職歴と体力でだめだ。それに口入れ屋に上前を刎ねられるのも、たまらなかった。まともな職を得ようと、求人票を刷って紹介状を書いてもらった。さんざん書類審査に落ち零れて、やはりじぶんの仕事をするべきだと悟った。いちどでも落ち零れたものには道はない。1年が終わった。けつきよくほうぼうをうろついただけで、ろくなことじゃなかった。喰い扶持すらも持てず、あたりをうろろうろ

としてる。そして被害妄想に駆られる。また過去の怒りを蘇らせて拳を握る。なにもかも遠ざかる。なにもかも手に届かない。終わりの始めみたいなものを感じながら、時間が過ぎるのをただただ待つだけになった。いったい、いつになれば作家になって女をものにし、自己実現の生活を暮らせるのか。そればかりあたまにあった。でも、おれはなにも書かなかった。書けなかった。表現できうるものはなにひとつなく、ただちやちな詩ばかりが脳内を駆けめぐった。こんなつもりじゃなかった。ほんとうならいまごろ、おれは作家になって、画家になって、音楽家になってるはずなのに。あこがれてた女の子たちと再会を果たし、楽しい日々を送ってるはずなのに、こんな場末で腹を空かしてるばかりだ。「今度こそ」とだれかがいう。おれのあたまのなかでだれかがいつもいつもいつでも、そうくり返しているんだ。

\*

歳をとるということ、そして無才のまま時間だけが過ぎてしまうことがたまらなかった。おれはだれも見返せない。ひねもす、薄暗い室のなかで酒を呑み、酔って自裁を試みた。失敗した。ヘリウム・ガスの苦しさで、かぶってる袋をやぶいてしまった。ガスはぜんぶ流れた。7千もしたのに。カフェイン錠もだめだった。ぜんぶ嘔いてしまった。生きるほかに道はないってことだった。おれはとりあえず快樂主義者になることにした。過古は遠ざかり、おれは齢をとっていく。できることはじぶんの世界を、この現実ぶつけることだ。肉親とはもうかかわらない。最後に母と会ったとき。祖母が病床と聞いた。母は、いまだおれが画家になるのを望んでた。本音かどうかはわからない。滅びつつある家族という檻、もう終わったんだ、みんなもう他人でしかない。これ幸いなりとおれはかぼやき、夜が更ける。水みたいにことばは逆る。そいつを書き留めることに躍起になる。だれかに赦しを乞う必要もない。おれには文藝があって、絵があって、音楽がある。やがて日付が変わって、世界が

またあたらしくなる。もちろん、淋しいときもある。週末になんの予定もなく、ただただ作品を書いてると、まったくじぶん  
が用なしみたいに感じる。そしてまたしても夜。もう波河からも、今宮先生からもメールの返事は来ない。もう1年が経つ。  
おれはまさしくペストだ。かれらみたいにきれいなことはいえない。建前のなかで暮らし、やがてどっかに消えちまうのはご  
免だ。仕方ないことだ、もはや憾む気にもなれない。ほんものの魂しいをもった男やら女やらに出会いたいとおもう。贗者は  
もういい、へたな芝居はやめてくれ。友衣子は、最初からおれをきらった。たったそれだけ気づくのに20年もかかってしま  
った。なんて鈍いんだ。ひとびとはみな珍しいけものを見つけたのとおなじく、おれに声をかける、そして笑顔を見せる。そ  
う、たったそれだけのことなんだ。そんなたやすい事実に気づけなかった。おれは上っつらのつながりも、贗者の友人も、た  
くさんだ。いまじゃ、みんなが示し合わせたみたいにおれを黙殺してる。かつて教室のなか、みんな無視されたのをおもいだ  
す。あのときとなにも変わっちゃいないのかとおもう。だれもかも、みずからの悪意や敵意に気づかない、解さない。なぜ自身  
がそう存るのか、考えようとも——しない。でも、それをいってどうなる？ おれは醜態を曝して来たし、はじめから棲む世  
界もちがう。ただ贗者に苦しむのはもういやだ。多くを望むつもりはない。魂しいが静かになったいま、見せかけのやさしさ  
や、情けにやられ、悩み、傷み、とり憑かれたくない。

遠い酒屋までの道程、学生たちが騒ぎ、大人たちが騒ぎ、おれは黙ったまんま店に入った。ストーンズとスカイウォッカを  
買ってでる。できることはなにもない。ふと眼を落とした路上で、老人が倒れてる。おれはかれに呼びかけた。

大丈夫ですか？

ほっといてくれ。

そうはいきませんよ、ほら頭から血がでてる。

血？——かすり傷や。

そのままだと、凍え死にますよ。

おれはかれのからだを起こした。上半身だけ起こされたかれは駄々を捏ねるみたいに両手でいやいやをする。でも、おれはこの老人をほって歩き去ることができない。どうしてだかできない。いままもずっとあった、ありふれた零落のなかにじぶんがあるような気がしてならなかっただけだ。おれは作家だからか、かれと話をしたくなかった。

どうしてそんなにまでして呑むんです？

べつに理由なんかない。

かれはじぶんの足で立ちあがった。

落ち落ち、寝ることもできねえ。

ここは寝る場所じゃないですよ。

かれはおれを睨みつけて唾を嘔く。

いいか、この地球のすべてがおれの疇なんだ、そこで死のうが生きてようがきみには関係ない！

かれはそのまま覚束ない、悲しい両足で繁華街を蛇行して歩き去った。長距離バスが行き交うなか、見えなくなるまでおれは見守った。なぜって？——おれは氣ぶっせいな男で、もう34が近いというのにひとりぼっちだ。いままでにやらかしたことのひとつをおもいだせる。どれもひどすぎる。いつも酒に酔ってた。おれは徳義というものを知らなければならぬ、持たなければならぬ。手に入れた。でも、おれにできるのは別離のみ。あしたも長い道をバスにゆられて来るだろう。またも不採用の決定、酔う口実ができるだけだ。たやすいはずの雑役人にすらなれず、停留所に降りると葭に火をつけるだろう。からかうような警笛と信号でいっぱいの通りを北へ急ぎ、酒屋のまえに来るだろう。ややためらって扉をあけるだろう、お気に

入りの1本を求める。それがよくないのはわかって、ただそれ以上のものが、この世界にはないからだ。河上から流れる寒気が喜ばしくおもえるだろう。ラブホテルの灯。タイムズの駐車場脇で、たったひとり、わが同類が歌を唄ってる。かれに水を、とびきり冷たい水をかけてやれ。かれのソフトにかけてやれ。そうすればきつとおまえの気は晴れるだろうから。

かつて恋をもたらした女たちへ、おれは手紙を書いた、《たぶん、あなたたちがおれに生命を与えたんだとおもう。友衣子、由子、中窪さん、城石さん、ぼくはあなたたちのことがうそもいつわりもなく好きだった。あなたたちのすべての振る舞いが、無意識がぼくを刺激した。どんなときもそれがぼくを奮い立たせてくれたし、表現することの源だった。ぼくはいま素寒貧だけど、こころのなかは想像力と意志でいっぱいだ。夜の舟に乗って、このまま旅立てたならどんなにいいだろう。あなたがることがいつもぼくを高めようとする。やがて天使のように消えてしまう永遠のときのなかで、ぼくの未来の恋人たちが眼を醒まし、ベッドの縁に立つ。そんな光景をぼくはおもう。やがてみんなぼくのことなんか忘れてしまうだろう。それでもぼくはいう、あなた方によって一時ならず救われたことを。そして耐えまない感謝を、謝辞を、ぼくは告げる。いまこのときのためにしつらえられたすべてのこと、すべての季節、すべてのかげ、あらゆる現象学的解釈のなかで立ちどまって、そこに唾を嘔く。悲しいわけでも、うらめしいわけもなく、奪い去られたぼくの純心のなかで、あなたたちのことをいま1度、懐<sup>おも</sup>いだし、そして封印するんだよ。ありがとう、あちがとう、ありがとう。——あなたたちの存在に永訣を上げてぼくは歩く》。

たぶん過古への郷愁がつよすぎるんだ。いつか読んだ本のなかで、《孤独であることも、おそらくはなんの誇りにもありえない。孤独であることによって自分を甘やかしてみても、そういう慰めは永つづきしない。孤独者はふたたび全体への復帰を求めずにはいられなくなるのだ》——そうあった。まさにそんなていたらく。おれはその存在を孤立のなかに、疎外したものでちよって受け入れられたがってた。けれどいまさら、どこのだれも声をかけてくれはしない。たとえ作品がたしかであつても。おれはあたらしい出会いへむけて書く。それが幻想でしかないにしても。酒を持ってアパートの階を上った。3階のお

れの室へ。だれもない室で呑む。通りを歩けば、女の子たちはきれいだ。でも、おれはだれの愛にもあずかれない、それもわかってる。だのに熱のこもった眼をむける。穢らしい。薄い胸板と、肉のついた腹を抱え、通りや、地下鉄の車輛や、坂や、路次や、商店で、かわいい子を見つけてしまう。そしてじぶんに嘔き気を催す。このおれが通りをさ迷い、どこにないを求めても、もはや意味がない。ひとびとの無防備さをおれは羨む。映画『汚れた血』のアレックスみたいに一方通行なおもいだけが沈黙のなかを歩く。そしてくり返す。疾走する自動車、広がる草地、追って来るバイク、最愛のひと、それらなにもかもを突き破って。

ああ、飛行機に乗るんだ。

ああ、飛行機に乗るんだ。

たぶん、おれはおれを笑うべきなんだろう。もうずっと笑ってない。ルーマニアの狼狂なら、こういつて笑うかも知れない。——人生に失敗して才能の裏づけもないままに詩を書き、さもなくば愛にも、野心にも、社会にも背を向ける。そして、その断念を復讐せずにはいられないと。——おれの書いたものは、みな断念された復讐だ。だからに愛語を求めずにはいられなかった。けれどそれも終わりだ。おれはじぶんでもわからないものを夢見て生きる。不可能な夢のなかを飛ぶ。おれはいまだにじぶんがなにものかになれるっておもってるだけだ。ほんとは何者にもなれず、たださ迷ってるだけなのに。だからいつまで経っても、おれの時間は過古にしかない。未来というものがどこにも見当たらない。荷役人でも皿洗いでもかまわない。おれはおれの人生を納得させられるだけのものを求めている。でも自我を地位がひきずり落とそうとしてる。そのまま寢床に降りて朝を待つことにした。窓のむこうで雪が降ってる。養老院もなにかもが濡れながらある。路次で貨物トラックが、ぶかっこの音を発てる。音楽。タイヤが路肩を擦り、ギヤが呻く。足許からせり上がってくる。人生。もはや、かつてのようにひとに咬みつくこともない。ただ遠ざかるだけのものにどうしてこれほどのことばや、おもいが必要なのか。夜が更けるばかり



だ。おれは忘れることができない。いままで出会ったすべてのものを。やがてトラックが動きだした。大通りにむかってロウで撥ねる。その勢いに乗って、おれはものを書きつづける。それしかない。いつかもつと、よりよいものを書くために。音楽が止む。スタックしたらしい。書く手がとまる。おれは大きな夢のなかでたったひとり暮らしてる。おれにはそれ以外に方法がない。だれか来てくれ。遠慮なんかいらぬ、秘密のノックをくれりゃいい。おれはいつもここで待ってるから。いつかおれを懐いだして、あるいはこの本を懐いだして。そうすればきつときみになにかしてやれるかも知れない。ともかく、おれは確かな手触りを、じぶんにも、この世界にも求める。過古のなかで生きる、過古にむかって考えるのをやめて、いまこそ停車場に立ちたい。きみはどこにいるんだ、おれの人生の私家版を読むきみは。おれはきみを求めている。

\*

いつもの眠れない夜、よく歩いて生田川上流までいく。冷たく、昏い街区の果てに長距離バスの発着場がある。新神戸駅がある。2月のかぜのなか、遠くで警笛が鳴る。車と車とのあいまを若い男が走ってた。黄色いヤツケが灯しにゆれて、かれは鮮やかな逃亡を見せる。長距離走者になるべくかれは毎晩走ってた。おれはそれを知ってる。

\*



アルコールと恋に怯<sup>おそ</sup>れて、単式蒸留器が月へと飛ぶ夢を見る  
電話代は気にするな、ぼくがぜんぶ払うから

きみの声が聴けるだけでもうれしい、それがぜんぶだれかのモノマネでも  
だれかのスタンド・インになるためにぼくは神戸の港から黒い海へ飛び込む

灯台守が眠る、やがて死んだぼくを発見するまで  
冷たい月がこっちを見てる

18/02/21

\*

しばらくして、わたしは立ち上がる。そして歩いてロージの宿までいく。かの女はハंकと笑っている。なにを話してるのかは、どうやっても聞えない。わたしはあきらめてじぶんの車まで歩く。そして乗り込む。少しばかり凍てついてはいたが、エンジンはかかる。しばらく空ぶかしをして温めたあと、わたしは本来の予定に立ち返り、『ザ・ヴィレツジ』までいくことにした。あさっての昼までにたどりつければいい。村を走る。いろんな人間がみじかいあいだに死んでしまっている。ビルもYもSteveも、スコフスキも、その三下どもも、滝田も、それでももちろん、わたしも。中心街を抜け、ハイウェイに入った。路肩にはヒッチ・ハイカーもいる。この寒いのにだ。ばかなやつらだ。そうおもったとき、ひとりの男に眼を奪われる。滝田だった。胸の血が生々しい。乾き切っていない。わたしは車をとめて、手をふる。やつは嬉しそうに走って来る。やつのブーツがいい音を発てる。——どうしてこんなところにいるんだ？

実は、おれにもわからないんだ、

でも、おまえさんが来るってことはなんとなくわかったよ。

話は走りながらしようぜ、つぎは『ザ・ヴィレツジ』だ！

よしてきた！

わたしたちは久しぶりに話した。大いに笑った。そして旅はまだつづいてる。わたしたちにはギターとドラムがあるみたい  
に、あの女には麻薬と男があるということだ。上空に輝く冬の月。菊正宗を呑みたくなった。白泉の句を懐いだす。どこかにあるだろうか。わたしはだれも悼んでなんかいない。ただひとりの仲間を愛するだけだ。わたしの胸もまだ乾き切っていない。

血は、それそのものが道であり、標べだ。どこから来て、どこへ帰っていくかなんて大したことじゃない。流れや標べに愚直に従い、たまには裏を搔いてやること。たった、それだけのものなのだ。

\*

長いわかれのうちに

やがて互いのものを失ってしまう

離陸する機影を握りしめて

きみやかの女をすり抜けてしまう

政治なんか語りたくもない

人間の話がしたい

かつてある詩人がいった

「ぼくはきみであって、きみはぼくでもあるんだ」って。

ぼくは鉄道に乗ってべつの町へ去る

進行方向とは反対の座席にゆられ、

やがて季節は春になっていく

中田満帆 '84年、西脇市にて生る。神戸市出身、在住。短歌、詩、絵画、音楽、写真。'04年より詩人・童話作家⇨森忠明に師事。出版局『a missing person's press』主宰・発行人。詩集に『38wの紙片』、『終夜営業—Open 24 hours—発送受付』ほか、歌集に『星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso』、短篇集『旅路は美しく、旅人は善良だというのに』がある。

# 裏庭日記／孤独のわけまえ

2023年12月25日・初版発行

写真・装丁・著作・発行人：中田満帆

〒651-0092 兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13

新神戸マンション北館303号室

mitzho84@gmail.com

078-200-6874

© 2023 MItzho Nakata , a missing person's press / Printed in Japan